毎月一回五日發行
第三種郵便物認可

女學世界

第二巻第九號

口繪

泰西名畫（レニー画伯筆）
戸田伯爵夫人
養鷄（小坂象堂氏筆）
舞子の濱
高松城
シンガポール婦人
紫野の田植
南洋土産
女子學院卒業生
淑德女學校卒業生
其他



女學世界第貳巻第九號目次

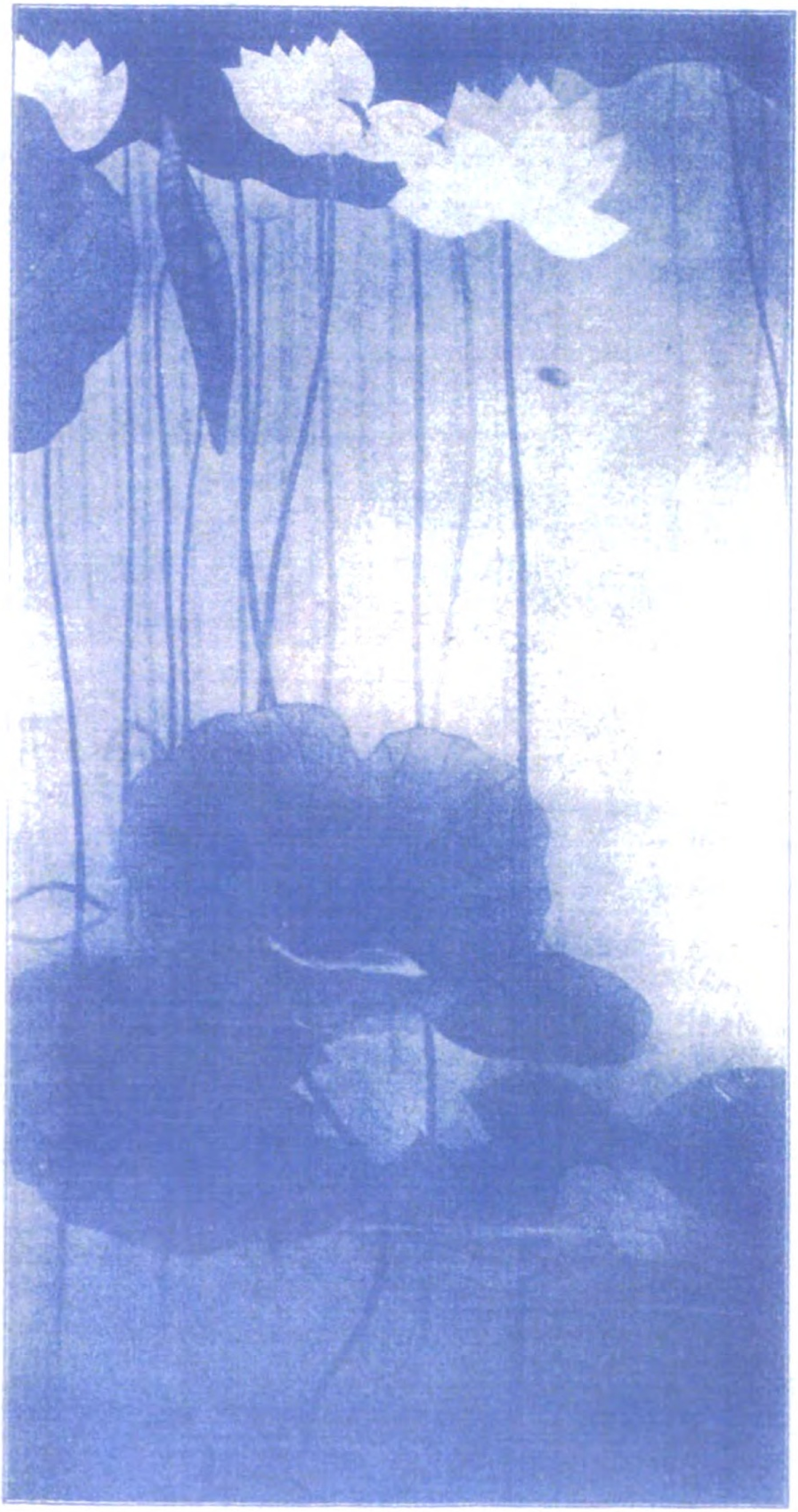


二八水は
肌を白くきめをよくし
●にきび●あせも●ひび●すべて肌のあれ、
おしろい下に用ゐて尤もよし又芳香馥郁として貴孃紳士の愛すべき作品なり
中瓶一本拾五錢
Nihachi Water.
登録商標
本品縮圖
12
花王石鹸
品質善良と衛生に經濟を旨として製煉したる作品なり
●賣捌所は全國到る處にあり
東京日本橋區馬喰町二丁目
發賣本舖
長瀨富郎
(電話特浪花九二二)

泰西名畫



迎　門





羅馬古彫刻



(甲の二)

慶應義塾教授 菅 綠蔭君著

言行要錄

全壹册

洋裝金字入上製
紙數二百五十頁
正價三拾錢
郵稅八錢

國の盛衰、社會の文野は、一に之を組成せる個人の言行如何に基し、而して、個人の成敗、國家の隆替も、亦一に吾人の日夜に事とする、大小の言行、之が起因本源たらざるものなし、依て、著者菅氏は、夙に此點に着眼する所あり、維新以來、實に驚くべき世變に遭遇せる、今の人が、今の社會に、處する所以の道、即言行の要、處世の法を示さんが爲、本書の述作を見るに至れり、收むる處の文章は、凡て七十有餘編、記する處の事項は、之を總論、健康編、成功編、品性編、及び處世編なる五編に、分ちて、細大殆と漏すなきは勿論、其行文の平易にして明快、材料の斬新にして多趣味なるが如きは、是れ此類の著作中、近時稀に見る處の好文字たり、乞ふ成功要錄とともに、一本を備へて、各人各家に於ける座右、日夜の師友たらしめんことを、

第六版

菅綠蔭君著

成功要錄

正價廿八錢郵稅六錢

本書は菅綠蔭氏の新著にして立志編處世編及び健康編の三編より成り其材料は專ら歐米の著書新誌等に求め廣く和漢の諸書をも參考して現世紀の青年が志を立て世に處する所以の道及び之が基本たる健康保全の新法を說くこと凡て九十有五編、今回慶應義塾國文教科用書として上梓することゝなりたれば、弊館著者に乞ふて廣く之を世に公にするに至れり、說述懇到文章流麗にして獨り青年立志の要書たるのみにあらざるなり請ふ一本を几上の實鑑とせられよ。

（甲の三）

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

水島教授校訂

高等商業學校卒業生濱田四郎君著（近刊）

補習教育 商業入門

全三冊

▲第壹卷七月上旬出版發賣す正價郵稅未定

本書は著者が我國に於ける商業補習の好著なきを慨し實業補習學校規定に基き編著せられしものにして水島教授の懇切なる校訂に係る叙事に法あり繁簡其宜しきを得一讀の下商業學の大意を窺ふに足るべし尚卷中挿む所の重要書數十葉は諸銀行會社の樣式により實物を模擬せる者以て商業補習學校の教科書たるべく以て商業學獨習の指南車たるべし實業篤志の士必らず讀まざるべからず

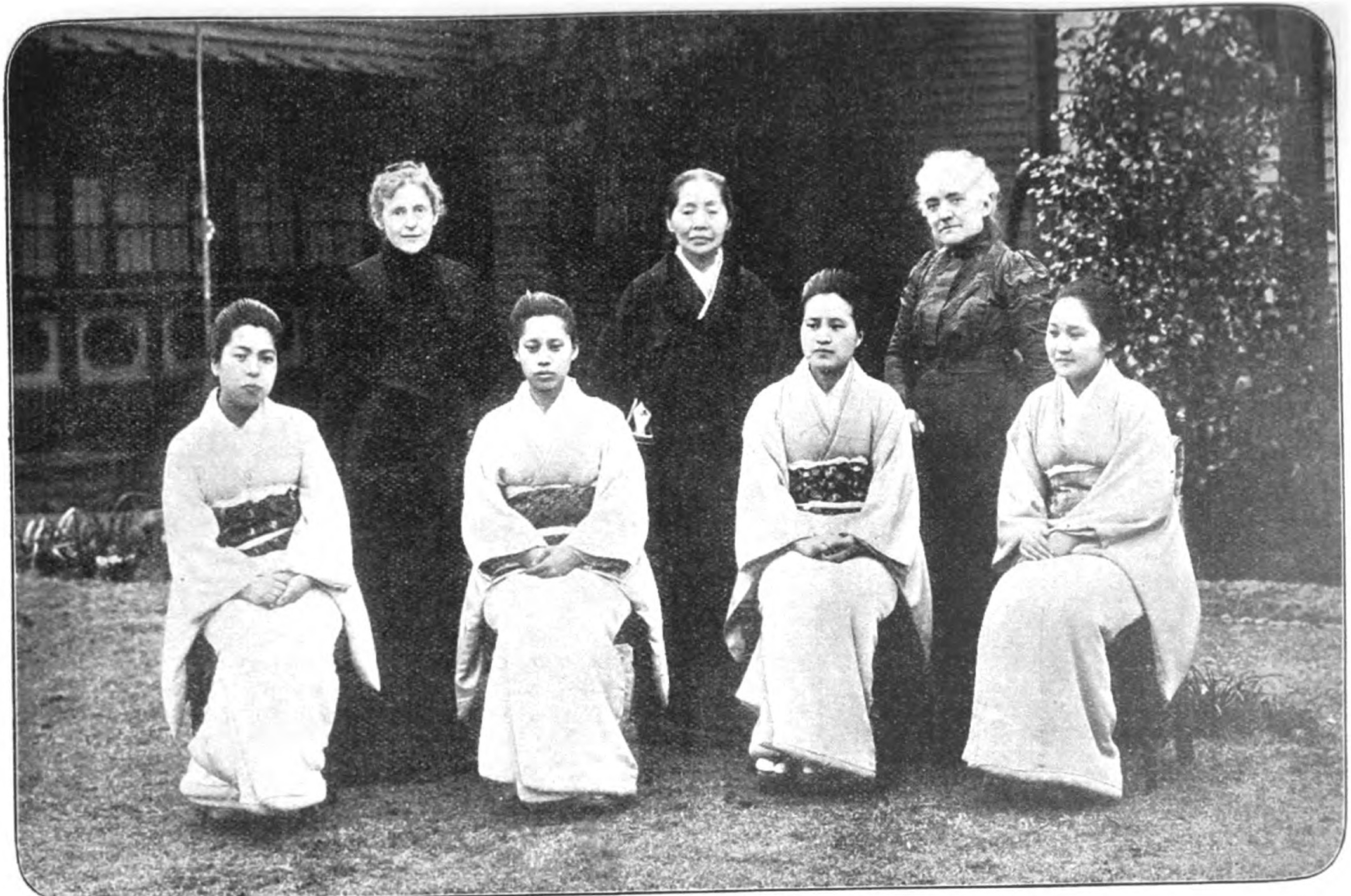
東京本町 博文館發兌

(甲の四)

養鷄



小坂象堂氏筆



女子學院全科卒業生と職員

南海名蹟



讃岐高松城



淑德女學校卒業生並職員

博文館 **蠶業叢書** 發兌

既刊

第壹編	蠶業通論	三谷徹君 池田榮太郎君 著
第貳編	生絲檢查論	德田實也君著
第參編	栽桑新論	池田榮太郎君著
第四編	桑樹病害論	岩淵平介君著
第五編	蠶体解剖論	松下憲三郎君著

全部十二册

壹册卅錢 六册前金壹圓七拾錢 拾貳册前金三圓貳拾錢 ● 郵税壹册六錢ヅヽ

農學士本多岩次郎君序文
三谷徹君著

第六編

殺蛹乾繭論

全壹册 洋裝 並製
定價金三拾錢郵税六錢

現下殺蛹乾繭法は斯業上緊急の大問題として之が改良を呼ぶの聲や大なり然るに此の如く其聲の大なるに比し其改良の實績を見る極めて遼々たるの觀ある抑も何ぞ是れ其器械を製する蠶繭其物の性質を解得して而て後製せしにあらず其工程を施す器械其物の構造を辨知して後之を使用するにあらず畢竟適切の方法と完備する器械との發明なき所以なり本書此弊を矯めん爲め之を指導す苟くも當業者たる者本書に就て研究せば大に得る所あるべし

續刊

第七編	養蠶新論	望月關馬君著
第八編	蠶體生理論	松尾重信君著
第九編	蠶種論	岩淵平介君著
第拾編	製絲新論	井上隆君著
第拾壹編	多化蠶飼育論	山田島次郎君 大森孫十郎君 著
第拾貳編	蠶業經濟論	德田實也君著

毎卷讀切

壹册卅錢 六册前金壹圓七拾錢 拾二册前金參圓貳拾錢 ● 郵税壹册六錢ヅヽ

(乙の一)

婚禮の友

渡邊國武子爵夫人宮岡慶子刀自校閲
華族女學校學監下田歌子先生序文
女子高等師範學校教授佐方鎭子先生序文
跡見女學校主跡見花蹊先生題歌
女子大學講師三輪田女學校主三輪田先生序
愛敬女學校長棚橋絢子先生序文
少女雛祭の圖濃彩石版武村千佐子先生口繪
新婚旅行圖淡彩石版美術學校千頭先生口繪
圖式及表紙竹田敬方先生繪畫
禮節家關◎葦雄先生伊澤千世子刀自校閲

武居碩三先生著述
西洋綴菊版極美本
定價金八拾五錢
郵税金六錢

此書は我邦現今の風俗に從ひ結納の交換調度の品物儀式の服装祝言の盃等中流以上の婚姻を眞行草の三種に區別し佳人才子が學業を卒へ先づ如何なる理想の良人を撰選ぶ可きや其詮議の要訣より血族結婚の弊早婚の害忌避す可き病質會見の方法媒妁人の任務贈答品の種類華燭の宴の式立新婚旅行披露饗應の方法等に至る迄細大漏さず凡そ禮儀に係る一切の事項を三十四章に網羅し附録には調度品買入れの注意を喚起したる商店の案内記を掲ぐる等著者が用意の周到なる實に實踐應用に適するのみならず古今内外の例證に據り多年講究研鑽の餘に成れるものにして如何に其趣向の緻密完備なるかは諸大家の序文題辭題歌等の多きにても其書の凡庸ならざるを知らる可し

◎發賣元 東京神田表神保町 東京堂◎

大賣捌所 神田通新石町東陽堂 日本橋通一丁目大倉書店

尾上榮三郎新作 詩かきの花

◎東京日本橋本材木町一ノ十五 文華堂 賣捌所 東京堂、東海堂 北隆館、上田屋

コロタイプ著者肖像入◎清方畫伯意匠表紙端洋装頗美本定價郵税共四拾八錢◎切手代用壹割増

全篇これ一個の悲劇自己が役からの上より想を構て此一小説となる某文士之を讀て驚て曰くあゝ我筆を焚かんかな俳優にしし此文才あり此詩想ありとせば我等は終に一俳優に如かずあゝ我筆を焚かんかなと以て其價値を知るに足らん

學生必讀 旅行之友

正三位子爵福羽美靜先生題歌
文學士中内蝶二先生序文
法學士桐生悠々先生序文
質軒岸上操先生序文
大内德亮君編

智見を廣くすると共に、身躰を健にするは旅行に如く事なし、快樂的旅行固より快なり、辛酸的旅行亦更に快なり、古今東西の名士が如何なる旅行をなしたるかを見よ

▲七月十日製本出來發賣▼
全一冊洋装袖珍美本携帶至便
定價金貳拾錢 郵税四錢
郵券代用一割増の事

賣捌 東京神田表神保町 東京堂
勉强堂、日本堂、盛文堂、東海堂、北隆館、田中書店、盛春堂、服部書店、栗原書店◎大坂盛文館

發兌元 東京小石川區指ケ谷町百三十三番地 文光堂

各宗本山名所圖會

石倉翠葉君著　山中古洞君繪　（製本出來）

大谷派本願寺名所圖會

全壹册洋裝
正價四拾錢
郵稅六錢

菊判石版表紙、寫眞版木版密圖挿入

本書は吾眞宗本山中最も莊嚴偉觀ある堂宇を以て普く天下に知られたる京都東本願寺の事蹟を編述せるものにして先づ所在他の名義大谷地名考大谷廟所考眞宗の名義及沿革舊史に現れたる事本願寺法系門跡考門跡傳代々門跡の雅懷蓮如上人の子守歌等を始めとし境內の沿革建築物及庭園の沿革寶物古文書本寺に附屬せる名勝舊蹟等其他本願寺に關するもの一切を一々歷史と實地に考證探查し又は勉めて通俗に振假名を附し且つ精巧緻密なる寫眞石版木版三十數種を挿入したれば一は斯家の參考となり一は旅行臥遊の好侶件たらん

●本派本願寺名所圖會

全壹册　洋裝菊判美本
正價六十五錢郵稅八錢

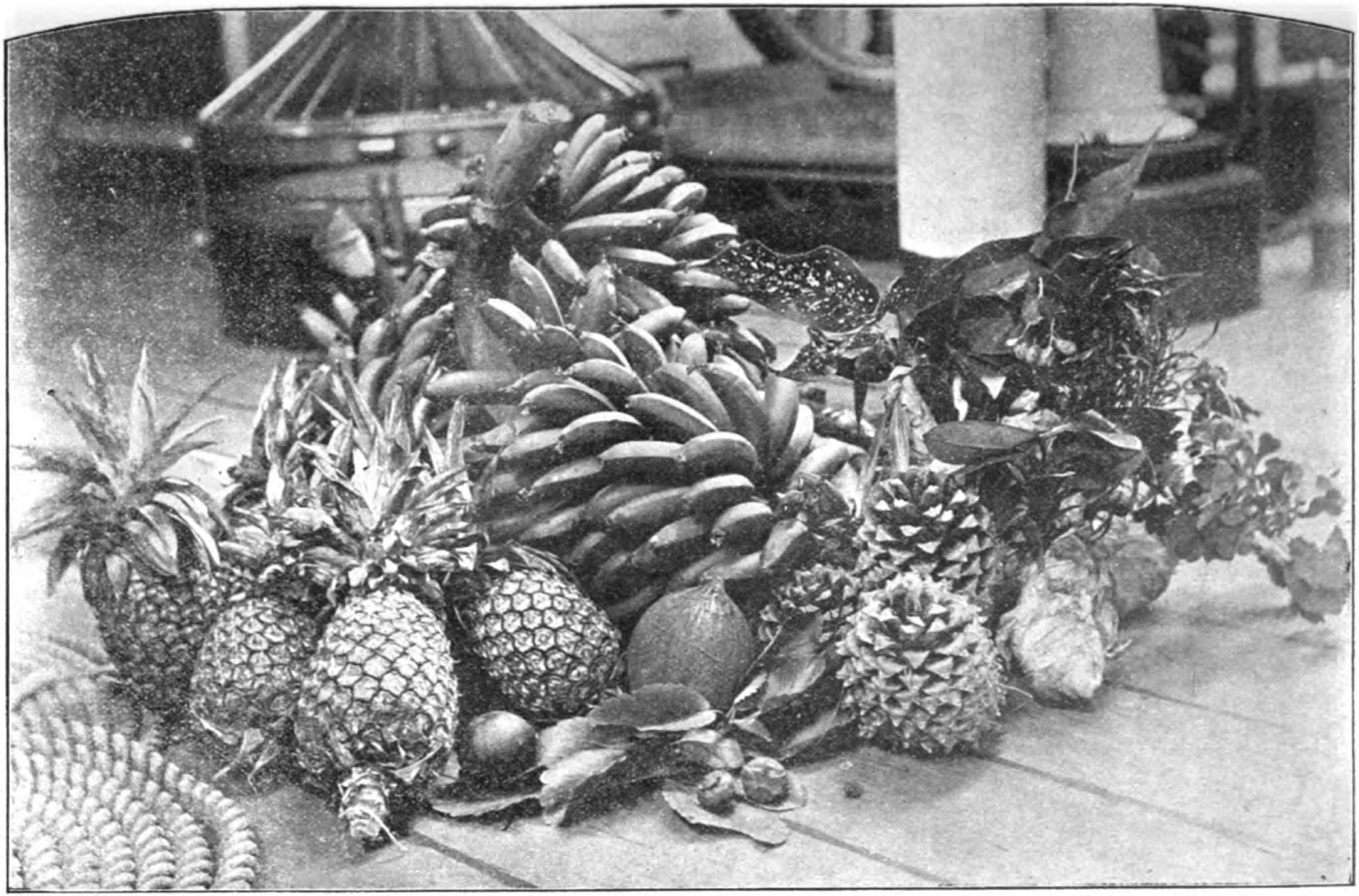
續刊

第三編 ●佛光寺名所圖會
第四編 ●日光名所圖會
第五編 ●身延山名所圖會
第六編 ●高野山名所圖會
第七編 ●成田山名所圖會
第八編 ●妙心寺名所圖會
第九編 ●智積院名所圖會
第十編 ●比叡山名所圖會

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

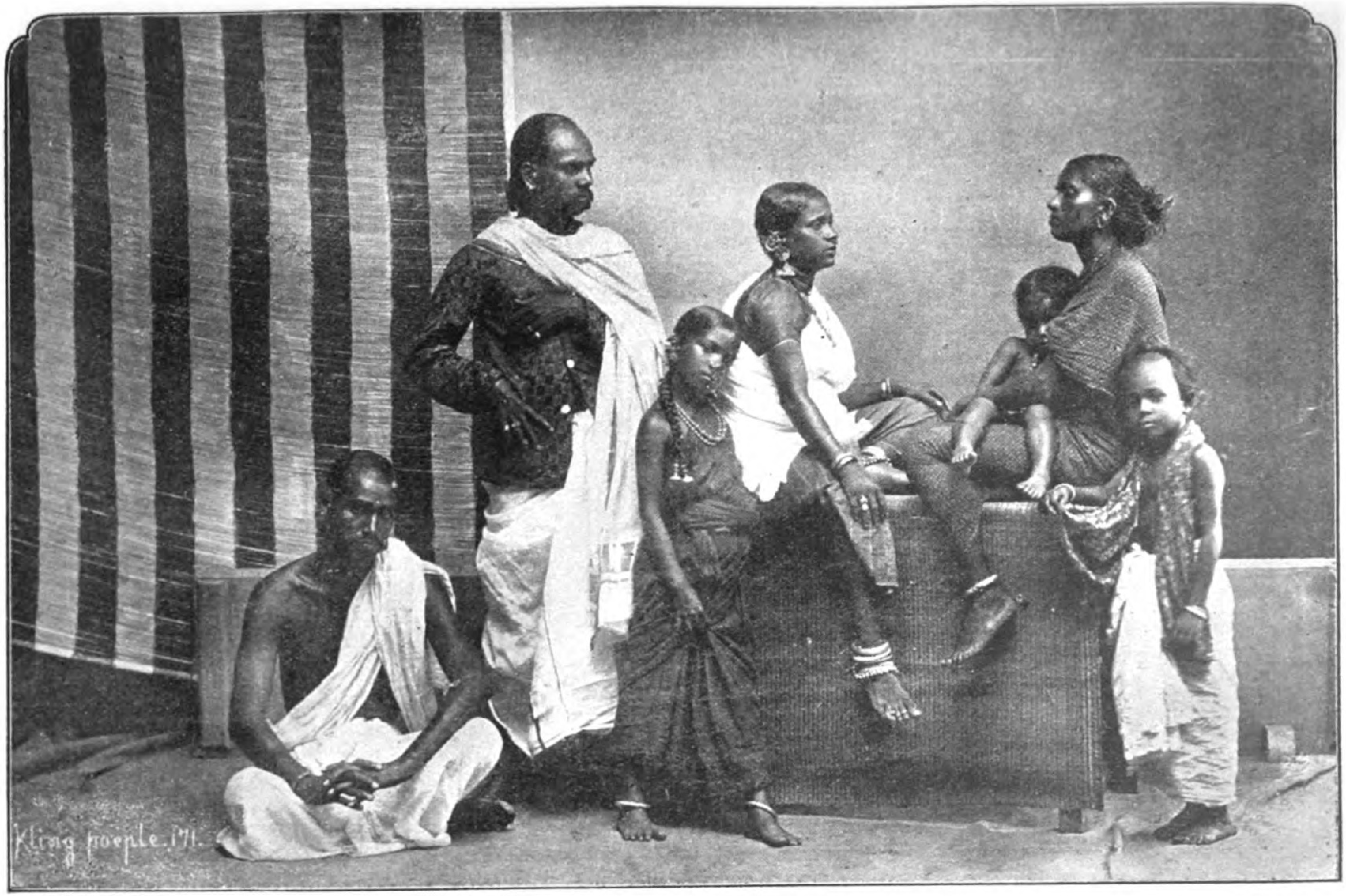
（乙の四）

南洋土産



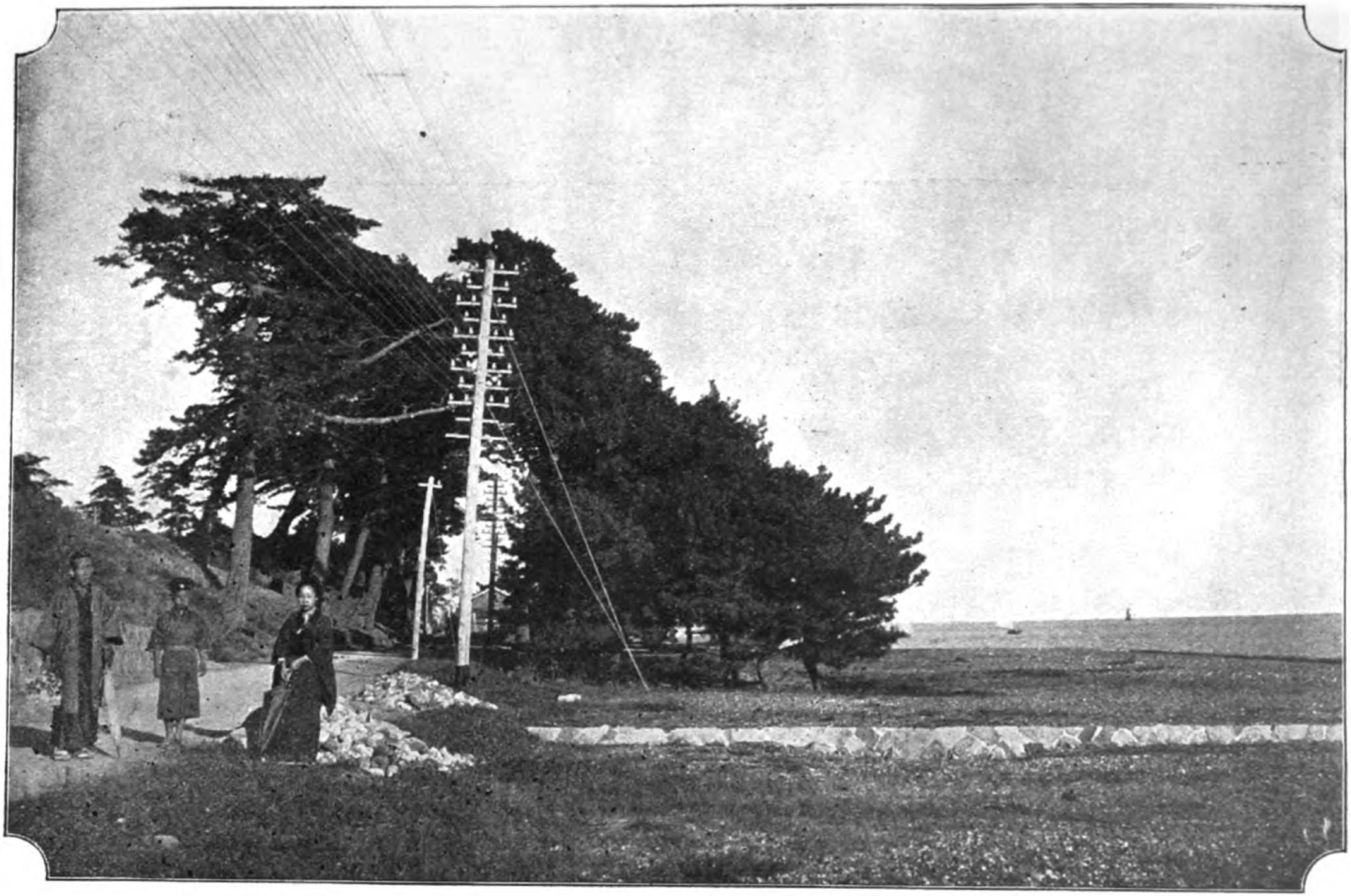
椰子、芭蕉實、パインナープル

記事參照

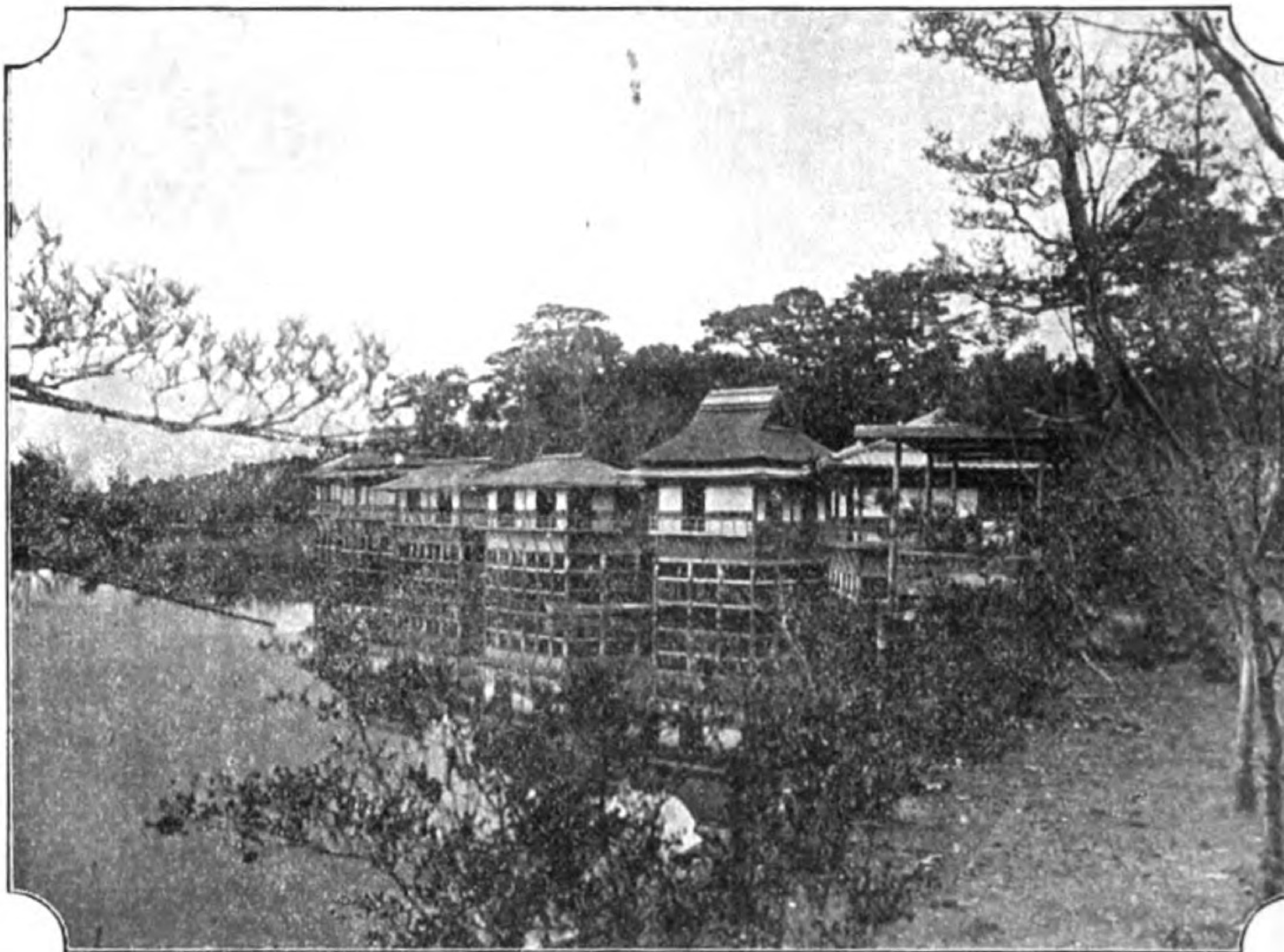


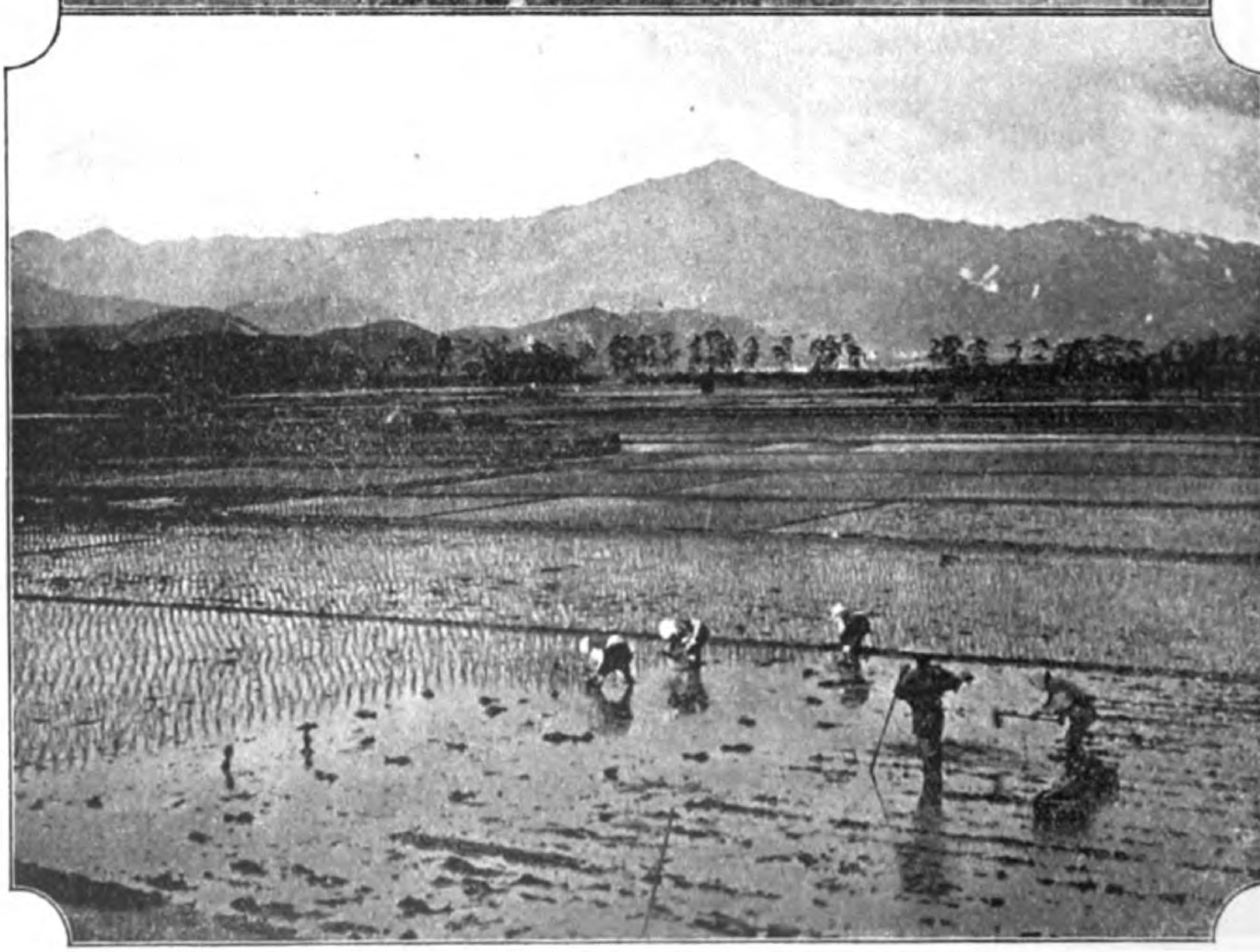
シンガポール土人の風俗

舞子の濱



長岡天滿宮　（山城）





紫野の田植　（山城）

● 英語研究誌 ●

編輯顧問 新渡戸博士

編輯主任（エー、エム、ベーコン。津田梅子 エム、シー、レナード。櫻井鷗村）

英學新報

毎月一日十五日發行（定價金八錢 拾貳册九拾錢 貳拾四册壹圓七拾錢 郵税五厘宛）

第拾六號 七月一日發刊要目

口繪 ▲太古の民（寫眞銅版色刷挿入）●●●●

社說 ▲英語研究の獨乙法、**寄書** ▲幸福の人、續（朝報社英文主筆、山縣五十雄）**會話** ▲消夏の計畫、**講義** ▲英語研究法、（高等師範學校敎諭本田增次郎述）**飜譯** ▲文學者と生活（德富蘇峰）英譯、▲簡易會話、▲答案の修正▲本社の新計畫になる和文英譯指南、四（哲學博士杉浦貞次郎）**書牘**

日米學生通信の現在（米國學生より日本の學生に宛たる書翰文）

註釋 ▲新渡戸博士著英文武士道▲津田梅子著イングリッシュストーリーズ▲愛國者の悲歌 **雜錄** ▲英語新論、（米國コロンビア大學敎授マシウス氏述松城生講譯▲作文の要譯 **時報** ▲內外新事件▲雜錄へ笑話▲質疑解答▲讀者の領分、等其他興味津々たり

▲第拾五號には**懸賞英作文新問題を發表せり**

臨時增刊 **春粧**（再版發賣）

▲言語の調子▲日英同盟と英語の研究▲馬果して泣や▲土佐日記英譯▲象つかひ▲お貰和譯▲橋立艦中珍話▲驕婦改作、其他定價郵税共廿五錢

發賣元 東京市神田區表神保町三番 特電話本局貳百四拾八番 **東京堂書店**

●英學新報社近刊書類

文學士畔柳芥舟詳說 津田梅子補訂
英文 頓機翁物語
袖珍美裝全壹册 定價郵税未定

村井弦齋原作 在米、高柳龍吉英譯 高等師範敎授エムシーレナード閲
英文 近江聖人
袖珍美裝全壹册 定價郵税未定

戰時通信記者の領袖ジェームス、クリールマン著 櫻井鷗村詳註
英文 從軍記者
袖珍美裝全壹册 定價郵税未定

エーシーハーツホルン 津田梅子共編
英文 法螺先生
袖珍美裝全壹册 定價郵税未定

發賣元 東京本町三 博文館 / 神田表神保町 東京堂

（丙の二）

文武堂藏版

世界冒險譚第拾貳編

櫻井鷗村君譯述（新刊發賣）

絶島奇談

（口繪）海老名君畫

洋装全壹册

正價金參拾錢
郵税金六錢

原書は英米讀書界に評判高きアリヤット船長の冒險小説なる老船頭の義俠、一家族の厄難を救ひて無人島に漂流の生活を營み蠻奴上の苦戰、老船頭の經歴談等、悲壯痛快を極め、また附するに幽靈船の奇々怪々なるを以てす世界冒險譚完成に當り掉尾の快編なり。

全部出版定成

第壹編 金堀少年
第貳編 遠征奇談
第參編 二勇少年
第四編 續遠征奇談
第五編 決志少年
第六編 漂流少年
第七編 殖民少年
第八編 航海少年
第九編 不撓少年
第拾編 朽木の舟
第拾一編 俠勇少年

每編讀切正價參拾錢宛

近刊

高等師範學校教授本田増次郎君譯
●處世要訓 四六判洋装美本全壹册
正價金參拾錢郵税四錢（七月上旬、新刊發賣）

北村透谷君遺稿
●透谷全集 四六判美装全壹册（紙數八百餘頁）

若松賤子女史遺稿
●忘れかたみ 四六判美装全壹册（紙數五百餘頁）

（丙の三）

●發兌元 東京 博文館●

續帝國文庫

幸堂得知先生校訂

第四十三編

種彦短編傑作集

（七月上旬發刊）

全壹冊洋裝上製
紙數大凡一千頁
正價六十錢郵税十六錢

（丙の四）

本書要目

梅櫻振袖日記●女合法辻談義●春霞布袋本地●花吹雪若衆宗玄●女模様稲妻染●曾我昔狂言●高野山萬年艸紙●桔梗辻千種衫●諸傀儡二面鏡●娘金平昔繪艸紙●傾城盛衰記●翻案道中双六●浮世形六枚屏風●娘狂言三勝話●忍買對花籠●浮世一休廓問答●鯨帶博多三國●比翼紋松鶴賀●女郎花喩言粟島●新靱八百屋の籠開●小脇差夢の蝶鮫●唐人髷今國姓爺●花紅葉名所扇●雁金紺屋作の早染●笹色猪口暦手●蛙歌春の土手節●忍笠時代蒔畫●關東小六昔舞臺●富士裙浮の蝶鳥●出世奴の小萬傳

以上の數編は何れも柳亭種彦の傑作短編にして幸堂先生綿密に之を校訂せられ種彦自筆の挿畫の如きも之を轉寫し其他挿畫澤山以て本文の缺を補ふたり

續帝國文庫續刊豫告

●神稻水滸傳　全壹冊
●名家漫筆集　全壹冊
●珍談奇聞集　全壹冊
●畸人傳集　全壹冊
●狂言全集　全壹冊
●續高僧實傳　全壹冊
●名家讀切小說集　全壹冊

以上

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

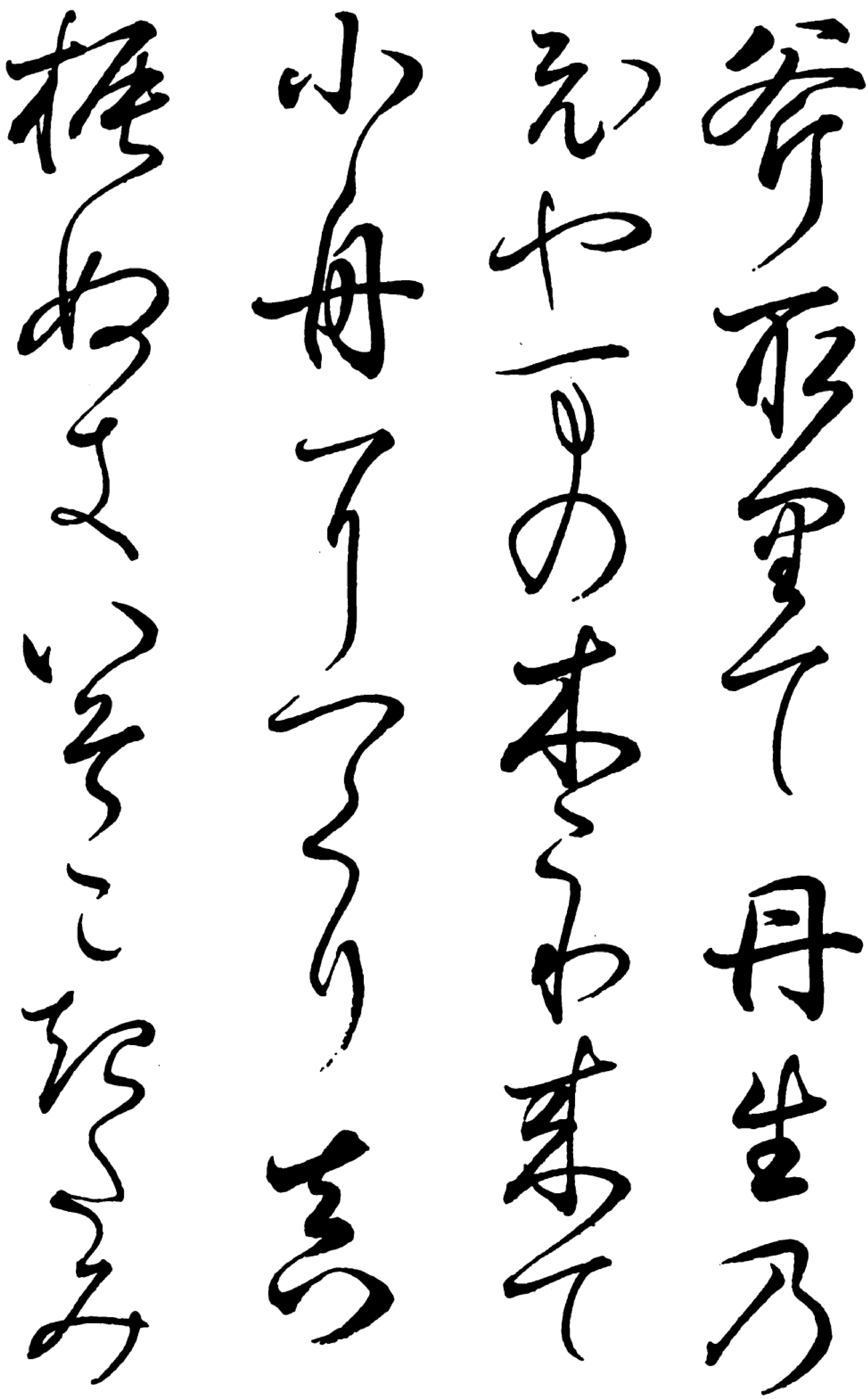
御便りもしかなは御暑さ
はげしく候ところ御揃御容様
ますます御機嫌よく御過遊ばし
されめでたく存候　右暑中
御見舞の志るしまで　通

幸便ニ付此段御達し

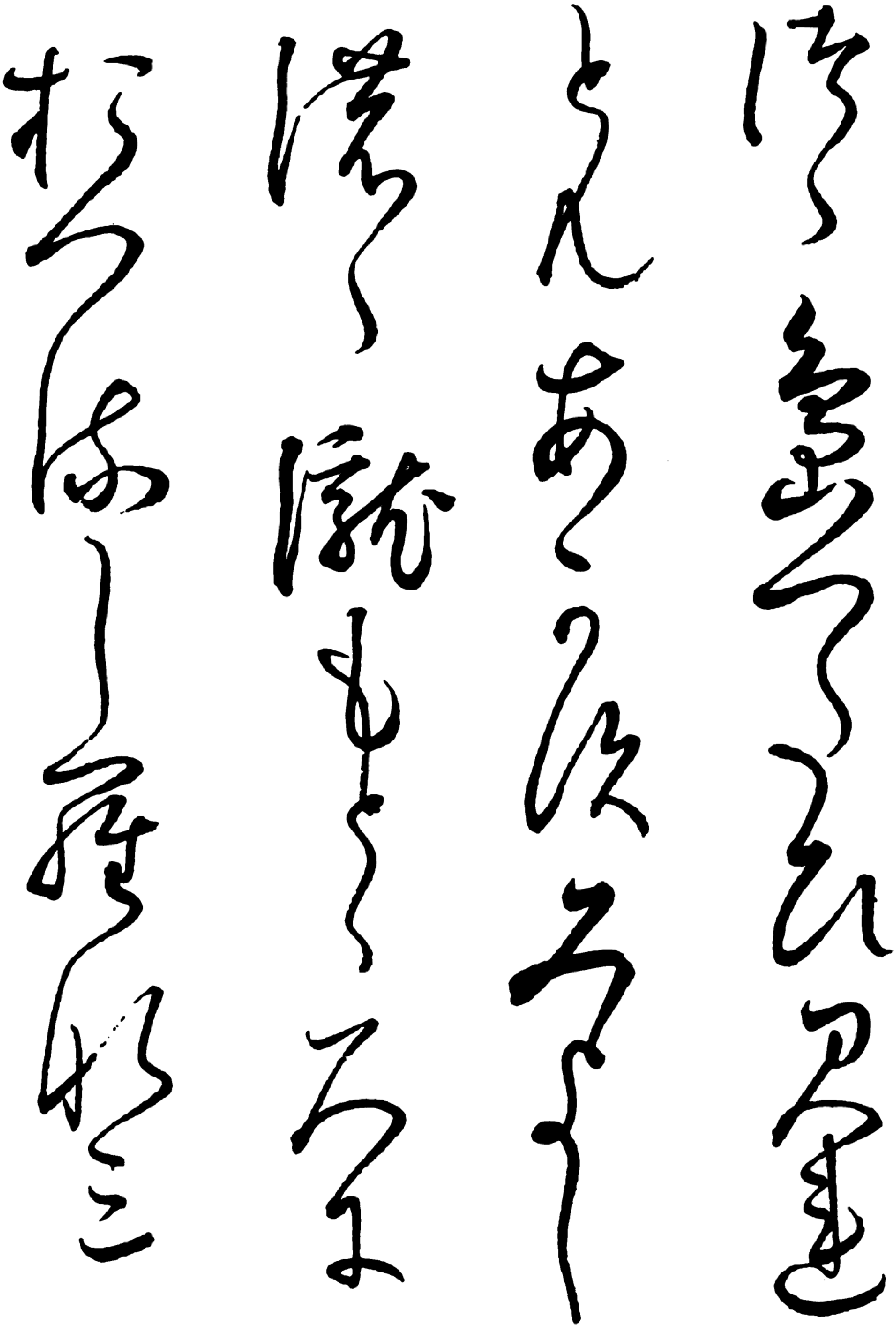
まゐらせ候　猶御覧下されし

候はゝ早〻御くれ

あら〳〵かしく



坂正臣先生筆



坂正臣先生筆

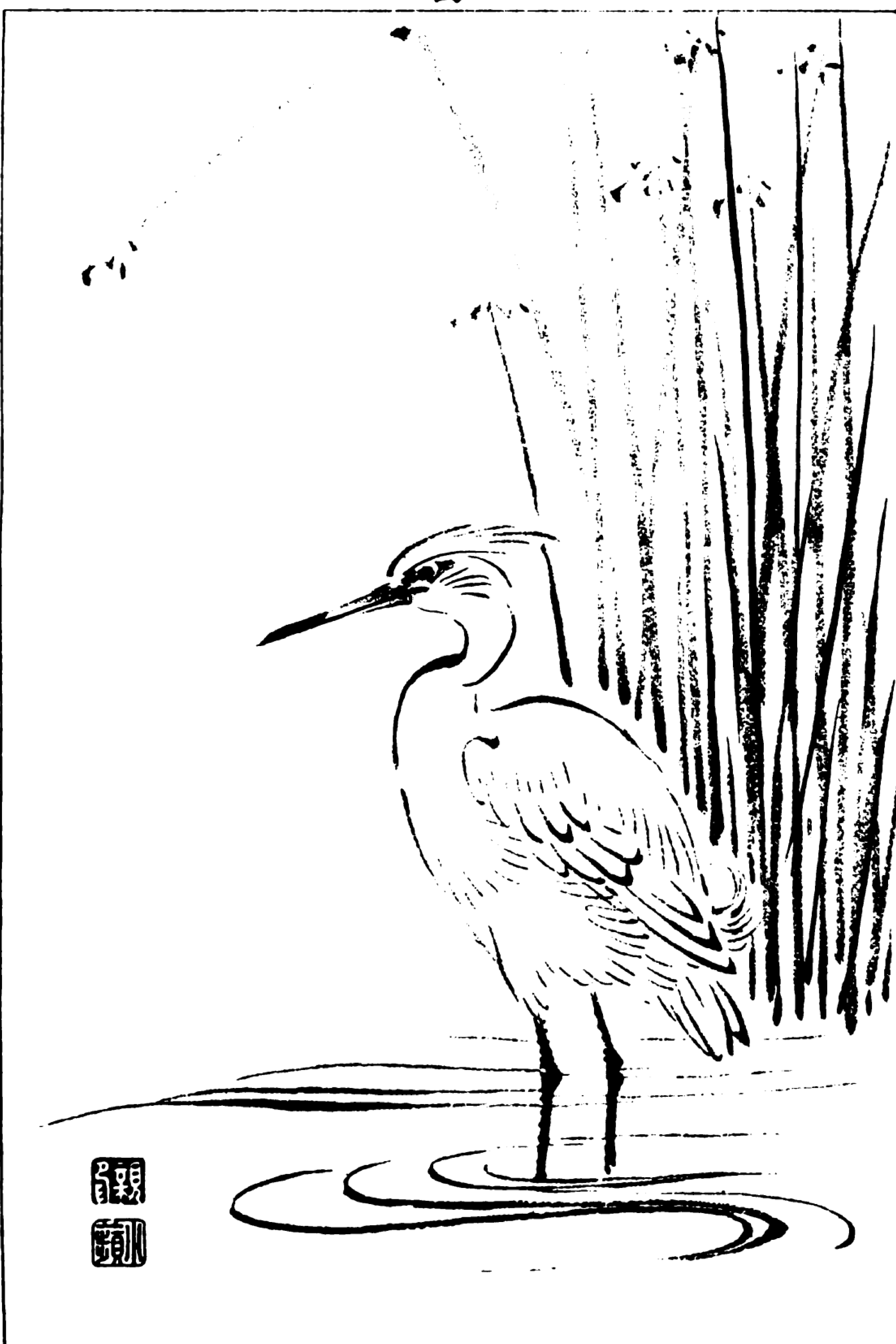
百合

野口小蘋女史筆

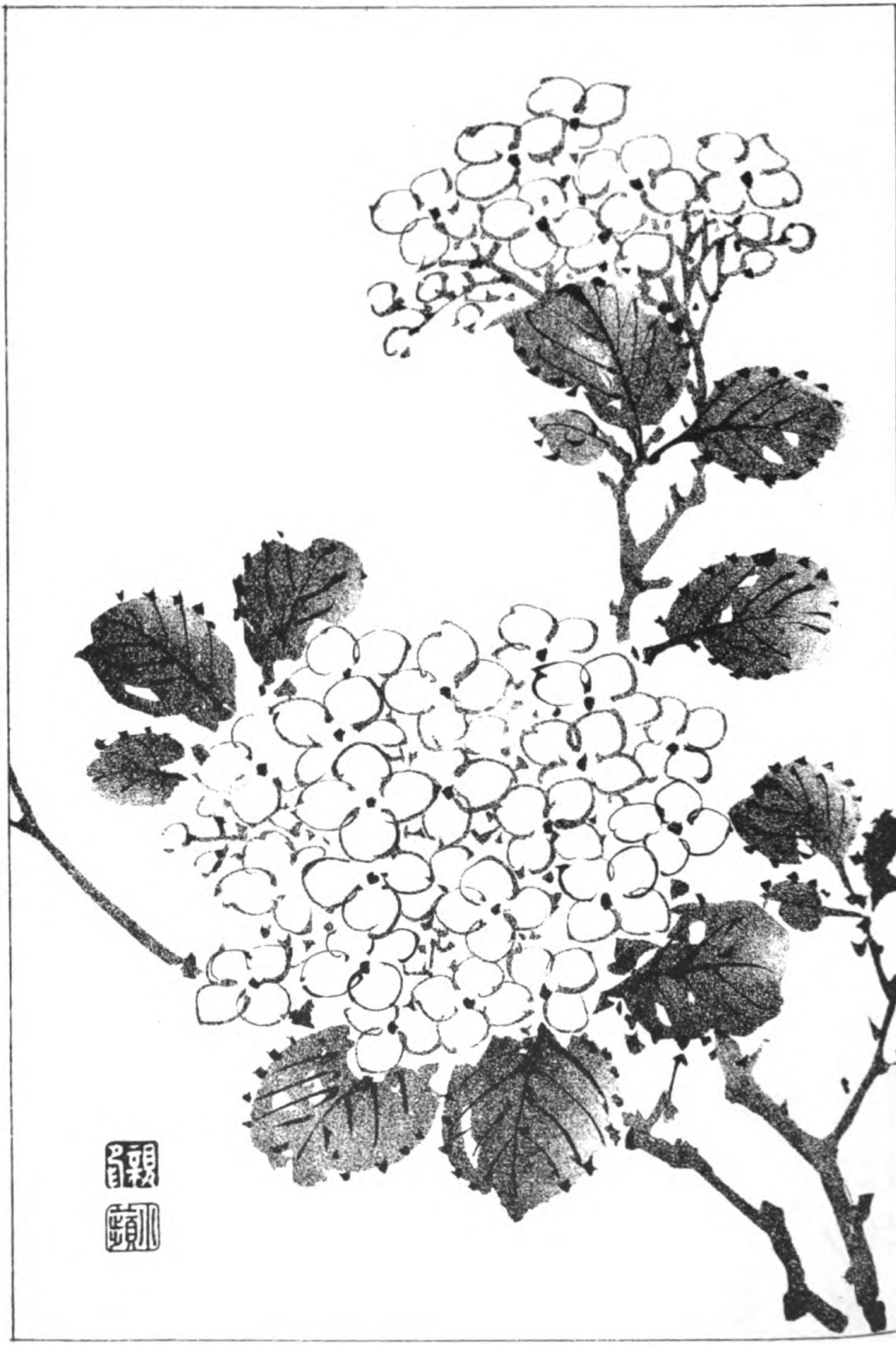


鷺

野口小蘋女史筆



紫陽花



野口小蘋女史筆

竹に雀



博文館創業第十五週年發行

太陽臨時增刊　海の日本

紀念十五周年

第八卷八號●五百三十頁●大判頗美本

口繪寫眞六色●表紙武內桂舟筆●裝釘美麗の大冊

挿繪卅六頁

●有栖川宮殿下●小松宮華頂宮山階宮三殿下●長崎及橫濱●宮島、松島、城ヶ島●故大橋佐平氏●浦港元山釜山の三港●芳川山本兩大臣●海軍六中將●水難救濟會及學校長八氏●近藤淺野中橋の三汽船會社長●三大稅關●三大燈臺●三大造船所●阿波丸●日本船海航路及沿岸各港の風景

名流筆蹟

近衞公、伊藤侯、山縣侯、大山侯、西園寺侯、杉子、東久世伯、土方伯、伊東子、榎本子、芳川子、福羽子、湖山翁、一六翁、鳴鶴

畫

橋本雅邦、川端玉章、黑田淸輝、安藤仲太郎、熊谷直彥、荒木寬畝、鈴木松年、寺崎廣業、松本楓湖、小山正太郎氏等の名家君、親愛君

●發行の趣旨……法學士　森山守次君
●帝國海運の沿革と將來の希望……遞信大臣　子爵芳川顯正君
●世界に於ける日本水路の價値……海軍少將　肝付兼行君談
●日本海事の狀況……遞信省管船局長　內田嘉吉君談
●世界に於ける海運事業の現況……郵船會社々長　近藤廉平君談
●日本海員掖濟會の事業……日本海員掖濟會副會長　前島密君談
●世界的なる海の日本……法學博士　松波仁一郎君談
●大阪商船會社の現況……大阪商船會社々長　中橋德五郎君談
●遠洋航海の話……海軍少佐　關重孝君談
●水難救濟事業……水難救濟會長　伯爵吉井幸藏君談
●中學生及び父兄諸氏に望む……東京商船學校長　平山藤次郎君談

●日本海週航記●海の北海道●橫濱港●東海の船たび●宇品港と北清韓國航路……坪谷水哉君
●東海岸警見記……文學士　大町桂月君
●伊勢の海……松岡國男君
●鳥羽より大阪……田山花袋君
●瀨戸內海航路記●上海渡航記●揚子江航路記……國府犀東君
●九州北岸及西岸……江見忠功君
●九州東岸巡航記●四國週航記……文學士　中內蝶二君
●臺灣航遊記●臺灣週航記●香港紀行……法學士　森山吐虹君
●シアトル航路……倉辻米國法學士
●山田長政……森山法學士
●海の文藝……高山文學博士

●海の幸……大江小波君
●過靑魚海記……遲塚麗水君
●俵寢瑣談……岸上質軒君
●故大橋佐平氏傳
●漢詩……諸名家數名
●新體詩には此海……大和田建樹君
○海の日本　中村秋香君　爐邊雜興　藤村和泉國
○高師の海邊鐵斡○行く春の海邊○絕海獨語　等

名家の和歌

東久世通禧伯　黑田淸綱子　千家尊福男　木村正辭君　小杉溫邨君　井上賴圀君
久我建通侯　高崎正風男　本居豐穎君　黑川眞賴君　小出粲君　松波遊山君
外數大家

正價

△並製　正價金六十錢　郵稅六錢五厘

△特製　正價金八十錢　郵稅八錢

(丁の二)

發兌元　東京[illegible]本橋區[illegible]　博文館

（丁の三）

明治三十五年七月五日發行
第貳卷第九號
紀元二千五百六十二年　西暦一千九百〇二年（壬寅）

女學世界

論説

風俗改良意見

訪問に就て

東京音樂學校校長　渡邊龍聖

我國には人を訪問するに一定の時間なき爲め訪問する人も訪問を受くる人も迷惑を蒙る場合多し、西洋にては時間を規則的に使用する習慣ある故に甚だ便利にして双互の職業を妨害するが如き事殆んど無し、これに反し我國にては訪問につき一定の時間無き爲め不時に來客あること多く、爲めに一方ならず職業の時間を妨げらるが如し、今日文明多事の際に當つて猶此の如き惡習慣あるは社會上の、大缺點にして風俗改良上より言ふも先づこれ等の點より矯正せざるべからず。

西洋にて人を訪問するは職業上の要務を別として社交上の訪問には一定の時間を定めある人あり、よし其の定めなくとも多くは午後二時より四時まで、夜中は八時より十時までの間に於て訪問するが普通の習慣となり居れり、されど我國の如く社交的の訪問を度々するが如き事なく、且つ訪問して長時間を要する場合に

は前以て先方へ通知をなし、其承諾を得たる上訪問するなり、されば職業上、及び社交上の訪問を爲すにも雜談に多くの時間を費やすことなく、また訪問を受くる人も我國の如く茶、菓子或は珈琲などを出し又は食事を饗するが如きこと殆んど無しといふも可なり、要するに是等の事は主人方にては大に手數を煩はし、客の方にても亦それが爲めに時間を費すこと多き爲め相互の便利上斯る事は一切省くものゝ如し、

元來歐米の習慣として人を訪問するには先づ玄關にて帽子を脱し、これを手に持ち、外套は其儘にて主人の出て來るを待つなり、偖主人來りて來客に接し、先づ帽子を下に置かれよと云へば、十分間乃至十五分間は時間に差支なしといふ意なれば、訪問者も其心して要談を爲す、又主人が帽子を下に置かれよ、且つ外套をも脱がれよといふ時は凡そ卅分間以上一時間は差支なしとの意なり、併し頗る懇意なる來客にても前述の如く茶菓、珈琲を出すと稀に偶々珈琲などを客に侑むるは茶時の時に限るなり。

訪問に一定の時間なき時は訪問する人も甚だ不便にして度々訪問せざれば目的の人に面會を爲す能はざること多し、また訪問を受くる方にても來訪に就ての時間の一定し居らざる爲め、人の來訪を受けし時、家族に火鉢、煙草盆及び茶菓子などの準備を爲すが爲めに繁雜を極め、隨つて時間を費す事多く、尙其の際家族が粗服を纏ひ居る時は、茶、菓子の支度、及び其他の要務に付衣服を改めざれば客に接し難き場合もあり、一人の來訪者あるが爲め家族が非常の迷惑を感ずることあり、且つ我國にては時間を重んぜざる習慣あるが故に、雜談に長時間を費し、遂に食事の時間に至るも尙留る客あり、その場合に於ては我國の習慣上食膳を饗せざるべからず、爲めに更らに多くの手數と費用とを要するは無論にして折角細君が家族に當て嵌めて調へ置き

し料理も來客に奪はれ、家族中の一人の折角の御馳走を口にする事能はざるが如き事ありこは些細の事のやうなれど明かに家族的快樂の一を缺ぐ者にて有形、無形の損多ければ今後一段の注意を要すべき事なり。歐洲にては晩餐に人を招くに當り、客と主人との懇意なるは勿論、家族も亦客と懇親の間なるを要す、何となれば歐米にては我國の如く來客と主人と唯二人にて食事を爲すが如き事極めて稀にして晩餐に招く時家族と來客と團欒して家族的に晩餐を供するの習慣なれば若し來客にて家族懇親ならざる時は一同團欒して樂しみつゝ食事を爲すことを得ざれば其結果快樂の大部分を殺ぐことゝなるを以てなり。

記者曰く渡邊氏の風俗改良意見は曩に其一斑を紹介せしが今又茲に訪問に就ての意見を得しを以て聊か其の大意を掲げぬその文字上の責任は記者に在り

女子の獨立心を養ふべし

女子高等師範教授 武田錦子

獨立自由を希ふは人の天性にして、男女を分つべきにあらざるなり、然るに世の父母たる者、男兒に於ては其必要を認めて、獨立心を發達せしむるに勉むと雖ども、女兒に於ては特り之が發達を勉めざるのみならず、却て之を得んとを恐るゝが如く、一も二もなく之を抑へ、唯々柔順父母の言に從はしめ、百方其依賴心を奬勵するが如し、即ち婦人三從の義を誤解し、家にありては父母兄弟に依賴し、嫁しては其夫及舅姑に依賴し、老いては其子に依賴することのみ考へ、毫も獨立の氣象を有せざるに至る、故に一朝其依賴せる人を失ふことあれば、小舟の浪に漂ふが如く、復た奈何とも其身の處置を爲す能はざるもの、其數蓋し少なからず、嘆ずべきことならずや、今父母其女を高等の學校

へ入學せしめ、教育を委ぬるに當り、其女の同席にあるにも係はらず、師に向ひ往々左の如き甘き言を爲すを聞く事あり「我娘は教師と爲すに非ず、何れ人に遣るものなれば、左程勉強さするに及ばず、唯落第せざれば滿足なり」と、宛も學問は教師のみに、必要なるかの如く思惟し、又卒業證書は、良家に嫁する資格を得る爲め、即ち父兄の依賴を去りて、良人の依賴を求むる準備なるが如し、斯の如き家庭に養育せられたる女子は、親の資産を賴み獨立心に乏しく、勉強するの必要を感ぜず、從つて成績の好きもの尠く、其嫁するに及びては、專ら其夫に依賴し、甚しきは家政の整理に至るまで、一々良人の指揮を仰ぐものなり、社會に對する義務の如きは、夢にだに知らず、徒らに長火鉢に倚り、小説に耽り、物見遊山を事とし、美衣美食を求め、己れの快樂慾望を遂げんとのみを計るもの。亦世間に多く見る所なり、父兄たるものも、亦其女たり妹たるものゝ、贅澤に氣樂に暮し居るを見れば、最も幸福を得たりと喜び、人に語りて誇るの風あり、斯る妻女を迎へたる夫は、內助を得んとして、却て困苦を加へ、甚しきは、妻女浪費の結果として、其所得の不足を補はん爲め、無理の利益を貪り、竟に不正の道に陷ゐり、以て社會を腐敗せしむる者あり、斯の如き婦人にして、偶々不幸に遇ひ、財を失ふことあらば、己れの力を以て、世に立つの方法を知らず、復た奈何ともする能はざるべし、之れ父母が其子女を教育するに當りて、其獨立心を枉げ、偏に其依賴心を養成せし結果に外ならざるなり、彼の米國の如き今日の盛大に至りし原因は、一にして足らざれども、其主因を推す時は、獨立心の發達に歸せざるを得ず、彼の國の學校教育家庭教育、社會の狀態等を視るに、獨立の精神充滿するが故に、人々他人に依賴することを潔しとせず。婦人の如き、亦大學卒業の後に至るも、尙ほ滿足せず、益

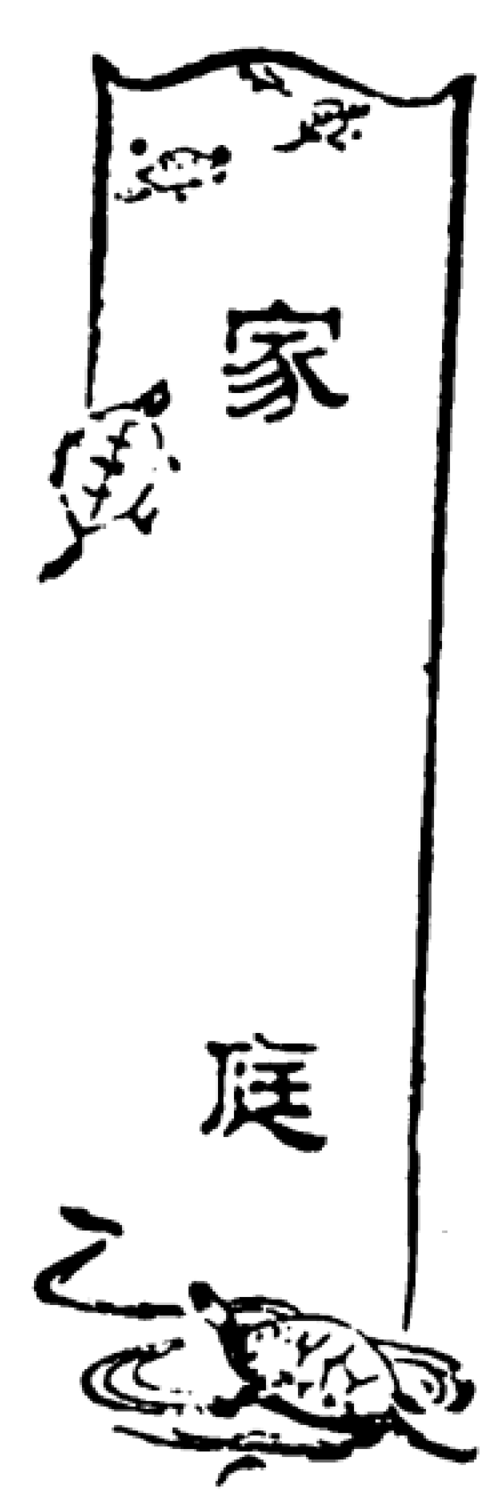
く々深く其道を研究する者甚だ多し、
我が十數年前の友なる、米國の一婦人、此頃鐵道事業に從事せる紳士と結婚せし旨申越されしが、其文に曰く「我等新婚以來夫は其業務多忙にて、鐵道學研究の爲め歸宅後も尙は机に向ひ、夜半まで勉强し、我は相替らず圖書館に勤務し、午後は一家の整理をなし、其他慈善事業に從事する等にて、少しも閑暇なし、唯々日曜日は我等兩人手を携へて會堂に往き、家に歸りて相語る、互に一週間の勞を慰するは此時のみ、去りながら忙中に閑を得其快樂は言ふべからず、仕事は幸福の基なりとは金言なり云々」と活氣紙面に滿ちたり、而して同時に郵送せし寫眞を見るに、十數年前袂を分ちし時と、少しも替りし事なし、聞く所に據れば、今日米國に於て婦人の獨立自活を營む者、各市に數萬あり、ニウヨーク市のみにても、高尙なる職務を執れる婦人の數十萬以上、美術學校、大學校其他種々の高等學校に於て修業せる婦人一萬以上ありといふ、是れ皆な獨立心の致すところなり、然るに我國にては一家の長たるものは、平均五人半の口を養ふ割合なりと聞く、故に家に餘裕を存するは、中々困難なることにして、國の富を增すも亦容易ならざる事明かなり、

我が嘗て米國にありし頃、寄宿せし家は最も幸福なる家庭なりき、其主人は年七十を越えたる兩親ありて、數百哩を距てたる片田舍に住居し、樂しく暮し居れり、然るに其父世を去り、母のみ殘りしを以て、主人は自分の家に引取り世話せんとせしに、「我は身體壯健にて自活の道あり、其方は數人の子供あり、善く之を養育せよ、クリンマン又はサンクスギビングの祝ひ時には、例の通り孫どもを連れ來れよ、我は此地に在りて、其成長を樂まん、自活は人の務めなりとて、竟に其勸めに從はざりき、風俗習慣の異れる、我國より視れば、人情薄きが如く見ゆれども、其子を愛する情は、却て厚く、且つ獨

立心の確實なる感ずべきなり。

何れの國を問はず、婦人の勢力は其國社會の道德、風俗品性に大關係あり、婦人の位置高きは、其國の世界に於ける位置高きなりといへり、故に婦人を敎育するは、男子を敎育すると同じく、其品性を高め、其獨立心を發達せしむることを必要とし、徒らに虛飾の敎育に甘んじて、卒業證書を婚嫁の材料に充てんとするが如きは、大なる誤なるべし、

スペンサー曰く「獨立心ある英國の男兒は、獨立心ある英國民の父なり、前者なくして後者を望むべからず」と我々亦之に倣ひて、獨立心ある日本男兒を生むは、獨立心ある日本婦人なり今にして女子の獨立心を養はざるべからず、



家庭の規律

ドクトル　川瀬元九郎

日本人の大多數は初めて此世に生れて來た其瞬間から不規律的の生活をなして居る、授乳時刻、睡眠時間等一として規則正しきことはない、社交上に於ても其通りで規則がない、爲に時間、金錢及勞力を浪費することが多くて甚だ不便である、是れに反して西洋では何事も規則詰めである、三度の食事時刻は無論一定してあるから、主人でも主婦でも時刻に遲るれば冷き御殘り品を臺所へ行て食はねばならぬと言ふ位である、それて日本人の樣に食事時刻に訪問するものは決してない、又若し食事時刻前に要談の爲に來訪して居ても食事時刻に近けば食事を約して辭し去るのである、勿論

通常の訪問は午後と定まつて居るから要用でなければ食事時刻に近き頃に來訪する樣なことは滅多にない、又食事中に來訪するものあるも平常の如く悠々食事を終た後でなければ面會しない、食事中に食卓を去るは失禮のことになつて居る、家族のものゝ許りで客のない時でも禮儀を守ることは仲々八ヶ釜しいてのある、然るに日本ては食事中でも客を待たせるのは失禮であると云ふので俄に食事を中止するか、大急ぎにて食事を終て客に面會して謝罪をすることになつて居る、この通りで西洋では家庭を重んじて食卓を去らない位である、それに日本人は平氣で夫れよりも外來者を大切にする別



段に此の方より御斷りを言ふに及ばぬことゝて先方が食事中に來るのが惡いのである。急いで食することは衛生上宜しからぬのみならぬ家族の快樂と平和を破る、又食事を中止すれば折角溫かに調理した食物を冷やかにして味を惡くして食せねばならぬ、或る家族では仲々に嚴格であつて主人が食事を中止する場合に一家族が一同に中止せねばならぬ、實に殘酷であると思ふ、是れが爲めに家族全體に一方ならぬ不便を來たすもので、家婢なども仕事が遲れて迷惑するのである、其上に西洋の來客は要談さへ濟めば直ぐに立ち去るが、日本の來客は多くは尻が重くて閑

口する、又食事前或は食事時刻に來訪する時は來客に食事を供しないと失禮であると云つて責められる、實に壓制な處置ではないか、不意に御馳走を出すのであるから家族内に大騷動を來たし甚だ不便である、將又西洋に於て親交のものが萬々一にも來て食事を不意に出すとしても、其時に食卓に有合せのものを食せしめて麵包位を切る丈の面倒であるから世話はない、日本てはそうでなくして、殊更に御馳走を調理して客と主人に出すのであるから甚だ不都合である。

西洋では便宜上及び衛生上から食事時刻を定めてあるのみならず、食事を日常の一快樂としてある、其時刻には家族一同が食卓を圍んで氣を落ち着けて食事をするので實に愉快なことである、日本流に平常主人は別の室にて單獨に食事をするか又は主人は勝手に外で食事するのと比較すると天地の差がある、西洋の上流社界ては吾々が宴席か式場へでも出る時の如く毎晩禮服を着用して食卓に着き禮義正しく且愉快に食事して一日の疲勞を慰藉するのである、日本の樣に單に胃を滿たすと云ふ主義とは異なつて居る、小兒は八九才迄は別の食卓に着て小兒に適當した食事を與へる習慣になつて居るが、父母と共に食卓に着くほどの年齡の小兒にありては、父母の命令にそむくとか其他何か不都合があるときは其刑罰として食卓に着くを禁ぜられるのである、小兒も是れを非常に重き刑罰として恐れるのである、日本では兩親の前で食するよりも却て氣樂で喜ぶものが多いと思ふ、是れによりても歐米と日本の家庭の差異全班を伺ふことが出來る。

日常の惣菜も前日には必ず三食に要する品物をば出入の八百屋に命じて取寄せて置くか、市塲にて買ふべきものは主婦自ら求めて置くことにしてある、或る家では一週間前から定めてある、大家になると一年中のことを大略取極て置くことがある、それで下婢共に勤き易く混雜を來すことがない、食事前に差當りて八百屋や魚屋へ馳け込む樣な不都合なことはない、西洋では仲々禮義を重んずるから仕事着の儘て下婢共が表へ出るものでない、斯樣な塲合が萬一あるときは主人か主

婦が自ら出懸けねばならぬ、決して規則外の臨時用を以て下婢の仕事を妨げることは更にない。來客がある場合には數日前から奉公人に告げて萬事を打合はせて置くから多人數の來客でも大混雜を決して來さない。日本の樣に來訪者がある度毎に茶菓を出すことなぞは下婢共に仲々の面倒を懸けるものであるが西洋では左樣なことは更になくして實に輕便である。

下婢共の業務は一年中大略定まつて居る、奉公人が一人である場合には一人で萬事の用辨を逹せなければならぬから、仲々多忙であるが規律を守て行くから割合に容易に濟むのである、日々の食事も日曜日は一般に晝餐を一日中にて一番の御馳走としてある所謂「ディンナー」である、平常よりも時刻が遲くして一時から二時迄位である、晝餐後は食器なぞを片付ければ晩方迄用がないから下婢は暇を貰つて外出する、又晩食は極めて輕便にしてあるから面倒はない、土曜日には襯衣寢臺、敷布、及食卓掛等を取換へ又一週間中に穢したる手拭及拭巾等を一時に月曜日の朝食後に洗濯をする、洗濯法は日本の所謂西洋洗濯法であつて、温湯、石鹼及洗濯板を以てよく洗ひ而して熱湯にて一度沸騰するのである、日本流の洗濯法に比すると仲々面倒である、洗濯物を沸騰することは衞生上極め



て宜しきことてあるから日本でも實行する樣に致したいものである、日本の勝手で用ゆる拭巾は二三日の間は白くてもじきに、眞黑になり實に不潔である、却て拭かない方が淸潔てあると思ふ位てある、西洋の拭巾は摩擦によりて穴が開いてあつても眞白て實に心持がよい、日本人は日々入湯して身躰を淸潔にするが洗濯には不注意であるから効能が少ないかと思ふ、火曜日には前日洗濯した物に熨斗を懸けるので洗濯物も新らしきものゝ樣になる、水曜日には客間と居間、木曜日には寢室なぞの掃除をなし、金曜日には窓の硝子拭きとか、土曜日には「ナイフ」「フォーク」及「スプーン」等の銀製の器具を磨と言ふ樣な工合に毎週日々の仕事が定まつて居るから下婢なぞに大に便利てある。奉公人が二人あるときは一人は料理番專門で他は仲働きで食事の給仕や掃除及取次なぞを一切受持つのである、三人あれば一人は男子であつて取次、御給仕、銀製器具の注意、客間の掃除なぞの受持ちとなりて、他の一人は寢室の用事を擔當するのである、三人奉公人を召使ふ家族は大家に屬するのである、日本では書生一人、仲働一人及御飯炊一人と云ふ樣に中等の家で少くとも三人の雇人を使用して居る西洋とは大なる差である。

近頃歐米漫遊から歸朝せられた一貴婦人が所々でなされた演說を新聞紙上で拜見するに、夫人は西洋では雇人の數が日本と比較すると非常に少數であるから西洋の下婢はよく働くと申さるゝが、少しく考へて見なければならぬことがある、日本に在住して居る西洋人の宅には比較上雇人の數が少ない、是れを以て見れば只に下婢そのものゝ能不能以外に種々の原因がある、第一に日本の旦那樣や奧樣方は少し臀が重すぎる僅かの事に幾度となし手を拍て召使を召す癖がある、今少しく主人等自ら西洋人風に化したらば雇人を一人減することが確かに出來る、日本では雇人の數が多きを以て自慢する風がある、實に不都合な話である、西洋では大家の主人でも時には玄關へ自ら取次ぎに出ることがある。來客かあれば直に火鉢だ煙草盆だ、サー茶と御菓子を急て出せ、二三分間に御代りと出て來る、次に何か

他の食物飲物と色々に我儘が出る、雇人には仲々は氣の毒である、實際富の程度から言へば日本人は少しく贅澤すぎると言はねばならぬ、其外以上述べて來た不規則の慣習を全然改良せねばならぬ、西洋の御勝手と日本の御勝手とを比べて見れば御勝手と御座敷と位の差がある、今少しく西洋に見習ふて勝手を改良し下婢の働きに便なる樣にせなければならぬ、又ぞろ〳〵した日本服ではとても活潑に働けるものでない、且不潔になり易くて感服しない、速に山根醫學士の改良服が看護服の樣なものを着ることに定めたらば便利であると思ふ、是れ等の諸點に注意さへすれば、日本人でも隨分敏捷に働けるものである、下婢共を責めるよりも少しく自らを顧みるが宜い。



掃除に付て一言せんに西洋人と日本人とは掃除と云へる語の解釋が異て居る、それて日本人が米國へ行て家族て働く場合なぞにありて、時々主婦から譴責を蒙り日本人は狡猾であるとか、怠け者であるとか邪推せらるゝことがある彼らは全く惡心から出て職を怠るのでなくして掃除は意味を了解しないのである、日本で室の掃除と言へば拂を以て障子や隅々を拂きて後、箒を以て掃き出す丈けてある、掃除して暫らくして室內に入り檢査すると塵が一面に落ち着いて掃除しない前より

も不潔であるこれで掃除が出來たと思ふて居るから譴責を受けるのである、日本の書生に硝子障子の掃除を命ずると濡れた布で一通り拭く丈けで濟んだと意ふて居る、實際硝子を掃除すると言へば鏡の樣に一點の曇りもなき程にしなければ滿足が出來ないのである、室内を掃除するも同じことで塵一つ目に留らぬ樣に清潔にするのである、日本人に清潔と云ふ意を了解して居るものが少くない、西洋では清潔は神聖に次ぐと言ふ位である、丁度外科醫が素人に清潔と言ふても了解が出來ないと同じ事である。

○禮義　一寸考へて見ると日本人は禮を重んじて西洋は一向禮式がない樣に思へるが、日本人の禮は虛で西洋人のは實であるて、實際西洋人の方が禮を重んずるのである、服裝に付て例を擧げれば、日本人は外出するときは相當に衣裝に注意する、然し其精神は自分が立派に見ゆる樣にするので、つまり驕慢心からである、然るに西洋人のはそうでなくして、不躰裁な服裝をして人の前に出づるのは其人に對して失禮であると云ふ精神からである、それで西洋人は衣服其のものは立派でなくとも、頭髮をよく櫛り顏面や手なぞに汚點なぞがない樣にし、白襟や「カフス」の清潔なのを用ひ、靴を磨き立て、爪を掃除し、衣服に汚點なきことに注意する、さすれば衣服につぎが當てゝあつても何んな貴人の前に出ても差支はないのである、それで西洋の都會に於て一等の街路に於て不潔な衣服を着けて居るものを見認めない、貧乏人は自ら公衆の前に出づるを恥づるのでなくして不潔な服裝を以て公衆の目や鼻に不快を感ぜしむるを憚るのである、又西洋人は只に他人の前に出る時のみでなく家族の內で互に注意して居るから、親子でも襯衣一枚で寢室外へ出る樣なことはない他人と同樣に注意するのである、日本では自分さへ心棒が出來れば如何なる風躰でも無頓着である、實に他人を眼中に置かないのである、靑年の如きは實に甚だしい不潔な衣服を着する程立派な樣な積りで居る、即ち是れを以て一の自慢として居る、失禮千萬なことであると思ふ、西洋で芝居なぞに行くときは禮服を着用

して行くものがある。是れもやはり他人に對して失禮とならない爲めである。

素人看護法(つゞき)

淑德女學校講師醫學士　佐藤恒久

前回には躰の運動と云ふ事に就いてお話を致しましたが。即ち筋の運動或は筋の收縮で以て躰が種々に運動して、曲つたり、物を取つたり、掴むだり、色々の事が出來るので在います。其は前回にも述べました通り、先づ腦から其働かすべき部分の筋まで命令が下る、其れを神經が傳へて始めて筋の運動が出來る、其運動を稱して隨意運動即ち意志に從つて爲す所の運動を云ふので在います。例へば今私が此コップを取らふと云ふ考があると、腦から直に命令が下つて自由に取る事が出來る、即ち隨意運動で在います。其外に不隨意運動と云ふのがあつて、是は自分か運動を態々爲やうと云ふ考が無くして、自然に出來る運動を申します。第一に少しも意志の命令に從つて居らぬと云ふのは心臟の運動で在います、其は自然に動くのであるから、意志で禁める事も出來ないのであつて、全く不隨意のもので在います夫れ故寢て居ても心臟は動て居る。今一つ不隨意の運動ではあるが、意志に從つて多少加減することが出來るのは、呼吸の運動で在います。尚詳しく申さば此外にも細々しいのが在いますが、先づ此位の事にして置いて、此次は今までお話爲たのとは少しく異つた所のもので、五官と云ふ事に就いて申述べませう、

五官の話

五官と云ふ者も矢張一の神經の活動で在います、前回に述べました通り、神經には運動神經と云ふものがあつて、腦から身躰に運動を命ずる所の電信線になつて、居ります、其外にもう一つ智覺神經即ち五官の根源を爲して居るものが、在います。諸孃も御承知の通り、五官とは第一視神經、第二聽神經、第三嗅神經、第四味神經、第五觸覺神經等の活動ぶりを申すので在います、それで先づ

第一視神經、是は眼と腦との間を繋いで居る所のもので、眼球の後部に擴がつて居て、眼球内の恰も寫眞機械の暗箱の樣な組織の中に向つて、外界の變化が寫る其を感ずるのが役目で在います。

第二聽神經、是は耳の内部に在つて、外界より來る音響を感ずると云ふ役目で在います。

第三嗅神經、是は鼻の中に分布して居て、臭香を放つ機發性即ち瓦斯の樣なものが其所を通過して、其際嗅神經の末端を刺戟すると、其臭香を感ずるので在います。

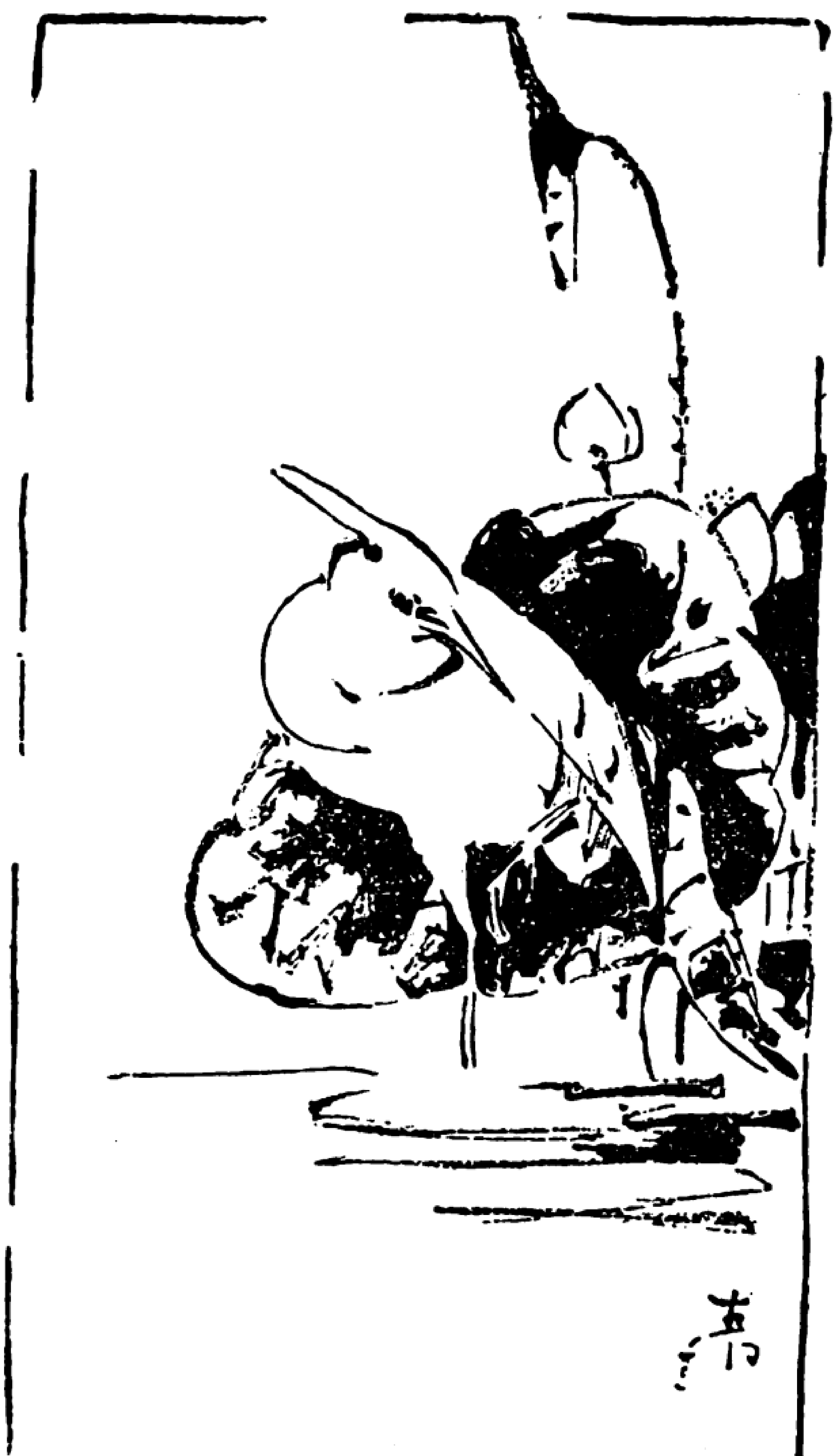
第四味神經、是は口中殊に舌の粘膜中に在いまして、齟嚼した食物が唾液に溶解せられて液躰となり、其液躰が舌面に浸み込と、甘いとか辛いとか云味を感るのであつて、是等の神經は皆腦から直接に達して居ます。

第五觸覺神經是は或るものは腦から直接に達して居る事もあり、或は脊髓から續いて居る事もあり、又脊髓に道を取つて行き別れて居ることも在います。此神經の末端は身躰の表面の皮膚内に在います、前にも皮膚の話を致した通り、皮膚と云ふものは唯躰を包むでばかり居るのが役目ではなく、排泄作用と云ふ事も爲し、亦此觸覺と云ふ事をも司る役があるので在います。即ち物が皮膚に觸れた時堅いとか軟いとか、尖つて居るとか、滑かであるとか或は熱い、或は冷いと云樣な事を感ずる事を司つて居るので在います。

以上述べました如くに、五官の神經は或は光線の變化を受け、或は音響、或は臭香、或は味、或は物に觸れなどして種々の變化が其神經の内に起る、其起つた所の變化を神經が直に腦に通ずると、腦が始めて其事を知る、それから後は精神に種々のむづかしい心理學上の變化を起して樣々の活動を爲るので在います。何にいたせ唯感ずると云ふ迄の分は醫學の範圍でありますが、其活動になると、心理學の方になりますので此邊で止めます。又佛教の方では此生理學で云ふ五官に腦を加へて六根即ち眼耳鼻舌身意と申します、併し是は唯生理學の簡單なお話を爲るので在いますから、先づ五官も此位に爲て置きまして此次は身躰に最も大切なる血液の事に移りませう。

血液の話

血液と云ふものは御承知の通り、赤い液躰で在いまして、躰の外に出ると云ふと凝結するもので在います。躰内にある間は全身何所までも行渡つて居て、管の中を流れて居り、其管を血管と申します。血管は大小色々在いますが、太いのは拇指くらゐ細いのは毛よりもゝつと細いのが在います。それて、一人の身躰内に於ける血液の量は大概どのくらゐあるかと云ふ事も知らなければなりません。是は人々大小によりまして一様には申れませんけれど



も、大概躰の目方と血液の目方と比較してお話するのが一番よいと思ひます。通常躰量の十三分の一は血液があるものとして在いますから、十三貫の躰量を有て居る人は其躰内に一貫目は血液があると思へば宜しいので在います。

此血液の製造所は何所であるかと云ふに、まだ能く分りませんが、是は多分脾臓と云ふて左の脇腹に在る其ものと、甲状腺と云つて咽喉笛の前の所に在る此二つのものらしく是は恰も乳腺の中で乳汁が出来る様に、此内て血液が製造される様に思はれ、其中には澤山に血液を含むで居ります。又骨髄と申して長い骨の真に成て居る部分も血液製造所らしく思はれます

次は淋巴のお話

淋巴の話

淋巴、是は無色の液であります茲では白い血液だと思へば宜しい、此の淋巴は或時は血液の中に在り、或時は獨立して別に流れて居る事も在います。而して別に流れて居る時には矢張淋巴管と云ふ細い管の中を流れるのであつて、是も血管と同樣に全身に行渡つたもので然し決して太い管ではありません。又時としては別段に管の中を流れて居ると云ふわけでなくして、躰內の臟腑の內或は筋肉の中に浸み込むで、居る場合も在います。恰も海綿の內に水が吸ひ込まれて居る如くに、組織の內に含まれて居ると云ふ三の狀態が在ります。又淋巴腺と云ふものは淋巴管の一部分で矢張海綿の樣な工合に出來て居る小さな球の樣なもので在ります。丁度鐵道に停車場が在る如くに、淋巴管の所々に淋巴腺が在ります。此淋巴腺が躰內で殊に多く在る所は頸の周圍、腋下、鼠蹊、及び腹中で腸の近所に澤山在り、其太さは大概豌豆くらゐのもので、躰の表面からは觸つて見ることは出來ないけれども、病氣の時などは淋巴腺が脹れますから上から觸ることが出來ます。殊に頸の周圍を觸つて見ると、グリ／＼したものがある是は淋巴腺が太くなつたので在ります。此淋巴と云ふものは何所で出來るかと云ふと、是は腸で出來ます、即ち飲食物が消化されて、其滋養分が腸の粘膜にある淋巴管の內に浸み込むで、(丁度植物の根が肥料を吸ひ取ると同樣に)一種の液躰が出來る、是が淋巴で在ります。前に申した通り、淋巴管だの淋巴腺は腸の近所に、澤山在り、是が段々上の方に延びて行き、終に集つて少しく太いものになり、頸の周圍の所で血液の中に混合して種々の役を爲すので在りますが、先つ是までが淋巴が製造場から血液の中に入るまでの順序で在ります。

是までは血液の性質或は製造場所の事をお話しましたが、是は何の爲にかと云ふと、人の躰が斯うして活動して居たり、又は小兒が發育したり、するには必ず營養と云ふものが必要である、丁度火を燃すのに薪や炭が

必要の如くに、人間の躰にも矢張それたけのものを消費して行かなければなりません。其消費して行く所のものをあとから段々補つて行く其物を營養と申します。即ち火を燃すに薪を入れて火勢を永續せしむると一般に血液と云ふものは人躰の活動發育に最も必要なものであり、又今一つの血液の役目は恰も竈の煙筒の様なもの即ち其は躰内で出來た所の廢物或は害に成る所のものを排泄することで在います。毎日火を燃して行くと煤が出來る、其煤を除くるには煙筒が必要である、其役目を躰内ては血液が有つて居るのです。然らば其廢物を何所で棄てゝ仕舞ふかと云ふに、是は種々の臓腑の力に依つて躰外に出されて仕舞ふのでありますが、第一何所て掃き出されるかと云ふと、肺臓で炭酸を吐き出されます。始め躰内の炭酸を吸ひ取つた所の血液が肺臓に行きて肺臓内の空氣の酸素と自身の含んて居る炭酸を交易して炭酸を躰外に排除して仕舞ふので在います。それから第二の廢物取捨物は腎臓で在います。腎臓ては血液中の第二の廢物即ち尿を捨てます又汗腺も是れと同様に汗を排出する。それて右の通りに血液が躰の榮養を供給したり廢物を排除したりするには血液が始終躰の内を巡て居らねばならぬ是が後に説く血行器の役目であります

飲食物の種類と効用

時任竹子

婦人が、家政を主るに當りて、先づ第一に、注意せねばならぬ事は、飲食の點である。即ち、其選定法、調理法なども大切であるが、其れを知る前に、食物の種々の品質と、其効用とを知るのが尤も大切である。

▲水、　水は、人間の生活上、極めて必要なるものである。食物は、なほ斷ちて數日に及ぶも未だ死に至らぬも、水は飲まずして、全く、二日を經過すれば必ず絶命する。斯くの如く、人體に最も大切てある水の効用も實に夥しきものである。先づ内患を治し、外傷を洗ひ、又能く種々の不潔物を洗滌し、巨大の機械を運轉

し、其他、宇宙にあらゆるもの丶爲に使用せられていかなる土地、何等の生物にも、決して須臾も欠べからざるものである。

水はしかく、甚だ必要有効の者故に、其不良のものは又極めて、有害ともなるものである。各種の疾病も、悪水を飲用するに原因せしことは少くなくない深く心すべき事である

水に軟水硬水の二種がある。軟水は、鑛物の成分を含めること少なきものであるから茶珈琲を煎ずるによろしく其他一切の食物に和して甚だよろしい。又布帛を洗ふにも適して、經濟上、大いに利がある。此種の水は石鹼を溶解すれば直ちに、泡沫を生ずるにてもわかる。硬水は是れに反して、鑛分を多く有するものである、故に茶珈琲等に用ふるによろしくない。又白色の衣服を洗濯するに決して純白となることが出來ない。これに、石鹼を加ふれば凝固りて容易に泡沫を生ぜないものである。

▲乳汁、獸類の乳汁は、人體の營養に適する。すなわち其種類を云へば牛、馬、羊、其他の者よりも得ることが出來るも、中に就きて最も得易くして、且つ其質も良好のものは牛乳である。故に爰には、其成分、及び効用等を說きませう

牛乳に含有するものを大別すれば、其百分中蛋白〇、五四五、乾酪二、七八二、脂肪四、乳糖四、六七四、灰分〇、七二九鹽分〇、五、水分六、四〇の割合である。されば牛乳を甚だ滋養なる飲料として、之を用ふるによろしくも必ず沸騰して、飲むをよしとする、而して、其分量は、大人に在りては一日に、三合以上を用ふるにあらざれば滋養とするに足りない又、牛乳を餘りに嗜まざる人は、茶、珈琲、紅茶、又は砂糖、食鹽など宜き程に、混へ牛乳は流動體であつて、肉類に比すれば消化し易いとも、倘胃弱の人には、其れ將た、一時に多量を下する時は消化を妨けらるゝこともある、斯るときは、一度に多くを飲まず、少しづゝ口中に入るゝがよろしい

牛乳は白色不透明であつて、人乳に比すればやゝ濃くある、味は甘味少なきを常とする。其甘味多きものは、

稠厚乳など混じたる不良の品である事がある用ひてはいけない。

牛乳の良否を試みんとするに、最も簡便なる法にすれば先づ清潔なる水を器に入れ、其中に、一二滴の牛乳を注ぎ見よ。其乳汁凝固りて、沈むのは、不良である。之に反して、水中に散り亂るゝ者は、良好であるといひ得べし。又一滴の乳汁を爪の上に滴らすに、固まり、恰かも、鷄卵を割りたるが如き形を爲すは、良好のものである。滴らすと頓て流れ去るは不良である、尚、指先に乳汁を濡らして揉み試むるに、脂肪氣あるもの及び沸騰せしめて、暫く冷まし置く時厚く上に皮の如きものを生するは孰れも良好である。

▲酒、　酒は孰れの國に在りても通常飲料として用ひらるたゝのみてなく饗宴の禮交際の助けとして、甚だ欠くべからざるものとなれるが如し。然れども、其効用を云へば、害多くして、利少なし。故に女子などにありて決して之を用ひざるをよろしいとなす。さて其成分は、何種の酒を問はず。多少の酒精分を含む。故に少量を用ふれば、酒精の作用によりて、所謂興奮の効を奏することがある。さながらに憂欝せる心氣を引き立たしめ大病人の衰弱を補ふ等の利があるとも少しく、其量を過ごす時は、人身の筋肉組織を損じ、活動力を減じ神經を刺衝し、激昂せしむる事甚し。而して人、一度酒を飲用し初むれば次第々々に其分量を増加して遂に、智能を衰へしめ、決斷想像の力をも減却し、心身ともに、衰耗に歸するものである。斯かれば人により、又は時によりては、適度に之を用ひることとは、強ちに、禁止すべきにずと雖も、婦人、小兒、及び神經銳敏なる者、脳力を多く使ふ人などに在りては用ひないにしくことはないてあらう

已むを得ずして用ふべき酒の種類は最良の日本古酒、純良の葡萄酒、麥酒等の如き醱酵したるものである。又衰弱の人の爲には「ブランデー」「コンニヤック」などをも用ふれども、總じて蒸餾したる酒は決して濫りに、飲用し馴れしめてはいけない。殊に女子は道德上に於ても飲酒は必ず愼むべきことである。

▲茶、　茶は本邦人常用の飲料として、中古以降、普く行はれしものである。　茶其成分中に含める「テイン」と呼ぶ、植物鹽基作用によりて、また一種の興奮劑である。故に茶を喫すれば、心氣の爽快なるを覺ゆるものである、然れども茶は決して多量に用ひてはいけない。多量に用ふる時は消化不良となり心悸を亢進せしめ不眠症を發し。又睡眠を妨けらるゝてある。殊に綠茶の最上品は「テイン」の多量きを以て最もよくない。却りて、交り物無き番茶を用ひるがよろしい。

番茶は煎ずる前に、能く溶して、沸騰したる、熱沸を注ぐべし。上茶は能く沸りたる湯を少し冷まして、急須、茶碗等をも、温め置きて注ぐべし。

紅茶は沸騰したる湯にて煎ずべし。此れにて砂糖及び牛乳等を和し用ひてよろしい

▲珈琲、　珈琲、チヨコレツト」「コヽア」等も、亦興奮作用を爲すものである。こも亦茶と均しく、多量に用ふれば害がある。珈琲の煎じやうは、紅茶の如くすべし。「チヨコレツト」「コヽア」は先づ能く、其粉を溶きて、其れに、熱湯を注ぎて掻き立つるか、又は、一寸、火に掛けて煎るも可なり。孰れも、砂糖牛乳等を和し用ふるものてある。

因に記す烟草は有害無益のものとして、擯斥すといへども、萬國至る所尚是れを用ふる所以のものは、蓋し、少量を喫すれば心氣を爽快にして、且つ、疲勞、徒然を慰むるに利があるからてあらう。然れども、烟草の成分中には種々の有害物を含む、就中「ニコチン」は有害のものてある。故に喫烟の量多きに過ぐる時は人體に及ぼす害毒の決して少々てない、斯かれば、小兒が喫烟の如きは、殊に嚴禁して、せしめてはいけない。

▲米、　米は我が國、上代よりの常食品として、第一に算へられたるものである。蛋白質の多き事は小麥に及ばずと雖も、消化の速かなることは、米にしくものはない。故に我等が常の糧に充つるには甚だしといふべきてある。米は肥後、美濃の産を最上とし、尾張、武藏之れに亞ぐ。其良きものは、粒肥えて、圓く、兩端尖りて、且つ光澤がある。焚きて食し、又酒麴飴菓子等にも

製して用ふ。

▲糯米、　粳米に比して蛋白質多く、且つ粘着力最も強き故に、強飯、餅等を製し且つ、飴菓子などをも作るに用ふ、又強飯を干して挽きたるを道明寺といふ從來軍用には最も適當の食品とて使用せしものである、

▲大麥、　は丸のまゝ煮て食し、又挽割としても用ふ。丸麥を煮て水に洗ひ浸し置きたるをえまし麥といふ。米に和して焚くときは、丸麥を煮たるまゝえまさずして用ふべし。大麥は、蛋白質を多量に含めるものなれども、其精くる時大半損耗し盡して、たゞ澱粉質のみを殘し留むること多い。常に肉食を爲す人に在りては、殊に麥飯を食するがよろしい、大麥は、味噌に製し、又麹菓子等をも作る。

▲小麥、　は最も人體の營養の裨益少なからざるものである小麥粉は、麵麭、饂飩、菓子、及び醤油等に製して、需用最も多し。又、小麥を精くる時生ずる所の小麥糖にて、麩を作る。小麥糖は極めて、蛋白質に富めるものなるが故に、麩は滋養分を含めること頗る多きものであると知るべし。

▲裸麥、　も亦麵麭に製すれども、小麥にて作りたるものには劣つてをる。其他、麹、味噌菓子等を造るに用ふ。

▲燕麥、　は煮て砂糖に和して食す。肺患胃弱の人などによろしい。されども多くは牛馬の飼料に用ふるものである。

▲粟、　も蛋白質を含有する。米に和し、焚き食すべし。又粟餅粟の水飴を製すによろしい。

▲稗、　も大抵成分は粟に均しくある。村落の農民は米に和して、常食とする者が多い。稗は飴に製し、牛馬及び小鳥等の飼料に供す。

▲黍、　は挽きて粉となして餅及び團子に製して食すべし。

▲玉蜀黍、　は隨分に滋養となるものである。煮又は、焙りて食すべし。又粉として。餅に造るもよろしい。其餘りに固く熟さゝる程に取りて食すれば。消化甚だ宜しけども固く、實の入り過ぎたるは不消化である。

▲蕎麥、　も亦多く蛋白質を含む。粉に挽きて、蕎麥切

蕎麥がき等を製して食すべし。

禮法の精神

禮法講習會師範　近藤嘉三

近來の樣に禮儀作法の亂雜無趣味なることは殆んと近古に類例の無い所で、彼の戰國時代と稱へた元龜天正の時分でもこれ程では無かつたろふと思はるゝことは、その頃の記錄類や日記などを見ても知らるゝ。今日では或る場合には全く禮讓と云ふことの跡を絕つたかと思はるゝこともある。それも公會の席上などでさへ……。それてあるから一家の中の私の禮、即ち家庭禮法などは遺憾ながら絕無てあると云ふ有樣、例へば人間一生の大禮と申す婚姻の式などてさへ、禮とか式とかと名の付けらるゝ方法に由て行ふのは極めて少くない。殆〳〵晨星落々と云ふ有樣てある。大抵の人が婚禮と云へは兄弟や親族が打集ふて飮食する、甚しいのは料理店などへ特出して藝妓などを聘して酒宴を開く、これが婚禮てあると心得て居る。どうもこれは驚くべき亂暴な次第で禮儀の荒廢も此に至てその極㸃に達したるものてある。云ふまでも無い事柄てあるが何も飮食するが婚禮の式では無い、又婚禮に飮食を爲ねばならぬと云ふ理窟も無い。がこれは彼の藤氏時代に於ける婚禮式の後に行ふた饗膳の式の名殘である。加之その三獻の杯の式計りが殘つたので、云はゞ肝要な婚禮の式は知らず〳〵の間に世間から忘却せられて、その式に隨伴した一部の形計りが僅に殘つた位のものてある。

今日の人、……中には禮法家と稱せらるゝ人々てさへも時としては三々九度の杯が婚禮の式かの樣に思ふ人もあるがそれは大なる間違で三獻の式は別に婚禮に限りて行ふ儀式ては無い。饗膳には必ずこの三獻の式を伴ふたもので即ち之は支那流の初獻、亞獻、終獻の式てあつて、丁度今日洋風の宴會てシャンパン酒を勸むる樣なものである。いはゞ極端にいはゞその式とか禮とかに關係の無いものと云ふても好い位である。即ち

一口に申さば式の後で飲食を致したと申す計りである。されば三々九度の杯を爲したからとてそれで婚禮の式を致したとは申されぬ、況してこの三々九度の杯だにも致さぬのは……それ等は殆んど論外である。斯樣な類は婚禮を致したなどと申しても……法律上の話は暫く措て、禮法又は道德など云ふ立場から申さば廉目の無い配偶で、斯樣な夫婦は矢張一種の野合と申しても好かろふか。

婚禮でさへ斯かる有樣であるからその他の儀式などで親族や知己の間に音問接遇するにも禮服を用ゆるも極めて少い着流しもあれば甚しきは兵兒帶姿か何かで出掛るもある。どうも亂暴極まる體裁である。それから何かことがあつて他人を招待する時の如きも主人の挨拶も無ければ客の挨拶も無い、殆んど集會の整理も秩序も缺如の姿である。一寸一つ二つの例を擧げても斯樣の始末であるが、これが日東の君子國だとか東方の禮儀國だとか申して自慢をし他からも尊敬を受けた國民の子孫の有樣かと思ふと實に情け無い次第で、我々は先祖に對して殆んど會はする顏が無い。

斯樣に禮儀作法が亂雜無趣味に成つたに就ては、それは、どうも種々の原因のあることであろふ、でそれを今一朝夕に公會の式作法から家庭の禮儀までも整へ樣と申すことは頗る難事である。が、然しどうしてもこの禮法のことに就ては相當の救濟法を考へねばならぬ、せめては公會に於ける作法丈でも規律ある方法の下に整理致し度く思はるゝ。社會は今方にその供給を識者に向つて催しつゝあるので。既に先頃の高等女學校長會議に際しても四五の校長等が今日に適當なる禮法の標的を示されんことを大臣に建白致したと承るが、これ等も實にその必要に迫られ居ることを知るに足るのである。隨分從來とても有志の間には國禮制定の議が無いでも無い。が何時も成効はせぬこれは私などの考へでは矢張りその方針を誤つて居たのでは無つたかと思ふ。即ちそれは小笠原とか伊勢とか云ふ古禮を復興させようと云ふ議論や、又はそれ等を折衷して一種の禮式を作り度いと云ふのであるが、それは恐く徒勞で

あろふ。即ち毎時もその計劃が失敗に終るを見ても知らるゝ。

伊勢流や小笠原流何もそれが惡いと申すては無い……惡いと申すのでは無いが、何分その作法が餘程時代後れに屬するものが多い、これを一口に申さば今日の人情嗜好に適せぬのである、摺足、三方……三つ指て挨拶をする、至極大人しやかには相違ないが之を蒼忙極まる二十世紀の今日　行ふと云ふことは……少し六ケしくはあるまいか。

女學校などても何分禮法の標的とすべきものゝ無い爲めに作法の教授は餘義なく彼の伊勢や小笠原の古禮を行ふて居るが、全くこれは實用の目的で致すのでは無いと申しても可い位。即ちその禮法なるものは只々教場で一時間なり二時間なり授業すると云ふに留つて之を日常の交際の上に應用することは無い、否な寧ろ出來ぬと申さねばならぬ。若し口の惡い人達に評せしめたならば今日の作法の授業は舊幕府時代の演劇の稽古を致して居るも同し事だと云ふかも知れぬ。果して然様であるとすれば禮の價値も實に地に落ちたのであ る。

然し行はれぬのも無理は無い。素とより禮は風俗の粋とか習慣の精とか申すべきものであつて、その時代時代の國狀嗜好から生れ出てたるものたるべきは云ふまでも無い事である、然るに五十年も百年も昔の風俗や習慣から作り出された作法を時世人情の甚く變つた後の世に行ふとするのであるからである。……先つ禮服に付いて考へても分る。舊幕府の頃まで禮服であつた裃、あれは當時の人の目には立派でもあつたろふ、隨分風流な扮裝でもあつたろふ。が今日は誰もあんな異形の風をする人はない。若しこれを今日の禮裝と定めて政府が法令の力で以て着用せしめよふと致しても恐くは忌避せぬ人はなかろふと思ふ。人の忌避じたり或は嫌忌する様なものは……どうして之を禮として一般の人に行はすることが出來よう。それと同様で彼の三つ指、摺り足流の禮法は百年二百年の昔ではそれが大變に立派であつて誰もく競ふて之を學んだも

のである、そして又大名とか貴族とか云ふ人々には交際は勿論日常の作法として全く實地に適したのである。けれども今日ではその粋であつた、優美であつた作法が實際に適せぬ樣に成つて且つ人が何んとなく之を嫌ふ樣に成つて參つた、人情嗜好の變遷は斯の如してある。この間の消息を解せずして、禮法が定めたいの作法が改正したいのと申しても到底無用の勞たるは申すまでも無い所であろふ。況んや禮法などは之を定むると云ふよりも寧ろ自然に定まると云ふ傾向のあるものであるから、その時々の風俗や習慣の精華を拔いて之を形つくるの方針を取るは最も大切たと云ふ事を知らねばならぬ。

禮はどうしても日新主義てなくては行はれぬ。我が陸海軍の禮法の如きも時勢推移に從ふて幾度も之を改變されて居る。既に昨年の陸軍禮法改正の如きも全くその必要に迫られたのである、斯樣に日新主義を取つて實用に適切ならしめ樣と勉めて居るから外の禮法と違ふて實際に行はれて居るのである。

夏の家庭

高木とし子

夏の衛生

追々暑氣に向いて種々なる流行病の襲ひ來る時節となりぬ、凡て家婦たるものは一家の健康を保護し病魔の入り込まぬ樣注意すべき責任あれば其豫防法を心得居るこそ肝要なれ殊に赤痢虎列剌膓胃加答兒の如きは一度發生するや忽ち猖獗を極め老人或は躰質の虛弱なるものは往々是が爲めに生命を失ふ事ありされば人々日常の衣食住に注意を加へこの大敵を防禦するの方法を講ぜざるべからず今聊さか其豫防を記し併せて若し不幸にして一朝此の災に罹りし時の法を記さん

第一家内及び其周圍近邊をなるべく淸潔ならしむべし暑氣に向ふ頃に至らば必ず一度家の大掃除を爲し一點の塵芥不潔物も殘り居らぬ樣隅々まで拂ふべし、又家の周圍庭園等にて腐朽ちたる木片、木葉等は悉く掻き

集め火にて燒盡すべし或る黴菌學者の説によれば古き板塀等は最も多く病毒の潜伏し居る場所なりと云へば能く洗い潔めて塗りかえる事肝要なり。又田舍家には家禽小屋家畜小屋の掃除をなし、壁を塗りかえ彼の堆く積れる塵芥溜の如きは取り盡して火に燒きその燃へざる部分は地中に埋沒すべし、又井戸換を爲し、天水桶、溜水等を醱注し捨て溝の掃除をして汚水汚物の溜り居らぬ樣にする事肝要なり彼の人口稠密なる都會にて傳染病流行の際は地方に逃げ行かば安全なりと思考する人も多けれど地方は都會の如く清潔法、衛生法等に注意行き屆かぬ勝ちなれば却つて病毒の製造場となりて危險なる事あり。然らば地方に住居する主婦等は殊更に衛生法を研究し又是を實行しておのれ先づ其近隣の人々に好摸範を示し、それより次第に其一村迄にも及ぼし、其村内をして清潔健康なる場所とならしめ以て都會に傳染病流行の際には安んじて生活するやう且つ市民の安全なる避所とならしむ樣 盡 力すべきなり。

まづそれに就ては盥盤桶等の如き木造の器物は日々洗ひ潔めて數時間日光に曝らし且つこれを用ゐる時は可成常に乾し置くやうにすべし。彼の種々の廢物を捨つる塵芥溜の如きは夏の暑き日光を受くるや忽ち腐敗して近傍の空氣を不潔ならしめ恐るべき病氣の源因となる事間々あれば塵芥溜には蓋あるものを用ゐ其中の廢物は可成度々取去らしめ、溜め置かぬ樣注意し、又時々は其中を洗ふ事も肝要なり。食料品を入れ置く鼠入らず戸棚等は毎日拭き潔よむ事を怠るべからず、又常に石灰を求め置きて下水、塵芥溜、其他不潔の虞ある場所には斷へず散布するやうにすべし

去る大醫の説に傳染病の豫防法は手を第一に注意すれば傳染病とて恐るゝに足らず、譬へば患者を介抱したりとて千倍の昇汞水に同等の石炭酸を加へてよく洗へば決して心配なし、傳染病のみならず平素食事の前に當り一度手を洗ふて食するやうにすれば甚だよし、若し昇汞水なくは石鹼にてもよし又食鹽にてもよし鹽は殺菌力を多く含むものなれば鹽分の多く含みたるもの

を食すれば安心なりといふ
次に主婦の注意すべきものは飲食物なり、飲食は必ず漉したるものか或は一度沸騰したるものを要す田舍の水は都會に比すれば冷やかにして且つ清ければ生水を其儘用ふるも差支なし、されとこは湧泉或は清冽たる流水のみに限れり。普通の井戸は決して然らず何となれば田舍の井戸或は溜水の周圍には大抵草木或は野菜類の繁茂し居りて稍もすれば其枯葉、腐敗物の落ち入りをるものなればそれが爲め却て危險多しと知るべし、溜水を沸騰せしむる事に付て一言せんに、水を釜或は藥罐にてあまり長く煮て其儘數時間置く時は再び其中に動物性のもの發生し生水よりも却て有害なる事あり、故に水一度沸騰せば直ちにをろして瀬戸物の器に移し冷るを待ちて壜に入れ



成べく風透しのよき處に置くべし、沸騰したる水と雖ども異樣の臭氣ありて味惡しきは最早腐敗したるなれば決して飲むべからず沸騰後十二時間を經たる水は生水に毫も優ることなきなり、牛乳に至つては腐敗力一層に速かなれば決して時を經たるものを飲用すべからず
食物に制限を直き惡食不消化物を避くべきは勿論なれど、又あまりに撰擇に過ぎ此も惡し、彼も害あり、食ふべからずとて排斥する時は毎日同樣なるものゝみを食する事となるを以て倦厭を生じ食慾を減じ却つて健康を害する事あるべし。且つ人の身躰を組織するには種々なる營養素を要するが故に食物には種々參差あるを要するなり又肉類は滋養分多ければとて日常其れのみを取りては不經濟なるのみならず却て健康に益なし

野菜類の如きも料理法よろしきを得ば衞生上大に有益なるものと知るべし故に食料には成べく種々なる品を取り交ぜて用ゐ以て一には膳部を美味ならしめ食慾を增進せしむるの助けとなし、又一には身躰を組織すべき要素を充分に供給し得る樣意を用ふべし、たゞ新撰のものを撰び且つ料理法に注意する事は最も肝要なりと知るべし。

次は衣類の事なり、流行病の傳染を防ぐ再頁法は血液の循環をよろしからしむるにあれば、常に暖衣を纏いて身躰を冷さぬ樣にし、暑中と雖ども薄きフランチルの肌着を常に着し、且つフランチルの腹卷を爲して腹部を掩ひ以て感冒腸カタル等を防ぐべし衣服は殊に注意して洗濯し、夜具は日光に晒して濕氣を去るをよしとす彼の朝起して直ちに其の夜具を疊むが如きはよろしからず

以上は流行病豫防の概略なれど萬一不幸にして一度病毒の家內に浸入し來らんか主婦たるものの注意一段の力を要す、若し看病の心得無く、醫の來る迄施すべき手當を知らざるがため狼狽して策の出づる處ろを知らざるが如きは素養ある一家の細君といふべからず。又山間僻地にして醫師の許迄駈けつけんも一里二里遠きは四五里も行かざる可からざる田舍家にては殊に臨機の所置方法を知らざるべからず、これには先づ數個の湯たんぽと芥子の一壜と、葡萄酒或はブランデー並に繃帶にすべき布を準備なし置き如何なる周章の際にも直に見出し得べき塲所に仕舞ひ置くべし而して虎烈剌病にかゝりしものあらばまづ葡萄酒三十「グラム」か「ブランデー」「十五グラム」かを與へ或は樟腦精と云ふ興奮劑わらび此中に五六滴加ふるも宜し、次に芥子湯にて脚湯をなさしめ、充分あたゝまりたるを見て、靜かに床に臥さしめ湯たんぽを身躰の周圍にあてゝ身體をあたゝむべし、又血液の循環衰ろへし樣子のあらば芥子を湯にて掻き晒布にのばして兩足の裏兩方の手首と腹部及び襟首に貼るべし。

以上の手當を醫師の來る迄爲し置かば病勢の增加を防ぎ且つ其治療を施すに當り一方ならぬ便宜を與ふるも

のなり。或時疫病ハ神一都府に舞ひ下りて其住民の三分の一を殺戮して曰くわれ手づからこれだけ殺さば充分なり恐怖は餘りの三分の二を殺すべしと」這は或國の昔物語なるが實に病氣を驚き恐れ神經を起す程病勢を増加し或は病氣の傳染を助長するものはあらじ、主婦たるものが心弱くして不慮の災難に出遇ふ時は忽ちあはてふためき爲す所を知らざるが爲めに小難も大難となり救ひ得べき患いも救ひ得べからざるに至る事は珍らしからぬ事なれば如何なる危急の場合にも取り亂す事なく、怖れず愕せず泰然として是れが救助の策を考え得べきほどの雄々しき氣性を養べきなり。



猶夏季の衛生に就て簡單に其の方便をいへば、第一は空氣の清朗なる事、第二は節食を力むる事、第三は衣服の清潔なり、空氣の清朗を欲せば樹木の多き田園の生活尤も願ふべきなれども、人各々其の生活上の都合あれば夏季三ヶ月家族を擧げて田舎の住居もむづかしければこれにはなるべく家の周圍に樹木を植へて空氣を新鮮にすると同時に家の周圍を清潔にすることそ第一の徑捷なれ、第二は鮮しくいふまでもなく淡泊なる食物を腹八分目に食し、第三は衣服の洗濯夜具の乾燥を、身体の冷浴、若しくは温浴を務むべき事なりと知るべし。

梅雨後の衛生

夏の衛生の附錄として玆に有益なる某ドクトルの梅雨後の衛生を紹介せん

▲雨後の空氣　雨降あがりのお天氣の氣持のよい事は誰でも同事ですがそれは單に隱れて居た太陽が現われたばかりでなく全たく大氣の清淨になつた爲ですそこで戸障子を開けて黴を拭取り殊に流し元などに氣を付けて新な空氣を通はせる事夜具や衣類を乾かす事は皆さんも自然に氣が付いて實行されて居らるゝ通です

▲氷水と腸胃　まづ霖雨がやんだので家も清淨に着物もサッパリなつたとする次にはカン〱する太陽に照されると云ふ譯ですが暑になると人躰の諸機關が鈍くなる隨つて食物が欲くないツイ水や氷に手が出るですが是れ等の冷いものは鈍胃袋をます〱害くして一層食物が欲くない、て前よりも猶の事水が非常に欲くなり香物の樣々不消化物が食たくなる又胃が惡くなるとひどく渇を覺ゆるものです氷をのむと僻になるとはそれてす

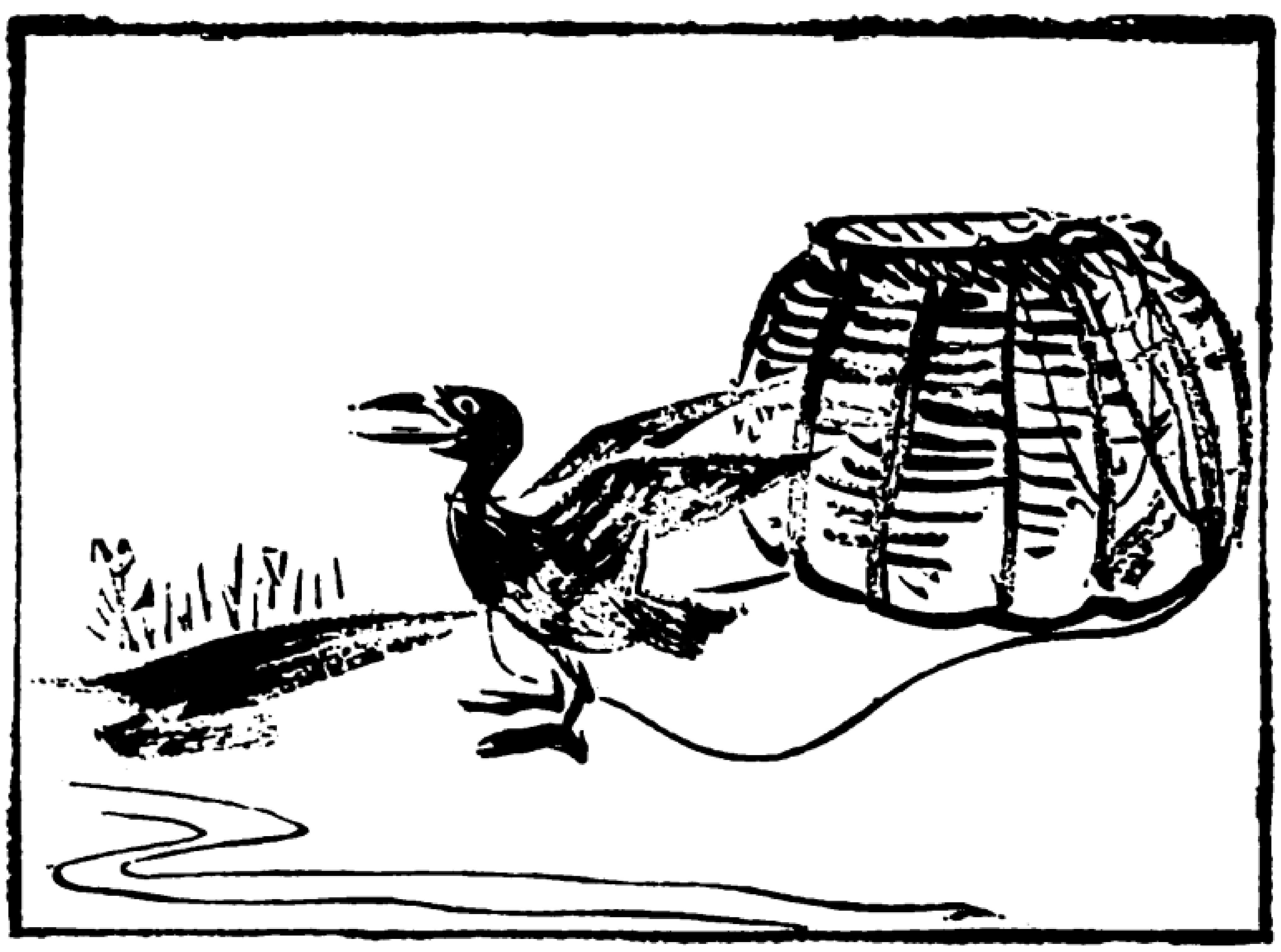


▲麥酒からウ井スキー　ですが何時まで水や氷で濟むならばよいですが食慾と云ふやつは妙なものだ段々するとそんなものでは厭へない水からビール麥酒からウ井スキーと云ふ樣になつて來る婦人だと氷などて胃を害して愈々食物が不味くなると甘い菓子など餘計な間食をする樣なものでツマリ最初に用わた一杯の氷が赤痢や胃病の親になる譯だから一寸我慢して初めて一杯をのまんがいゝのです獨り氷許りでなく酒好汁粉好き茶呑煙草呑みと云ふ樣な極端な食慾は皆此樣な順序からその人の天性の樣になるのです

一躰日本流の食事の仕方は甚はだ亂雜で不規則で且つ不衛生的である、これを改良して今直に西洋流にする

と云ふ事はまだ日本の家庭に行われにくいかも知れないですが普通の日本食でも夏殊に夕飯を早くして九時頃には充分消化する様にそして早寝朝起きをするこんな風な順序にして間食をしなければ胃が悪くならない従つて脳の工合も宜いですから暑さも存外堪いよいと云ふ事になるのです

▲お茶と菓子　西洋では大抵四時頃に家族集つて茶を呑みますがその時刻に訪ねると格別其外の時には滅多に菓子などを出すと云ふ事はないですが日本では客があつたら何時と限ずお茶とお菓子はきまりもので其外食事時分でもないのに鮨とか何とか云ふ御馳走する事も間々あります是れは夏とばかり限つた譯ではなく何時でもあまりよくない事です殊に夏などは腸胃が悪くなりやすいてすから種んな御馳走は云ふ迄も無く茶や菓子も一切廃て頂きたい、チト問題外ですが食事などに來て下さいと云ふて殊更に招んだ時の外は西洋風に一切食物を出さない事は衛生上から宜しい許りでなく訪ふ人も訪はるゝ人も時間もむだにしない丈ても助かります



▲冷水摩擦　冷水を頭からあびるのはよくないと思ますが夏は成可夙起して冷水摩擦をおやんなさい精神が大層爽になつて暑も従つて凌よいてす微温浴もまたよいのてすが日本人は毎晩湯に入りますから是れはいはんてもよいてせう

夏季の食物

夏季の食物は冬季に比すれば一般に分量の減ずるもの

なるが特に米飯は旨くなくなり人によりては半減し又は三分一に減ずるもあり是等は皆消化器の遲緩となりしものにて別段差支のなきものなれども、時には日常の食膳を變化して見るもよからん。或は輕き溫飩の如き又は麥飯もよし殊に麥飯は米飯に比して滋養多きのみならず脚氣性などには至極適當なり、但し麥飯は米飯に比すれば消化遲き由、其早く空腹を覺ゆるは消化の爲めにあらずして、一種の刺擊によるものなりと、されば麥飯よりも寧しろ麥粥の方よろしからん

果物の効用

時候の產物即ち夏季は夏季、冬季は冬季と各々其時節に應じて出來る食物は人間の身體に密接の關係を有する事は醫學上の定說なるが夏季は冬季よりも比較的野菜の潤澤にして隨て人の身體に要する處ろも肉類より野菜類を多く用ふるが如し果物も夏季若しくわ秋季の產物にしてこれが衛生上に及ぼす効能又決して少なからざるなり

扨て果物と云へば一般に水分の多きものなるが其水分は蒸餾水と同樣にして極めて純粹なるものなり、而して其水分中には著しき糖分即ち甘味を含有す、この甘味は身體の重なる營養分となるものにて吾人が日常食用する穀物中に含める澱粉と同樣な効用を有するものなり

蓋し夏季は吾人の躰內の諸機關遲鈍となるものにて消化力も著しく衰へ、隨つて腸胃を過勞する食物を採るに不適當となるものなれば此際にあたつて果物の如きあまり腸胃を勞せずして消化し得き食物を取るは極めて肝要ならん、殊に果物の液汁は槪して一種の酸味を帶び之れを食ふて常に爽快を覺ゆるものなれば炎暑の候に當つて能く熟したる果物を食ふは營養に伴ふて精神を爽快にする効あり而のみならず其酸味は又種々なる黴菌を撲滅するの効能を有し且つ腸胃を淸淨にし隨つて消化作用を活潑ならしむるの効用あり、一例をいへばレモン汁に虎列剌病の黴菌を投ずれば直ちに撲滅するが如し、以て其一斑を知るに足るべし

以上の如く果物は夏の食物として非常の効能を有するのみならず其上天然の色といひ、形といひ最も奇麗にして食するに手數を要することとなく吾人が好んて食するには實に適當のものなり但し果物を食すれば動もすれば下痢を起す場合あり、是は畢竟其の用ゐ方を誤るものにて例へば夜分就寢の場合に當つて多食を爲すとか又は不熟なるものを食ふとか、氷水乃至は冷水などを同時に食する故なり、尤も果物は動もすれば胃腸を損ずる弊ある故近來は熟煮法を用ゆ、即ち支那桃、林檎、の如きは砂糖を加へて煮て食するなりこれ果物を食する随一の安全法なり、

毒蟲に刺されし時の心得



暑さを避けて木蔭に憩らひ又は萩桔梗の秋の花を尋ね朝露を分くる時など誤つて虫に螫ゝれ蛇に嚙るゝ等田舍にてはありがちの事なり蛇に嚙まれし時刺すが如く、しびるゝ如き痛を覺へ青黒く赤みを帶びて腫はては目まひなどを起すに至ることあり、狂犬、牛、馬、等も亦甚だ危險なものなり、斯く生物に嚙まれし時は先づ其毒の血液に混ぜざるやうにし、而して後ち其毒を消さゞるべからず、即ち一方には其傷より上の方をきびしく押へ、又之を縛りて其の毒の深入りするを防ぐと共に一方には口にて吸ひ(此場合には直に唾を吐又口を嗽ぐ事を忘るべからず)又之を切り開きて血と共に毒を流出せしめ若くは醋鹽水等にて洗ふべし、或は硫酸などにて傷所を燒くもよし、若し手療治に

て如何と思はゞ、成るべく早く醫師に示すをよしとす、些細なる疵より重大なる症を惹起し遂に命にもかゝわる事あれば注意すべき事なり。

又蚤蚊などに螫されし時むやみに搔く時は腫物のやうになる事あり。大した事ならねど小兒などは痒がりて爲めに氣分までもあしくなるものなり、この際には藥店よりアンモニア（水溶液）一瓶もとめ臭氣を消す爲めに香水をまぜ、痒所にすりつくれば忽ち愈ゆるものなり。子供などを伴ふ家庭にて旅行海水浴、湯浴などに出かくる時には亞鉛化、アンモニア、ビスミットなどの用意ありて然るべし

蜂虻などに刺されし時は柿澁をつくれば直ぐに愈ゆるものなり。又干柿を刻み酢に浸し貯へ置き其都度傷口にぬれば、そのあたりはれも減り痛も去るものなり。

夏より秋にかけて旅行登山また草叢の跋涉庭の手入れなどする時に、注意すべきは蝮なり。殊にかき海邊又は畠庭園などの手入をなす時には時々其の害を蒙ることあるものなり。もしこれに嚙みつかれし時は、杉の上皮を去り內なる甘皮をはぎ取りて、齒にてがち〳〵かみやわらげて傷口にはりつけやるべし。但しこの際には他人の手に依賴すべし忽ち毒を吸ひ取りていたみを止むるものなり。かゝる覿面の效あるものなれば、若し被害者自から甘皮をかみやわらげんか、毒は口の方へ吸はれ齒ぼろ〳〵に落つべし。されば他に人なき時は石にてたゝきやわらめ、決して傷口の外自分の躰にふれざるやうすべし。また澁柿をたゝきて傷口につけるもよし。すべて澁は毒蟲の螫したるに效ありと知るべし。

夏の臺所

一家の盛衰は臺所より起るとの諺もあれば、これを預かる主婦の責任又決して輕からず江戸時代よりの風俗習慣として東京人士の住居は臺所、雪隱等すべて汚れ安き所に意を用ひて淸潔法を行ふは一つの良き習慣なるが、やう〳〵時節も暑さに向い、戸棚の隅の茶碗の底に殘りたる醬油より蠅が飛び出し、煮豆の腐りたる

より黴の生へ出づるなど追々臺所の清潔法に殊更注意すべき時節とはなれり。傳染病 流行病などはた臺所 清潔法の行き届かざる事より發る事多ければ一家の主婦たるものは、最もこゝに注意して拭掃除を丁寧にするは云ふ迄も無き事なり。

不注意と云ふ事は、輕からぬ言葉なり、不注意と云ふ事はすべての罪、禍の基なりと知るべし、交際に義理に欠ぐは不注意の爲めなり、薄着をして寒冒をひくは不注意の爲めなり、醫者をたのむを躊躇して病を重くするも又不注意の致す處ろなり、疎忽と云ふ事又氣がつかぬと云ふ事はもとおのれの悪しき念、おのれの故意にて過ちを爲せるにあらざるより、さほど罪にはあらずと思ふ者もあれどこは大なる間違ひなり、故意に惡事を爲すは人外の事なれば申すまでもなき事なれど、この疎忽、不注意と云ふ事は實に大切なる言葉なりと知るべし、容易ならぬ事と知るべし、何か過失を爲し、つい氣がつきませんでした、つい疎忽をしましたといふだけにて事はすむべしと雖も、これ甚だしき罪惡なり即ち人間の懈怠罪なりすみてもすまなくても氣が付かなかつたから詮方なしとあきらめ世間ではこの事につきあまり大切に思わぬ事多けれど、これ大なる罪と知るべし。不注意の爲めに人を殺す事もある事を思ひ見るべし、されば大いなる注意は主人の役目なれど細かき注意は細君、主婦の役目と知るべしされば家庭の主はこの邊によく〳〵注意して箒のさきの塵の汚れ、臺所の隅のすみにも注意



して悪しき病毒の發生所たらしむる勿れ。

夏の臺所の注意は第一器具を多く置かぬ事なり、なるべきたけ日用のもの丶外は出し置かぬ様にすべし、さすれば一つの器を用ふる事多きが故に、自然と清潔法行はれて、秩序もつき躰裁もよし、種々の器具をならべて事を繁くするはやがてブセウ不清潔の基たらむ、器多ければ手數多く、手數多ければ随て時間を費やす事多く、時間を費やす事多ければ遂には注意行き届き難きに至らむ、清潔法にかなへは又經濟法にもかなふなり、一つの注意行き届けば萬事をよくするものなり、注意をよくせづしてむやみに拭掃除をし、又は流行病の豫防法とて薬などまきちらすともそは何の効果も無く、二階から目薬と同様ならむ、されば夏の臺所は器具を少なくして手を省くを第一の清潔法とすべし、其上にも拭掃除をよく丁寧にせば、病氣などは發る筈無きなり、其他水瓶の水は絶へず新らしからむ様にし、且つは不足無きやうにすべく、石灰、石炭酸の用意をもなし置きて折々汚しと思ふ所に撒くべし、夏の拭掃除は熱湯を必要とす、暑しとて火鉢の火に注意を怠たるはまたよろしからず、儉約のやうにてその結果は却て不儉約なるへし。

従來我國の習慣として臺所は家の中にて一番下等なる場所とし多くは光線の透らぬ日陰の方に設けて器物に濕氣の乾く時なきが如し、これ甚だよろしからず將來は南向きとしなるべく光線の入るやう造りたきものなり。

當年は入梅前に雨量多く爲めに梅雨前後よりいろ〳〵の病氣を生じ、壯健なるものも何となく心地爽快ならず主婦たるもの丶一段の注意を要すべき候なるがさらぬだに腐敗し易きは食物なり食物に就て尤も困難なるは入場所にして、臺所用戸棚の多くわ竈の近くにあるは誠に便利のやうなれども又危險なり、容易に腐敗せざるものにてもこれが爲めに幾倍腐敗を速むるものなれば可成風通よく清涼なる場所へ入れ置く様 すべきなり。

署中の盆栽

◎蘭と萬年青　この季節に開花するは本蘭なり、以て床上の観賞とすべし、蘭も萬年青も宜しく梅雨を避くべし。

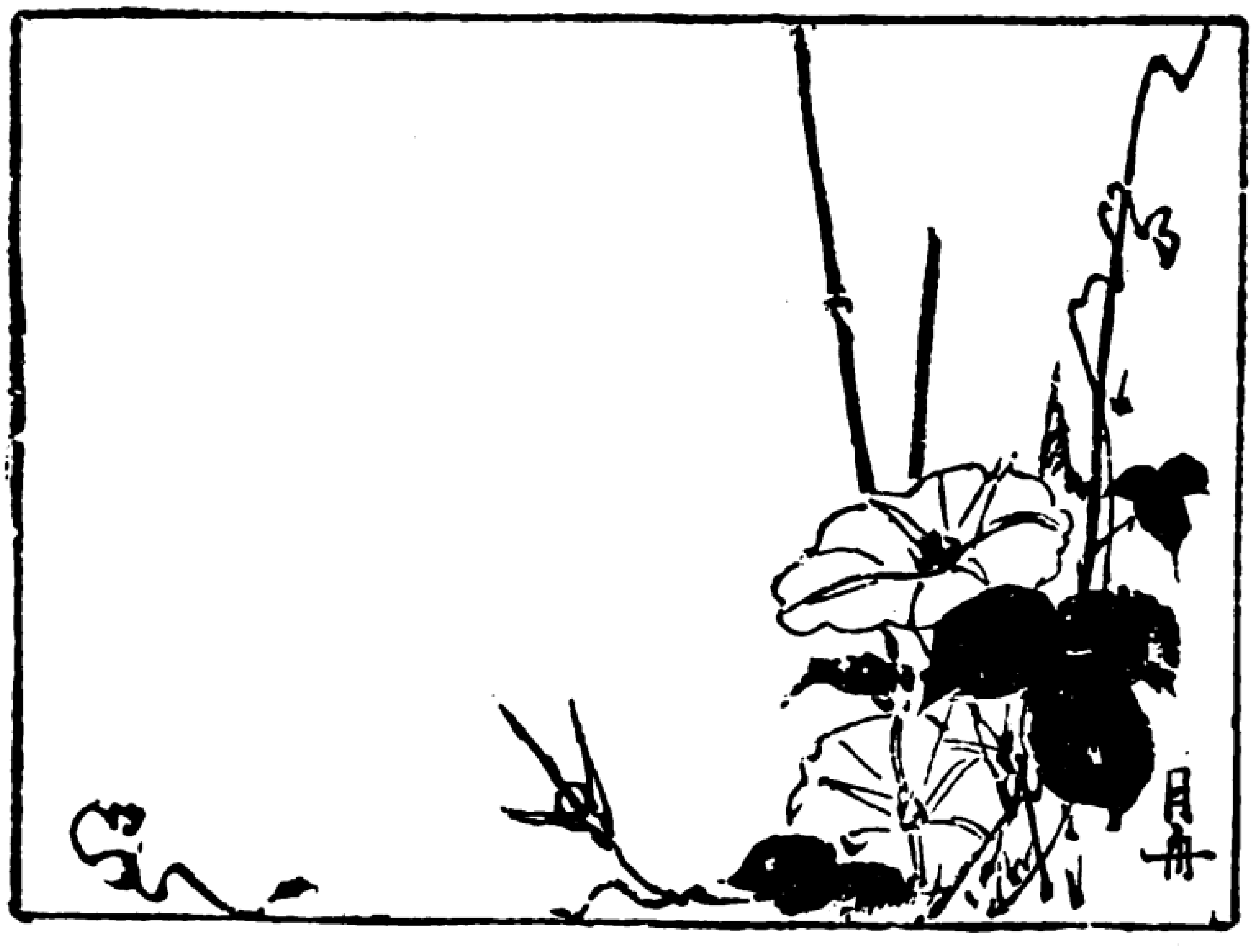
◎蘇鐵　は七月中旬より野天に露出すべし。これ又床上の好賞翫なり。

◎夏橘　結實は六月に眞盛りなり七月中頃まで接木、揷木、移植によろし但し雨天をよしとす。

◎檜　も前と同じく接木、揷木、新植に適す、床上の観賞一段なり。

◎薔薇、百合、石竹、石榴、共に床上椽頭の観賞によろし

◎石菖蒲　七月中旬より観賞し又移植、根揷等もての頭より始むべし、根揷の法は好む石菖蒲の根を凡そ五分位に刻み切り、これを純砂の内に揷置時は細葉を生ず、此期に至り便宜の木石に附するに際し木苔、小砂利、赤土を便宜に混合し、最初根の細き石菖蒲二三根を取り、其の根に右の混合泥を附し、其周圍に石菖蒲をつけ更に根をつけ之を止め、重ねく此の如き大いさに至らば鉢又は石等へ附し置くをよしとす



◎紫陽花　盛夏頃蒼空の色にうつりて眺め一しほなり。

◎松　常盤なる綠の色、何時見ても掬すべき趣きあれど、殊に七八月に於て其の蒼々たるは、一段の涼味を感じ観賞比類なし、八月の下旬より古葉を取り去るべし

◎棕梠竹と蘇鐵　共に夏季の観賞に適し、南方の風

を見るの思ひあり

◎百日紅　これ又盛夏庭園中の好觀賞なり

◎南天燭　八月結實す觀賞最佳なり

◎葡萄、林檎、梨、共に觀賞に宜しく、綠葉の間熟したる實の連接して、甘露滴るゝかと許り、涼味ことに面白し

◎百合　いろ〳〵あれど鹿の子百合、殊に此の月に開花す

◎雁來紅　とは初秋の艸花なれど時によりて盛夏の觀賞となるべし

◎牽牛花　露の乾ぬ間の眺めにして毎曉時を期して咲き揃う、寢醒の觀賞殊によし

◎秋の七草　觀賞めでたし

◎翠菊　本年の春蒔この夏の愛觀に適す

◎小菊の類　此の頃花咲ものにして、小女の優美き姿に髣髴たる、其雅致愛觀すべし

◎秋海棠　八月中旬より開花す

夏の洗濯

色を褪まし地をあらす患なき安あがり洗濯法は、糠を切につゝみて打ふり糠汁を拵らへ、洗濯物をこれに浸し、汚れに日光のあたるやう上に向けて暫時日向に放置すべし。汚れ次第にうかみくれは幾度か打ちふり洗い、後清水に漱き、絹めりんすなどはしぼらずして干すなり。かくて絹に糊を付け或は張板にはるにはごく〳〵薄糊にせざれば地を損じやすし。又張る時他の絹切れにて表を能く摩擦すれば新らしものゝ如く艶出づべし。

墨の付きたるは御飯粒をすり付けてつまみ洗へば容易く落つるものを少しの事を面倒がりて墨つきたる儘の浴衣などを小兒に着せたるは母親の不行屆も思われて見にくし。

折角の美くしき薄色の單衣も帶の下、膝のをれめのところなどに汗のしみあるは誠に品劣て見ゆ。汗は直にあらへは水にて落つれど時經てはなか〳〵むつかし。

これは薬店よりアンモニヤを求め、此に浸しあらはば見事に落つべし。つまみあらひの時に用心せざれば水ぎわつく恐あり。西洋紙をあて火熨斗もてかわかさば此患なかるべし。

一般には渡らねど海邊に避暑などせらるゝとき、木綿物の洗濯にはわざ〳〵石鹸など要なかるべし。海水をくみてしばらく浸して洗へば白地など眞白に落つ。これを清水によくそゝぎ干せば可なり。

綿布麻布の類はシヤボンにて可成手早に洗ふべし。色物は一層早きをよしとす。但色物を洗時に、生明礬焼明礬を粉にして石鹸湯に混ずれば、色さむる事なし。

絹布は、白色石鹸、蜂蜜、焼酎(焼酎二十ならば蜂蜜三、石鹸三の割合)を混じ、軟かなるブラッシュを浸して絹布の表裏より摩擦し、後清水に一時間ばかり放置し、然る後温湯にて静かに洗ふべし。乾す時は、竿の代りに糸を用ひ、又は細き紐を二本渡して掛くるもよし。たゞ、絹布の重なりつかぬ様に注意すべし。

生乾の時に、微温火の火熨斗をかくれば艶を生ず。

時節から白地の着物を用ふる事多ければ、往々洗濯に困る事あり。洗方には別に方法なけれど、糊をつくる際、少こしばかりの藍粉を混ぜ、とかし用ふれば、眞白となるべし。

衛生 経済 素人料理法

實踐學校講師 岩間芳松

前號に料理の本旨より器物の心得を記しましたれば本紙に魚鳥獸るいの生立塲所幷に好時季に寄り味の良否及び滋養分の大關係がありますゆえ之を記します

魚と云へば第一に、鯛之は祝ひ魚にも用ひ料理の材料としても數種に用ひられます、此好時候は七月頃より翌年の三月末迄、然れども小鯛中鯛は年中あまり變化のなきものです生立塲所は東京にて申せば神奈川内海より相州三浦三崎等が本塲と申東海道筋より其次に九十九里より房州海邊が貳等て銚子港及び水戸邊より魚市塲へ輸送する鯛は大略魚行商人の賣品となり腹部

か薄く味の下等たるものです。

▲鯛料理の仕方。海鹽煮椀或は茶椀盛種、煮肴、おろし煮、照り燒 鹽燒 魚田燒 雲丹燒等以上日本料理で洋法の料理にも數種に用ひられます、日本料理より調理法を記しますが前號へ鰹節汁の取方を記し置ました故其原料の撰方で有ますが成べく古節を用ひるのです、本年は品不足の爲め高價で有ますが、料理用どして用ゆる品は伊豆土佐等を一等と致し薩摩伊勢等を貳等とし其他の諸國産は雜菜用に用ゆるので料理用の品は以上の節に限ります。

▲壹尾の鯛にて二三の調理法。鯛海鹽煮。椀盛。茶椀盛等は清く洗ひたる鯛の頭を切取貳ツに割適ぎに切置其他刺身用として脊の身を人數に應じ切取置殘りの腹部を海鹽用に切り鹽をふり置（三十分より一時間内外）にて鹽が身にしみ込極宜敷味になります其他照り燒用として適ぎに切置少しの醬油に漬。鯛の鹽を洗ひ落し鍋或は深き器物へ入れたるうへより沸騰なしたる湯を差入れ手早く湯を絞り水をかへ充分鱗をさぐりとり笊へとりわげ置煮出し汁を沸騰させたる中へ鯛を入れ鹽味がちに醬油は極少々用ひ茗荷の小口切りを少々加へ味を見斗ひ吸口は柚子を用ひて海鹽とす。

鯛の作り身は海鹽種より切とりたる身を半身切皮のつきたるまゝ板へのせ皮めへ沸騰したる湯を充分一面にかけ水に冷し布巾にて水氣をふきとり適ぎに薄切に作り殘りの半身を皮をすきとり刺身に作り皮付と盛合葵につまものを添へるのですか當今數種ある內靑紫蘇の細切り小なる木瓜の小口切り紫蘇等を一品添へ出すと宜敷刺身にはつま物を添るのは衛生上肝要であります。

▲照り燒。醬油に漬置たる鯛を（魚の節は其まゝ串にさし）火にかけ醬油を兩三度兩面へ適ぎにつけこんがり燒て照り汁を兩面へ一面になすり手早く一寸煎り串を拔き皿に移したる前へしたしもの其他見斗ひ付合せを付し酢取生薑を是非とも添へるので有ます。

照り汁の仕方。味淋壹合の中へ盃猪に一ぱいの白砂糖をかへ深き鍋にて煮つめながら度々に醬油を少しづゝ

かへ入れ適ぎのてり汁に煮つめ深き器物へ移し入れ鳥の羽根にてなするなり此照汁は數日貯へ置て使用になります。酢とり生姜は細き一本づゝになりたる新生姜或はもやし生姜を根の部を四五分切殘し布巾てみがきじくを一寸あまりの長さに切り殘し酢にてざつと煮て水に冷し用ひるなり。したしもの種類幷に仕用法。新菊、ほうれん草、芹、其外何菜にても湯でゝ水に冷ししぼり芹の如きはアクを抜きしぼり庖丁をなして煮切(味淋を煮つめたるなり)と醤油にて味をつけ能く交ぜて附合にするなり。

新案豆腐料理

岩崎勇

前號掲載せし鷄卵料理に連接して豆腐新案料理を二十種紹介せん。

▲昆布巻豆腐　先づ適宜の拍子木形に切り別に灰の上に紙を布き之を列べて、充分水氣を吸ひ取らしめ、然る後清潔に洗ひたる昆布を以て縦に右の豆腐を巻き、細く裂きたる昆布を以てそれをくゝり、充分に水煮を爲し、昆布の烹熟するを待ち、醤油を入れて二三十分間も煮るべし、これは昆布の味をして充分豆腐に浸染せしめん爲めにて又自ら一種の風味あれば、精神料理として尤も妙なり。

▲つのあげ豆腐　豆腐を七八分位の立方形に切り少時水氣を去りて後、葛粉の小塊の上にころばし、葛粉の粘着したるまゝ胡麻油にて揚げ、山葵醤油などにて食すれば頗る妙なり。

▲味噌漬豆腐　豆腐を適宜の拍子木形に切りて一たび湯煮をなし、更に充分冷却して後、日本紙に包み、味噌の中に漬け置かば、これ亦一風味あり。

▲松葉豆腐　細切昆布を清潔に洗ひ清め、銅鍋に入れて水煮すれば鮮美なる緑色を呈すべし、豆腐を製するの初めより、右緑色の細切昆布を二寸前後の長度に切り、適宜に其の中に入るゝ時は、此昆布はたがひちがひに散亂して宛も緑松葉を散布したるが如き狀を

呈すされとこれは豆腐を製造する時にあらざれば出來難し。

▲泥鰌豆腐　冷豆腐と活きたる泥鰌を鍋中に入れ火に上せて煮る時は、熱度の次第に加はるに從ひ泥鰌は其熱に堪えずして豆腐の中なる冷處に逼ひこみ自然に豆腐の體中に入り、終に豆腐と共に烹熟せらるゝに至る、其の烹熟するを待ちかつぶし醬油を鹽梅して放冷して後適宜に之を切る時は、珍奇なる料理となる。

▲きぬこしまかひ湯豆腐　豆腐を五六分許の賽目に切りて湯煮し重炭酸曹達の微量を其鍋中に投ずべし、斯くする時はたとへ長く煮るも其豆腐は猶柔かにして絹帛漉と少しも異なることなし。

▲たまごやき豆腐　豆腐を布に包み壓搾して水氣を去り、擂盆に入れて擂りつぶし、之を食料に用ゆる黄色の顏料と砂糖とを適宜に加へて細に擂りまぜ、隨意の形にこしらへ湯煮し、已に煮熟したる後、更に火にて炙き適宜に切りて器に盛るなり。

▲團子豆腐　豆腐を布に包み、一ト搾して水分を去り、又擂鉢に入れて擂りつぶすこと前法の如くし、更に砂糖を加へて充分にすりまぜ、後適宜の團子と爲して青竹の炙串に串し、火に上せて少しく焦るまで炙き砂糖醬油をつけて、また其の醬油の乾くまで炙き、串のまゝ器に盛るを團子豆腐とはいふなり。

▲むすび豆腐　豆腐を細に擂りつぶして之を細長形の美濃紙嚢につめ、微温湯の中にて隨意の形に結びて、湯煮にして後、其紙を剝ぎ去り更に醬油などを加へて煮るべし。

▲おぼろ豆腐　豆腐を鍋中に入れて湯煮し、其の固まるを待ち、鍋中の湯を去り、豆腐を碎きながら更に其水分を去り、然る後、適宜に醬油と砂糖とを加へて加味し、之を擂鉢に入れてすりつぶし、また鍋中に入れて火に上せ、飯匙子を以てよく攪きまはしつゝ、其水分を去り、又凝固せざらしむるやうにし、尚ほ又擂鉢に入れて擂つぶしたる後食料臙脂少許を加へ充分攪きまはせは丁度鮓につかふ鰕のおぼろと同じき觀を爲し、精進料理に遣はるゝなり。

▲巻餅豆腐　豆腐を鍋に入れ湯煮して其の固まるを待ち水氣を去りて豆腐をこまかくくだき、適宜に醬油、酢、砂糖を以て加味し、更に能く水氣を去り、そして後圓柱形の布に巻き筐に入れて壓搾し、凝固するを待ちて布を解きほどき、淺草海苔又は薄葉炙卵にて巻き、適宜に輪切と爲せば、口取などに宜し。

▲茶筅豆腐　來客などの節一寸間に合ふ豆腐料理なりこれは豆腐を尋常の短冊か賽目に切るは面白からずとて、汁は誰も知る松魚節の煎汁に、豆腐を短く大き拍子木形に切りたる一端より縦横幾條かに刻みて其半身に達せしめたるものを入れて出す、茶筅豆腐と稱するはこれなり。

▲鼈甲豆腐　豆腐に木茸、椎茸、麻子等適宜の物を加へて俗にいふいり豆腐と爲し、別に寒天を煮とかし砂糖を加へて甘味をつけ、馬尾篩にて重箱の如き内面平滑にして且つ方形なる器中に濾し入れ右の炒豆腐を其中に撒き散して沈下せしめ、充分放冷して後適宜の形に切りて器皿に盛る精進料理の口取などに妙なり。

▲しぐれ豆腐　豆腐を適宜に切りて粥となし、之に蛤蜊の肉を入れ小鍋にてフツ〳〵煮て食す。

▲磯あられ豆腐　蛤丁と豆腐とを粥と爲し、淺草海苔をかけたるをいふ、其味淡泊にしてなか〳〵美なり。

▲甲子豆腐　豆腐を湯煮と爲して後、器に盛りてよく其水を去り、之に豫製せし「くずめん」をかけて下飯に供す。則ち「あんかけ豆腐」これなり、蓋し「くずめん」とは葛粉を適宜に水に溶き之を醬油と砂糖少許とを加くて火にかけ攪きまはしながら、煮てどろ〳〵と爲したるものなるが、時としては豆腐を普通のかゆと爲し、之に水を以て溶きたる葛粉をそゝぎて前後の手數を省くもあれど、其味は大抵違はぬものなり。

▲胡麻かけ豆腐　豆腐を湯煮すること猶ほ甲子豆腐の如くし、これに胡麻醬油をかけて食するまでの相違なり。

▲ぎせい豆腐　まづ俗にいふ「いり豆腐」を製し、將に火より取り卸ろさんとするに臨で麪粉少許を加へ、其の冷めざるに及びて、木匡に布巾を布き、右のいり豆

腐を入れておし固め、而して後適宜の大きさに切りて食するなり。

▲山家豆腐　是は至て手輕き煮物にて、常の白豆腐を丸にて空なべに入て、銅杓子にて潰し火にかけて煮ば汁出るなり、其へ豆腐一丁に猪口に一杯の割かたに醬油加へて能煮わげるなり、山椒粉を入るもよし、又煮上るとき鷄卵の溶解たるを入て混和してよく、又生湯葉か干ゆばを水に浸柔かに成たるを細に刻みて入まぜるもよし。

▲味噌かけ豆腐　白豆腐にても、燒どうふにてもよき程に切、湯煮として椀に盛とき、汁の溜らぬ樣能したみ取り、風呂吹の如く味噌をかけるなり。

▲豆腐せんべい　豆腐を搾りて水分を去り、擂盆に入れて擂碎し、又葛粉と砂糖とを加へて充分に擂和し、然る後手掌を以て適宜に煎糕の形に製して茹で、更に火に上せて兩面を熬るべし。

輕便野菜スープ

（西洋もとき）

春江女史

すべてスープは動植物中に含有せる滋養分を水に浸出して味をつけ、實を入れ羹汁となして食膳に供するものなれば老人小兒若しくは、躰質虛弱なる人に薦めて尤も効用あるものなれば、夏季は一般に人の消化機の衰ふる時なれば固形食物よりは液躰食物を取るによしとす、又同じ液躰にても動物性はくどくして夏季の食物に不適當なれば玆に蔬菜のスープを紹介せん、按排は聊か西洋風なれども手數もかゝらず、金もいらず諸事輕便なれば新藁青簾の座敷に、一寸風變りの味を試み給ふべし。

●松葉うどスープ

善き松葉うど十二三本を取り、頭を切り去り、皮を剝き、八分程に切りて五分間程湯がき、水をこぼして此度は鹽少許を入れて三十分程文火にて熟煮して十分柔

かくなりし時を計りて、篩嚢にてすり漉し（剛くして漉す事能はずば一應擂鉢にて擂るべし）鷄卵三個バタ一匙半を加へ、温飩粉二匙程まぜて、他に煮え湯を取り置き其中に入れ鹽少許を落し、三葉を泳がせて、隨時煖めて用ふべし、香氣ありて風味此の上なきなり。

●蠶豆スープ

そら豆の粒のよきものを撰り、鹽湯にて軟かくなるまで熟煮し、篩嚢にて漉す事前の如く、之を牛乳五合に解き、バタ一匙、温飩粉二匙を加へ、能く交ぜ合せて、再び絹篩にて細かに漉し、鹽一匙、胡椒少々、玉葱の細かく刻めるものを加へ、入用の時暖めて用ふべし。單に蠶豆のみならず豌豆にてもさゝげにても善し、玉葱の代りに胡蘿蔔を用ふるも妙なり。

●豌豆スープ

此は一番旨きスープなり。先づ粒よき豌豆を一夜水に浸し置き、翌朝水を去り、更に冷水にて暫時冷して後水を去り鍋に入れ。而して米一合に水一升位の割合にて、一時間程文火にて熟煮し、細かに刻みし（叩きたるものにてもよし）玉葱と芹又は三葉を合せ、尚よく煮て篩嚢にかけてバタ一匙鹽少許を加へ、水にて適宜に解かし、入用に應じ暖めて用ふべし、實は菜にても大根にても可なり、鹽の代りに日本流にて醤油を用ふるも善からん。これは老人、小兒、又は衰弱せる人々によき食料なり。

●球菜スープ

玉菜（キャベヂ）の程宜き處を取りて細かに刻み、他に玉葱の薄くはぎたるもの――若し求めらるゝならば芹を二三葉入れらるゝも面白し――と共に、水を十分容れたる鍋に鹽一匙ばかりを加へて煮、菜の色の透き通る樣になりたらば、湯をこぼして篩嚢に掛け、漉されたるものには更に牛乳五合若し嫌ならば、鷄卵五個程加へバタ四匙温飩粉二匙を合せて、鷄肉ソープを交ぜ、必用の時入れ加減に分量して、更に鹽一匙と胡椒少許を加へて煮るべし。玉菜の味合とバタを混和して餘程結構なるスープとなる。若し只の玉菜に代るに赤キャベヂを以つてすれば、スープの色赤くなりて、美しきもの實には玉菜ならば矢張胡蘿蔔がよかるべく、赤キャベヂには胡瓜など妙ならん。

英　語　實　習　（會　話）

江口操舟

AT THE SEA-BATH.	**海水浴場に於て**
A. I'm delighted to see you, Miss. B. When did you come down?	甲．まあーようこそ。いついらつしやいましたか。
B. We arrived here yester-day and are staying at our villa, as you know. Where is your lodging?	乙．昨日參りました。やはり別莊の方に居ります。あなたがたはどちらへいらつしやいますか。
A. We are lodging at the Tōryō-quan, just beyond the bridge.	甲．私共はつい橋向ふの濤龍館へ居ります。
B. We had a very pleasant time here with you, last year.	乙．昨年もここで御一緒になりまして大變面白うござりましたね
A. By the way, let us take a walk on the beack.	甲．ちよいと。海濱を散歩して見ましよう。
B. Well, but the sands may be burning hot, aren't they?	乙．はい。砂が暑く燒けては居ないでしようか。
A. No, not much. We'll walk on the edge of the shore.	甲．いーゑ左程の事はありません水際を歩きましよう。
B. Oh! her is a little shall.	乙．おや爰に小な貝が御座ります
A. How pretty it is!	甲．ほんとーにまあ奇麗ですこと
B. The weather is very fine to-day, andEnoshima can be seen distinctly.	乙．今日はお天氣がよくて江の島が能く見へます。
A. How for would it be from here?	甲．あそこまで何里位で御座りましようか゜
B. About forth miles, I should think.	乙．大概四里ぐらいだろうと存しますね。

英　語　實　習

A. There are many fishing boats over there.	甲. 向ふの方へ澤山漁船が居りますね。
B. What are they doing?	乙. 何をして居るので御座りましようか。
A They are fishing Tai using shrimps for baits.	甲. あれは蝦で鯛を釣て居るのでござります。
B. A large ship is sailing with full wind, yonder.	乙. ずつと沖の方には大きな船が追手に帆かけて走て居ます。
A. Perhaps, it may be on orange ship from Kii.	甲. 多分あれは紀伊の蜜柑船かも知れませぬ。
B. Well, the sea is very calm in these days, isn't it?	乙. 近頃は波がたいへん静なことで御座りますね。
A. Yes, indeed. Won't you like to take a sea-bathing, now?	甲. 左様で御座ります。あなた海へおはいりなさいませんか。
B. With pleasure. I enjoy bathing ver much.	乙. はい。私は海の中で遊ぶのが實に好きで御座ります。
A. But you must not go too far out.	甲. けれどもあまり沖の方へいらつしやてはいけません。
B. Can you swim, Miss. A.?	乙. あなたは泳げますか。
A. Yes I can, about twenty yards.	甲. はい十間位は泳げます。
B. Oh! you do very well. My younger brother makes fun of me as I can't swim well.	乙. それはおゑらいですねー。私は泳げないなつて弟から笑はれます。
A. How many times do you bathe, a day?	甲. 日に幾度位おはいりなさいますか。
B. Only twice, morning and afternoon.	乙. 午前と午後と二度はいります

英　語　實　習（日用品及家具）

English	讀方	日本語
Organ	オルガン	風琴
Piano	ピヤノ	ぴやの
Violin	ヷアイオリン	提琴
Hand-organ	ハンド オルガン	手風琴
Fiute	フリユート	笛
Shuttle	シヤツツル	羽子
Battle-door	バツトル ドアー	羽子板
Card	カード	骨牌
Spool	スプール	糸巻
Needle-box	ニードル ボツクス	針箱
Pin	ピン	ぴん
Thimble	シムブル	指套
Measure	メジユアー	尺
Rules	ルーラー	定規
Compasses	コムパセス	兩脚規
Razor	レーゾル	剃刀
Eye-zlasses	アイ グラツセス	眼鏡
Paper	ペーパー	紙
Letter	レツター	手紙
Envelope	エンヴエローブ	狀袋
Ink	インク	いんき
Pen	ペン	ぺん
Pen-holder	ペン ホールダー	ぺん軸
Pencil	ペンシル	鉛筆
Soap	ソープ	石鹸
Comb	コンブ	櫛
Ribbon	リボン	りぼん
Hairpin	ヘヤーピン	笄
Neck-tie	ネツクレース	襟飾
Necklace	ネツクイーダ	首環
Hair-lace	ヘヤー レース	髮結
Pomade	ポーメート	髮油
Scented-water	センテツト ワーター	香水
Rouge	ローヂ	紅脂
Tooth-brush	ツース ブラツシユ	齒刷
Tooth-power	ツース パウダー	齒磨粉
Pick	ピツク	小楊枝
Chopsticks	チヨツプスチツクス	箸
Mirror-stand	ミロル スタンド	鏡臺
Toilet	トイレツト	化粧臺
Wash-stand	ワチツシユ スタンド	洗面架
Umbrella	アムブレラ	洋・傘
Sandals	サンダルス	草履
Slippaers	スリツパース	上草履
Socks	ソツクス	足袋
Purse	パース	巾着
Trunk	ツランク	皮槓
Bureau	ビユーロー	簞笥
Round-fun	ラウンド フアン	團扇
Watch	ワチツチ	懷中時計
Clock	クロツク	柱時計
Chain	チエーン	鎖

史傳

ローザ、ボンヒュール女史（續）

文學士　中内蝶二

六

栴檀はふたばより芳しといひけむ。女史は年なほ弱かりしかど、繪畫の技倆は不思議にすぐれ、日夜父の畫室に籠もり居て、畫筆とることをのみ樂しみとしけるほどに、或日父のレーモンドは、何氣なく女史が走書きになりし一枚の繪畫を取りて見るに、意匠筆づかひの巧みなること成人も及ばぬほどなれば、いまだ斯道の師にさへつかぬ我娘に、かばかりの技倆あらむとは、親ながら思ひもかけざりきと、且おどろき、且喜び、それよりは、日々己が仕事の暇を割いて、運筆の法、遠近の位置のとり方など、こまやかに教へ導きけるに、もとより天稟の才あることゝて、さながら一を聞いて十を知るの譬へに洩れず、その進歩の痕は、若竹の一寸二寸と伸び行くよりも著るければ、父はやがて、女史をルーブルの美術館に送り、こゝに陳列されたる大家の名畫を、思ふがまゝに複寫せしめぬ。

そもこのルーブルの美術館といふは、以太利、希臘の古代より、近き頃に至るまでの世界の名家が手になりし、珍らかなる繪畫彫刻、その他種々の貴き美術品を收めたるいはゞ世界第一の大美術館なれば、このわかき美術家に取りては、この上もなき勉强所なりき。朝は疾くより、夕は遲くまで、時間のゆるすかぎりは此處に通ひて、古畫の複寫に餘念なく、しばしも筆をやすむることなければ、この館の理事を初めとして、數多の人々、女史が熱心と技倆とに驚かざるはなかりけり。されば、女史が噂の次第に高くなりゆくまゝに、その複寫したる古畫の賣行きも隨つて好く、これがために得る所の金額は、少きものにはあらざりしを、女史は一錢一厘も自からこれを用ゆることなく、殘らず父に與へて家計

の究乏を助けたりき。時に、芳紀僅に十七とぞ聞こえし。

七

花鳥山水より始めて、歴史風俗の畫に至るまで、女史が技倆、何一つとして至らぬはなけれど、わけて得意なりしは動物の畫にて、己もまた、これを專門に研究せばやと勉めたるものゝ如し。さは云へ、家はもとより貧しくて、模型、標本などを得べき資もなければ、遠き野路をたどりて郊外の山里をめぐり、或時は雨にうたれ、或時はまた風にさらされ、ひたすら辛苦を嘗めて寫生につとめ、一日も怠る時とてはなかりき。

かくて二とせ三歳と過ぎけるほど、十九歳の時に至りて、このわかき美術家は、世界の初舞臺にのぼりぬ。さても、其時の結果は如何なりしぞ。女史が滿身の熱血を注ぎし創作は、『山羊と綿羊』及び『二兎』と題せる二枚の油畫にて、これを巴里美術展覽會に出だして、ひそかに世の評判を待ちたりしに、さすが天才が苦辛の作ほどありて、想ひの外なる好評を博し、各地の新聞爭うて、この女流畫家の初陣を歡迎せざるものあらざりけり。

初陣の功名に益々力を得て、女史は其翌年、更に『野獸』『牧牛』及び『賣馬』と題せる三枚の大作を出品して、一層の喝采を博し、これより年を逐うて出品せし幾枚の畫に、評判いよ〳〵高うなりて、今は第一流の美術家にも伍すべきほどに上達せしかば、さしも究乏をきはめたりし女史が一家も、一道の光明かゞやきわたりて、この世の春はめぐり來にけり。

千八百五十一年の展覽會に出品したる『牡牛』と題する傑作は、妙技一等の金牌を得て、遠く英國政府に買ひ上げられ、女史は身に餘る面目を施しぬ。

かく女史が評判の高うなるにつれて、父のレーモンドが名も次第に世にあらはれ、官立女子美術學校の校長に任ぜられしが、多年貧苦になやみし身の、今や娘の光榮と己が立身とを見るにつけ、俄に心やゆるみけむ、間もなく病に冒されて、樂しき春を見棄てゝ逝きぬ。

八

女史は直に父の職を襲うて、女子美術學校の校長に任ぜられ、妹ジユリエツトは其教授となりぬ。歐米各國の豪商貴紳より、潤筆をたのみ來るもの引きも切らず、女史の忙しさは、げに一通りにあらざりき。

かゝる忙がしき間にありて、女史が畢生の力を注ぎて畫きたる傑作は、『駿美』と題せる大畫にして、この畫一たび千八百五十六年の巴里美術展覽會に出づるや、滿都の人氣はもとより、歐米各國の新聞雜誌、いづれもこれが評判を傳へざるはなく、英國の一紳士は、八千弗の巨額を投じてこれを購ひ、時の皇帝ナポレオン第三世より、特に『レヂオンの名譽十字勳章』を女史に賜ひぬ。婦人にして此勳章を受けたるものは、まことに之を嚆矢とし、女史は無上の光榮に浴してけるなり。

女史は、これより英國にわたり、蘇格蘭、英蘭を經めぐりて、到る處に篤き觀迎を受け、後歸りてフオンテーンブロー附近の山莊に移り住まひぬ。その間に成りたる大畫『山中の賤民』『曙』『ハイランドの山湖』『ヒレーニースの山景』などを始めとして、世に名高き傑作少なからず。其價額或は一萬弗に上りたるものあり、或は二萬弗に及びたるものもあり、女史はこれが爲めに巨萬の富を重ねたれども、もとより慈善の心に富み、且つは幼き時より貧苦に馴れたることなれば、悉くこれを博愛の爲めに費し、公共の事業に投じ、或は奬勵金を學校に送り或は美術家の苦境を救ひ、或はまた、年久しく召使ひたる男女に、養老の資金を與へなどして、己が衣服裝飾などは毫も顧みず、今は八十歲の高齡にのぼりて、たゞに佛蘭西繪畫界の女王と尊ばるゝのみならで、また慈善界の女王と敬まれて、樂しく餘生を送れりといふ。

（完）

封建時代婦人の氣質

鹽井福子

一柳源兵衛の妻の話

貞享元年の事なりけん一柳源兵衛と云ふものあり、役にて江戸に赴く事ありけるに、家いとまづしく、路費

なくして任につく事能はざりけるを、親族の余吾彌一兵衞といふもの、いさゝか富める身なりければ、之に費をかりて、やうやく旅立つ事とはなりぬ。此處に、かねて源兵衞と心合ひたる友、中江玄齋といへるもの、源兵衞を送らんとて、酒肴を整へて、まづ己が家へ迎へ費をたすけたる余吾は元より、その他日來の知己、及び散樂師中村一之進などを呼びて、送別のむしろをひらきけるが、宴酣なるころ、余吾、此の行の費をかせしをほこり、盃を一柳にさしすゑて、このたび汝が役に趣かるゝは乃公の力にあらずやとて、鼻うごめかし云ひしに、一座の人、みな思はず其の人の面を守りけるが、一柳の心や激しけん、頓て盃を滌め、いざり出でゝ、貴公が洪恩報ひ奉るに言葉なし、たゞこれを以て答へ申さんのみとて、刀をぬきてハッたと彼れが額を打ちたりしに、皮肉忽ち破れて鮮血淋漓として座にそゝぎぬ。一座おどろき、余吾は佩刀を拔かんとせしが、まだ鞘をはなれずして、まづ仆れたり、嗚呼つゝしむべきは長舌にぞある。

一柳は、靜かに余吾が刀を引き、人々に向ひていふやう彼れが刀を拔かざる前に斃すは不可なりとて、みづから其の刄もて己が肩を傷つけ、かくて彼れも我れも二つながら道を得たりとて、從容刀をしぼり、もとの席へかへり、さて散樂の師をかへりみて、いふやう願くば君我が家に行きて、わが妻にことのよしを語りたまへ、我れ今自刄せんと欲すれば、裝束を渡すやう傳へ玉へかしと。中村承諾して徐かに盛久と云ふ散樂をとなへ、畢ッて一柳の門を叩き、妻女に會し事のよしを語りぬ、妻女は色を正しくしてさては、良人、今日の事、士人の行ひに愧づる事は候はざりしかと徐に問ひぬ。中村、あつばれなりしよしを答ふ妻女また重ねて託する所あらざるかを問ひて命ぜしまゝの裝束をとゝのへて中村にわたし、始終自若として亂れたるけしきなく、中村にあつく勞を謝しぬ、中村また盛久を唱へて、中江方へかへれば一柳、狀を具して、官に訴へ、裝をなし、官吏の來るをまちて、腹をほふりて死したりける。

かくてのち、妻女は是非なく己れの家にかへり、父母に

たよりけるが、まだ年も若く、花の色もうつらず、子もなきものを、いたづらに寡居せしめんは不便なりとて、再縁をすゝめしかど妻女は從ふ氣色あらざりけりしかるに、親はなほ之をいとをしみて、ひそかに婚儀をとゝのへ、結納の日となり、始めて此の事を語り、何事も親の心に從ひ、身の行く末をはかれよかしとさとしければ、妻女はまた爭はず、何事も仰せに從ふべしと答へしに、父母をはじめ、人々いたくよろこびて、結納の仕度何くれとなくいそしうとりまぎれて何事も心づかざりしを、妻女はいつしか一室に入りしまゝ久しうなるも出て來らぬに、人々あやしみ、



其の室に至り見るに、こはいかに妻女は赤き心を血にあらはして仆れ伏し居たりけり。人々おどろき悲しみせめては其の志をとげしめんとて、夫の墓に埋めけり、その後一女ありて、毎晨必ず來り、墓をきよめ、香花をたむけ、經を唱ふる事二十年一日の如くなるに、その誰れなるかをあやしみ尋ねければこは妻女が夫の家にありしころ、召し仕ひける侍婢なりけり。夫の人となり既に狷介、妻も狷介、而してまた此の婢の誠あり、これ誠に日本武士の一家を代表せしものなり。

木村長門守重成の妻の話

こゝに又夫が敵の質とならじとて、愛兒を殺ろし、我が身を捨てし細川忠興の夫人の如きあり、また大坂の落城に一種の花のあはれを添へたる木村長門守重成の妻は、眞野豐後守賴包の娘にて、城中第一の美女なり木村氏へ嫁ぎていたく、長門守の心に叶ひ、世にたぐひなき夫妻の交情なりけるが、大坂の事非にして、豐臣氏の運旦夕に逼りけるや、重成食せずしていたく憂ふるさまなりけるに、妻女もと聰明の性なれば、とくその當時の事をさとり、もしも妾を殘して戰死せんずるを憂ひてにはあらずやと思ひ、靜かに夫の前に出て申しけるは、君が今年今福の一戰は、關東五十餘萬の師を驚ろかしたまひぬ、されど花ぞめのうつろひ安きは人心にしてはたしがたきは一死なり、死ぬべき時に死せざれは、死にまさる耻ありとかや人生僅かに五十年、今、君何を憂ひ玉ひて、食さへ斷たせ玉ふ。妾の解しがたき事にて侍りと云ひしに、重成呵々と打笑ひ、五穀胃に入れば二十四時を經ずば消えずときく。されば、吾れ穢きものを斥けて、潔よき心を出さんとて、かくするなりと答へけるに、妻女これを聞き、いとよろこびて、武勇の道を語りて退きけるが、なほ心に思ふ事どもこま〴〵と文に殘し、自から刃に伏して世をさりぬ。その書置に、

一樹の蔭、一河のながれ、是れ他生の緣と承り候にこそ。そもおとゝせの頃よりして、偕老のちぎりをなして、只かげの形に添ふが如く、思ひまゐらせ候。此のごろ承り候へば、此の世かぎりの御催しのよし、かげながらうれしう思ひまゐらせ候。唐土の項王とやらんは、世に猛けき武士なれど、虞氏のため名殘ををしみ、木曾義仲は松殿の局に別れを惜しみしとやら、されば世に望み窮まりたる妾が身にては、せめては御身が御存在の中に、最後を致し、死出の道とやらんにてまち上げ奉り候。必ず〳〵秀賴公、多年海山の鴻恩御忘却なきやうたのみ上げまゐらせ候。あらあらめでたくかしこ。

妻より

長門守重成樣

長門守、此の書を見て、いたく感じて、忽ち死を決し、荏

々しき合戰をなしいさぎよく討死せしとぞ。我が朝武士の妻は實に此の如かりき

瓜生判官保の母の話

金鐵かたしと雖、鍛冶に合はざればこぼれ易く、眞木柱固しと雖、根を固めずば動き易かるべし。武士の心たけしと雖、恩愛に引かれ易きは人の情、まして情けを知るが武士、子を思ひ、妻を思ふ心はよしや忍ぶとも、忍ばれ難きは老いたる母が後のなげきを思ふ心なるべし。されば維新の大丈夫吉田松陰が牢死の時、

親を思ふ心にまさる親心
けふのおとづれ何ときくらん

とよみて世を辭したり。實に子を思ふ母の心ばかりたとへなきものはなく、從つて子も、母に先き立つばかりくるしきはなかるべし。されば大丈夫の母は、女々しきを尤もつゝしむ。女々しくては子を武士の道に出でたらしむる事能はず故に日來より心を男々しくして、愛兒にも姑息せず、つねに私を輕んじて、公儀を重んじ、無量のかなしみを心にたゞゆるとも色これをあらはさず、つねに己れをいさぎよくして子を敎へけり。



延元元年、瓜生判官保、其の弟兵庫介助重、彈正左工

門照、義鑑房等と脇屋次部大輔義治公を大將として、義兵をあげ、大に足利氏の兵にうちかち、かねて、一の宮と、新田義顯等がこもりをる金が崎城の後詰をせんとて、翌正月七日、里見伊賀の守を大將として、敦賀へかゝりけるに、賊の兵二萬餘騎にとりこめられて、保兄弟等、此處を先途と戰ひ、縱橫無盡にきりまくれども、敵は二萬餘騎、味方は僅かに千餘騎、衆寡終に敵せず、里見をはじめ、保、義鑑房、甥七郎、あへなく戰場の露と消えはてけり。弟等三人はなほ後圖をなさんために僅かにおちのびて歸へりけり。此の時討死するもの五十三人、疵を被ぶるもの五百余人、子は父に別れ、兄は弟におくれ、妻は夫を失なひ、悲しみ家々にみちたり。されども保の老母は、子の討たれたるを聞けども、悲しめる氣色はなく、大將軍義治が御前に參じて、此の度敦賀へ向うて候ふものどもの不覺さよ、里見殿をばあへなく討たせまゐらしたり。さてこそは口惜しう思召玉はめ、老母も誠になき齒をかまんばかりに覺え侍れば、君が御心はさこそと思ひまゐらせぬ。されど、もし、判官兄弟が恙がなくして歸へりたらんには、此の上のくやしさなるべきを、まづ三人が御供つかうまつりたるばかりがせめてもの慰めなり。なほ殘りたる弟三人あれば、あくまでも大將の御ためにつくし申すべければ、御心安んぜさせ玉へとて、つゆなげきの色を見せす、自から酌をとつて一獻をすゝめければ、義治公も感涙を流され、氣を失へる勢も、別れをかなしめるものどもも、みな此の言の葉にはげまされて、悲しみを忘れ、いさみたちたりと云ふ。

那須五郎の母并に烈女お藤の話

また元和のころ、那須の五郎、いくさに出でけるが、老母之れに敎訓しけるやう、古へより今に至るまで武士の家に生まるゝものは名ををしみて命ををしまず、義を守りて忠を專らとす、みな、父母に別れををしみ、妻子になごりを思ふと雖、家のため、世のあざけりを恥る故に惜しかるべき命を捨つるなり、身體髮膚之れを父母にうく、敢へて毀傷せざるは孝の始めなり、身を立て道を行ひ、名を後世にあぐ、これを孝のをはりとすと

云ふ。汝孝のはじめあり、必ずつゝしみて孝の終りを立てよ、返す〳〵も身ををしみ、我れを省みて公儀を他處にし、祖先の名をけがすなかれ、汝が祖先那須の與一は八島の戰のとき、扇を射て敵も味方もほめたゝへたりと聞く、その時の布衣をば汝に贈る、返す〳〵も身命ををしみて祖先の名を失ふ事なかれとて、薄紅の布衣を錦の袋に入れてぞ送りける。五郎涙を流して出で立ちけるが、やがて此の戰さに戰死して、拔群の功をたてたりと云ふ。必竟我が國武士の子に、忠臣、義士の多きも、家庭の感化のしからしむる所にして、實に志あるの母は、一旦事あれば、己れ死して、子をして義に向はしめたり。赤穗の義士中にも、原宗右衛門の母、近松行重の母、竹林唯七の母等、みな己れを先き立てゝ、子に義をすゝめ、忠をはげましむ。我が國ばかり節婦烈女の多きはなかるべし。其のみづから君に仕ふる身を以ては、渺々たる巾幗の身を以て、君恩の師恩に代ふべからざるを悟り、一身を犧牲に供して、快刀一擊、纖手毒婦を倒して君側を清め、國害をのぞきし藤女の如きあり。藤子は飯田の城主、堀親貞に仕へたるものにて、親貞の愛妾若山、もと姦佞邪惡、ことに城を傾け、國を傾くるの妖婦なり。藤子時に年二十二歲、容姿もうるはしう、心もかしこかりしが、若山の書のめでたきに、字帖など請ひて、その手蹟を學び居りしが、一旦毒婦と知るや、けがらはしき筆いつまで習ふものかはとて、直ちに金二歩をそへて修儀の代とし、字帖をかへし、弟子の籍を除かんことを請ひ、更らに白袍衣を服して、短刀を懷にし、若山の子舍にゆき、人を避けん事を請ひ、そのあたりにその奸惡毒手のかず〳〵をかぞへ責めしに、若山も二つ、三つ、言葉かへせしが、藤女の決心に、唇ふるへて言出でず、逃げんとするを、毒婦逃がすべきかはとて、固く衣の裾をふみ、腕をのばし、襟を取り、思ひこみたる刀首、一さしさし貫きぬ。折りしも、父、彈二郎錠口番をなし居りしが、變事をきゝつけ、驚きて跳り來り、此のさまを見るより、あわてゝ娘をとりおさへ、寄倉に縛ぎおきぬ。

さて、事をたゞすもの、藤女が命を救はんと欲し、心狂

ひてなせしならんと問ひしに、藤女色もなし怒りて曰く、妾、決して狂はず、問ふ所の事、公けのためか、私ためか、妾よくこれを心に辨ぜり、何ぞ狂はんやと答へければ、檢者また問はず、乃ち命じて獄書して、狀を上申し、之を飯田に送り、師走二日、命を傳へて之れを斬らしむ。その日になりければ、監吏、藤女をして席に就かしめ、云はんと欲する所を問ひしに、藤子從容として色をも變ぜずして曰く、妾もとより死を決して はかりし事、此處に罪に伏す、何の恨むる所かあらん。たゞ父なる人の罪狀の如何なるや、それのみ我が念にかゝるのみと答へけるに、吏曰く、彈二郎しばらく罪をさけて一の瀨の定番となりをりしが、幾ばくなくしてもとの役に復しぬと云ひしに藤女よろこび、他にまた思ふ事なしとて、しばし暇を乞ひけるに、吏疑ひ、今更に心臆せしにやと云ひけるに、否、妾、此の頃、月のさはりあり死して後みぐるしきさまのなからん事を欲してなりとて、乃ち起つて厠にゆき、かへりて座しけるに、太刀取り眼をかくすべしと云ひけれども、藤女從はず、妾は武家の娘、さばかりの志あらでやは、謂ふ憂ひずして此のまゝに殺ろし玉へとて、櫛をとり、髮を搔き、靜かに手を合はして死に執きしに人々感ぜぬはなかりしとぞ。あはれ、一身をなげうちて、君のために毒婦をのぞきたるは男子にも稀なる忠婦にして、殺ろす前に習字帖をかへして師弟の關係を絕てるは用意周到といふべく、死にのぞみて從容として身のけがれを淸めたるも、おちつきたる女子のたくみを見ゆ。實に藤女の如き立派なるふるまひ、男子にも、外つ國には見ざる所なるべし。

戰國武人の妻女

また武勇男子をしのぐに至れる板額の如きあり、巴女の如きあり、小萬あり、勝子あり、慶長の亂、小山城おちんとし、城主富田信孝今や自殺と、もろはだぬぐや、忽ち、雪の肌に半月のたてものうつて、身はたゞ月か雪かとかゞやくばかりの花の婦人、纖手短刀をふりかざして縱橫に切りまくり、さながら疾風怒濤の勢ひに、雲霞の如き大軍を追ひ拂らひたる信孝の夫人あり。

身は二八の花の手弱女、父が留守に強賊四人忍び入りて、積みたる米を擔ぎ出さんとするや、大におどろき、父のあらぬを伺ひ、女子と侮どりて、かゝる無法をなす、賊にいたづらに奪はせて、他日、何の面目ありて人を見んやとて、玄關の外にかくれ忍び、暗中より突き出てゝ四人を切り仆したるお婉あり、また妖怪をつかみとらへし曾代女の如きあり、伊賀局の如きあり、淸水太郎左衛門尉の母の如きあり。殊にかしこくも、龍容玉體、我が日の本に二つなきやんごとなき神の御子、しかも后の宮の御身もて、御親から、よろひを着、冑をつけ、御太刀をはがせ玉ひて、海外に征し玉ひし神功皇后の如きならびなき英武の君もおはしまし玉ひたり。支那人日本をさして姬氏の國と云ひたるもまた一理ある事にて實に我が日本女丈夫の多かりしも武勇を尊ぶ國なればにや、而して、今の女丈夫を云ふもの、或はざん忍、邪見の徒、また粗暴過激、つゝしみなき、いはゆるおてんばの徒をさして、女丈夫と呼ぶものあれど、こくはくの女子は、人のあはれをも、悲しみをもよく忍び得る所より俗にしつかりとしたると云ふ意より、女丈夫を借り來れるの事ならんか、まこと女丈夫はさやうの謂ひにあらず、武士はものゝあはれを知るとありて、また英將は威ありて猛けからず、笑ふときは三尺の童子も之をしたひ、怒るときは猛虎もこれを恐る、これまことの豪傑にして、女丈夫もまた之れと同じく、一旦ものにげきし義に走りてこそ猛けくもなれ、峻しくもなれ、その平生は、たゞ信實の心深く、へつらはず、よこしまならぬ性の、おのづから人ともよく和して、やさしきものなるべし。あはれ、今の世の人よ、女丈夫をあやまるなかれ。

忠臣は二君に仕へず、貞婦は兩夫にまみえず、これ日本に古來より稱へたる美德なり。子七人なすとも女に心をゆるすなど格言とせられし支那國の婦人、その陰險はかり知らるべし、西洋はまた女子の再婚するを不德と見ず、中々に夫の亡きのち、ひとり空閨を守るを愚ろかものゝ如くするに、西洋を尊ぶ日本の士もまた之れにくみして、さやうのものを世におくれたる人の如く見る徒もあれど、日本はもと至情を以て立ちたる國、

誠を以て結びたる世、殊に女子は情を以てかちたるものなれば、はじめて嫁するや、まづ其の身も心もみなその夫に供す、故に夫死するともまた二夫にまみゆる心もなし。

敷島の大和しまねに人二人
　　ありとし思はば何かなげかん

これ日本至誠の女子の德にして、さながら松柏の霜雪にかれざるの操行を見るは、まこと日本女子にして多く見る所なり。

マダム、ドスタヱルの傳（下）

湘竹女史

夫人は、今や伊太利に漫遊し、かの有名なる「コリーヌ」を著述せんが爲、その材料をば求めけるが、遂にコペーに歸り、一年を消して、そを著はし終へぬ。「コリーヌ」は、巴里に於て出版されたるが、間もなく「コリーヌ」の名は普ねく國中に知られけるが、その美術として、詩として、「コリーヌ」は實に不朽の大傑作なり。ジユフレーは、「アデインボル評論」に於て、著者をかく評せり。「夫人は實にヴオルテール幷にルツソー以來佛國に於ける大文豪にして、世界各國を通して、古今未曾有の大偉人と稱すべし」と。「コリーヌ」の世に現はるゝや、那翁はその機關新聞上、同著に付き大激評を與へ、而してその明白なる署名をさへ附加せり。當時の警視總監は、夫人に忠告するに、「コリーヌ」に添ふるに那翁頌德の辭をもてせば或は夫人が巴里に召喚さるゝことを得んとの言をもてされしが、正義を狂ぐることを能はざる夫人は、この事に服從すること能はざりき。

夫人は再その二子、シユレーゲル及シスモンデーを伴ひて、獨乙に遊歴しけるが、こゝに於ても到る處として夫人を見んと渇望せぬものとてはなく、その談話をきかまくほつせぬものとてなければ、ある時一婦人は、ギエテーに書をよせていひけるやう、「スタヱル夫人の座せる卓子の周圍には、幾多の人士列び立ちて、立錐の餘地なきまでにて、後方よりのびかゝれる人々の爲、われ

は殆ど窒息されなん計なりき。」と獨乙滯在中、夫人の長子(此時十七歳なりけるもの)は、那翁に謁して、遠竄をとかれん事を哀訴しけるが、那翁の心は頑として動かすべからず。而して、いひける樣、「汝が母はわれに反抗して輿論に訴へんとすれば、われはわが生涯かの女が巴里に歸ることを許さゞるなり。われは汝が望みをしれども、われもしかの女を許して巴里にかへらせなば、かの女が引力は世人をその周圍に引つくるに足らん」。とぞ歎じける。

コペーに歸りて、「アレマニウー」の著作に二年を費し、そが材料に四年の年月を消せしなり。夫人は前書に倣ひて、此度も巴里に於て出版せんものと、出版書撿閲官の手に渡せしかば、夫人の稿中那翁の意に適せざるが若き部分は悉く删正して、直ちに



一萬部を印刷中その校閲の爲、佛國に立歸り、禁制を犯し、滯留する事となしけるに、夫人の驚き、いか計りぞ。傲慢なる那翁は、その一萬部を直ちに灰燼に歸せしめ、加之、夫人に三日内に佛國退去の命を下せりとは

こゝに至り、夫人が二人の男兒は、母の爲乞ふ處あらんとして、ファンテンブローなるボナパルトに對面を計りたれども、その甲斐なく、却て直に歸國せよさなくば捕縛さるべし。との嚴命をうけたり。かゝる殘酷なる處置に對する唯一の理由は、夫人はその著書中この豪邁にして利己主義なる那翁に付きては一の稱辭をも掲げざりし爲なりとは、驚くも亦餘りあり。夫人絶望の極、ヂエ子バに歸りたるが、この暗黒なる生路に、一點の光りを放てるは夫人の周圍に集る人士の中夫人が一の若き陸軍々人の知

友を得たる事にして、こはロッカと稱せる青年にて、戰場にて受けたる數多の負傷になやめる中にも、天然の容色と、高尙の風采とを備へ、殊には一點の難ずべき處もなき性行の人とぞしられたりき。天この青年をもて、夫人が行路の難を慰めんとするか。この青年は、僅に廿三年の春を迎へ、夫人が齡巳に四十五歲の秋なるにも拘らず、靑年が心は、夫人の談話に奪はれ、その元氣は夫人が傍近くある事によりて回復するを覺ゆるまでに夫人を敬慕するに至れり。夫人はこの青年を知り、共に談ずるにあたり、その敗戰に同情を表し、またそが勇氣を感ぜり。かれは高潔にして、溫厚なる性格の士にして、夫人が常に渴望せる單純なる獻身的の眞愛をば、彼女に捧げたり。かくて相互の戀愛は、遂に婚儀をもて全ふするに至り、千八百十一年遂にそを實行する事とはなりけるが、眞に幸福なる結婚とはこを云ふなるべし。そはあせゆへ花の顏とか、又は根なき一時の戀愛に基きたるものならで、天稟の才能と、高潔なる心情との交換的戀愛にして、かくの若き愛情は、歲月も變ずること能はざるべし。夫人は、那翁がこの報をうるや、必定ロッカは佛國へ召還さるべしとの恐れありければ、この結婚は數名の信友を限りて其他は秘密になしおかれたり。この恐怖は、實に原因ある事にして、嘗て夫人に同情を表せしシレーゲル、ダムルカシエ等は、漸々佛國を追放さるゝ事とはなりたり。夫人はスウヰツルランド內地旅行、又は佛國に附屬せるいかなる邦上に入る事も禁制せられたり。而して、コペーを去る二「リーグ」を超ゆる時は、直ちに捕縛さるべしとの命は下れり。（この捕縛とは即ち死をいふなり）。この時那帝の權力は、全世界を掩ふにいたりければ、夫人はかゝる有力者の苛責に對しては、蹰躇も啻ならざる有樣に至れり。夫人は英國に渡航せんと渴望せしが、佛國の許可を經ざれば、此地に到る事克はざるなり。故にこの亡命の夫人が、該邦に達せんには、取るべきの途は澳、露、及瑞を橫はつて二千「リーグ」の間を旅行することとなりけるが、夫人にはこの冒險の一途あるのみ。されば夫人はこの機に臨み、父母の墓前に於て徹宵祈禱を捧げ、而してわ

が夫の朝夕坐しなれし椅子、及卓子に接吻し、途中死もし來らば、かれの上衣に吾身の亡骸を包まんと、夫の上衣を手にとりて、夫と二人の子等諸共決死の旅に出立ちしは、實に紀元千八百十二年五月廿三日の事なりき。其身を馬車の中に潜め、さして行衞は其婢僕だもしる由なければ、次の食事頃ひには歸るべしとぞ思はれたりき。かくて時たち日過ぎて初めて其旅だゝれしとはしられぬ。

かくて二人は六月六日といふに、ブイアナに着しけるが、こゝは至る處々人相書をもて嚴しく夫人を探索の掲示あり、かつロッカの捕狀さへ出されたりとは、しられければ、もはや同行すると能はず。こゝにロッカと袂を分ち、ロッカは單身旅行する事と



なりたるが、彼等は何處にいたるも、數時間を超えては滯留すると能はず。夫人はかゝる殘酷なる取扱をうけたれば、憂身にやつるゝ夫人のはては心も身にそはず。ある時は、殆ど知覺の精神を失ひ、暫時馬車よりおろされて、神氣の元に復するまで路上に身を横ふることさへあり。時々刻々只恐ろしき捕偵と、死の來襲とを待つの有樣なりき。しかるにこの行路の艱難を經て、遂にロシアに着しければ、アレキサンドル帝及エリサベス皇后によりて懇切なる對遇をうけ、この處よりスウヰーデンに到りけるが、この處にもベルナルド王の歡迎をうけ、其後間もなく英國に達し、こゝに四ヶ月の滯在をなしけるが、この間に宛も凱戰式擧行とも云はん計り、ランヅドン公の邸に於て、國

中屈指の貴夫人等集會して、その群集の中、あるは椅子にのぼり、あるは卓子の上にこの著名なる夫人を一見せまく競へり。されば英國上流界、及文學界には、夫人が名の顯はれぬ處とてはなかりけり。

夫人の「アレマンニウー」は、千八百十三年遂に發刊され、その手書は獨、波、露、瑞及「ボールチック」海を亘りて、密に齎らす處となれり。

この「アレマンニウー」の初韻は、獨逸風習に付き論ずる處あり、第二にはその文學、技藝、第三には哲學、及倫理第四には、同國宗教の事に論及せり。該書の販賣高は、非常なるものにして、直に歐洲中重なる國語に飜譯されたり。ラマルチン云ひけるは、「彼女の文躰はかの女の少壯時に比して、その勇壯にして煥發せる元氣を失ふことなく、そが上に愈々熟練に、いよ／＼高尚に、いよ／＼ねびまさりまる思想の深き源泉は、一段の光輝、一段の趣味をそが文躰に放ちぬ。かゝる文躰は、形容の美にあらずして、神髓の勢力なり。かの女の名は文學のあらん限り、歷史の存せん限りは、永久不滅なるべし。」とぞいひあへりける

さても、此時佛國には大變動あり。那翁はライプシックの大敗軍に、廿五萬の兵士を失ひ、「エルバ」島へと逃走しければ、夫人は直ちに巴里に歸り、ブイクトル、ユーゴーが嘗て長き遠流より郷土に歸り來れる時、うれし涙にむせびけるその同感に、さすが夫人もうたれたりけん。かくて夫人が客室は、間もなく露國の亞歷山王を初とし、ウエリングトン公其他の名士の會する處となりたるが、那翁は佛國に歸るにあたり、夫人は速にコペーに逃れたり。この時那翁は夫人に招狀を發して、今より後わが生涯は勤めて歐洲の平和を圖らんとて、夫人に巴里歸郷の事を勸めたれども、夫人はその甘言を信ずると能はざりき。

夫人が美くしき愛孃は、當時の大政事家ダク、ド、ブログリーに嫁し、幸福なる家庭を樂しみけるが、夫人が夫ロツカ氏は、その健康を失ひければ、夫人は共に暫時伊太利に轉療の事とはなりたり。紀元千八百十六年那翁が最後の敗北後、「セント、ヘレナ」に流竄の身となりけ

れば、初めて巴里都下に歸るを得たれども、多年の辛酸に、殆ど羸弱の身となり、日を重ぬるに從ひ、益々甚しく遂に身ら再び起つ可らざるを知るにいたれり。かくて自からいひける樣「わが父は彼岸にわれをまてり。」と又シアトウブリアンドにいひけるは、「われはわが神と、わが父と、わが邦土とを愛せり。」と最後の夜、夫人は夫ロッカ氏に別るゝことの近ければ、眠る間も氏に離るゝことを惜まれければ、ロッカ氏は、夫人に對しいへるやう、「眠り給へ。われ傍にありて、喚起し申さんに。」といはれければ、「さらばよ。」といひて眠りに就きけるが、これぞ永き眠りとはなりき。彼等は、コペーに於けるいと大なる古木の下なる、夫人が父の墳墓に葬れり。かくて、ロッカ氏は、夫人に後るゝ僅に七ヶ月にして、三十一年を一期として、あへなくなりたり。その世を去るに臨み、云ひけるは、「われはかの女の腕によりて、死ぬべかりしを。」とその獻身的の愛情亦見るべきなり。夫人の幼兒、即ちロッカ氏と婚後設けたる、五歳の男兒は、夫人の二女オーガスト、及アルベルチンの養育する處となりたり。夫人の死後、其著書「佛國革命に付ての熟考」及び「十年の遠流」は出版されたり。初めの書に付ては、その政治上の卓見、實に後世までの木鐸となり、永久不滅の勢力を有せるものなりき。シャトウブリアンド氏云ひけるは、「夫人の死は、現世紀に於ける古今未曾有の大損失といふべし。こは到底償ふこと能はざるなり。」と夫人は蓋世の英傑にして、又眞の涙をもてるものなりき。ゆへにその熱衷をもて、人を愛し、また熱衷より愛せらる。夫人は不朽の名を殘せり。宜なるかな、今尚數千の人が、「ヂエネバ」湖畔の墳墓の前、懷舊の涙を手向くることよ。

（完）



○文苑

竹柏園六月歌會

鷄（兼題）

あかつきの長鳴鳥はなかなかに
　時守よりもたゞしかりけり　久我建通

牛の尾の長からぬ世を庭とりの
　とさかとたにもなりて過さむ　小出粲

時はかる針さへおくれ先たつを
　入聲たかへぬ庭つとりかな　相澤求

中垣のへたてもあらぬ隣とち
　こゑかはしつゝ庭鳥のなく　又原保行

朝市に運はるゝ籠の中にありて
　時つくるなる庭とりあはれ　山崎房吉

親鳥の餌をあさりゆく跡おひて
　小鳥いく羽もせわしけになく　土田道一

軍とりしやもの羽ふきに長鳴に
　ふらまもちやほもひそみ隱るゝ　石榑千亦

家にかへる雛ほふらんと我いへは
　年おいし母の眉ひそめます　横山硯

とやをいてゝ朝餌をあさる雛の
　雛にましれりあひる三つ四つ　關屋祐之

神代よりいまにかはらぬ鷄の聲
　幾あかつきをかけてなくらむ　萬木敬二

庭鳥のこゑに眠りをさまされて
　うき世に又も生れいてにけり　龜山新一

さえわたる月にうかれす庭鳥の
　羽音たゝしく時をつくなり　細川玄重

まなひやのひるの板木のなる頃を
　村のをちこち庭とりのなく　澤弌

あやしくも時を違へすなく鳥は
　いかなる神のをしへうけゝむ　大野楽

うまいして眠る島人さますへき　松寺久雄
常世の國のとりのねもかな

をちこちに雞なく聲の聞ゆなり　波多江嘉助
月しらみゆくわけかたの宿

やりしゑにまたあきたらてひよ〳〵と　高石眞麿
ひよこは餌箱おひてゆくかな

おそる〳〵首さしのへて庭鳥の　上田尚
へひをうかゝふ夏くさのかけ

あなられし人里近くきたりけん　樋口寅二郎
ほのかに聞ゆにはとりの聲

あかつきの夢おとろかす家つ鳥　増山三響子
老はねさめの友とこそきけ

時つくる共いさをしは世中に　板倉止子
庭鳥にますとりはあらしな

賤の女か歌ふ田歌も靜まりて　板倉藤子
ひるけいそかす庭鳥のこゑ

籠の中に入れしひよ子をさつかひて　大河内國子
妹背親鳥かたへはなれぬ

かやふきの軒端のしたのふせりこの　大河内桂子
なかになくなり庭鳥ふたつ

庭鳥のしのゝめ告ぐる聲きよし　松平岳子
とくおき出てゝ朝きよめせん

人もかくあらまほしけれ曉の　安東鶴子
八聲のとりは時をたかへす

あなたにて鳴けは此方も聲あはせ　堀越しな子
ことわりけにも庭とりのなく

雛鳥をはくゝむ親のさまみては　大村八代子
我身もさらに親をしそ思ふ

おくり來し人と別るゝ村はつれ　佐藤朝嘉子
庭とりなきて夜は明にけり

迷ひ入りしみ山の奥の一つ庵　松浦島子
人やすむらむ庭とりのこゑ

あからむと羽はたきませる親鳥を　中村文子
まちわひて雛のとやの内になく

あすよりは背戸に放ちて遊はせむ　白岩つや子
昨日かへりし庭とりのひな

雛鳥をとなりの猫にうはゝれて
中たかひせるをさなとち哉　久保花子

野良猫に子を奪はれし其夜より
わか庭つとり夜なきそめけり　有賀晴子

とんほつる里の幼子うちつれて
ひなの庭鳥追ひちらしゆく　市田とよ子

皆人は田はたにゆきて賤か屋の
静けきにはに庭とりのなく　山本芳子

五月雨にをくらくはあれと短夜の
早あけぬらし庭とりのこゑ　池谷久子

こかひするわさいそかしき一つ家の
のきはま近く庭とりのなく　小林茂子

竹垣もまはらにゆひし賤か屋の
うち外あらはに庭とりあそふ　關屋愛子

さきたわむ卯花垣根めくりみれは
庭鳥あそふ川そひのいへ　池谷朝子

山深く川きよき頃君と二人
庭鳥かひてやとをしめはや　清水錦子

母窓によりそひ見れは葉ふきの
家居三つ四つ庭とりのこゑ　佐々木信綱

夏夜

竹まとにふき入る風も涼しくて
ふしよかりける夏の夜半かな　相澤求

時鳥こゑきかはやと待つほとに
はやあけそむる夏の夜半かな　又原保行

夏の夜は早あけにけり蚊遣火の
けふり殘して月をのこして　山崎勝吉

ゆあみして晝の暑さを流したる
夜のこゝろは夏としもなし　大野泰

ねくるしき夏の夜頃は夢さへも
結ふかひなき志のゝめの空　土田進一

戸さしせて夢結ひつる夏の夜の
はや手枕にかねのおとする　細川玄重

潮あみん明日の友得たり月清き
汀のみちのそゝろありきに　石榑千亦

歸りきてかたひにをたに脱かへす
かりねのまゝに夜はふけにけり　横山碩

都路の今宵のあつさいかならむ
ねられさりけりてゆるきの磯　關屋諧之

やり水に冷しゝ麥酒くみなから
壷のあつさを語る夜半かな　澤犬

螢かりてよひも友にさそはれて
ねるまみしかき夏の夜半哉　龜山新一

燈火の光うすれてかも川の
川原のすゝみ夜は更にけり　松寺久雄

夏の夜の闇をうれしと打むれて
大宮あたりほたるかりする　增山三雲子

短しと昔かこちし夏の夜も
あかつき急く老となりぬる　板倉藤子

水うちし庭のとひ石つたひつゝ
月かけふむもすゝしかりけり　大村八代子

立のほる蚊遣のけふり末きえて
夏の夜はやもしらみそめけり　松浦島子

壷の間のあつさ忘れて端居する
よはこそなつの命なりけれ　久保花子

新麥を月にひくらむ夕貌の
さける垣内にうすの音する　佐藤絹嘉子

月淸くさよ風わたるあつまやに
君ほこります笛をきかはや　山本芳子

花火見し舟こきさりて川岸の
燈火きえて夜はふけにけり　中村文子

日くるれば夏なき庭に納凉して
ねやには入らし夜は更ぬとも　安東菊子

今こはしこはしいひて凉むまに
東の空はしらみそめけり　白岩つや子

打つとひ壷のあつさの苦しさを
語るはしゐに月もいてにけり　小林茂子

螢とると小暗き垣の内外に
さとのわらへのいさかひの聲　市田豊子

夏の夜のあけはなしたる家の軒に
たえす音する風鈴のおと　堀越しな子

いさや君よへのつゝきを語りませ
　夜風すゝしき眞砂路の上に　有賀晴子

軒にさけし岐阜燈灯に火をいれて
　あつさ忘るゝ夏の夜半かな　清水錦子

田端屋

印東昌綱

餌をかへてやりし、軒の金絲雀はけたゝましう鳴き出てぬ。内儀は今朝よりの田端屋ゆきに、できぬながらも晝けの支度は我の役、茶碗洗ひしは今のさまなるも、時計の針は早くも三時なり。巳之よ、それては留守を賴む。知れる通りのお店の聟入、歸りは十時を過ぎん。仕事はとくきり上げてよし。御馳走の折詰もて來ん程に、ねふくとも待ちてゐよ。と打つゝむ胸の苦しさ、知り給はねばせんもなけれど、子供にてもだます如く、いつにも增して親方の上機嫌、いでゝゆきます後ろ影を見るさへつらきさ、染色匂ふ田の字の半被、あれよ今宵の祝儀の爲、出入の人々に別たれしとか。嗚呼こよひの祝儀、我は何として此一夜を送らんかと、削り居し杉板たゝきつけん迄、我を忘れて立あかりし巳の吉は、俄に店の戸引たてゝ、僅かを殘しゝ障子ごしに、光弱き冬の日を通はしめつ。木屑鉋屑ちらばれる仕事場の片隅に、力もあらず仆れかゝりぬ。

おとうと弟子の金太は、拗らせし風のよべは熱さへありしかば、今日一日を免されて、二階の六疊に臥し居り。折々催すしはふきの、薄暗き天井より響き聞ゆれど、巳之はおのか胸の苦しさに、とひてやらむの氣もつかず。繰りかへしなば人や笑はん。さればとていかて忘れうべき。幼なかりし其かみの事ども。館山の安館屋といへば、土地はおろか此國の浦々にも聞えたりし料理茶屋の、父か自から庖刀とりてのいそしみは、都の人の口にもかなひて、折から年と共に盛になりゆく海水浴の、年と共に我家も榮えゆきしを、ゆくりなくも我兄の、其頭土地に來り居し衿赤き女と、あたなる契結びかはして、家の金持出すうちは猶賴みありしも、遂にはそこゝより少なからぬ金、借り集めたりしを、ふところに、

家を走りて再び省みぬ禍の、父の怒大方ならず、さる性にてはなかりしよと、悔めども過ての詮議いやすに道なく、辛くも凌ぎをつけたりしに、傾ふく運のこれやはしにてありけむ。木枯吹きすさぶ暁の、寐耳に打ならす半鐘の火もとは、五軒とへだたらぬ裏町よりおこりて、猛火は見る〳〵打廣がりつ。はては我家も遂に立がたき境に落ち入りたりしに、それこれの基となりて、ふと病ましく父がいたつきの、いくほどもなく悲しき別れとなりつるは、今より二とせ前、わが十七の春まだ寒き頃なりき。母といふはのち添の、母とよびてより僅かに三年をこえず。さばれ三年が程の情は情、家の爲我等が爲につくしくれし恩、今更惡しういふにはあらねど、いはね渡すまじ、父の死家の沒落をあとにいづこへか隠れゆきつ。誠の母君いまさんには、打續く不幸のうちにも、いかに心強かりけむを、否々誠の母君世にいまして、これらのわびしき數々を見もし聞きもしたまはゞ、いかばかり歎き悲しび給はん。それを思へば、家榮えゐたりし頃、別れ申しゝこそなか〳〵心安かりしか。あゝ何事も忘れん、忘れはてんと思ふ胸の、片へより湧きたちくるは、とひとはれにし田端屋との昔の交り、かなたは堅き呉服商の、あとにもさきにも唯これのみを美くしき玉と育てあげし、お絹とてわれよりは年一つ下の、親しかりしは今思ふも唯夢のやうなり。我を養子にもらはむの時には、七子は黑の五つ紋に、仙臺平の袴必ず見ちがへむ事なるべし。お絹が裾摸樣の襯も、ゆたかに白き衿、氣高うかけて座敷の床の前に、はづかしげにゐ並ばんさまの目に見ゆるやうにてと、やゝもすれ



はかなたの母の、繰りかへし語りいづるに、さる事のあすが日にもあるやうの心地せられて、遊びゐし二人が幼心にも、胸たゞならず騒きたちつ。かなたのにげゆけば、此方も遅れじと走りいでゝ、行く先はいづこ、濱づたひを小石拾ひ〳〵、汐入川の川口袖ぬらしゝも、幾たびなりしぞ。諏訪神社の祭の日、宿禰の花車の飾さきには、町内の子供等の、いづれもつくがならひとて、我はかの人も皆と同じ揃の浴衣きて立まじりつゝ、いでぬ力も一生懸命かぶり居し牡丹の花笠、いつのまにか破れたりしを、かの人の早くもみつけて、よしといふを取替へくれし、よそ人ならば何とかいひのゝしるべき、幼子どちの名にしおふ、田端屋の秘藏娘、われもさすがに父が羽振の大方ならぬ頃なれば、唯わけもなく打笑ふのみ。月寒し觀音堂は十夜の夜、念佛のあとはいつものごと、浪花節のあるといふに、連れだちてゆきたりしを、人一杯にてすわりもえならず、椽のもとにゐしを、折よくもいて逢し肴賣の彌太といふ親切爺の、たちまちよき場所とゝのへくれつ。歸りには迎ひの來てありしを、あぶなしとて中々ゆるさず門迄送りくれしに、思ふやう話のできざりしを、又のあしたのかごともをかし。めづらしき春の沫雪かの人のもしも知らずばと、かけゆきし店先に、かなたもしらずばとかけいてきて、同じ心のはたと落ち合ひつ。其まゝ我家に伴ひつゝ、其頃は猶ゐましゝ母君、都の勤めさきより、折しも商用おひて歸り合しゝ兄上など、一つ火桶のもとに語りたりしよ、學校の歸さ今宵のおもしろき事、文にかきて參らせん、必ず返事おこせてよといふに、送るべき人、前におきて後のたよりはをかしからずや。書く事あらば今いひ給へ。歩みつゝ聞かんほどにといへば、彼方は聞かず。口にてはいはれぬなればとうつふきし横顔、又も例のと思ひつゝ別れたりしも、其夜となればさすがに忘れ難く、もしも誠に書きや來ると、いく度となく立出し帳場格子に、お孃様よりとさし出す使の役は女中のなにがし、いつはりならぬもさすがに嬉しう、とる手おそしと開き見れば、罪もあらぬ摘草行のおすの誘ない、誰がつけ智恵か名宛のみは、花蝶様のそもそれ

を始めとして、日毎顔あはすひまを、猶絶間なき互の心、いひ送りいひ來る玉章は、積りつもりて箱にぞみちぬる。其箱なりき。その箱なりき。恐ろしき火を後ろに逃げゆきし其折にも、忘れずとり出しは、誠に其箱と父が渡しゝ手提となりき。それよりのちの事、あゝそれより後の事、最早思ひいださじ、思ひ出れば恨みも多かるを、父はさる低きなりはひこそ營なみゐたれ。世にも珍らしき迄、心直く潔き性なりしかば、田端屋の兼ての望、改めてはいひ來らねど、心にはそれと悟りゐまし丶を、家は倒れ我身も倒るゝ今はの極にだに、さる事唯の一言も口にはし給はざりき。我父ぞ誠に世の中のなりゆくさま、世の人のうつりゆく心のうちとも知りぬきゐ給ひて、女々しうはたよりもせず、いひ殘しもしたまはざりしよ。げに計り難



きは人心、うつくしみかけくれしは、こなたも相應は榮え居し程にて、今や家もなく親もなく、もとより貯もなき身の上に、行方しれざる兄上のよくなりて、歸りきまさんには云ふ事もなけれど、萬に一つ淺ましき姿と變りはてなどして、歸りきまさんか、かたみに相扶くべき唯一人なる兄、唯一人なる弟の身として、いかで打捨おかるべき。さるのち〳〵のかゝづらひども、思ひめぐらさんには、などて今更われを養ふに迎へむ。引とりて世話せんといひいづべき。頼みなれ我身、力なき我身を、いかで昔のかたらひに立もどすべき。立もどさじとつとむるは、親々のいちはやき胸算用、かの人のみはさすがに猶娘心の、昔の馴染さながら捨てしとにもあらず、ほだちとにもあらぬあやしき境に、我も知らず〳〵さまよひつゝ、人しれぬすく

ひの泉の甘きにゑひて、故鄕遠くさりもえやらず、程近き此村に何ほこりかに日をすてしゐけむ。よしやこゝなる親方夫婦の、都より移り住みきて、我ありし昔の事とも委しう知らぬとはいへ、建具屋の弟子と身をくだして、おめ〳〵と今日までも我顏さらし居し愚かさ。げにはづかしかりし我姿かな。我はかくてつひに〳〵捨てられしなりき。捨てらるゝ身の、かねて思ひまうけゐし今宵の事。何今更に胸さわかする。今は思はず。何事も今は思ひいださじ。あゝ戀しさは父母そろひゐましゝ頃よと、かきむしらるゝ心の苦しみ、はらすによしなき己の言は、闇より闇をやたどるなる。外の方により殘されし金絲雀は、折しもまたひとしきり鳴きたちぬ。

日足短かき冬の空の、今年も既に十日とあらず。潮止橋の橋のたもとは日にそへて賑はしき、夕べ、夕べの今宵はとりわけ田端屋の娟様拜まんの、女づれ少なからず、風寒き汐入川の川端を八幡の方より、只一文字に威勢よく打つゞき來し數多の車は、かの橋ふみとゞろかして過ぎゆくと共に、あとに追續く無數の人影、夕日はまつたく沈みはてぬ。さきの程より此橋のほとりを、うつぶき勝にさまよひし一人の若者は、今しも人波におはれ行きし車の方を見守りて、やゝしばし立たりしが、何事をか心にさだめけん。渡りかけし橋たちまちそがひに、ゆく先やいづこ。暗き川づたひを寂しき星にまもられつゝ。

梅雨日記

宮澤すみれ

○しのぶのつゆ

去年、五月雨ひまなく降るころなりけん、東の京に乙羽子が訃音をきゝ、ゆるぎの里に湘煙女子が遠逝を知りておもふことといと多かりき、歐山米水は依然として高く且つ潔からんも、將たまた牡丹芍藥は再び匂へども而かもうたひし人やなし、一つはたのしき樂園に古今諸文豪の靈と會して永久の淸談たのしかるべく、他は九品蓮臺の上、こひしき君をかたりて、まことの禪味を

やさとるらん、さても東洋シイザイを以て目されし星氏が魂のいづちにさまよふらんと、天の一方を見やれば、霏々たる細雨いまだおさまらず、あやしの雲とぢて凄まじかりき、しのぶ草しのぶ袂に夏猶つめたき雫の落ち來りて陰々たる夕べ、山寺の晩鐘こと更らに寂滅爲樂とひゞきぬ。

○香花

深き眞理のあるところは知らず、故人に對する弱き人間の情を滿足せしむるは佛法の道にあらずや、なき人の命日忌日に香と花を奉つる、何となう其人のうけ給ふやうおもはれて、未來現世いとしたしう交通なし得べくおもはれぬ、識者必ずやそを迷と罵り給ふらん、而かも他の宗教の死者に對する禮、いさゝかひやゝかとおもはへて、我は人のあなどりとも顧みず、四季折々の華を奉り、また香をたきて、其煙の末を、うつゝのよの現象と、みまもるをこよなきたのしみとなす、我が命終りての後もかくてよとまだ東西しらぬ幼子にそとかたりしが。

○古池

蛙飛びこむとうたひし芭蕉が句を、かれこれ深ういふ人あれど、げにも實景とさとりけるは、我が住む軒の後園にものふりたる池ありて、幾世幾歲へつらんか、蒼うすみてものすごく、かたへに優しき花菖蒲こむらさきに咲けるあり、春は山吹また金色をあやどれど、いづれも古池に對して良き對照ならず、唯一蛙の飛びこみて、水に聲あるそれのみぞ、唯夫れのみぞいひがたきの感想にみつるなれ、古池や、げに花あれど婉ならず、芭蕉翁は自然をうたふにいと適切なる意を捕へ給ひしなり。

○ほとゝぎす

これ詩人騷客うたひ盡くして余すところなし、我また何をかいはん、唯千代女が夜一夜ねむらで、句をおもひし事の熱心を感じ、平民文學の女豪が十七文字の爲いかに心神を勞せしかを追想す、蓋しこは世にたかく名のりしもの、而して悲しきは山間の子規なり、今、更科日記のうたを借りて、我がおもひを洩らさばや。

誰に見せ誰にきかせん山里の
このあかつきをちかへるねも

○菖蒲

今は昔、この國某池にすめる大蛇、さる姫君のあでなる姿におもひをこがして、己はうつくしき武士となり、遂に姫君と契りけるが、一日蛇躰の現はれてやむなく越の國青柳の池といへるへ飛びこみぬ、姫はみもごり給ひしが、菖蒲の湯へ浴し給ふて、心地すが／＼しうなり、いつのまにか胎内輕うなりしを以て、後五月五日この湯を立つる風習おこりしと里人はいひ傳ふ、信か僞か。

夫れ人間仁義を忘れて利慾をみごもらは、よろしく菖蒲湯に浴して、霊の復活をいのるべし、然らずんば、おそろしき蛇性、母より子に、子より孫に傳はりて、神聖なる大和魂消滅するに到らん、ひとり母のみならんや父猶然り、然れ共、霊の復活をはかるべき、菖蒲の湯、そも／＼いづこなるらん、鎌倉あたり江の島か、はた大磯小磯、貴人の別邸あるところか、ゆけよゆけ、海にいたりて猶得ずは、アルプス山は道とほし、芙蓉の峯のいたゞきまでも登りゆけや而かも大聖宜く、道は近きにありと。

○田植

きのふは我が家の大田植なりき、朝まだき月あるころに起きいでゝ爐邊を清め、火を點ずれば、遠き隣家にてもつるべの音きこゆ、いづこも／＼一刻を千金にたくらべて田植いはふたのしさよ、やがて手傳にとて來れるは村の若き男女合はせて五名、田植手拭とて新らしきをかぶり、友禪のはてなる襷十の字にあやつりて、きりゝと裳をかゝげたる勇しさよ、中には美くしき容貌もてるさへありて、泥にけがすは口惜しきやうなれど、彼等は一年中のたのしき折として、我がおもひを悟らず、みにくきもまた露の白玉かゞやく早苗とりて植うる見れば、うつ伏きがちなる姿にやさしき風ありて、二の町なるも歌によまゝほしきやうなり。

官にまします君等よ、この田植をばあだに見すごし給ふなかれ、是秋の收穫となりて、肥馬輕車よつて以て、

この水田の中より、捧げまつらんが故に。

〇ほたる

腐草光なし、化して而て螢となる矣、そも／＼春の花の行方はいつちなるらん、英雄の事績史上に赫々たれど、一點この光に及ばず、螢や翩々として水を渡り、空にあがり、多くは天の星かとあやまたれつ、暗にもこれが光の飛び交ふて夏の自然にほめたゝへし枕の草子が著者さらなり、そこふむなゆふべ螢の居たあたりと、柏原の詩人が奇才知られしもこれなり。

唯うらむらくは清き水邊におもひあがれるを捕へて、絹のふくろにせまき／＼夜をあかさしむる人あるを、世に罪ふかゝりしは支那の某學者が手業か、彼は唯書をよまんが爲燈火に代へて罪なき虫をくるしめつるよ。

〇夕顔

やさしき女のこれは節なき夕顔の上が、口惜しの花のちぎりや一枝折りて參れとのたまひつる、貴人の御名をだに知らずして、深くも契かはしけるよ、さればあれたる河原の院も、玉をみがけるうてなとおもひ給ふて、恣なる御いつくしみ、女は、まして、この大なる愛のうちに恍惚としてすごしけり、されば執着ふかき御息所が心の鬼女性のいみじきインチエーションもて荒れたるやかたの契を知りけむ、夕貌の花遂に枯れ果て終んぬ。

前の畑に廣う棚渡してこれが白きを愛す、農はもと本業ならねばむなしき花のみや多らん、稱にいふ、實らぬもよろし我は唯、花をめでてんのみと、さても北信山家の夏の夜、維光めきたる御使もあらねば、ひとり咲きてひとり消りゆく、夕貌の花、いとこゝろ安かんめれ。

〇泉

ふりしきる梅雨に、けがれずにごらず、夏そばの莖あかき畑の南に、いと／＼きよき泉あり、暑のがるべき清水もたぬ都人貧しき哉、彼等は車に乘り汽車に投じ、數多の財をいだしてすゞしきをもとむ、夏の山家は幸なり、價高く涼をあがなふに非らずして、おのづからなる秋の風、扇はこゝに用なきものなり。

泉の女神住み給ふか、青葉もれくる折ふしの日光に、ふかき底よりわきかへる水泡の、あやしういろありて、むすぶ我が指こぼるばかり、ゆるし給へ女神、我はこのつめたさに得たえんやと訴れば、ほゝとほゝ笑む女仙が面影見へてものすごし、夢なりけんか、うつゝなりけんか知らず、花ならば玉章の紙にこめて都の友に參らせんを、さてもく、鏡花の君よ例のものがたりはかゝるましみづよりかと、ことゝひ參らせたうおもひぬ。

○なでしこ

自然生の撫子ことしもまた小さき花あり、小女にたとへんか、やさしき姿なるを、ものゝ本によみし瞿麥姫は、嫉妬深くして、ほとゝぎすの御方をあやめり、彼女は絶世の美人、生は京にして御父は雲の上人なりといふ、共にこれやさしかるべきの遺傳なるらんに、殘忍また慘殺、そもく婦女が嫉妬は、ほのふのごときものか、遺傳にあらず、本性にあらず、忽然として現出すべくや、なでしこの花を見る毎に例の物語をおもひおこして、いまはしきアソシエーションぞしきりなり。

○口なし

可憐、また可哀、あさましき名よ口なし、御身は何人が亡魂なるか、うらみを飮みてうせしもの、將たまたいはじかたらじの秘密をやもてる。口なしの花莞爾として曰く、御身が察する所あやまてり、我はおもふところもなく、またいはんと欲する事もなし、知らずや人間のことのは、朝た夕べに變遷ありてたとへば秋の空のごとし、就中、愛とかいへるさゝやきは、春の野せましと舞ふこてふにも似て、けふは櫻にてよひは菫、げにうつり移き人の心よ、我はいはじかたらじの沈默をまもりて、靜かに天職を全うせん、手折らば手折れ、すてなばすてよ、見たまへ高く且つたふとき神の御業を、これ無聲の言、無言の詩、禍なる哉ものいふ人間よ、一枚の舌、よく全世界をやきつくさん、あな怖ろしやと、ねむごろなるさとし、我おもはず襟を正うせり、あはれ口なし、御身が言の大なるよ。

○なる神

夕立いとうれし、夏の苦熱をあらひ去るこゝちし、

はあれど、おどろ〳〵となる神の、戸のひまより光さし入るゝはあさましう生ける心地もあらず、昔殿上にあまた落雷ありしを菅原公の御うらみとおのゝきしよし、公いかで此の如きわざをなし給ふらんや、五月雨はいとわびしけれど、霹靂の音ならして心やよし、さはあれどやがての盛夏を思ひやりて、山おろしのこゑもかくやとおのゝかれぬ、むべ平家の公達が富士川の恐怖、これは二十有餘年の榮華に兵馬の音をわすれ給ひしもの、我等が去年よりの秋月春花に、戯むれしこのみのそれよりはながく且つ深かりしを、雷獸となんいふものに似たらんやうの源氏がむごき處置に、斃れけん故事をも添へて、我はをさなくも雷電いむ事甚し、眠るが如き我が靈を天のよびさまし給ふともさとり得ずして。

○夏中休暇

夏のやすみといふ、山に川に故里にやすむべきは當然なり、夏期講習とて流行のごとくそこゝひらかるるを見て歎に堪えず、綸謡唱歌の類或はよろしからん、科學的のものにいたりては頭のなやましき心地す、けふなん新聞にて、早くも夏期何々の講習さだまりて、何々講師迎ふるといふをきゝ人事ながら、あつしくるしとおもひぬ、老婆心とはかゝるをいふならめ。

ながゝらぬ夏のやすみに高き山、清き水、前途多望なる男女の學生諸子をまつ事久し、況んや涓々たる泉、颯々たる嵐翠、自然はかしこき師をそゑらみて卿等を迎ふべく、今やたのしき趣向をおもふの最中なり、やがてきのふけふふりつゞく梅雨ぬぐひ去られて、七八寸の稲、千町田に波うつ頃、學生諸子よ、單衣のきぬ輕うふるさとさして歸りたまへ、慈愛ふかき母と姉、父と兄、山と川、卿等の歸省をまつこと切なり。

○百合

花いまだなし、芽少したけて葉三つ四つついてぬ、やがてましろに咲くころ、我つゝしみてこれがもとに聖者のみことばをきかん、ソロモンの榮華のきはみだにも其よそほひこの花の一つにしかざりきと、さみだれよ、明日はをやみてこれに日の火を與へよ、それは世界の美、野のゆり花の一もとに、我等相見る事を得べければ。

江の島の記

中島眞子

明治卅二年八月それの日。俄に思ひたち。江の島に詣てけるに。いにし年見しよりは。ところ／＼の有樣。かはれる事多かりしかば。

うべも我年を經にけり昔見し
　島の姿も面がはりせり

たちかへり今日きて見れば旅衣
　うら島が子の心地こそすれ

渚にたてる不老門といふは。ことし五月に出來しなりとぞ。

名にしおふ門にし入れば今よりは
　老せぬ身とも成ぬべきかな

御社にぬかづきて。年頃思ひ渡りつゝ。からうしてまうでける事など。思ひ續けて。

斯計思ひ入江の島なれば
　神も惠を垂れざらめやは

濱邊に逍遙して。

いにしへのあはれも深き兒が淵
　見るかひぞある江の島の浦

碎けてはまた打よする白波の
　うづまく淵の風の涼しさ

そのかみ。なき人と共に。こし程の事を思ひ出て。

うちつけに袖ぬらしけり波の聲
　風の音にも昔覺えて

かりのやどりもとめて。しばしやすらふ。都を出しより。曇りかちにて。富士の峰も。さだかならざりしに。夕暮に。俤計りほのめきたり。

戀わぶる心や空に通ひけん
　雲井ほのかに匂ふふじのね

心あてに見やりし雲のそれならで
　はるかに晴る富士の遠山

かへるさは。片瀬河をのぼる。いと淺き瀬にて。底のいさごも。限なく見え。いみじう涼うて。萬のうさ。名殘なう流したるこゝちす。

かたせ河波にうかべる島山に
　棹さす舟ぞ似るものもなき

學藝

夏季の天然（中）

藤堂梅軒

○花　壇（夏の草花）

夏も七月頃となれば、暑さは其の頂上にまで達し、我も人も團扇、扇使ふ手が忙しく、燒け付く暑さに、仕事するにも慵く、果てはトロリ〱と心地善に睡氣を催して來る。これでは寧そ庭にでも出て、花壇の間に徘徊するがよろしからうと、さて見渡す花壇には、種々の百合の花もあり、石竹の花もあり又其の葉の日扇をなすひあふぎの花もあるなど、其の盛なる樣中々に春の花壇にも劣らない程であります。

百合の類には多くの種類あるもので、花の黄赤色で大形なるおにゆり、赤色で最小形なるひめゆり、白き質に美しい紅の細點が散り亂れて居るかのこゆり、それに似て其の紅が稍々黒ずんで眞中に一條の朱紅のあるべにすぢゆり、それからさつきゆりとてさつきのような色合と形とをして居るもの、なつすかしゆりとて色紅く瓣と瓣との間に隙のあるもの、さゝゆりとて白い花に淡い紅の暈のあるもの、又てつぽうゆりとて、花の最も大きく白色で香氣の甚だ強いものがある。其の他猶名だけを擧げれば、すげゆり、ほうらいじゆり、しろかのこゆり、たけしまゆり、ひらとゆり、きひめゆり、はるすかしゆり、あみがさゆり、てんがいゆり、くろゆり、かたこゆりなど實に夥しいことであります。何れも百合は其の根を掘りてこれを食用にすることは誰れもよく知つて居る所であるが、其の根といふは實は地中に潜んで居る短い莖で、これに肉の厚い葉が取り圍んで居ります。これは、冬の末、春の初頃に掘り取れば、最も肉の厚い味の善い滋養の食物となりますが、春の晩、今や莖を地上に高く延す頃には全く食するには適しないです。其の他我々が膳に上せる葱も、亦百合の類で、只々

花が小くて色の美しくないものが莖の先に圓く集つて團子の狀をなし、葉も亦樣子が變つて、通常の扁いものが縱に卷き付いて全くの筒のやうになつて了ひそれに其の白根といふ所は宛も他の百合根のやうに相當して、これに土を培ふ程其の白根が益々延びるのである。詮ずる所百合の謂ゆる合百根と、葱の謂ゆる 白根とは大した差がないので



只々一方は鱗の形をして居るが、一方は其の葉が厚くはならずに、白いまゝに、幾枚となく取り圍んで居るのであります。此の點が申せば、にんにくにららつきようなども皆同じ類であります。

百合類の効用は格別で、何れも其の根を滋養として廣く食用します。殊にかたこゆりは俗に片栗ともいふて、其は深山に生じ、小い植物で紫色の

花が咲くので、其の根から澱粉を搾り取つて、片栗といふものを製造します。葱の類は、凡て一種の臭を持つて居る所を珍重せられ、殊ににんにくの如きは甚だ過ぎてチヨツト常食には出來ない程てあるが、支那人西洋人は喜んで常に用ふるそうである。ねぎは所によつては、其の白根ばかりを食して、綠い部分を棄てます、東京などてはそうてあるから、上に述べだように、態と白根ばかりを、長く延ばせるのてあります。西洋の種類にたまねぎといふて、其の根が圓く大きくて、臭は餘程淡いから、若しも暗所で鼻の感ぜぬ時に生のまゝ食べさせられると、林檎てあるかと思ふ程てある、今は此の葱も一般に我が國ても移し植えられて來ました。

なてしこ類や、ひあふぎになると、全く庭園の飾りに栽えらるゝもので、殊になでしこには種々樣々の美しいものがあつて、或は盆栽に或は花壇に紅、白、淡紅、斑など、格別に我々の目を歡ばせるものである。俊頼の歌にも

なてしこの花咲きそむる夏の野に
けふ日暮しの聲ぞ聞ゆる

とありて、昔からも、これを賞愛して居ることが分ります。野や川原に生ずるものは、これをかはらなてしこといふもので、優しい淡紅色の花が咲くのです。庭に造られるものは、多くはこれを、かわらなてしことといふて、それを石竹ともいふて居ります。それから、ひあふぎは、全く別種の植物て、實はあやめ、かきつばたの類に屬する。チヨツト、樣子が、その類のようには見えないが、よく〳〵其の葉や花を調べると、全く詐りのないことが分ります。

夏の花壇に就いて、御話をすることはマア、ザツト、こんなもので、これから、外へ出掛けて、野路を辿ることゝすれば、果してどうであらうか。

○野路（蝶のはなし）

野路を行くの興は、元來長閑な春の天に、最も多いのてはあるが、しかし眞夏の空に、ソヨ〳〵と吹く凉風を迎へつゝ、漫ろに行くも亦格別てありませうヨ。路傍

には、差して美しい花の咲いて居る程のことはないがえのころぐさやめひしばなどの禾本科植物の穂が、風に揺られて居る風情などとなく愛らしくあり、又所々におさがほに似たひるがほといふのが、白い淡紅色の喇叭を立てゝ進軍の歩調を促して居るやうである。又草の茂の間にはまゝ萱草といふのが咲いて、六瓣の黄紅色で隨分見事な花である。其花や葉莖全躰が甘くて、これを食用にもし、又乾し上げて藥用にもせられる一名これをわすれぐさともいひます。これには類似の



種類があつて、八重咲のやへかんぞう（又やぶかんぞうともいふ赤い色のべにかんぞう、黄金色のひめかんぞうなどがあります。此れ等はいづれも百合の類に屬するので、斯うして見ると、百合類はなかなか廣いものだといふことが分かるでしよう。

それて氣候が、このやうに暑くなるにつけては、動物の繁殖するは、實に驚くばかりで、何から御話をしてよいやら、殆んど手の着けようもありません。兎に角、蝶だけのことでも、ザット申せば一般に此の頃になれば

美しい斑の翅をもつて居る蝶が、著しく増して來て、野路行く者を送り迎へする樣、誠にすが〳〵しい心地のするものであります。あげはのちようを始めとして、きあげは、くろあげは、こむらさき、ひようもんちよう、あかたては、ひめたては、ひをどしちよう、くじやくちよう、もんしろちよう、きちようなど只〻名ばかりを聞くさへ、其れぞれ美しきものの數多きを察するに餘りある。しかし、名は優しく、姿も美しい之れ等の蝶が、有用の植物を害する虫であると聞かば、誰とてチヨットは信じもするまい。實にあげは、くろあげはは蜜柑や柚などの葉を荒らし、きあげはは胡蘿蔔などを損し、こむらさきは柳を害し、ひようもんちようはいちごを痛めひめたては、くじやくちようは苧麻を弱らしひをどしちようは朴の木を困らせ、もんしろちようは蘿蔔や菜の葉を喰ひ、きちよう、ねむの樹を苦しめます。勿論このような美しい姿となつては、そんな横着はしないが、仔供の時に惡戯をするのである。否、惡戯ではない、實は仔供の間は全く此れ等の葉を食して生活するのである。毛むしや青むしなどが、即ち其の仔供のときの姿で、蝶の生活上、已むを得ないことが、恰も植物の迷惑になるので、即ち人間にも惡い影響を受けるのである。但し其の害は仔供の間のみに限つて、成長すれば却つて大に、植物の繁殖を助けるのであることは、今更に繰り返すには及ばぬでしよう。

○水邊（沼澤中の植物）

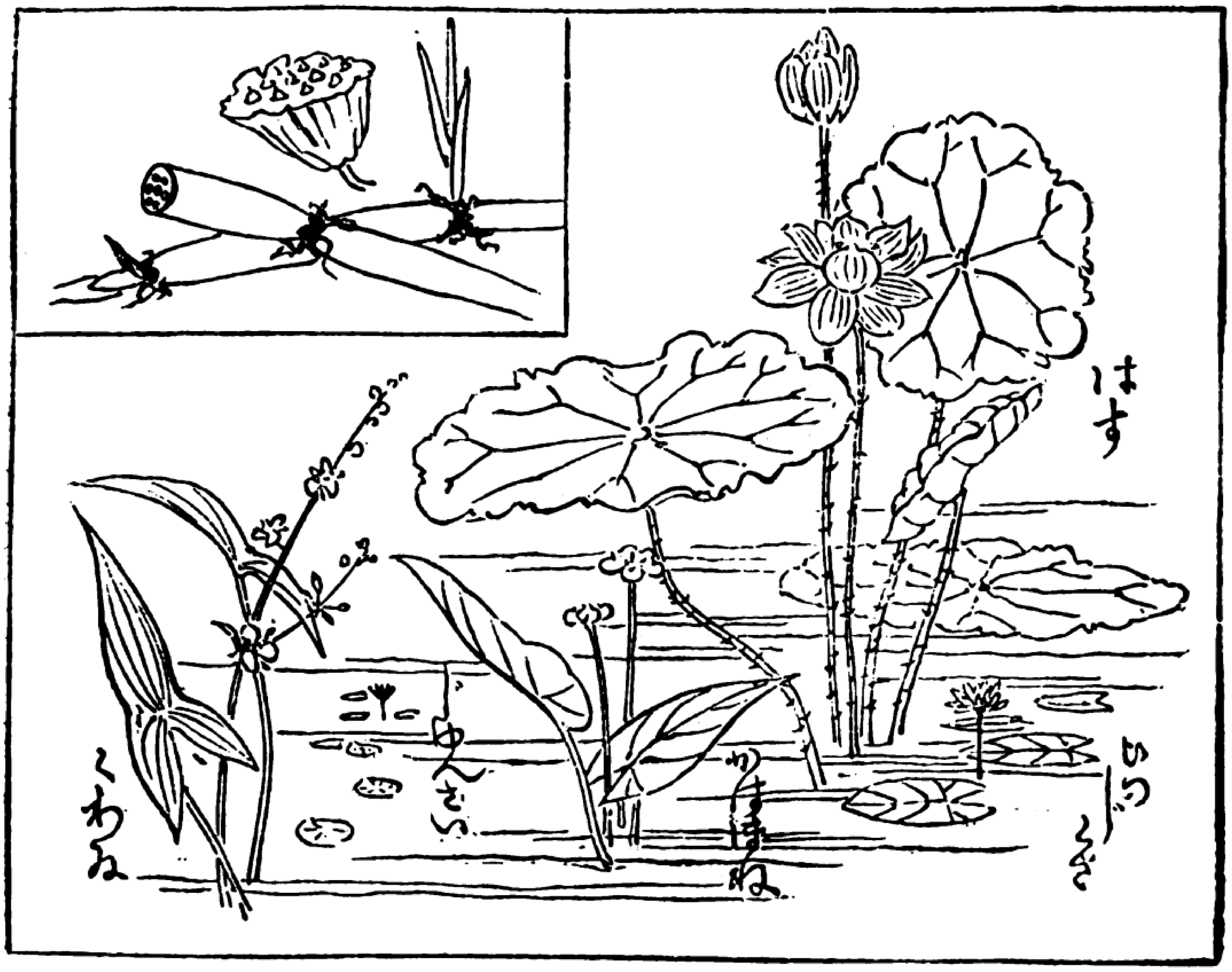
野路を彼方此方と辿りつゝある間には、或る清き流れに出逢ふことがあらう、又池の縁にも寄り着くもあらう。此の頃の暑さ、如何で水面を只て見逃し置かうか、これ亦出來るだけ綠い蓐を敷きつめたるかとも覺ぼしきほどに、蓮、かはほね、ひつじぐさ、じゆんさいさてはくわゐなどの水草が生ひ茂りて居る。

蓮は一にはちすともいふて、花に紅、白、淡紅、又瓣に少いと多いとの區別があり、何れも其の清く美しきを以て賞せらるゝもので、泥中の蓮といふは、此の意味である。支那人はこれを花中之君子也といつて、甚く淸ら

かなるを愛して居ります。昔、遍昭法師も歌ふて

はちす葉の濁りにそまぬ心もて
何かは露を玉とあざむく

とさへ賞揚した。蓮はたゞに花の美なるのみではない、實用の甚だ廣いもので、先づ蓮根の食用になることを思ひ出すであらう。蓮根といつて、決して根ではない、謂はゞ百合根のように、莖の泥の中にかくれて居るものである。本當の根は鬚のようで、其の節から生じ、



葉も亦其處より生じ、始めは葉は水中にありて、段々と水面に浮び、それから水上へ突出て大に開くのである。何にせよ葉の形が圓くて、長い柄が其の下面の中央に着く具合は、外の植物には多く無い例であります。從つて葉は、正しく天に向つて、鉢で以て受けて居るようになつて居る、すれば、其の中に雨水が溜まつて、植物に害を及ぼさなければならぬ。ところで天工の妙は格別で、葉の表面には天鵞絨のような毛があつて、雨水は皆、

彈かれて、中央の底に溜まりて水の珠になります、軈てその水の珠が、段々と大きくなれば、それだけ重くなる、そうすると、其の重さて葉の柄が曲がつて、葉の鉢が傾く、そこて、水の珠は、容易に墜ちて了ひます。

蓮根は盛んに食膳に上されるが、それは花の淡紅色てあると、白色てあるとの二種に限るので、殊に淡紅花の蓮根は肥つて、少々肉色かゝつて、味が最も優れて居る、白花の方は矢張り色も白くて粘り氣があります。次に蓮の實が食べられます、其の實はチョット豆粒のやうて、それが杯の形して居る花托の中に埋れて、半ば姿を現して居る、熟すれば黒くなります、甘味があつてチョット旨くあります。葉も亦嫩い間には食べられます蓮飯として食するとチョット面白いのてす。かはほねやひつじぐさなどは、何れも蓮の類で、其の花を賞するに止まり、ひつじぐさは午後の未の刻限即ち二時頃に咲くからだといひます。只じゆんさいは蓮の類てあるものの、花は一向詠めにもなりません、其の葉の若くて巻き付いて居るものを採つて食用にする、それに粘液が包んで居るのを珍重がられて居ります。此の粘液に就いて御話すべきことは、何のためにこれがあるかといふことてある。これは學者の中て一つの問題になつて居るが、兎に角水中の虫や鳥のために、ムザ〱と食ひ荒らされないまでに、ヌラ〱としたものを塗り付けて居るのだと申します。

次にくわゐに付いて、少々いふことがあります。これは蓮の類とは全く別で、其の芋は矢張り地中の莖であるこれに青いのと、白いのとの二種がありて、青いのは長圓て味が甘い、白いのは眞圓くて、少々ゴリ〱して苦味がある。又別にまめくわゐといつて、球の小いのがある、これをはかりぐわい（升て量るから）とも又吹田ぐわゐ（攝州吹田村の產）とも稱せられて、味が反つて佳くあります。若し大きなくわゐを作らうと思つたら、中途てこれを掘り出して、餘計な芋を離し去つて、一株每に五六個づゝを存して、再び泥の中に埋めて置けばよろしいのてある。兎に角滋養質の多いもので、割烹にも亦用ひます。

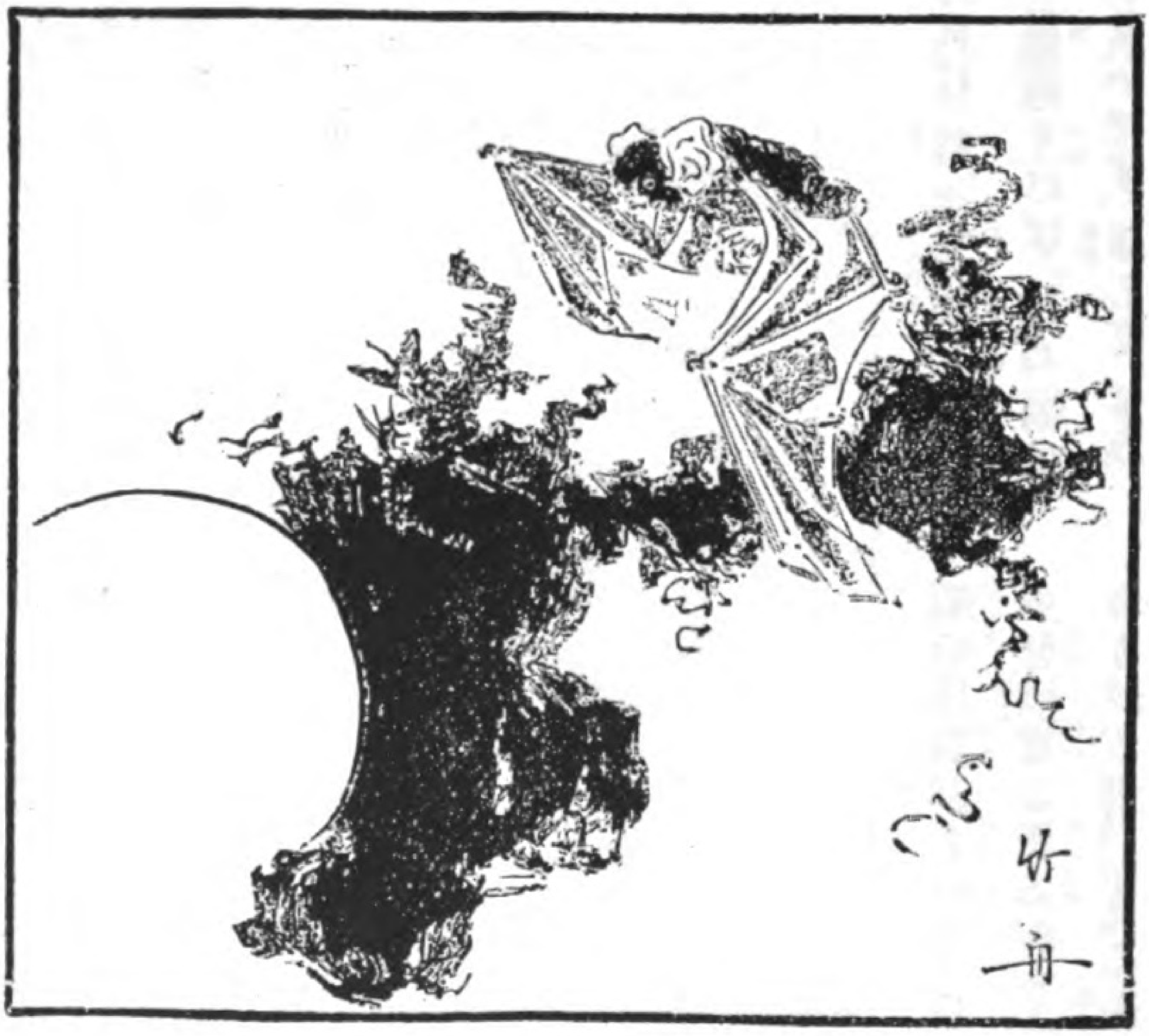
此のように池の端で、餘念なく暮して居る程に、日は段々と傾いて、今や全く西天に沒して了つた。これでは歸りが案じられるからとて、急ぎ我が家を指して足を向けた。燬け付かんばかりの暑さも、今は夕風に洗はれて、いとゞ胸襟の凉しく覺ゆる頃しも、我等は又も新たに樂しい研究の材料を得ました、抑も何であらうか。

○晩景(蝙蝠のはなし)

一羽二羽將た幾羽の蝙蝠が、翩々として忙しげに働きつゝあることとであります。全躰蝙蝠は世界の各地にも產するが、普通の種類、即ちあぶらむしといふものは、亞細亞の東南部(日本も此の中に含まる)亞非利加の北部、歐羅巴の中部南部に擴がりて居るものである。常に棲む場所は昔の城趾や、寺の塔の最上などの高みで、黃昏になれば、頻りと其の近傍を飛び廻ります。通常地上から二三間程の高さを限りて、並木や、大道や、墻壁や建物に沿ふて、行きつ、戻りつ、自在輕妙に翩ります。何分にも其れの耳殻が、實に大きくて、能く前の方へ向けることが出來るものだから、若しもこがねむしか、何かの昆虫が、遠くにブーン〳〵唸つて居る所を聞き着ける力があります。若しも、其れを、聞き着けて見出さうものならば、一直線に飛びつゝあつた所を、忽ち身を翻して、數尺も道を轉じ、アップと響く音を立てゝ、これを口に呑み、パリ〳〵と嚙みて、翅鞘などの硬い部分を地上へ投げ棄てます。其の技の敏捷なること、實に驚くの外はありません。元來、蝙蝠は大食でそれに消化することも、亦甚だ速いものである、それといふも、躰が割合に大きいものだから、多くの食物を要するからであります。餌は前にもいつたように、昆虫の類で、殊に蝶の類を最も好んで貪りて食します、尤も夜に出る蝶で、即ち蛾の類のことである。

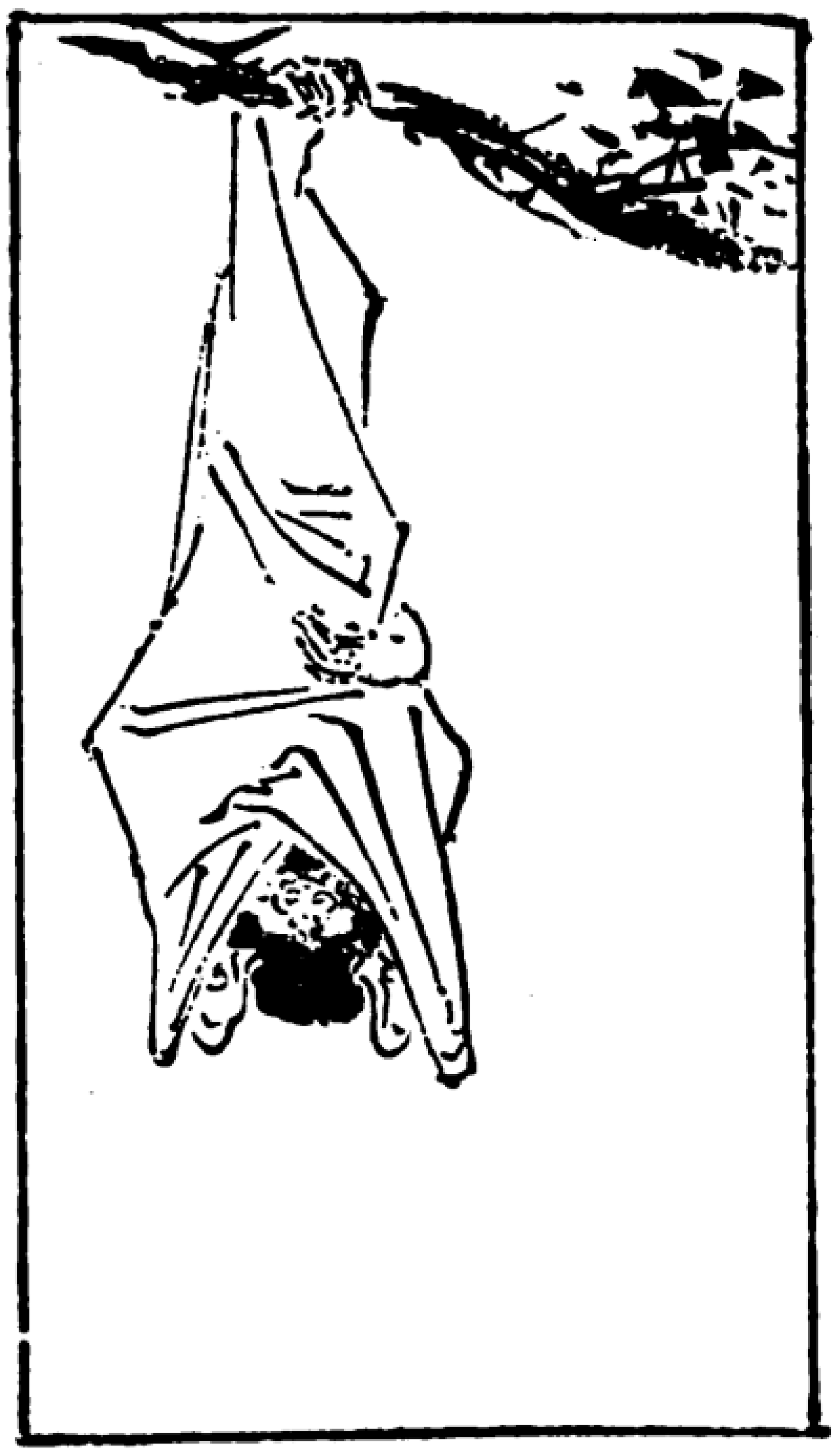
蝙蝠は、どうも、親子家族が、親しく共々に暮らさないものです。それには理由がある。彼れの性質は弱いもの虐をするので、子供を嚙んだり、餌を奪つたりするような薄情ものであるからであります。

學問の開けなかつた時代には、蝙蝠を以て鳥の類と見倣して居つたが、最早今日となつて、學者てなくとも、そうは考へないでしよう。其の證據には「鳥なきの蝙蝠」といふ諺があります。それで見ても、鳥と蝙蝠とは、別の類と認められて居ることか分かります。成る程、それはよろしいが、蝙蝠を以て、鳥の仲間入りが出來ないような下等の動物と見られて居るらしいのが如何にも蝙蝠に取つては、慇然であります。何ぜといふに實際は、蝙蝠の方が鳥よりも、遙に高等の動物なのであるのです。よつく御覧なさいよ。鳥には歯がないが、蝙蝠には猿のような歯がわるのみか、柔かな唇までがある。まだ、それに耳殼があるに、



鳥には其れがない。翼に於ても、何れも腕から成りたつては居るが、鳥には其の指の具合が明かでないに、蝙蝠はそれがチヤント備つて、しかも其の五本の中、四本が極めて長くて、翼を支へ張る道具となつて、恰も、洋傘の骨のようになつて居る。洋傘を蝙蝠傘といつたのは、誠に相當であらうと思はれますチそうして拇指の一本だけは、別になつて、先に鉤のような爪を以て、物に引つ懸ります。それや、これやを見較べると蝙蝠の鳥よりも高等なる動物てあることが分かるでしよう。そこで、或る學者は、これを以て獸類と鳥類との中間動物と見て、即ち鳥類が段々進んで、獸類に達せんとするチヨツトとの境目に、此のよ

うな動物が出來たのだと考へます。しかし、これは古い說で、今日では、誰一人も、此に贊成する學者はありません。獸類の中でも、蝙蝠より遙に下等なものがありて、寧ろ獸類中の最高等の猿の類の次に位するものだと認められて居ります。蝙蝠も中々格が上つたのてすよ。丁度日本國が日清戰争から、ズン〳〵と格を上げて、今ては世界の最强國なる英、佛、獨などの次に、置かれるようになつたのと同じようです。否、其の英國と、日英同盟を結ぶ程てすから、或は對等にまて押し上つたのてもありましよう有り難いが、しかし又一方には、益々勉强せんければなりません。蝙蝠も今少し勉强すれば、猿と蝙蝠同盟を結ふようになるかも知れないです、果してどうてすか。



此の不思議なる翼は、護謨のように、薄く薄く躰の周りに延び擴つて、しかも、それが表と裏との二重になつて居ります。これは元と、躰の皮膚が、腕と脚との間に、延び擴つて出來たので、其の表は、躰の背面の皮より成り、其の裏は、躰の腹面の皮から成り上つたので、其の證據には、表は多少短い毛が疎らに生へて居る、それが此の表裏二面の異なる點の著しいことてあります。此の翼も、其の緣の所になると、段々薄くなつて、殆んど透明てあるから、中の管が歴々と見へ透いて、其れを猶、顯微鏡で見ようならば、中の血の流れをも明かに認められます。

蝙蝠は翼があつて、自在に飛び廻るが、又一方に地の上を歩くこともあります。丁度それは鳥と同じようであるが、しかし其の歩き樣の不作法、不恰好なことは、猿が歩くよりも甚しくあります。先づ、其の四ッ足を互ひ違ひに運ぶ樣が、ヒヨコ〳〵として、殆んど倒れん

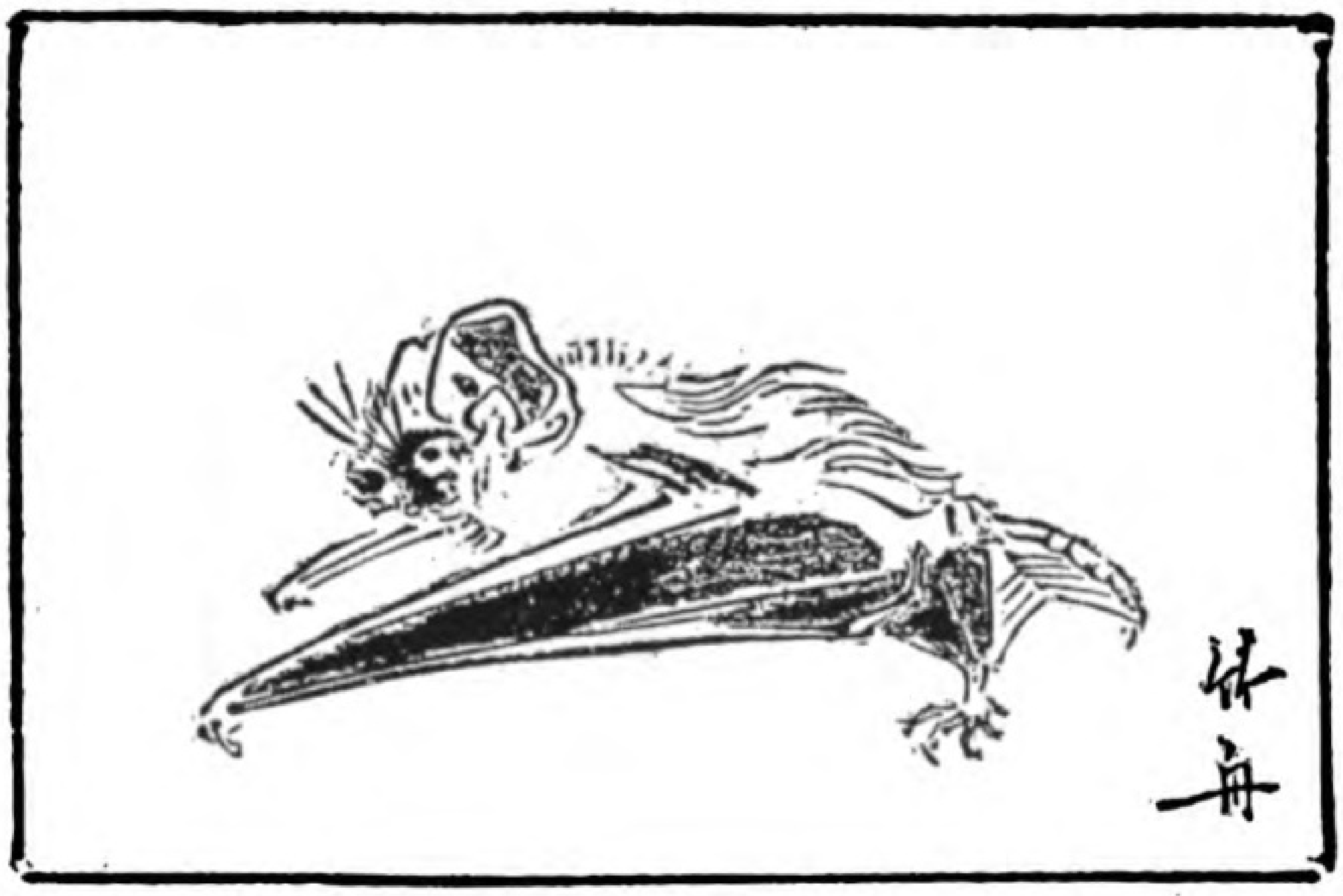
とする所を、ヤツトのことで身を引き辷り行くようなものである。それから、彼れは地上から其のまゝ直ちに、飛び翔けることを能くしません。どうしても、それは出來ない、一旦は、是非、何かに這ひ上つて、それから始めて飛び上れるのである。それには、壁か戸板かの粗い面の物に、手を掛かけ、其の爪でシツカリ支へて、幾足かトボ〳〵上り詰めて、それから翼をして立つのであります。

それで、冬分になると、全く蝙蝠を見た人はありますまい。それは、全く隱れて了ふので、寒さに堪へられないからといふばかりではなく、第一彼れが常食として居る昆虫の類が、冬時に見えなくなるからであります。燕なんかでは、トツトと暖い地方へ、去つて往くから、少しも不足はなからうが、蝙蝠は、そんな意氣地や機轉が開きません。我々が若しも冬時、地下の穴倉か、寺の高い堂の屋根裏かなどを詮索するならば屢々同類が群りて、彼方にも此方にもブラリ〳〵と垂れ下つて居る所を見付けるでしよう。其の様が實に面白いです。先づ體總べてを翼で包んで、頭を眞直に下向にし、後足の爪で以て、シカと、何かに捕つて居るのである。そのようにすれば、衣物を多く着たような譯で、且つ其の間は、一切食事もしなければ、又身動きもしないのです。これを稱して、蝙蝠の冬眠といひます。



此の冬眠の間には、又呼吸をも、殆んど斷絕して居るといふも差支ないて、實は此の動物は、平生でも全く無空氣の中、若しくは炭酸などの全く呼吸の出來ない中に置いても、暫時の間は、能く忍んで別段に異狀がない程であるから、冬眠の間こんなてあるにも、少しも不思議なことはないのです。

段々と、蝙蝠の話が長引いたので、思はず時間を取りました。それから、急いで路を行くと向ふから、一つの螢火が現はれて、次第に此方へ近よつて來ます。どうも、七月の此の空には、螢は既に後れたものであるにと思ひつゝ、猶彼方を見張つて居ると、又も一つの螢が現れた。次第々々に其の數を增して、十幾つかとも思はるゝだけ、川筋の柳に止まりました。成る程、此の頃は、螢は後れて居るが、しかし、それは、世の人が、最も珍重する源氏螢が、見えなくなつたので、平家螢は此の頃、また盛んに遊んで居るのです。源氏螢といふのは、體が大きくて光が强い。地方によりてはこれを大螢とて宇治螢とも石山螢とも一寸螢とも山吹螢などといひます。近江の石山では、螢が名物だといつて、遠近から見物に出掛ける者が多く、其處の旅店などが繁昌します。又これを捕つて、京都

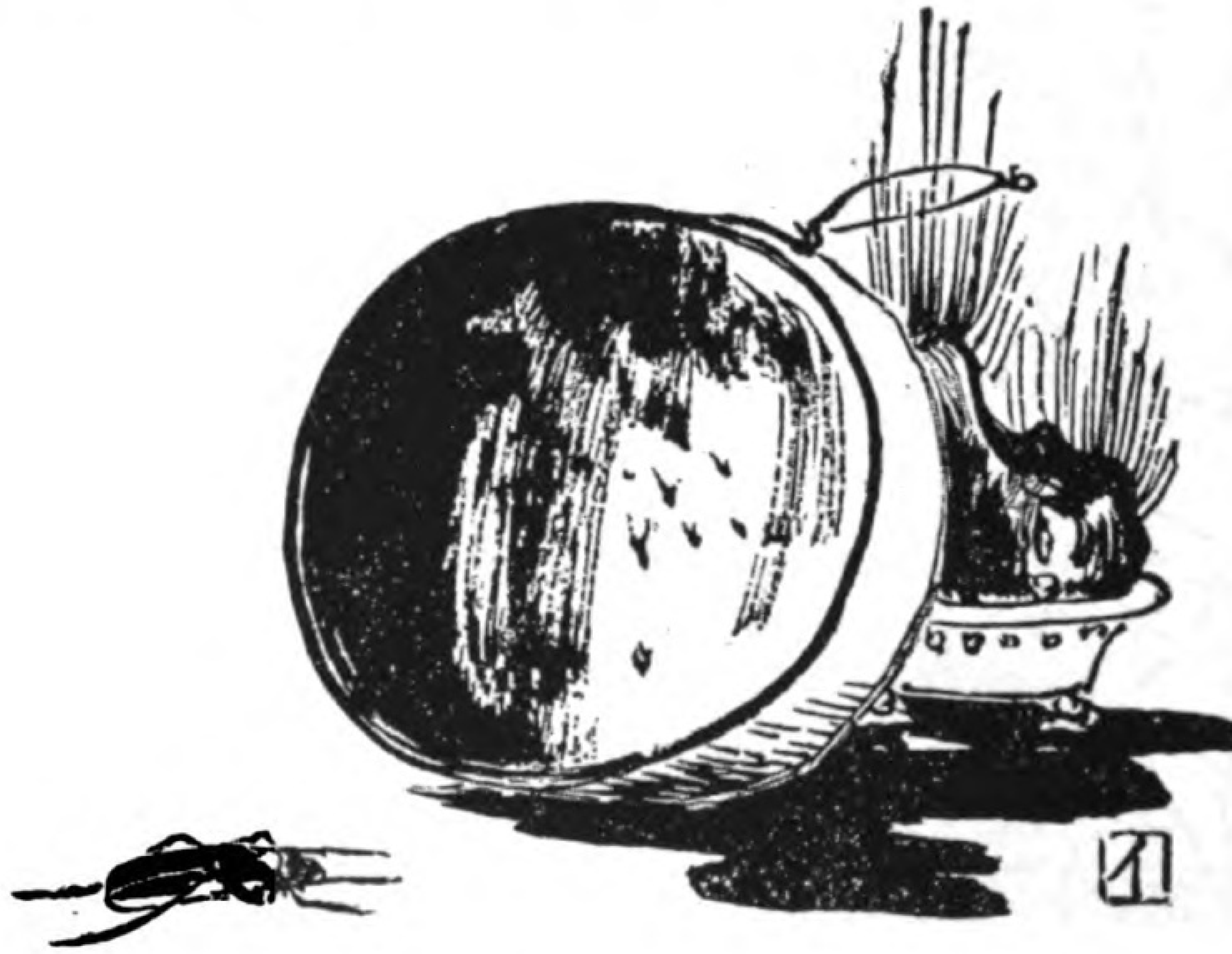


大阪等の都會へ、盛んに賣り出します。それには、螢捕者が輕い扮裝をして、蚊帳の切れで造つた細長い袋を三も四も携へて、草原などへ行つて、手當り次第に之れを捕り、忙しげに、これを口の中へ吸ひ込んで、幾十か溜まれば、間を見て其の袋へ投り込みます。其の袋には、幾百も這入つて居つて、實に美しいことであります。螢捕は暮から夜明まで、取りつゞけて、三千疋程も取ることもあるそうです。何でも螢は水つぽい所を好み、水氣をかけると生々として、猶々光を增します。殊に柳の樹に止まることが、最も好きで、それは又、どういふ理由かは分かりません。

それから平家螢は、體の大さが源氏螢に及ばないで、見た所でも光の景氣がないから、何となく陰氣に感じられる。だから世間では、これを病螢とか、幽靈螢とか、又子ノ子螢とかいはれて居る。一方

に姫螢といはれ居るのは、餘程最負て、やさしく指されたのであります。それに此の螢は汚ない水の邊りに居るから、一層人に厭がられるのである。

螢は何れにするも躰が黒ずんで首筋は赤い、しかし琉球や臺灣の螢は、大分種類が變つて居るそうであります。螢を飼つて置くには、矢張り蚊帳地を張つた函の中に、俗にいふほたるぐさといふのを入れて、それに時々吹水をかけるのであります。どうしても、濕つぽい所に住むものだから、此のように水を喜ぶのであります。しかし、どうも、螢は死に易いもので、商賣人などは、毎日幾百匹となく損耗するのであるが、それは外に賣れ口がある、即ち薬種へ賣り捌くのです。聞いて見ると、その屍骸を揉み潰して、飯と一所に煉り附けて、刺のさゝつたのを拔くともいひます。又其の粉を服用すれば、熱を冷すといふことです。



試しに、一夜螢の飛び廻る邊に居つて、光る有様を實見するも面白い。宵の八九時より十二時頃まで段々と光の勢を増して來て景氣がよろしいが、もー、一時二時頃になると、段々と衰へて、草の葉などに止まり、益ゝ下りて、草の根元に潜み、殆んど認められないようになる。若しも其の場合に、人がこれを掻き立てれば、忽ち一齊に光り始める、螢捕はこれで以て、夜明まで仕事するのであります。又其の邊りが暗く、螢火の甚だ振はぬ時に當りて、一疋の螢が盛んに光を放ちて飛んで來ることでもあらば、今まで沈み切つて居つた群が一時


月舟

にピカ〳〵と光ります。自然朋友に捨てられるようなものでしよう。

螢は自分で、此のように、光るからでもあらうが、自分より外の光を好まない。月夜のときなんかは、木や草に止まつて、只々薄い光を放つだけで、一向引立たない鶯が、老練なもの丶傍では、遠慮して歌ふを耻づると丁度同じでもあらうか。さりながら他の光が、煙草の火とか、マッチの燃え殘りの火とかのような、チョットしたものであると、喜んで飛んで來ます。

こゝに段々螢の研究をすると、螢は何のために光るか、又どうして光ることが出來るかの、疑問が浮んで來るでしよう。この答は中々六つかしいので、者の想像するだけに止まつて居ます。先づ其の光る理由から申すと、雌と雄とが、暗き夜に互に招くためであらうと思はれる。それは雌雄の出逢ふ時に最もよく光り、又或る外國種の螢の雌は全く翅がないから、草の先に止まて、頻りと尻尾を上げて、強く光を放つと、雄は爭ふてそれに集まり飛んで來る例があります。又光を不意に強めたりすると、蛙や他の動物が、これを餌食にしようとしても、チョット氣味わるく感じて、迂濶に手を出さぬことがある、それで自然、身を守る方便となるのです。

次にどうして光ることが出來るか といふに、何でも尻尾の黄色の部分であることは爭はれないが、こゝに黄色の粒が澤山充たされて、此の粒 こそ が發光の原體であるだらうといふことです。しかし此の粒は何物であるかは分からないので、兎に角、それが空氣に觸れて酸化して發光することは確かであります。其の光が、或は明かに、或は幽かに成るのは、螢が呼吸する都度に、空氣が、それに觸るゝの多いと少いとの差が出來るかてある。其の光には、一種の綠味を帶びて居るのが普通であるが、或る種類は黄色或は青色或は又多少の赤色のもあります。その中で綠色が一番光が強いのであります、源氏螢などは、即ちそれであるのです。

鮑の話

今井古軒

昔から鮑の片思ひと云ひますが、諸君も御存じの通り、鮑は蛤や蜆などゝ異つて殼が片方ばかりにあります鮑が海に居る時は、殼の方を上にして、岩などに吸ひ付いて居ります、其生活して居る塲所は、外海に面する岩石質の海底でありまして、かじめ、わかめ、こんぶ等の海藻類を餌物として居るのであります。

殼の背に回旋のある所は尻の方でありまして、之に反對の方は頭であります、其處には呼吸する孔が並んで明て居ります。

鮑は氣候の餘り寒暖に過ぐる處には棲息致しませんが日本では大抵の沿岸には多少居ない處はありません、そして深さは四十尋位より下には、棲息せぬ樣でありますす從前は鮑を捕ふるのに、網、簎又は蜑と稱へる女が、海底に潜入して、捕つたものでありますが、近來は潜水器を使用して、極小さなものまでも捕ります。

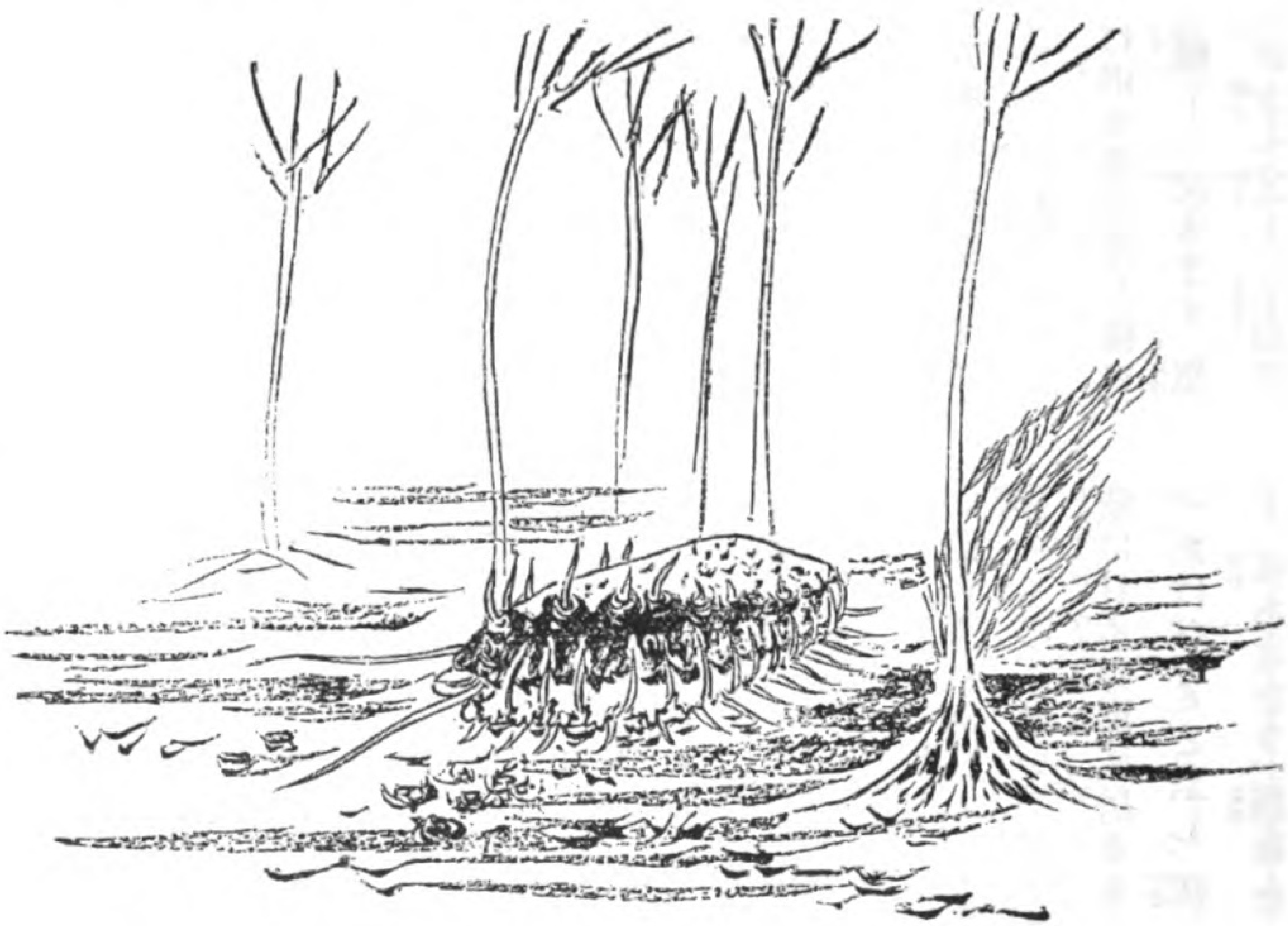
潜水器は例のゴム製の着物を着て、足には非常な重い靴を履き、躰の中心を取る爲に、胸と背に、各十貫匁餘もある樣な重い鉛の塊を付け、頭は金屬製の兜見た樣なものを冠つて、そして腋の下と頭とに、呼吸する爲の管が付いて居ります、船の上に居るものは、生き綱即ち呼吸する管を持ち、ポンプで絶へず空氣を送り、窒息せぬ樣にして遣るのであります、大抵二十尋位より下へは行きません、夫より下へ行けば、苦くなつて、終には窒息することがあります。

上總の小濱の沖で、先年英國の滊船が、一艘沈沒たことがあります、其沈沒船を買ひ取つたものが、潜水器を使用して、曳き揚げに從事して居りました處が、偶然一大鮑礁を發見しまして、夫から今日まで有名鮑の產地になりました、此處の鮑は非常に大なるものがありまして、中には殼の大さ一尺五寸餘に及ぶものがあります、夫から此處の鮑は、支那へ輸出する鮑中でも、最も上等なものであります、此處は諸君も御承知の通り、九十九里の濱續きで太平洋に面して居りますから、非常に波

の荒い處であります、夫故鮑の獵船は皆夕景獵を終へて歸帆すれば、船を波にさらはれない樣に、砂濱の水際から三十間もある處に引き揚げて置きます、そこで出獵する時は、毎日午前三時頃から潛水器を準備して、船に乘り込み、恰かも新造船の進水式に於けるが如く、高い砂濱の上から船を滑り落さして出船致します

それから遙かの沖に向つて乘り出し、十里餘も出れば、鮑の棲息して居る場所に達します其時は午前十時位になりますが、夫から潛水器を準備して鮑を捕り始めます。

先づ潛水者は、毛織の、シャツ



股引などを十枚位着て、其上に潛水服を着るのでありますが、夫れてなければ、海底に潛入してから、寒くて働けぬそうであります、夫から呼吸する管の付いて居る兜の形をした、眼の處に硝子窓のあるものを冠つて、頸の處で螺旋嵌にして置くのであります、此兜を冠ると同時に、兼て用意のしてある、ポンプを、五六人掛りて二人つゝ交替に運轉致します、之れは兜を冠れば呼吸の通ふ處がなくなりますから、其呼吸に差支のない樣に、管から空氣を送る爲に、ポンプを運轉するのであります、若しポンプを運轉しなかつた

ならば、潜水服を着た人は、窒息して死んでしまいます

潜水者が海に下るには、船の横の處に、舷から斜に下けである、梯子を傳つて入るのであります、潜水者は腰にれつた、鮑を入れる網袋を、鮑起しと稱へる道具と、尚潜水中船の上に合圖をする縄を、結び付けて潜水します、

眼の前に設けてある硝子窓は、四五倍の廓大力のある、レンスが嵌めてありますから、能く何んでも見へる様になつて居ります、海底に達した時は、海藻の繁茂つて居る間を掻き分けて、山の様な處へ上ぼつたり、谷の様な處へ下りたりして、探して歩きます、そこで岩の上に吸ひ付いて居る鮑を見出した時は、鮑起にて捕つて袋に入れ、珍らしい珊瑚屬のものや、何かゞあれば捕つて段々進んでまいります、船は潜水者の進む儘に從つて漕ぎ進み、ポンプを絶へず運轉して居ります、鮑が袋に一杯になれば、合圖をして船の方へ送り、又前の如く進んで、凡一時間位毎には浮き上がつて、息休をなし、又潜入して午後四時頃になれば、止めて歸途に就くのでありますが、夫れで潜水者の一日の業務は終るのであります。



潜水者は一日中に大抵大きな沙魚や鮃などの様なものを手捕りにしますが、之れは中々面白いもので、捕へた時は縄で括つて船の上に合圖をする、そうすると船に居るものが、引き上げて捕へるのであります、鮑は一日に何百貫と云ふ程も捕れることがあります。

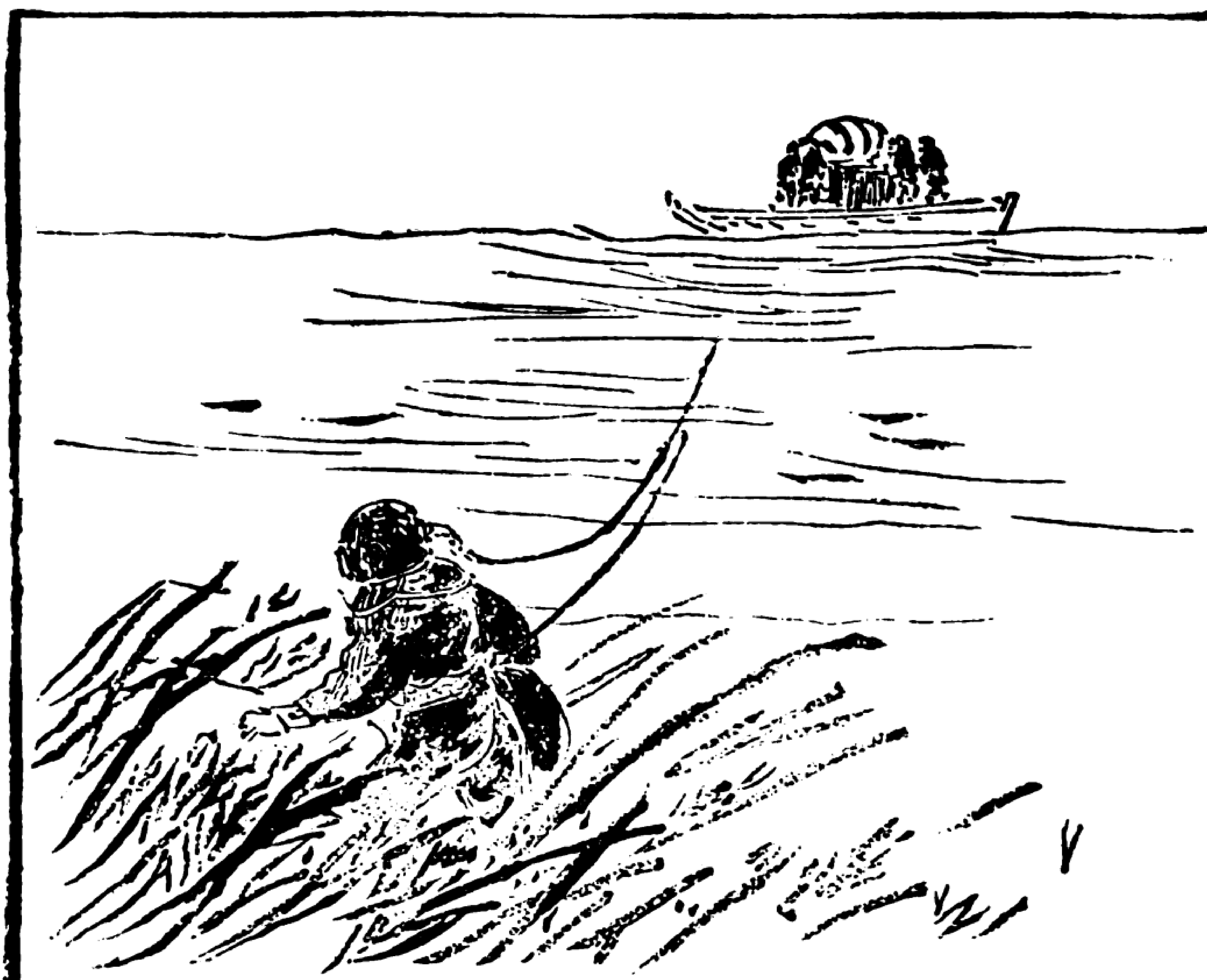
鮑が海底に居る時は、餘り遠くは移動致しません、夫故他の介類や、藻類などが殼の上に着生し、ほんだわら、などは一丈もある様な長いものが着いて居ることがあります。

鮑は日本近海に居るものは、まだか、をがひ、めがひ、えぞあはび、とこぶし、疣あなごう、平あなごう、小あなごう、長あなごう、圓あながう、みゝがひ等に分けて居り

ます。

元來鮑は總て七十種の餘もありまして、濠洲地中海、英吉利海道、北米の西北海等は有名な產地であります。

日本では肉を非常に珍重致します、外支那に輸出する乾鮑に製しますから、價も隨て貴く、乾鮑などは百斤百五六十圓も致しまするが、歐羅巴などでは、肉よりも却て殼の方が價があるそうであります、殼の價が一噸四十弗、乃至九十弗位の時、肉は一噸凡十五弗位だそうであります、近來日本でも殼を輸出する樣になりまして、獨逸などでは、夜景の彫刻などをするには、日本產の鮑殼でなければ、用を爲さないと云ふ位にまで、珍重される樣になりました。



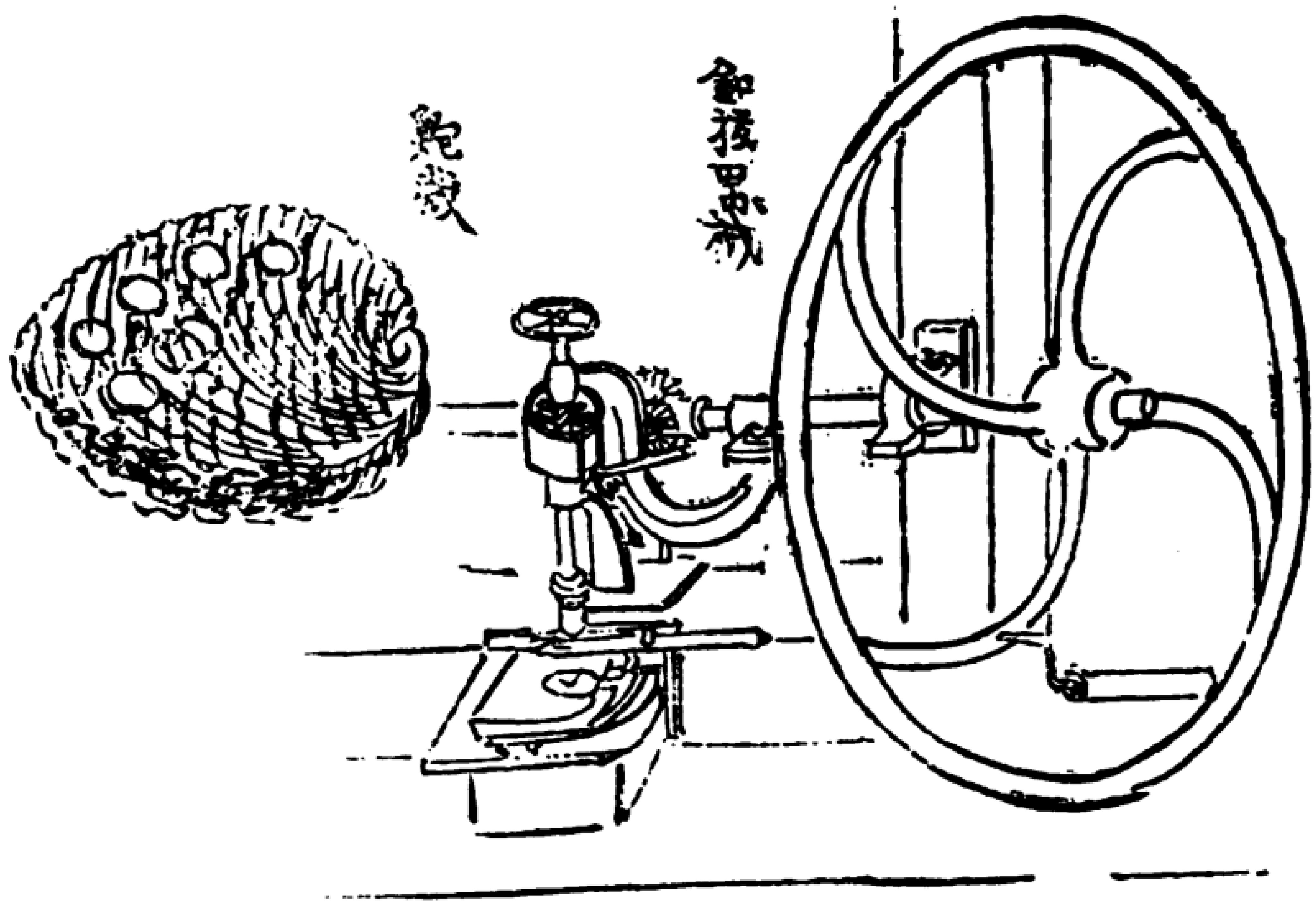
鮑は昔から熨斗に作り、殼は靑貝細工に用ひますし、又鮑には頗る貴重なる、眞珠のあるものがありまするし、又近來は釦に製造致しまするから、殼も餘程有用なものになりました。

諸君方が着して居らつしやる、シャツ、などに付けてある釦は、他の介殼で

作つたのもありますが、多くは鮑の殻から作つたものが多いのであります。

此の鈕を作るのは、鈕抜き器械を用ひて致しますから、眞に雑作なく作ることが出來ます、圖に鈕抜きの器械を示して置きました。

鮑殻を以て青貝細工などを致しましたのは、今から一千百七十五年前、即ち聖武帝の朝に出來たものが、今に存じて居ります、夫から平氏時代、今から七百三十餘年前には、漆器に嵌粽する、所謂螺鈿細工が盛んに行はれ、其後本阿彌光悦だとか、尾形光琳だとか云ふ様な上手な人が出まして、此細工を致し、近くは下總芝山村の農大野木專藏と云ふ人が頗る此細工が上手て、後珊瑚や、染角、象牙等を介殻に混ぜて、草花や、人物等を巧みに彫嵌ました、此人は後芝山と號し、世に芝山象眼と云つて、徳川十一代將軍、家齊公の治世に榮へて居りました。



鮑殻を切つて、漆器に嵌装し、更に漆を掛けて研ぎ出しにする工藝は、支那の法に做つたもので、京都の青貝清兵衛と云ふ人などは餘程の名工でありました。

身體の妙能（下）

林　壽　祐

食物から吸收されたる、滋養分は躰全體に運搬され、到る所の物質の養ひ、兼て老廢物をさらつて行く、これを循環器といひ、其本部は心臓である、心臓は斜に胸の正中に横はり、恰も喞筒仕掛の機械である。消化器から吸收されたる滋養物は、前に躰中を環ぐり、汚なくなつて

還つて來た血と一所になり、右の方から心臟に入り、更に拔けて肺臟に至り、血中の炭酸を出し、代りに酸素を取りて、清潔となりし後、再び心臟に還り、次いで心臟の左の方から出る、大管に入り、頭、軀幹及び手足に流れ、更に諸方に枝を出し、枝また小枝を生じ、遂に眼に見えざる程、細き管となり、全身中爪と毛と表皮の外、何んなツマラナイ所までも擴つてる、其細かいことは何處でもチヨツト針先で刺すと、血の出るので知れる、て此極く細かい血管を毛細管といひ、毛細管は、絹て造つた管の樣であるから、血液中の滋養分は、隙間を通り拔けて、各細胞を濕ふし養ふのである、で血液中の血球は肺臟より持ち來りたる酸素を、各細胞に與へ、代りに炭酸を吸ひ靜脈となり、靜脈の毛細管相集まり、一管となり、更に大管となり、心臟に還へり、再び肺臟にて洗はれ、さうして全身を環ること、始めの如くである。心臟は伸縮によつて、一回に一合足らずの血を、一晝夜に五萬回も出したり入れたりする故に、其壓力は非常なものであつて、頭の樣な高い所、足の趾先の樣に遠い所まで、滯りなく送り廻はされる。心臟の內部には、所々に瓣膜があつて、血液の逆に流れるのを防いてる。血管は恰も水道が、東京市內を巡ぐる如くて、外界へは少つとも拔け出づべき孔がない。て動脈管と靜脈管の二種に分れ、動脈管即ち清潔の血の通ふ分は、其質丈夫で彈力に富み、一時壓されても、潰ぶれてしまう事はない。動脈管の血は、壓力が强いから、若し少しでも孔があくと、其所から勢よく迸つてしまう。さうして動脈管には滋養分を滿してあるから、甚だ大事である、故に滅太に傷を受けない樣に、躰の內部を通つてる。靜脈管のは、使ひからしの血であつて、汚ないから、動脈血程大切でない、且つ壓力は大に弱い、故に傷を受けても、動脈血の樣に迸らない、て此血管は彈力なくて、躰の表面に近く現はれてる、吾々が容易に見る青い血管は、即ち靜脈管である、靜脈血は壓力が弱いから、場合により血が逆に流ることがある、それを防ぐ爲に、所々に瓣が備はつてゝ、若し逆戻すると直ぐ瓣が立ち塞がつて戻さない、試に指を以て、青い血管の或

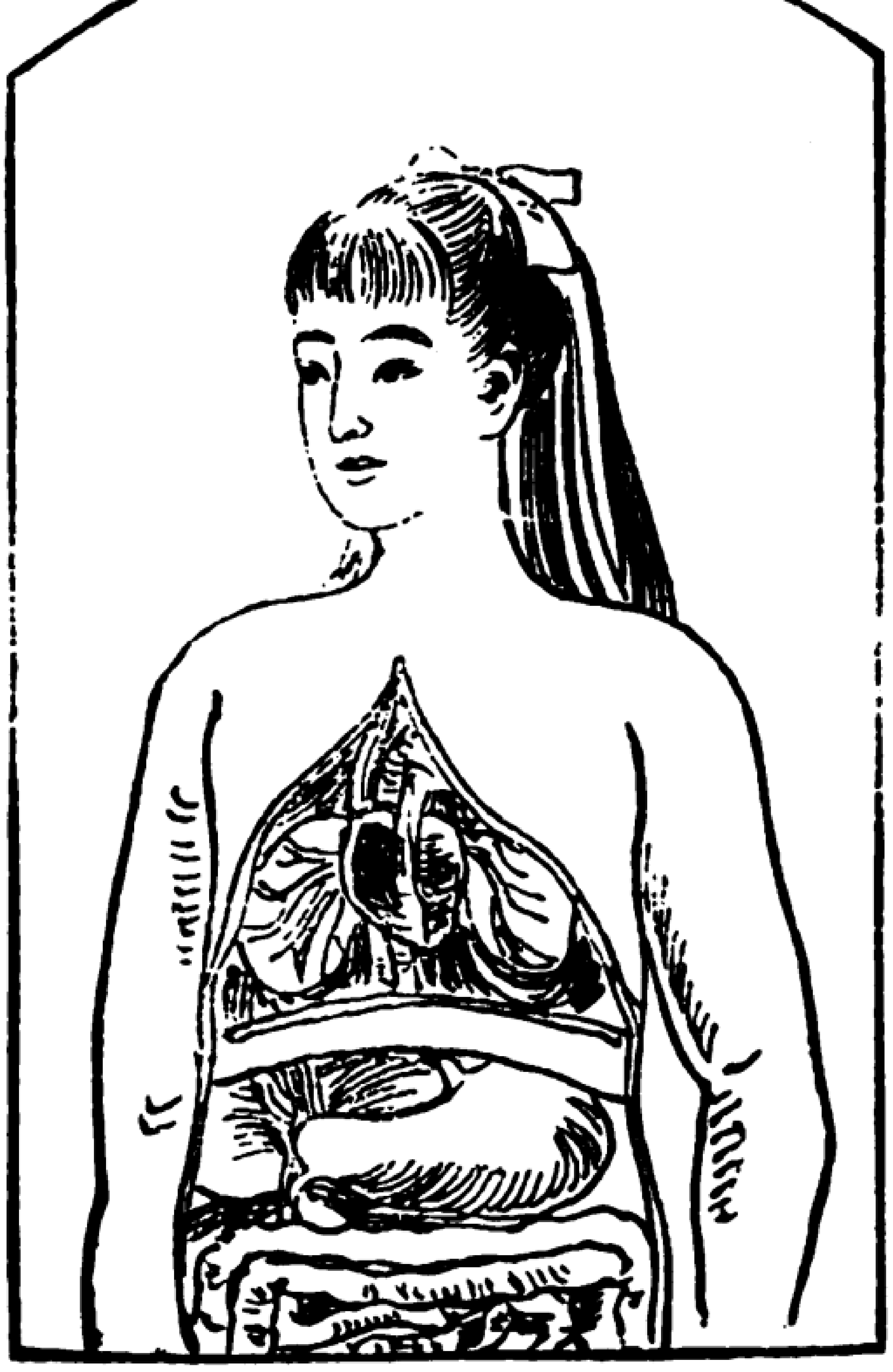
る所を強く壓すと、必ず血管の所々に、節が現はれる、これが即ち逆戻りを防がんとて、瓣が横に塞がるから其所だけ太くなるのである。動脈管は、内部にあるから、容易に見ることが出來ない、が手頸の近傍とか、股の附根など、關節の所に來ると、筋肉がしまつてるから指で壓すと、ピク／＼其波動を感ずることが出來る。

血液中には、纖維素といふものがある、纖維素は空氣に觸るゝと、能く塊り付くの性がある、故に少し位の傷より、血が流れ出ても、纖維素の爲め凝つて、傷口は塞がられ、血の流れるのを防ぐのです。血液は多量の食物から、僅かしか取れないので、甚だ肝要である、故に小さい傷でも止めて置かなければ、大に損害を受ける、されば血の凝まるといふことは、吾々人間の爲め、甚だ幸ひなことといはねばならぬ。

吾々が、竈の中へ、薪或は石炭を入れ、燃やせば必ず煙及び灰といふ廢物が出來る、此廢物を取らずに置くと、火の勢を減じ、遂には燃ることの出來ない樣になるから煙筒をこしらへ或は灰を取り捨てる。人間の躰も其通り、食物を用ひ、運動すると必ず廢物が出來る、竈の灰は、一週か二週位に、一遍掃除すれば、間に合ふなれども、人間のは一日といへども取り除くことなければ、直ぐ害を蒙る。食物の糟が、即ち糞が消化器の管の末端から、外界へ排出されることは、前既に述べた如くである、で水分の多くは、腎臟に集り、尿素と共に小便となり、躰外へ排出される。けれどもチブ／＼と絶えず小便を放ちては、甚だ困るゆへ、先づ膀胱といふ所へ溜め置き、やごろといふ時分、排出される樣になつてる。水分は猶肺及び皮膚からも排出される。肺の水分を出すことは、冬期息の白く現はれるのを見ても察しられる。皮膚の全面には、小さき無數の孔が散ばつてゝ、縱令冬期寒い時分でも、絶えず小孔から、水分を蒸發してる。肺はまた呼吸により、有毒なる炭酸瓦斯を多量に呼出し、代りに酸素を吸ひ入れる官能で、一時一刻といへども其呼吸を止められると、直に息を切つてしまう。皮膚も水分の外、矢張り多少酸素を取り、炭酸を排出する、皮膚を油か何かで、全躰の三分の一以上を

塗り或は、焼傷をすると、大に水分及炭酸の排出を妨げられるから、倒れてしまうのである。

て此皮膚、肺、腎の三部は、人身の三大排泄器といはれ、齊しく水分を排除するが、其分量は各異つてる。例へば、普通の人は一日の小便概ね八合餘りなるに、皮膚から出てる水分は、三合許り、肺から出る水分は、其半量位しかないけれども此三器は、相調和して、其作用を完ふするもので寒氣烈しき時は、皮膚は躰温の散り失せんことを防ぐ爲め、悉く細孔を塞ぐ、そうなると水分は専ら腎臓の方へ廻はり、常よりは小便を多くする。それから若し腎臓に疾病が起ると、皮膚と肺に、其影響を及ぼすのである。炭酸は多く肺より呼出せられ、皮膚より出づるは少なく、腎よりは全く出ない。凝固物は、主に腎臓より出て肺にはなく、皮膚よりは、極めて小量てあるのです。



さて筋肉と骨で運動を爲し、口、胃、腸で食物を消化し、心臓、血管で滋養を躰中に配ばり、腎、肺、皮膚で、不用物を掃き出す仕掛となつてるが、之を指揮するものがないと、いくら器械が揃つてゝも、何にもならない。恰度護謨で造つた人形と同じことである。然るに活動するからは、必ず指揮官がある筈である、此指揮官を神經といひ、神經の本部を脳髓といひ、意思観念の發する所である。總て活動する動物には、蟲類から鳥獸に至るまで脳髓といふものを備へてるけれども、人間程發達しないから、智識といふものは甚だ乏しいのである、動物にして神經が滅茶苦茶になつたら、もうお終まい、

何の役にも立たないのである、先づ人間の神經系統を見るに、最も高い所に腦を戴いてる、腦は生命の三脚の一つて、精巧に出來て居る代り、傷つけると直き狂つてしまう、所で扁たい骨で周圍を保護してるから、大抵の事には大丈夫てある、腦は大腦小腦に分かれ、大腦は表面に皺多く、其實質は四百匁位ある、小腦は大腦の八分の一位ので、意思即ち魂なるものなく、謂はゞ大腦の手代ともいふべきである。　腦の下は一本の太き神經となつて、躰の中央え貫き通ッてる。脊骨に圍まれてるから、特に脊髓と名けられ、水杓子ていふと、頭が腦で、柄が脊髓である、脊髓の兩側から、三十餘對の神經を出し、其神經が亦枝を分ち、枝また小枝を分ち、表皮と毛と爪の外、躰中到る所に行き渡り、其末端が皮膚で終つてる。　腦からまた特別に、眼、鼻、耳、舌の四官に神經を出してる、恰度腦は中央政府で、皮膚、眼、鼻、耳、舌の五官は、地方廳の樣なものである、五官と腦とに通する神經は、電信線といふべきである、五官で感じたことは、即時に神經なる電信線を使ひ、腦に通知し、腦の指揮を仰ぐのである、で此五官器は、各專門の業をとつてる。　皮膚は、痛い痒いとか、熱い寒いとか、堅い軟かいといふ樣なことを感ずるので、縱令皮膚の上に、いくら美味の食物を摺り付けても、少ッともうまからないである。　其味を感ずるのは、舌であつて、辛いとか甘いとか、酸いとか苦いとか、或は澁いとかいふことは、直き感じてしまう。　鼻は專ら香ひと臭ひのを嗅ぎ、耳は音聲を聞くのみである、故に鼻に向つて內所談をするも、スーとしてゝ、鼻先であしらいもしない。耳の孔へ麝香を插み入れ、或はアンモニアを吹き込むも、一向平氣である。　眼はまた物の形狀色澤を見るのが專門である。今こゝに鯛や鷄肉の煮たのがあるとすると、眼は其豐かなる肉を見るのみて、うまいだか、まづいだか、毫も知れた譯でない、が從來の經驗により、腦は之を以てうまいものと思つてる、そこで賤しい性の人は、食慾を引起し、口をモグ〱させる、所謂漢文的の垂涎禁ずる能はずといつて、唾液の汾泌するのは、舌の感じてなくて、腦の感動てある。　斯の如く眼は見、耳は聞き鼻は

嗅ぎ舌は味はひ、皮膚は觸れるといふ樣に、分業されてるから、各其道にかけては、非常に發達してる。て此五官器完全して、吾々は安全に運動することが出來てるのである。

神經系統には、五官の外、自働作用といふものがある、此作用より、心臟肺臟胃腸などは、睡眠中或は物を考へてる時でも、間斷なく動いてゝ、一刻といへども休まない、一分間に、心臟の如きは七十回前後も伸縮し、肺臟の如き、十八回も呼吸してる、若し之が一々腦の命令を受けて爲ることとすれば、大變が出來てしまう。自働作用と共に、また反射作用といふものがある、此作用あるが故、口の中へ食物が入いると、直ぐ唾液を分泌せしめ、眼の中へ芥が入らんとすれば、腦の命令を待たず、チヨツと眼を閉ぢ塞ぎ、また氣管の中へ、細かい物が入いると、必ず噴出してしまうから、前以てそれらの害を防ぎ避けることが出來るのです。此外心臟や肺臟、胃腸の如きものには、交感神經といふ一種の神系統がある、是等の器官が絶へず働きながら、一定の調節を取つてるのは、即ち交感神經の力も多いのです。



吾々人身躰の生理構造は、大略前の樣な譯であつて、七十年からも、此宇宙間に活動し。靈妙なる智識をふるつて、萬物を支配し、尊敬すべき道義心を以て、社會的の幸福を受けつゝあるのである。て人身躰につき、詳しく研究すれば、實に巧妙に出來て居つて、一も無用のものがない、若し不用なものになると、其部分はダン／＼退化し去ッて、有要の所は、益々

發達して來るのです。予は更に號を換へ各部に於ける官能妙所を述べ、諸嬢をして、美妙なりとの觀念を起さしめんと欲して居ります。（完）

星の話

木村小舟

▲空晴れて、星明かなる夏の宵、屋前屋後に、すゞみ臺を設け、得も言はれぬ清氣を、身にあびて仰いで空の景色をながむれば、輝々たる幾萬の星辰、一面に羅列して、さながら天花の、一時に咲けるが如くなるに、吾知らず恍惚として、しばし見つむれば、その中には、形すぐれて、大きなるもあり、光の極めて、著しきものもあり、あるは集まりて、一の團躰を作れるもあり、あるは離れて、個々別々なるもあり、折りふしは飛び去りて、直に消ゆるもあり、或は長く、尾を引くもありて、頗る奇觀を極むべし、實にや古人の、これを以て、雨の降り來る穴なりと、想像せしも又、無理ならぬことならずや。

▲銀河、西南の天に起りて、ながく東北の空に向つて引く、その狀白光を帶びて、さながら天上を流るゝ河に似たり、唐土の人これを以て銀漢と呼び、銀河と稱して、彼の牽牛、織女の二星、この河を距てゝ住み、たゞ毎年七月の七日、烏鵲の渡せる橋を越えて、一夜相逢ふべしと、故に下界の男女、色糸をかざり歌をかきて、この二星をまつる、國音にて之を天の川と云へり、さは云へ泰西の人々も亦、これを呼びて乳路となし、甘き乳の出づべき源なりとす、之等は皆、今日の如き、精巧なる望遠鏡の、製出せられざりし時代の、想像説に過ぎざりしかど、一度斯學の大斗、ガリレオ氏出でゝ、望遠鏡の改良を企て、遂に精巧なる品を造り、玆に銀河を以て、無數の恒星の集合躰、しかも其數の、二千八百萬種以上なることをも、確かむるに至れり、かくの如き多くの星躰も、その距離極めて遠きに依り、吾等の肉眼には、たゞ白色の微光を認むるのみなり。

▲恒星、彼の滿天に、はびこる無數の星辰をば、吾等は

一に、恒星と稱するなり、恒星の内にて、肉眼に認めらるゝもの、その數凡そ六千種あり、かつ其大いさの如きも、我が太陽の、三千倍大のものありて、盛に光輝を放てども、恒星の内にて、最も我地球に近きものすら、猶太陽と地球との距離に、二十萬倍すと云へば、之を認むべき沙汰にあらず、あゝ如何に精密なる望遠鏡ありと云へども、よく此の天の幽遠を破りて、確なる研究をなし遂ぐる能はざるなり。

▲惑星、太陽に附隨して、その周圍を廻轉する星躰は、都合八個あり、これを太陽系統の八惑星と云ふ、その内にても木星はすぐれて大きく、土星は之に次ぎ、海王天王の兩星は、やゝ小さく、地球と金星とは、略々同じ大いさにして、火星と水星とは、最小形なり、彼の月球の如きは、地球に附屬して、太陽をめぐるが故に、これを衞星と名付く、この他猶我が太陽系統の内には、三百以上の小惑星有るべしと云ふ。

▲明星、日は西山に沒し去りて、淡靄模糊として到る時に中天にありて、早く輝々たる一大星光を認めん、人は呼んで、宵の明星と云ひ、殊に其光輝の佳麗にして、宛然笑めるが如きを見て、詩歌に寄するもの多し、これ實は彼の水星なり、曉の天、白くして月は既に山下に落ち、殘星漸くまばらなるが中に、一きは目だちて大なるは、曉の明星と呼び、早起して之を拜するもの有れ共、實は之金星なり、この二種の星は、共に我太陽系の惑星にして、地球には最も近き距離に、その位置を占むるものなりと云ふ。

▲火星、精巧なる望遠鏡を以て、火星の表面を觀察するときは、頗る我が地球に、類したる點の多きことを認むべしと云ふ、即ち海陸晴明の區分もあり、かつ又雪の如きものゝ、存在すべしと云はゞ、無論濃密なる大氣もあるべく、種々なる想像は、遂にこの星には、翅を有すること、彼のキユピツトの如き、人類の棲息すべしと傳えらる、蓋し未だ誰も信僞を確むるなし。

▲土星は木星に次ぎて、大なる星躰にして、その中央即ち赤道の邊には、一の環狀あるを以て殊に有名なり、要するに之、そのはじめ彼の太陽の大瓦斯躰中より、分離

獨立せしとき、極めて速かなる廻轉を催ほせしに依り端なくも又々、分離せんとし、星雲の、今は凝結して、この附屬物を生じたるなりと云ふ。

▲星雲、晴夜大空に向つて、望遠鏡より望み觀る時は、今も猶天の各所に、多くの星雲ありて、或は正に凝結せんとし、或は又未だ、凝結せずして、盛に燒けつゝあるものと見ゆべしとの事なり、そもく星雲は、一の高熱を有する大瓦斯體にして、吾等の住する地球も、又かつて一の星雲なりしかど、順次冷却し來りて、遂に地殼を生じ、生物を出現せしめたるものなり、さは云へかくの如く、變遷に變遷を重ねし地球は、永久に現今のまゝなる、狀態を保てば、眞に幸福なれども、物體の運動は、一日もかつて休まず、表面は進化なりと雖、實は恐るべき現象を示すべき地に、進みつゝあるものなり。

▲地球、はその始じめ、太陽より分離せし、一の星雲なりしかども、その懸れる空間の溫度の、極めて低かりしため、漸次冷却を來たし、今はたゞ、その中心點に所謂地心熱を有するのみ、されども之すら、到底永く持續さきるゝ次第にあらず、終にはこの地心熱滅却して、火山絕え、溫泉涸れ、而して後水氣滅し、空氣滅して、如何なる生物と雖、その生を保つ能はざるに至るべし、今の月界の如きは、實に我地球よりも、やゝ久しき前に於いて、この慘狀に遇ひたるものなりと云ふ。

▲太陽、は、地球の產みの親丈ありて、その大いさの如き、假りに地球を、一粒の米とたとふれば、彼はその七斗二升に比すべしと云ふ、この大球を構成する處の物質はと問はゞ、實に、水素、鐵、銅、アルミニウム、ニツケル、コバルト、カリシウム等と稱する、多くの金屬元素にして、しかも盛に絕えず燃燒しつゝあり、されば其熱度の如きも、優に華氏の一萬二千度以上に達すべしと云ふ、且つこの火球の外圍には、高熱を有する一種の水素瓦斯存すべしとなり。

▲彗星、も又同じく、太陽系統に附屬する、一星體に他ならざれども、その廻轉する軌道は、他の惑星の如く、正しからずして、或は長く、或は短かく、時々變更して、殆んど一定の速度なければ、さながら我系統以外

に綿を置くものゝ如し、かつその實質は、光輝ある星體の核と、これに屬する、星雲の如き長き尾を有せり、しかも或る時は、この尾狀の光輝を失ひ、又ある時はその狀を變じて現はるゝなど、神變鬼化の概あり、實に奇星と云ふべし。

▲北星、本州より之を望むときは、やゝ北天に位置を占め、北海道にては殆んど頭上に近く、又去つて南岸に至れば、北方遙に地平線上に見るべく、赤道を出でゝ又此の星あることとなし、太古黃帝の母は、大電の北斗を繞るを見、感じて帝を生みしとか、北星は常にその位置を更えず、劍狀に羅列する七星を從へて、高く燦然たり、故に遠く航海する人、又は暗夜に旅行する者、多く之に依つて北を知り、無事に方角を取ると云ふ、この星一名を北斗或は北極星と云ふ。

▲流星、夏の夜、星の殊に明かなる時、身を涼み臺に仰臥せしめ、しばらく中天を見つむるときは、天の一方より、一個の星躰忽然として現はれ、急速に運動して、程なく何處に去りしか、影も見えざるに至るべく、又時としては、やゝ大なる一星の、長き尾狀の光線を引きて、活潑に走れるもあり、或は又日中と雖、轟然たる音響を放ちて飛び來り、遂に地面に墜落して、強く破碎し去るもあり、人々或は呼んで光り物と云ひ、稱して天狗の火となし、いたく恐怖の念を抱けども、實は皆之流星にして、その種類三種あり、即ち一を發射星と呼び、一を降星となし、他を隕石と稱す。

▲降星、忽然として飛び、忽然として消ゆる星は之を發射星と呼ぶ、この小星は、その發光と共に一片の瓦斯躰となりて消滅すれども、降星は猛烈なる勢力を以て、激しく地面上に落下するものなり、しかも此際に當り、空氣は非常なる大壓力を以て、落下し、來る星躰に抵抗するが故に、彼は爆然として、恰も大砲を發射せしが如き響を出して、遂に碎破し去らるゝなりと云ふ。

▲隕石、は古來我國にも、屢々落下せし話しありて、現に博物館にも之あり、俗に星石と云ふは、彼の降星の、未だ空間に破碎せずして地に達し、しかも深く埋沒せしものなり、その形狀は、重に球形をなし、その構成さ

れし元素は、總計二十二種の多きに達し、就中鐵ニツケルコバルトなどは、その主成分にして、他は極めて小量宛なりと云ふ。

▲大月、月の正に山頭を抜け出でんとするや、その形甚だ大きくして、宛然盆の如しと雖、漸く中空に至るに及びて、次第に縮少するもの丶如し、然れども實際は、我頭上に來りて、はじめて大と見ゆるが當然なり、遠きもの丶却つて近く見ゆるは、如何にも不思議なりとて、古來和洋の學者も、深く研究すれども、未だ正確なる說わるを聞かず、強いて云はゞ、吾等は只心と眼との迷に歸すべきのみ。

▲夜も更けぬ、風も殊に涼しくして、我が衣のいたく、夜露にうるほひしを覺ゆ、猶かたるべき節も、少なきにあらねど、今はしばらく談話をこゝに止め、明宵また此の處に會すべし、いざゝらば ―― 　（完）

女學生と「バスケットボール」（毬籠）　（一一〇）

在大學　佐竹郭公

新綠池澤に滿ち、輕風はそよ〳〵と諸嬢の頰をねぶるの氣候となつた。見よこの好時節は諸嬢に向て戶外運動を爲せと奬勵しつゝあるを。蒼々したる晚春の野に若菜摘も可なり。雙手にラツケツトを持て晚餐后に一二ゲームを試むるは最も可なり。其他ボツクーでも何てもよろしい。

近來女子の遊戯に反對を唱へしものが漸々減じたが、昔は左樣ではなかつた。曰く疲勞を增すと。併し疲勞の如きは畢竟注意の足らぬから生ずるのである。又曰く疎暴危險所謂御轉婆に流れると。併しこれは遊戯の規則を嚴密に守らぬからです。先年英國から歸朝された安井哲子女史の御話を承れば、女學生が運動に熱心だと曰へば鳥渡お轉婆だと云ふ樣に聞えるかも知れ

ませんか、實事は全く之と反對で、例の茶話會に運動服を更めて出た時は其優美にして閑雅なる、實に運動服をつけて野外に跳ね廻はる人物とは思はれない位です。それに日本の女の子などが大勢で遊んで居ますとキアーキアーと譯もなく騒々しいですが、西洋の遊戯場などは實に靜粛なもので、身躰を自由自在に最敏滑に活動さして、而かも森として無言なのです。

近來英國の家庭は若い細君令孃が非常に遊戯に熱心で、テニス倶樂部とかホッケ倶樂部とかが雨後の筍の如くに起り、婦人社會の内から、斯道の達人が駸々として輩出する。これといふのも皆數年前英國婦人の躰格が非常に衰へたといふ説が有力なる學者間に行はれた結果だ想です。故に今日では壯年女子の身丈に付き數寸を加へ躰量も以前より増したのは事實です。然るに尚之に滿足するとなく近き將來に於て其身丈を六尺以上に昇らせんと決心したてはありませんか。之を我國の有樣に徵して見ると如何でせう。邦人が細腰を尊び、幽靈と御親類然たる女を楚々人を動かすの美人と褒めるのとは雲泥の相異です。又英國女學校の運動遊戯は又仲々盛んなもので、先年までは或は舞踏の教師を聘して躰操代りに踊りを敎ゆる所もあり。男子仝樣の躰操をさせる所もありましたが、今は一般に瑞典流の躰操が盛んに用ゐられて居ます。遊戯ではテニスホッケ端艇などが最盛んですが、端艇の稽古に取附く前に水泳の練習をするのです。有名なる英國のクロー夫人の日記に、『午後は散歩と遊戯にて日を暮らしぬ。遊戯と云へば、ローンテニス、ファイブスと天氣の寒く變り易き時にテニスの代りをなすホッケなり』と曰ふのを見てもわかる。學校内の競爭は勿論度々ありますが、一の學校と他の學校と撰手を撰んで競爭するのが仲々熱心です。女學校ですらそれですから、男子の學生間に運動熱の盛なとは申す迄もありません。男女交際と共に運動が又學生の墜落に陷らぬ最肝要な原因でせう。我邦の男學生が淑女と健全なる交際をせず、動もすれば賤業婦などに戯れ、又婦人かしげく寄席劇場などに出入して藝人の品定めに熱心な風を之に

比べて見ると實に憮然として情ない考か起ります。諸孃ば日本婦人が北京籠城の際に如何に哀れな態度を執つたかを御存知でせう。然るに記者は先日横濱阜頭を逍遙しつゝありし時ゆくりなくも乳呑兒をつれたる西洋婦人の話に耳を傾かして。彼女は在北京公使館附武官の細君であつて夫を北京の空へ殘し、一人の乳呑兒とビスケツトを携へ、晝は何處へか潜伏し、夜は歩き、途中はビスケツトを嚙つて飢を凌き、遂に天津の聯合軍に投じ、それから便船でこの横濱に着き、明日疲勞保養の爲め日光に行かうと思ふと曰つた。私はツクヅク此話を聽て感嘆に堪へなかつた。島田三郎君が北京籠城て日本婦人が味噌を附けたけれども、斯くの如き婦人を養成したる社會に責任があるぞと喝破せられた。實に尤の話です。記者は切に我邦婦人に向て躰育を奬勵すると同時に父兄及び女子教育家か尙一層此點に留意せられんとを冀ふものである。

併女子躰育の必要は十分認められたとしても、如何なる種類の遊戲運動を女學生にやらせるかと曰ふに至ては頗る困難なる問題である。勿論男學生と女學生とは其生理上性質上に大差があるから、男學生の用ゆる運動遊戲を其儘に女學生へ適用させんとするは最も謬れる見解です。要するに女學生の運動術としては、日本在來の追羽子、テニス、クロツケー、舞踏、競走等皆よろしからう。併し記者は右の如き單獨的遊戲よりも寧ろ團躰的遊戲を女子に適用するを最も當を得たるものと思ふ。由來女子は一般に神經が頗る過敏で勝に狂し敗に失望するの度が頗る強い。故に運動を團躰的にすると勝負の結果を苦にする弊害を除くとができる。加之女子は男子に比すれば偏頗の判斷を有ち易く、公共の事にも一個の私を忘るゝとができない癖がある。而も其生活の制限せられ其境遇の狹隘なる爲めに此癖は益々高まらんとする傾向がある。故に自己以外に眼を開いて共同の幸福の爲に働く精神を訓練するは殊に女子に取て最も欠くべからざるとである。然るに團躰的遊戲は丁度この訓練に適當して居る。現に有名なる女子教育家ローレンス孃の如きは遊戲は見解を廣くし友誼を

増進し相互的尊敬及忍耐を共勵し一切の動作に個人的動機を中心とするの精神を減殺するの効あり』と曰ています。

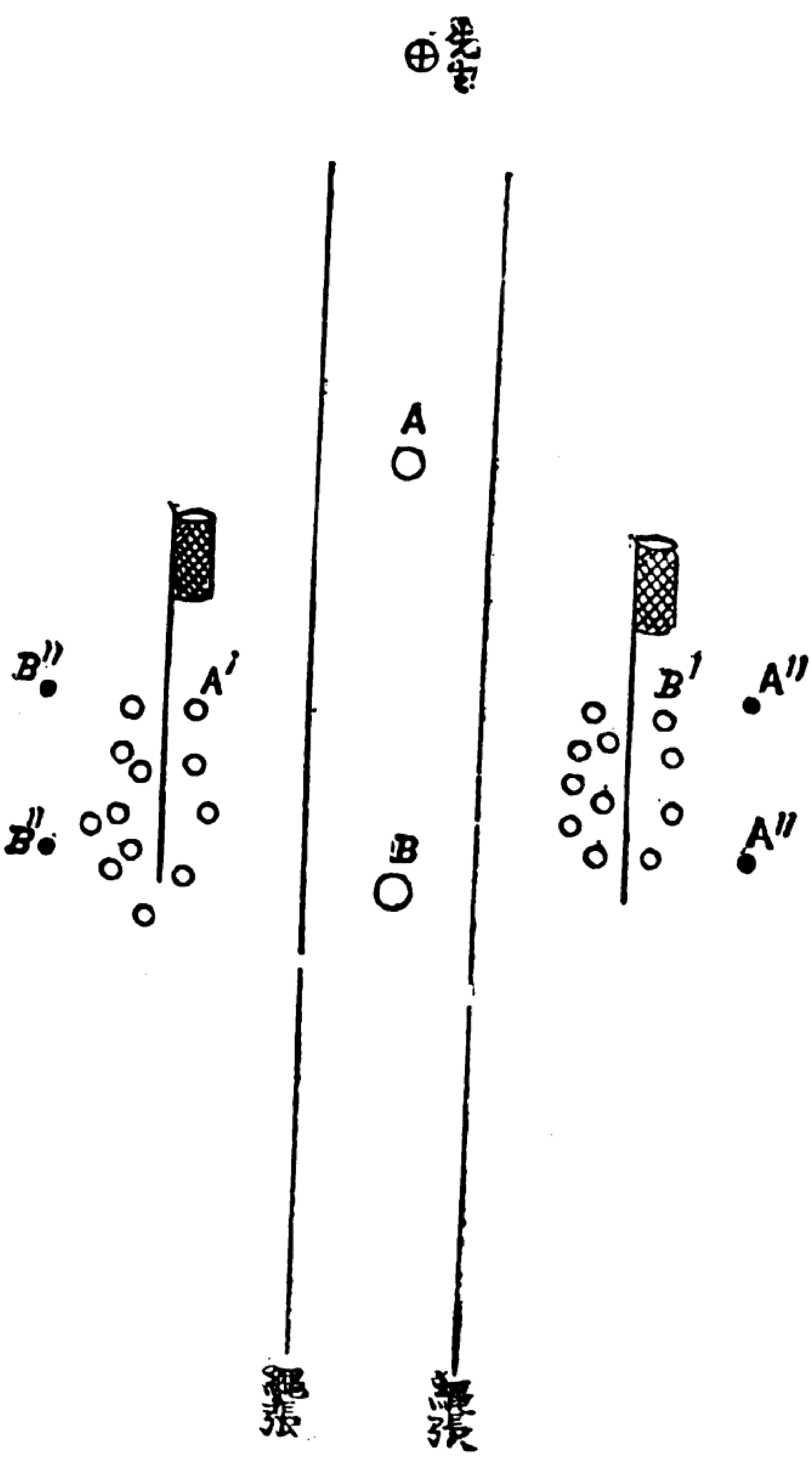
今囘躰遊戯を特に奨勵するものとしても、西洋遊戯より移して日本女學生へ適用し易きものはまづホッケとバスケットボールでせう。安井女史の如きは、歸朝匆々女子高等師範學校學生の過度の勉強の結果、往々神經衰弱に罹るのを嘆じて英國に流行するホッケを全學生にやらせたいと曰つて居りましたが、何分スチック(球を打つ棒)が高價だから乍残念やめにするといづぞや記者に曰はれたとがあ。バスケットボールに就ては記者がこれから説明する處である。

現今日本の華族女學校其他の高等女學校に行はれて居るバスケットボール即ち毬籠なるものと西洋殊に米國高等女學校内に行はれて居るバスケットボールとは大に異る所がある。由來日本の毬籠遊びは華族女學校の躰操教師小野泉太郎君が立案せられた規則に依て行ふもので、他の學校も之に倣て居るらしい。

遊戯の準備を曰へば、先づ高さ三間程の竿の頂端に口徑凡そ五寸、深さ凡そ一尺程ある圓き籠(バスケット)を附けたもの二本を凡そ二三間の距離に相對して立てる。又竿の前三四尺許の所へ長さ凡そ三間の綱を二本の杭にて高さ凡三尺に相並べて張る。又別に底ある籠の口徑より稍々小なる直徑の手毬一個が入用です。競技者はまづ三十人以下が適當です。場所は成るべく廣く平坦なのがよい。籠に入れた球を籠から出す爲め一々竿を抜き挿しするのですから地上の穴に樹てるか、又は竿を固定して置き轆轤の作用で籠を上下せしめ得れば最も便利です。

偖仕合の規則を述べませう。競技者全員を紅白の二組に分け、各々相分れて多數は竿の周圍に集めます。(A′B′)ソコデ一組人數の四分一を邪魔者として各々敵方に入らせる。(A″B″)此外に各組から一二名宛を綱と綱との中間に出し(中間者と假りに呼ぶ)。別に一人の先生(審判者)があつて、先生が初めに球を中間者中(AB)に投げこむで遊戯を始める。中間者の何れかゞ之

を受取り、自分の組（紅、白）即ちA′かB′へ投込む。紅、白の何れにても之を受取つたものは球をバスケットに投入れる。然るに邪魔者即ちA″B″は紅組若くは白組か球をバスケットに投け入れるのを妨害し、且つ之を奪ふの權かある。若し奪つた時は、自分の組へ中間者の手を經て送り、自分の組に投込ませる。斯くして勝負は三度の中早く二度球を籠の中に入れた組の方を勝とします。故に二度續けて一ッ組か球をバスケットに入れたら最早三度する必要かありません。今申せしは三戰二勝なれどこれを五戰三勝としてもよろしい。只規則の定の方次第です。西洋の所謂バスケットボールなるものは大に之に異つ



A、B、紅白兩組ヨリ一名宛繩張内ニ出セル者
A′……紅組ノ多勢　B′……白組ノ多勢
A″……紅組ヨリ派出サレタル邪魔者
B″……白組ヨリ派出サレタル邪魔者

て居る。各組には競技者五人宛即ちフォーワーヅ(Forwards)二人ガァーヅ(Guards)二人センター(Centre)一人を要し、用球は「フートボール」の用球と同じ事で、只楕圓形でなく圓形の點が異る許です。競技場の兩側には底なき籠を附けたる竿二個を、樹て球を其籠に通はし其勝敗を決する。大概の女學校では男子の適用する規則に由れとも、まゝ女子のみに適當するやうに規則を更へた學校もある。一躰男子規則は女子に取ては幾分か過激に失する虞もあるか、併しこれとても適任なる審判官かありさへすれば大丈夫です。

この遊戯は近頃盛んに米國の高等女學生間に行はれて居る想です。即ち紐育、ブルークリン、の如き都會では重に冬の頃行はれて居ますか、「ヴアッサー」「ウエルズリイ」「ブリユン、モール」「ニユーコム」等の有名なる女學校では此頃即ち晩春より初夏にかけてバスケットボールに熱中する風がある。偖斯等の競技の際には女學生の親族朋友か四方より潮の如く集來してくるけれども、男學生の「フートボール」會の如くこれを公會とする精神は全くないやうです。

女學生か運動に熱中するは毫も男學生に讓らぬ、けれど少しく彼是趣きを異にしておるかと思ふ。即ち男學生は頻りと自分の伎倆を公衆に發表したい傾向がある。併し女學生には決してかくの如き野心はない。只愉快に健全にさへ成れば遊戯の目的か十分達せられたと思ふておるらしい。今米國各女子大學高等女學校に於けるバスケットボール目下の狀況を述べませう。

スミス、カレッヂ、(Smith college)にては諸種の運動をやる内でバスケットボールに付て卓絕の伎倆を持つて居る女學生が非常に尊敬を受ける校風でやるから、此遊戯に對する學生の意氣込は頗る非常なものである。愈々諸孃の腕前の凄ひ所を現はす時になれば、氷糖、肉其他躰力に影響ある物の飮食を節制し、いざ春期運動會に逼てくると、諸種の宴會へ誘はれても、決して之に應ずるものなく、每日々々バスケットボールの練習に努める風である。

ヴアッサル及びウエルズリイ(Vassar, Wellesley)の

両女子大學では、前校に比すればバスケットボールに對して稍々冷淡であるけれど、併し他の遊戯例へば端艇競漕、ゴルフ、庭球等の遊戯運動と共に最も至要なる位地を占めて居ると曰て可なりだ。若し夫れブライアン、マウヰル(Bryn-Mawr)の女學校では、非常にバスケツトボールを試みるものが多く、各級から互に撰手を撰び出だし、五月の撰手競戯會を期して勝敗を決し、勝つた級が銀製の提燈を保管する名譽を得るは、丁度我邦の大中學の學生が隅田川のボート、レースで「チャンピオン、フラッグ」(優勝旗)を爭ふのと同様です。其他ニューオルレアン州の「ニューコム」女子大學では其土地の氣候が温暖であるから、春夏秋冬共に續けて行ひ、其伎倆等の如きも北方諸州の女學校に比して決して譲る處はない。

終りに我國に於ては華族女學校が率先して此バスケットボールを其運動會に採用し、續て各高等女學校にも行はれて居やうであるけれども、未だ以て盛なりと曰ふとは曰へぬ。女子遊戯の沸底なる今日他の遊戯に比して費用を要するも少く別に規則に錯雑するとなき此バスケットボールの採用を余輩は各女學校に對して切に推薦するものであります。

裁縫實習

女子職業學校教員　金子銅子述

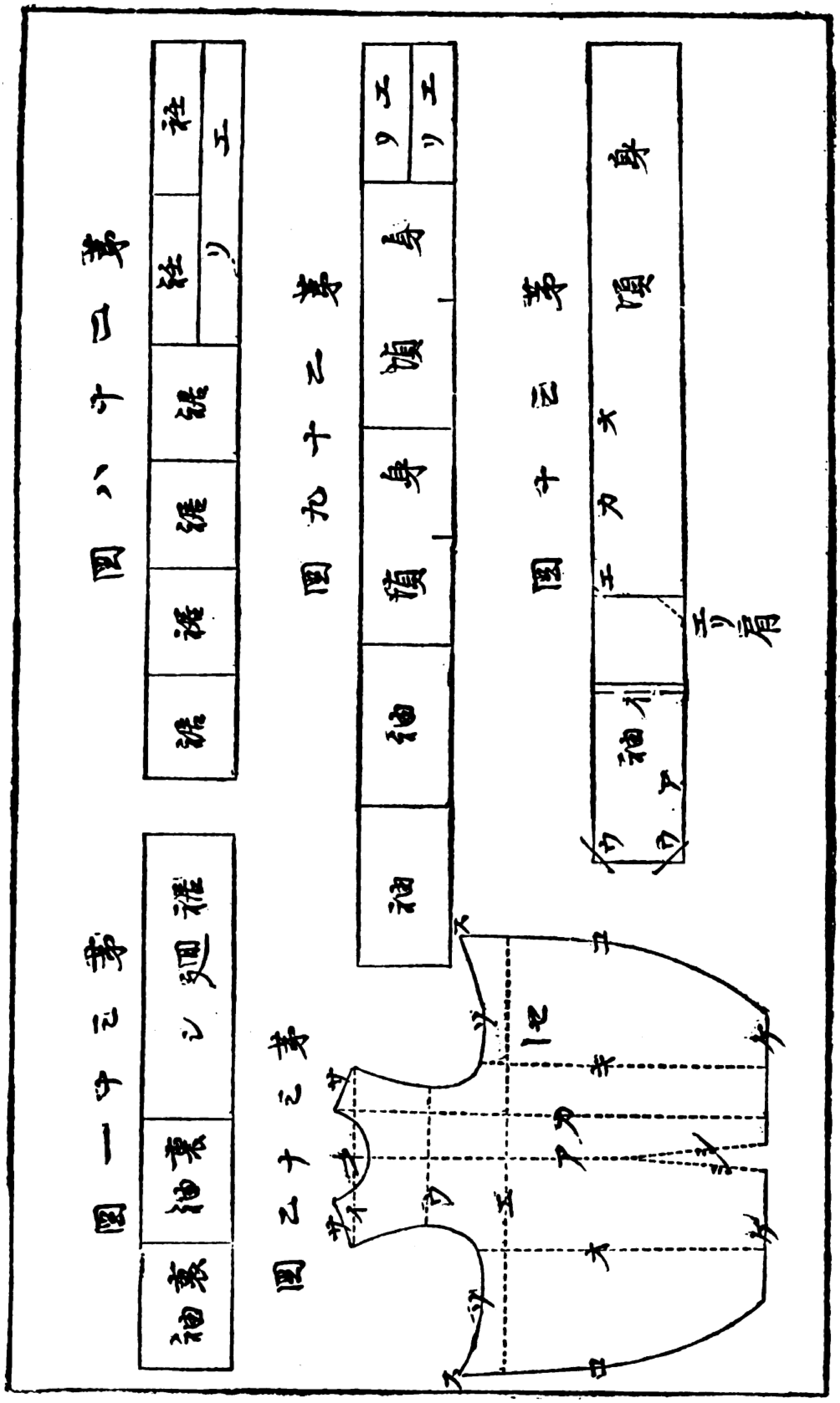
▲單衣半がさね

前號に單衣重ねを申上ましたから、ついでに此には單衣半がさねを申上ませう、裁方は上着になる方（表ともいふべき方）は單衣重ねの上着と同様で、重ねとする方は第二十八圖の通りに致します、積り方は上着は前の上着と同様ですから別に申上ません、下着即ち重ねの方は衽丈二尺五寸といたしますから衿丈が五尺となります、裾丈が二尺五寸つゝ故つまり裾丈の四倍に衿丈を加へたものが下着即ち重ねの總丈です、もし下重ねの上衿を要するときはそれだけを見積まして、衽丈を少しくつめ、其先より上衿をとります、それ故衿の

先きよりは余り切れが出ます、これは其着る人の好によりていつれにするもよろし、縫ひかたは、最初に袖をとります、この半がさねのときは、重ねがつきませぬから並の袖口の切のかゝりました單衣の袖の樣に縫ひます、次には身頃をとりまして矢張重ねつきの上着の樣に縫ひます、次には下重ねの切をとりまして、本重ねの下着の裾がけの樣に裾がけを致します、衽は矢張本重ねの通りに竪褄を絎け、下重の切は本重ねの通りに背脇を縫ひまして、上着の背及脇の縫ひめとをとぢ合せます、次に前巾の縫ひ込みになります所を上着下重ねともに綴ぢつけます、次に下重ねの切の上部の端を上着に絎付ます、此時は針目に注意して表には極く細く針を出す樣に致します、次に衽をつけます、これも本重ねの通りにいたします、左右とも衽をつけましたらば、竪褄を本重ねの樣に絎け衿をつけます、その附けかた絎けかたは本重ねと同樣です、此他の諸部分は皆本重ねの通りに致します。次には猶前の本重ね、半重ねの單衣縫ひかた裁方の御話のついでに

▲單衣しづ付

を申上ませう、このしづは本重ね、半重ねを大に略したもので或は裾さばきのよき爲めか、又は節儉のためかかやうの物を拵へたのかしづに用ゐます切は表と同質のものか又は甲斐絹、縮緬等種々の品をつけるやうて、近頃は表と同樣の品を用ゐるに、表地に摸樣があればしづにも摸樣をつけ極少しく袘を出してあるのがございます、扨裁方は表は並の單衣同樣にて、今更申上る必要もありません、縫ひ方も亦並單衣と異るとはございませんが、只裾がけをせずに衽をつけまする と衽の竪褄をくけずに置くのが少しちかひます表を縫ひ上げましたらしづの切をとりまして四裾を合せ衽をつけて裾を合せ折をつけて引かへし、裾の工合をよく見て(袘を出すとも、けぬき合せにいたしますとも)躾をかけます、次に背と脇とをとぢ衽をもとぢます、しづの衽は四裾より丈が長くありますから其長き部丈け表衽の縫ひ目に縫ひつけます、次にしづの上の端の縫ひ込みに躾をかけ下に置きましてしづと表との切のシズミのなき



様に注意して待針をうちてとめ置きまして、小針に表に絎けつけます、次に衿下をしづの方と表と巾をよく合せて下より左右とも縫ひ上げ引かへして躾をかけ衽の上の端を表にくけつけて衿をつけ、袖をつけます衿つけかたくけかた、袖の付けかたなどは並の單衣同様てございます。次には

▲單衣長襦袢

前巻に申し殘しましたから一寸こゝで御話しいたしませう、長襦袢には單へと袷とありますから、單衣の方から申しませう、單衣長襦袢は第二十九圖の通りてありまして、其積り方は袖丈の四倍に身の丈の五倍と一尺(この一尺は衿肩廻しと衿先きの縫ひ込んでございます、)とを加へ出たものが、用布丈でございます、標の付け方は第三十圖の(あ)の如く(ウ)山標、(ア)袖付け、(イ)袖丈標で、身頃は同圖の(い)の通り(エ)山べら、(オ)身のやつ、(カ)袖付けの標とをつけます、縫ひかたは先づ袖をとりまして、表を出して袖下を縫ひます、このときはやつくちの縫ひ込みのある方はそれだけ縫ひのこして置きます、次には之を引かへして、裏を出して袖下の標の所を縫ひ袖巾をあたりましてやつくちを絎けます、次に身頃をとりまして、背を二度縫ひいたしまして、後巾をあたり脇をぬひます、次にこの縫ひ込みを單衣の着物の様にとぢを致します、次に裾がけを致し前巾をあたり着物で申せば相褄にあたる所に標をつけます、此標は裾の標より眞直の所につけるときまたは二三分位巾をつめて標をつけると好によりていつれともいたします、それより衿肩廻までなぞへに折をつけて衿をつけるのです、次に衿をとりまして、山をはぎ合せ(第二十九圖に示しまする通り衿が半巾になりますから山繼になるものでございます、)衿をつけます、衿先は單裏の絎け衿の様に致して絎けつけます、次に袖をつけ出來上りといたします、此長襦袢は衿肩を後にくりこしまして前身頃の長くなりましただけはだきの所あたりにて前下りをつけます仕方がありますこれは脇縫ひのときは前身頃の長き丈をつまみますだけで決して羽織の前下りの様に縫ふのではございませぬ、し

かし當時はこの仕立はあまり用ゐませぬ、つまり着惡いからて、極ぬきえもんの人などがこの仕立を用ゐるのてございます、それ故此頃では前申し上ました通りに仕立まして丈を少しく長くいたして置きまして着用するときに一寸ゆとりをつけて着ました方が工合がよい樣てございます、袖又は身頃につけてからやつくちを絎るともありますからこれも御斷りいたして置きます、やつくちは袖を付て後ち絎た方が致よくあります。

▲袷長襦袢

表の裁ち方は第二十九圖の通りてありまして積り方も同樣でございます、裏は第三十一圖の通りで裾廻しは横切を用ゐます、標付けかたは表は第三十圖の通りで裏は身頃を表より袘丈長くいたせばよろしいのでございます、扨縫ひますには先づ表と裏の袖をとりまして裏袖を向ふに表袖を手前にして袖口の方を合せてこゝを縫ひます、それより引かへし躾をかけ又裏を出し表の切の裏にかへる分を見つもりまして下に置き裏表の切を重ねて袖巾をあたりやつくちを縫ひます、次にやつくちと袖口とをよく合せまして袷の袖の樣に袖下を縫ひます、次にやつくちに躾をかけます、次に表身頃をとりまして背、脇を縫ひ次に裏身頃をとりまして、表と同樣に背及脇をぬひます、次に裾廻しをとりまして、背脇を縫ひまして裏身頃の裾にこれを縫ひかぶせます（裏は表の丈より袘たけ長くなりてをりますからこの裾廻しの切をかぶせてとめればよろしいのでございます、）次に裾廻しの下は裏の裾に合せて躾をかけておさへ、裾を合せます、それより引かへし躾をかけ袷の裾袘をこしらへました通りに少しく綿をふくませて袘の加減を見て、横とぢをいたします、次に背脇を綴ぢます、これも袷の背脇をとぢました通りに致しまして、身のやつを縫ひ袖をつけます、袖は裏袖は裏身頃に表袖は表身頃に別々につけて縫ひ込みは表は袖の方に裏は身頃の方にかへします、次に前の縫ひ込みを躾にてとぢ單衣長襦袢の樣に前巾をあたり衿をつけ衿先きを縫ひ衿をくけます、これ等は皆單衣長襦袢と同樣でござい

ます。次には

▲ねびえしらず

を御話しいたしませう、少しく難易の順序がくるふ様でございますけれども、時候からでありますから御覧なさる方にも御参考になろうかと存じましてこゝにかかげるといたしました、裁ちかたは第卅二圖に示しました通り、(カ)一尺四寸五分、(シ)六寸一分(エ)一尺七寸、(ア)七寸、(イ)六寸、(ウ)四寸、(オ)及(キ)は同寸法で八寸、(ク)の巾七寸、(コ)九寸、(サ)の巾一寸五分、(ク)一寸三分としてこゝを圖の如く灣形にきりとります、しかしこれは用ゐる小兒の年齡躰格によりまして斟酌せねばなりませぬ、今申ましたのは大概四才位の小兒用のでございます、用布はキャリコ、フランチル或ひはさらし木綿もありませう、が、とにかくキャリコなとて製すましには裏をつける方がよろしくあります、そのときは表を裁ちました通りに裏をも裁ちます、(表と同じ巾のものなれば表の通りに裁ちます、木綿巾のものでありますればこの三十二圖の(ア)の所で繼きを

致します樣に一巾のうちより片方を裁ちます、即ち左右片身のものを一枚ッヽ裁ちまして(ア)を繼ぎ表と同じ形にいたすのでございます、(縫ひかたは初めに裏のない方を申上ませう最初は第三十二圖の(シ)と(コ)を合せ裾口をそろへて下より三寸位縫ひまして、衿の周圍丈をのこして其他の周圍を三つ折にして端をマッリます、もし此用布がフランチルでありましたら二つ折にして千鳥がけにいたします、次に裾がけ、これも周圍と同樣フランチルなれば千鳥がけにいたし其他の品なればマツリます、次に衿の灣形の所に總尺一尺七寸位の紐をつけます、このひもは絹布を用ゐて頸の周圍だけに綿を入るもあります、又は半インチ位の巾のテップをつけるかいたします、次に衿につけました紐と同質のものを(ス)の所左右につけます、この長さは左右とも一尺三寸ばかりでございます、次に左の脇第三十二圖の(セ)の穴をあけて穴かがりを致します、(第三十二圖は表から見たるもといたしますから(セ)の所に穴をあけるのでございます(裏)をつけまする方は矢張初め

に(シ)と(コ)とを合せ裾口をそろへて四ッ縫ひにいたし其他は衿をのぞきて、殘らず表裏合せて躾にておさへミシンをかけるか又は手縫ひなればかさりミシンの樣に返し縫ひを致します、其他は單衣と異る所はございません、しかし(ス)の所の紐は表と裏の間にはさみてつけるをよしといたします、又第三十二圖の(ソ)の所に二個ばかりヒダをとるともありますこれは通常のにはございませぬが、ヒダをとりました方が着ました工合がよろしい樣です、同圖の(セ)の穴も並のにはござりませぬけれどもこれも左右を合せて下になる方の紐を通しまして結ました方が都合がよろしいので此頃では皆かやうにいたして居ります。

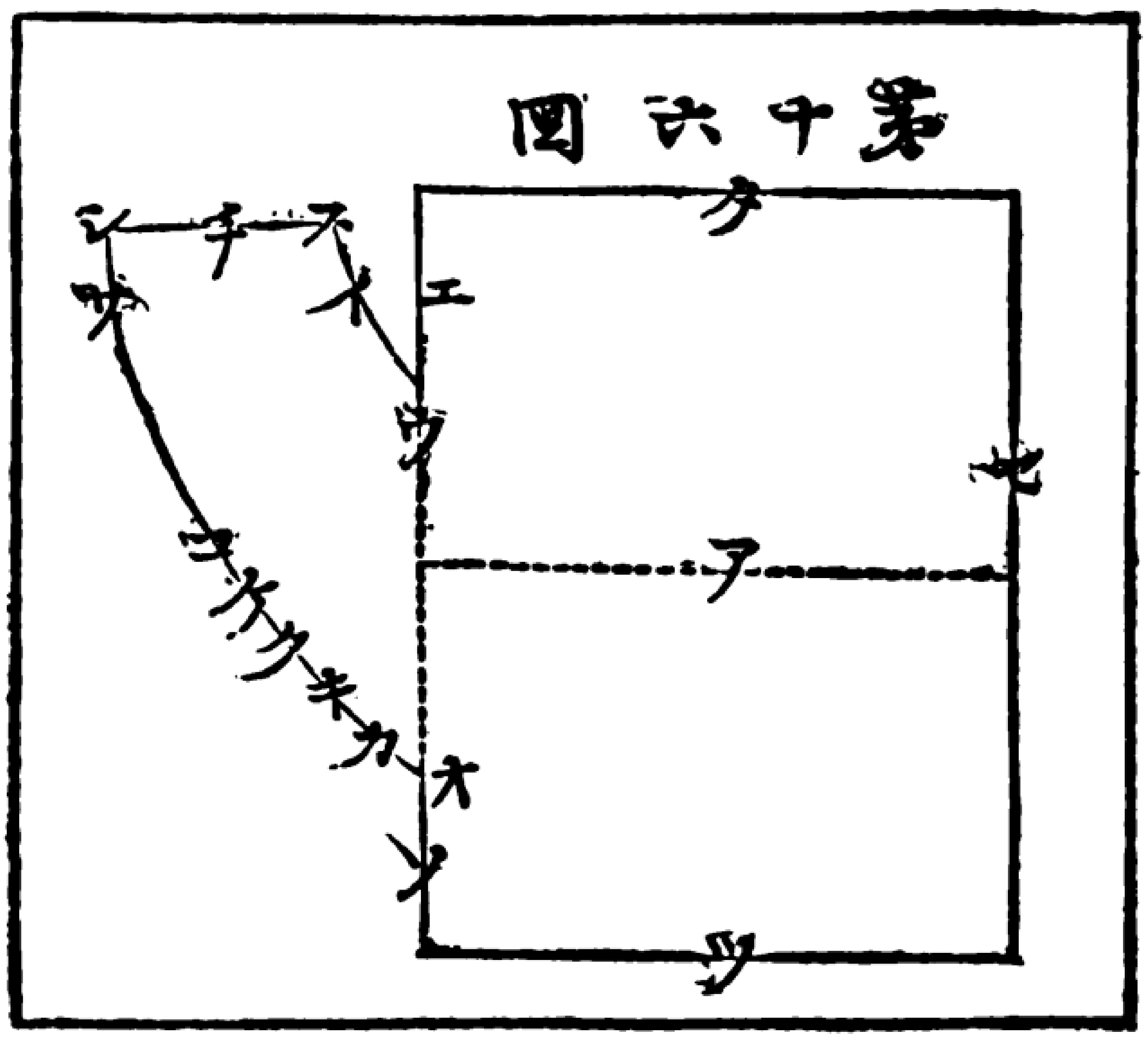
編物實習

女子職業學校教員　豐原繁尾述

▲手袋

これは五六才位の小兒用の手袋で極簡單なものを御話しいたすつもりでございます、編み初めに鎖編三十五個を編みまして基をつくります、其次の側は今編みました鎖の向ふを一本とりまして、帽子編みにて此側の終りまでまゐりまして、一ッ鎖編みをして直に裏にかへして持ち、只今編でまゐりました帽子編みの上の目を二本とりまして、帽子編みにて此側の末まで編み、又終に一の鎖編みをいたして又裏にかへし、又帽子編みの上の目を二本すくひまして、此側を帽子編みをいたし終に鎖を一つあみまして又裏にかへします、これより前の如くに一側々々に編てまゐります、この一側の終りになる度毎に一つの鎖を編みまするのは其側のつれぬためで、もしこの鎖編みを致しませぬときは丈がつまりまして、其目的のものを作ることが出來なくなりますから、よく注意していたゞきたいのでござります、以上の如くあみまして、第十六圖の(ア)の巾が三寸許になりましたらば、其側の終りの目數圖中の(エ)の所を六つ殘して直に(イ)部に當る所に七ッの鎖編みをいたして、新に一小部分の基をつくり、其鎖編みの目の

向ふをすくひまして帽子編みを致します、この帽子編みの數が六つ出來ます、(七つ鎖編みをいたした其七つ目の鎖の次より帽子編みに致しますから帽子編みが六つできるのでござります、其次は直に(ウ)の所より前に編で出來てをる所に帽子編みをつけてまゐります、即ち圖中(ウ)の下の直線のにみつけあるのでございます、次に此側の末の目七つを殘して丁度圖に就て申せば(オ)の所あたりより直に裏にかへし鎖をあまずに(この所はつれました方がよろしくわりますからこゝては鎖編みを致しませぬ、)直に又帽子編みを致してまゐります、此側が編終りましたらば一ッ鎖を編みまして又裏にかへして帽子編みをいたします、此側は終りの目二つを殘しまして(先の側で七ッ目數をのこしてわみましたが其上を又二つの



第十六圖

こしますので、圖中の(カ)の所あたりでございます、)直に裏にかへりますこゝも亦鎖をいたさずにかへるのでございます、又此側を終まで編みましたらば、鎖編み一つを編みまして又裏にかへして編てまゐります、此側は前の側て目を減しました所より又二つ目を減しまして(圖中(カ)にて二つの目を減しましたが次の此側は(チ)にて目數を二つ減します、つまり前の側より二つの目數が減じたわけになります、)かやうに二つつゝの目數を減すると都合三度いたします、即ち圖中の(カ)(キ)(ク)は目數を二個つゝ減します、次の(チ)よりはこの所にて目數一個つゝを減してまゐり終の側の目數が八つ位になりますまて編てまゐります、つまり圖中の(サ)の所の目數が八個になればよろしいのです、次に此終りの糸を入すばかり

の長に切りまして、それを毛糸針に通しまして、圖中(シ)と(ス)とを合せて平にからげます、これが拇指になるのでございます、又始のかけ目(セ)と六つの殘してある所(ソ)とを合せ其他の所もよく合ふ樣にいたして拇指をまつりつけました糸を以て(タ)の終までからげ合せます、しかし拇指を入れる方は少しく下の方につれる加減にして付けませぬと手掌の入る方より拇指の方が長くなりまして形がわるくなりますからこゝをよく注意してつけませぬと工合が惡うございます、それより(セ)の上部と(エ)の所とを合せます、これで手袋の形が出來上りました、左右とも此の如く致して出來ましたら、(タ)の部の周圍に飾をつけます、飾は只今まで用ゐました糸と色のちがうものをとりまして、帽子編みを一回いたします、この一回の終には初めの帽子編みの上の目の向ふを一本すくひまして、ヘーケルを入れて糸を出して一度に拔き出します、これで帽子編みが一回いたしました、次の側は矢張帽子編みの上の目の向ふを一本とりまして、一つ帽子編みをいたし

又次の下の側の帽子編みの上の目の向ふを一本すくひまして又一つの帽子編みをいたします、次にそこより直に鎖編みを五ついたし其もとの（この帽子編みをいたしはじめました其もとの帽子編み）帽子編みの目の手前を一本すくひまして、直に糸を拔き出して丸き形をつくります、又次は下の帽子編みの上に一個づゝ帽子編をいたして、又五個の鎖をあみ前同樣に丸きものをつくり順次此の如くして一周いたして飾は終ります次に拇指の上の周圍にもこの飾をいたします、次に下の圖中の(ツ)の方は十六番の編棒（金屬の棒で先が鈎形になつてをりませんのでございます、大抵五本を用ゐます、一を持ちまして平に一本ッゝ目をすくひます、其目數は大抵二十五個か或は五十六位つくりまして、初めの側は目の間の穴が大きくならぬ樣に棒にかゝりてある目の糸を捻りて編み其上を本目二つ、逆目二つ（本目及逆目のとりかたは前號靴下を申上ましたときに委細御話いたしてありますからこゝには略します、）といふ工合に編てまゐります、この編かたが三十五段

ほども出來ましたら糸をとめます、左右とも以上申上ました樣にいたしまして、手袋は出來上りといたします。

畫學の心得

武村耕靄女史

△經營位置

經營位置とは畫の大小疎密に係はらず、其前後左右及遠近の釣合よく圖と作る事をいふので御在ます、扨此位置を經營するといふ事は、初學にて只其手本のまゝを臨畫なすといふ場合にては、其紙面の釣合に注意し位置を整ふるまでなれども稍進歩するに隨ひ、横圖を竪に竪圖を横にと寫し換へ、或は新たに自己の意匠を以て圖を作るといふ場合になりますと、其時には一層此研究を必要と致します、たとへば家屋の建築にても位置の經營よろしくなければ、其構造はいかに善美を盡しても、之を完全の家とはいはれぬと同じ事にて、繪畫の布置も全局整はざれば筆墨の妙にあらはれ難ふ御在ます、故に之れを學ぶには、名家の作例を參考として法式の大略を理會せねばなりませぬ、彼の古今の名畫を觀るに、假令へば墨竹の圖の如き、如何にも粗雑にして、僅かの筆數もて描てあるものにても、筆勢はもとより位置もよく整ひ、畫であれば又之に一筆を加ふる事が出來ませぬ、或は叢林疊嶂も其配置が完ければ、一樹を減じ一峰を削る事が出來難きと申事は、畫の氣脉自然に貫注するゆへで御在ます、又布置を整ふるに主客といふ事あり、たとへば百合に蝶の圖なれば、百合は主にして是に飛來らんとする蝶は客で御在ます、或は一種の草花にて、他に附屬する鳥蟲又は花卉等を畫かざる圖にては、一圖中の重なる位置を占むるものを以て主枝となし、他の花枝は客として之に相應する如きあり樣に畫き添るものと致します、此外山水人物鳥獸等巳に主客相顧應する樣に、一氣貫通する勢ひを以て畫くべき事で御在ます、尚又物の長短遠近正偏集合等種々注意を要する點が多くありますゆへ、今其蘊奧を盡すには一朝數言のよく及ぶ所ろで御在ませねば、玆に

刺繡圖案

河骨

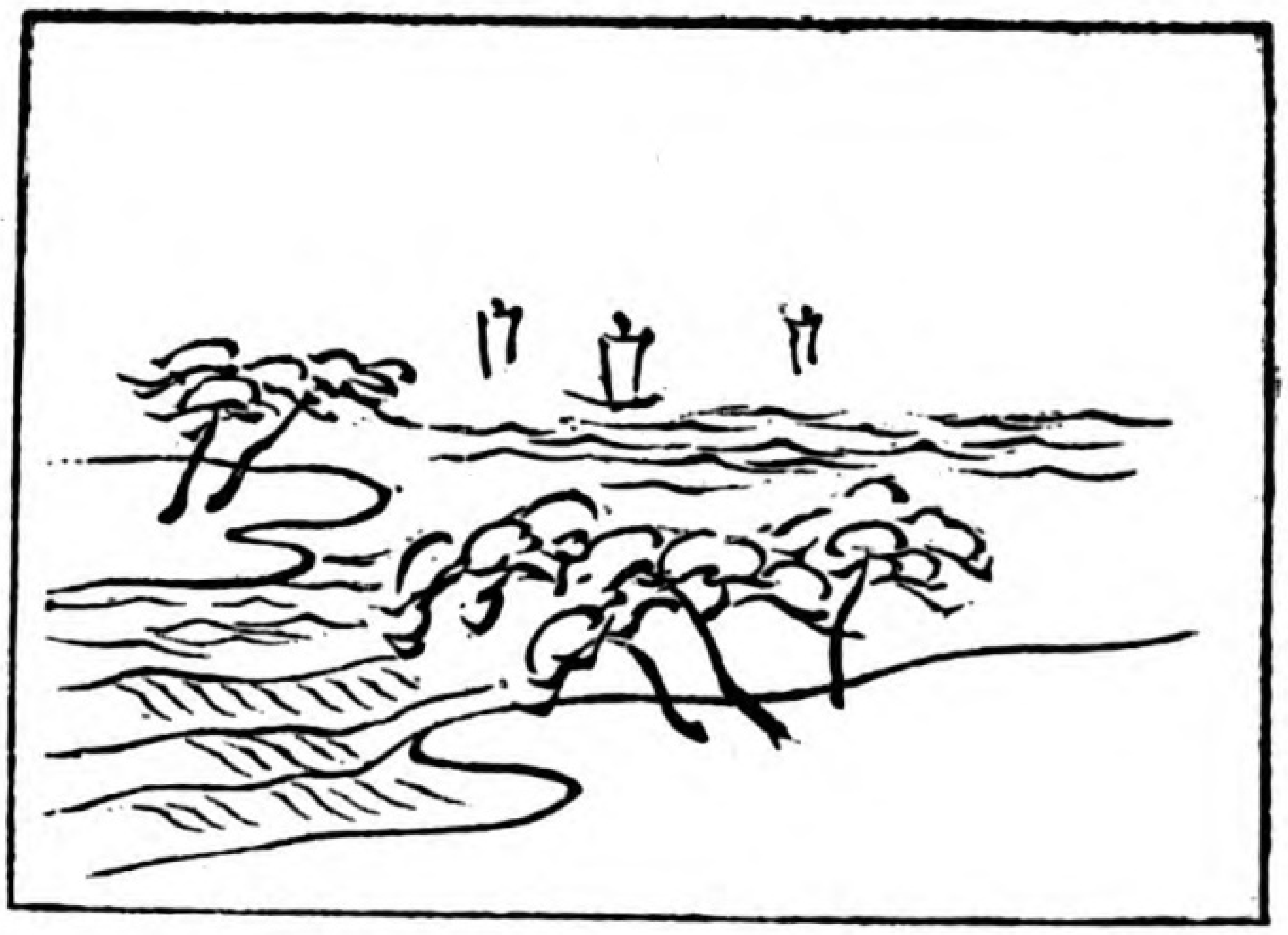




新鶴女史

刺繡圖案

海濱





はたゞ其大略を述ぶるまでに致しました

△傳移摸寫

畫を學ぶの道は、我師の筆跡を練習する餘暇、古今の名畫を摸寫し其妙所を得るの緊要なる事を前にも述ましたが、今玆に粉本摸寫の目的は如何にと申に、多く古今の名畫を集めて、之を參考とすることは最も難き事にて、よしや之をなし得るも、只眼に視たるのみにては、筆墨の妙味を十分會得しかたふ御在ます、故に古人の筆跡を摸寫し、其能く原本に違はぬ樣に摸寫して、其筆墨の妙味を解し多く之を貯ふときには、又古畫を貯藏すると同一で御在ます、之は他日の參照に備ふるばかりでなく、尙古人の筆格を究むる事に於て其益する所尠なくは御在ませぬ、されども爰に注意致すべき事がありまするは、原圖の筆行を失ひたるものを寫し置かば、粉本も益なきのみならず、却て害あるものになりませう、故に原本の筆格を子細に吟味し、常に摸寫の熟練をよく養はなくてはなりませぬ、初學の之を養ふには先最初に簡單なる小圖から初め、漸々複雜の大作を寫す樣になるので御在ます、總へて細密なる畫は、普通の手本にては學ぶこと至て稀でありますれば、其密畫の着色の如きは、此摸寫といふ事にて多くは學び得るので御在ます

玆に尙一言を要する事は、總へて畫をかくに當り、我意匠をもて圖を作るの難き處より、とかく古人の原圖を其儘にすこしも取捨する所なく用ひ、終には粉本のみに依賴するの弊に陷り、我意匠を發揮の氣力に乏しくなるといふ事を戒めねばなりませぬ、良藥も其用を失すれは効能なく、良材も用ひかたをあやまれは、又無益に終ると同一にて大いに注意すべき事で御在ます、故に傳移摸寫は古人の筆格を學ぶと、我新圖を作るの參考とに供することとて御在ます

以上の文にて六法の大略は述へ終へましたが、是は只初學の方々の其大要を解するまでに過ぎません





國文學講義（六）

淀のわたり（枕草紙）

文學士　尾上柴舟

卯月の晦日に、初瀨寺に詣づとて、淀のわたりといふものをせしかば、舟に車をかきすゑて行くに、菖蒲、まこもなどの、末みじかく見えしを、とらせたれば、いとながゝりける。

○卯月は四月なり。晦日は、月でもりの義にて、月の末をいふ。今は、つごもりとはいはて、つもごりといふ、轉訛のほど、をかしといふべし。○初瀨寺は、大和の長谷の觀音なり。平安朝にては、高貴の尊信多かりしが如く、源氏、其他の物語にも、此寺のこと、おほく出てたり。此寺の、今も在るは、何人も知れるところなり。○淀のわたりといふものをせしかば、淀は、淀川、淀のわたりは、淀川の船渡しなり。都わたりなどのわたりとは、意ことなれり。渡りといふものをせしといふは、たゞ、渡りをわたりしことなり。○船に車をかきすゑて行く、清少の乘れる車を、船につみて棹さし行くの意。○末みじかく見えしを、末はさきなり。水の上に出でたる葉先の、みじかく見えたるを、なり。

○四月の月末に、長谷寺の觀音に詣でむとて、淀川の船渡しをわたりしに、船人は、わが乘れる車を船に乘せて、棹さし行けり。その時、菖蒲、眞菰などの、水面に出でたる葉先の、短かく見えしを、人して取らせたるに、深き水のことなれば、いづれも、皆長きものなりき。

○此節、何となく畫のやうなり。緑色にゆるく流るゝ川水、賤しげなれど小やかなる烏帽子きたる船子、船

につみたる女車、菖蒲眞菰などを手繰りよする從者など、何れも趣あらざるはなし。筆端彩あるものが、菖蒲などの水中にあるを、短かしとおもひて、取らせたれば、思ひの外に、長かりきと驚きたる、清少、才女といへども、流石は宮廷の人なり。案外に、迂遠なるところ、また趣味あり。

菰つみたる舟のありきしこそ、いみじうをかしかりしか。高瀬の淀には、これを詠みけるなめりと見えし。

○菰つみたる舟、眞菰などの、刈り上げたるを、多く積みたる舟なり。これまた畫趣あり。○高瀬の淀には云々、高瀬の淀は、河内にあり。古歌に多くありて、名所と定められたるところなり。此地には、菰多しと見え、歌には、大方これを結びてよめり。六帖にも「菰枕高瀬の淀に刈るこものかるともわれは知らでたのまむ」などいへり。されば、菰つみたる舟を見て、清少はこれらの事を思ひ出てゝ、彼の高瀬の淀に、景物としてよむは、この菰の事ならむ、と考へたるなり。

○その川の面を菰の刈りあげたる、あまた、青やかに積みたる舟の往來したりしは、甚だ趣ありき。河内なる高瀬の淀には、歌の景物として、菰を詠むことなるが、げに、この菰の事ならむ、と思はれたり。

○景によりて、歌をおもふ。歌流行の當時、げに、しかるものありしならむ。清少、この行によりて、はじめて、菰の趣味あるを知れりしなるべし。旅行は、人の迂をすくふこと、尤も多し。

三日といふにかへるに、雨のいみじうふりしかば菖蒲刈るとて笠のいとちひさきを着て、脛いと高きをのこ、わらはなどのあるも、屏風の繪に、いとよく似たり。

○三日といふにかへるは、五月の三日の事なり。

○五月三日といふ日に初瀨より還りて、まだきなじわたりを過ぐるに、雨のいといたう降りしかば、菖蒲刈るとて、出でたる里人の小さき笠を着、脛いと高く

あらはして、男子も、わらはも、一樣に打まじりて、刈り取り居るも、また、屛風に書きたる繪によく似て、面白かりき。

○此節また興趣あり。淡々たる筆、無限の味を留めたるなど、文かく人のよくならふべきは此文なり。當時の美文字など、すべて、事を多く寫さむとつとめて、遂に、何の匂ひもなきに陷るもの少なからず。かゝる人は、よろしく此文に鑒るべきなり。

海月の骨（枕艸紙）

中納言殿まゐらせたまひて、御扇奉らせたまふに「隆家こそいみじき骨をえて侍れ。それを張らせてまゐらせむとするを、れぽろげの紙は張るまじければ、もとめはべるなり」と申したまふ

○中納言とは、淸少納言の仕へまつれる中宮定子の御兄藤原隆家のこと。○まゐらせたまひて、隆家が中宮の御方に參りたまふなり。○御扇奉らせたまふ、隆家の中宮に扇を献上したまふをいふ。○隆家こそ云々、隆家の語なり。○いみじき骨、いみじきは、結構なる位の意。骨とは扇の骨なり。○それを張らせてまゐらせむ。それは扇の骨なり。その骨に、紙を張らせて奉らむ、との意。○おぼろげの紙、おぼろげ、は、朧氣にて、朦朧の意なり。轉じて、尋常、普通の意に用ゐる。「おぼろげの蜑やはかつぐ伊勢の海の波高き浦に生ふるみるめは」（後撰集）の如きも、これなり。されば、おぼろげの紙とは、尋常一般の紙をいふ。結構なる骨には、適當せざる紙をいふ。

○中宮の御兄中納言隆家、ある時、中宮の御方に參りたまひて、中宮に御扇を献上し奉らむ、として、のたまはく、「隆家、われこそは、實に、珍らしく、結構なる扇の骨を得たれ。されば、その骨に紙を張らせて後、奉らむと爲るに、かくよき骨なれば、普通一篇の紙は張るまじ。それに相應するよき紙ならでは、と思へば、日頃、其紙を探し求めて侍るなり」と申したまふ。

○例の書きなぐりたる筆つきなり。一氣に書き下し

たる、非難すべきにもあらねど、今より見れば、御扇奉らせたまふには、御扇奉らせたまはむとて、ともあるべく、おぼろけの紙は、はるましければ、は、おぼろけの紙はふさはしからねば、などあるべきか。張らせて、張るまじなど、おなじ語の再出せるも、よき事にあらず。

「いかやうなるにかある」と問ひきこえさせ給へば、「すべて、いみじく侍る。更に、また見ぬ骨のさまなり、となむ人々申す。まことにかばかりのは侍らざりつ」と、こと高く申したまへば、

○「いかなるにかある」は、中宮の隆家に尋ねたまふ御語なり。○問ひきこえさせたまへは、は、尋ねとひたまひければなり。○「すべて、いみじく侍る」。骨は、一躰に結構なりとの意。○また、見ぬ骨のさまなり、は、また此世にては見えぬほど珍らしき樣したる骨なり、といふなり。此句、心をつくべし。何となれば、此句より、次ぎの少納言の秀句は、出で來ればなり。○こと高く、こと、は、言なり。高くは、その聲の高きをいふ。

○中宮は隆家の語を聞きて、『さほど、結構なる骨とは、いかなる樣にかある」と問ひ尋ねさせたまへば、隆家答へて、「その骨のさまは、すべて、結構にて侍るなり。人々も、「かゝる骨は、此世にては、更にまた、見ざる樣をしたり」と申す。まことに、數多の扇の骨を見たれども、かくばかり、珍らしく、結構なるものは侍らざりけり』と聲高く申したまへば。少納言、之を聞きて、次の如く云へり。

○此節、後の、己れの秀句に反應せしめむとて、隆家の詞を、くた〳〵しきまで、長く書けり。これ、雲を畫きて、月を明にすると仝筆法。

「さて、扇のにはあらで、海月のなり」と聞ゆれば、「これは隆家がことにしてむ」とて、笑ひたまふ。かやうの事こそ、かたはらいた

き物の中に入れつべけれど、人ごと、「な落しそ、」と侍れば、いかゞはせむ。

○さて、扇のにはあらで、海月のなり、は、少納言の語なり。隆家の、全く、世になくめづらしき骨なり、といふにつけて、「さて、それならば、その骨は、扇の骨にはあらで海月の骨なるべし、」とて隆家を揶揄したるなり。海月の骨は、世に無きものなればなり。少納言の慧才、驚くべきにあらずや。○これは、隆家のことにしてむ、これ、隆家の語なり。隆家、少納言の秀句を賞へて、「この句は、隆家、われのいひたる事として、人にも語らむ」といふなり。○かたはらいたき、は傍らにて聞き居るも、心痛き意なり。片腹の痛さにはあらず。○「な落しそ、」は、な書き落しそ、なり。決してかゝる秀句は書き脱すべからずといふなり。

○少納言、隆家の語を聞きて、いふ。「さては、君の、世になく、めづらしきものとのたまふ骨は、扇の骨にはあらで、海月の骨なるべし。海月の骨は、無類の珍品なるべければなり」と云へば、隆家、いたくこれを賞讃して、「君のこの語は、甚だ、面白ければ、この隆家が、云ひたることゝして、人にも語りて、自讃せむ」とて、笑ひたまへり。この樣なる事は、傍にて聞くも、自慢めきて、ゆかしからねば、わが、前に書きたる(此節の前に、かたはらいたきもの、といふ條あり)かたはら痛きものゝ中に、書き入るべくして、此處に、特別に取り出して、書くべきにはあらざりけれど、人々、「決して、かゝる秀句を書き落すな」といひ侍れば、如何はせむ、心にもあらで、かくは、書きつくるなり。

○扇のにはあらで海月のなり、の一句、寸鐵人を殺すものといふべし。かたはら痛きものゝ中云々、少納言、自づからも、かゝる機智を弄することの、ゆかしからぬを知れるを見る。されど、かく有爲男子をも弄謔するところ、乃ち、少納言の少納言たる所以なり。

漢文評釋

天女使

文學士　久保天隨

（二）（菊池三溪）

翁稽顙出邀之、延之上席、膜拜曰、不以下界之陋、辱枉蓮躅、敢問、貴孃得非辨財天女化身耶、何其容色類小町、而眉目似衣通乎、雖然昏夜之行、鬟眉男子、猶且難之、而況於深宮閨黛乎、意者當有緊要密事、願吐露其錦心、使僕與聞、僕雖不肖、安得不竭一臂力歟。

（訓讀）翁、稽顙し、出でゝ之を邀へ、之を上席に延き、膜拜して曰く、下界の陋を以てせられず、辱くも蓮躅を枉げらる。敢て問ふ、貴孃は、辨財天女の化身に非ざるを得んや。何ぞ其れ、容色小町に類して、眉目衣通に似たるか。然りと雖も、昏夜の行、鬟眉の男子、猶ほ且つ之を難る。而かるを、況んや、深宮閨黛に於てをや。意ふに、當に緊要の密事あるべし、願くは、其錦心を吐露し、僕をして與かり聞かしめよ。僕不肖と雖も、安んじ一臂の力を竭さゞらむや。

（字解）稽は曲げること、顙は額、稽顙は頓首と相似てそれよりも尚ほ一層丁寧なる御辭儀○膜拜、膜はたゝくといふ意味があるから、これはぺこ〳〵と幾度も頭を下げること○陋、いやしい、見苦しい○枉、まげる、移す、運ぶ○蓮躅の躅は足跡、蓮歩の足跡といふこと○化身、かりに姿を現ずること○小町、百人一首「花の色は移りにけりな」の歌で、皆樣御存知の美人、仁明天皇承和の頃の人、出羽郡司小野氏の女、その父の名は、常澄ともあるし、秀澄ともあるし、其實ともあるし、孰れが正しいか私は知りません○衣通、まことの名は弟姫といつて、名高い美人、その姉は允恭天皇の皇后となつて居たのに拘はらず、又弁せて御寵愛なされた。天皇あるとき、この姫のおはする藤原の宮に御幸し給ひ、物陰から御覧ぜられると、姫はうちわびたる御氣色して、「我が脊子が、來べき宵な

り、さゞかたの、蜘のふるまひ、かねて知るしも」と詠まれた。なほ詳しいことは、日本書紀の允恭紀に出て居ます○昏夜之行、くらい夜分の御來訪○蟄眉、男は髮をのばし眉を剃らないから、特にあら〳〵しい處を示す爲に、付けたのであります○難、憚かると訓す、おつこうに思ふこと○閨黛、閨はねや、黛は眉ずみ、つまり女性といふこと○意者の者は、前にもあつた例の語助、意味なし、おもふにと訓ずれば、それて澤山○緊要、さし迫つて居て、且つ重要なるといふ義、○錦心、心の中といふことだが、何にしろ、相手は美人であるから、錦の字を以て形容したのであります○僕、やつがれ、謙遜した自稱の辭○一臂力、ひと肌ぬいで働く。

(文義)ところが、主人は急いで出て來て、蛙のやうにへいつく張り、恭しく御辭儀をしながら、之を迎へ、やがてとある一室に導き、上座に据えた上、遙か引き下がつて、ぺこ〳〵と頭を下げ、疊の塵にまみれるのも關はない位。さて言ふには、下界の見苦るしいのを御厭ひなく、かたじけなくも御足を運ばれたのは、如何にも有り難い仕合に存じます。一體、貴女は如何なる御方で御座りますか。辨天さまが、假りに御姿を現はされたのでありませんか。どうも、そうとしか思はれません。その御操致の美しいことは、小町の如く、目鼻だての揃つて居ることは、衣通姫のやうであるを見れば、只だの人間てはありますまい。けれども、暗い夜分、わざ〳〵の御來訪、荒々しい男でさへも、おつくうに思ふくらゐのところ、まして姫御前の御身では、猶更のこと、これは屹度、何か差し迫つた重要な秘密の御相談のあることゝ考へます。どうぞ、御遠慮なく、御心の中を仰せ出だされて、やつがれに聞せて下さい。やつがれも、男でありますから、及ばぬながらも、ひと肌抜いで、相違なく、御盡力いたしませう。

(評論)この一節、主人の言葉を述べたところは、如何にも上手に出來て居る。こつちから、まだ一語も出さない中に、主人の方から圏套にかゝつて來たのが、そ

もく\の始、その光景實に見る如くてあります。

女子秋波流眄、微笑曰、果令其言有如皦日、不獨賤妾慶幸、併一門闔族之幸福、雖然所以其不易明言者、妾懼機事不密、以貽後患、主翁乃屏去家人、誓其靡他、

（訓讀）女子秋波流眄、微笑して曰く、果して其言をして、皦日の如きこと有らしむれば、獨り賤妾の慶幸のみならず、併せて一門闔族の幸福。然りと雖も、其明言し易からざる所以の者は、妾、機事密ならず、以て後患を貽さむことを懼る、と。主翁乃ち家人を屏け去り、其他なきを誓ふ。

（字解）秋波流眄、ながし目といふこと。横目を使つて情あるさまにぢろり觀る○有如皦日、皦日は明かな日といふことで、つまり「一點の詐僞なし、さりながら天日の明かなる如くてあつたならば」とこふこと○慶幸、よろこび○一門闔族、親類の末々まで殘らずといふこと、これは何を指したのか、後になつて自ら分ります○機事の機は、機關の機で、謀を廻らすこと。事は事を行ふこと。○貽後患の貽はのこす○屏去の屏は退ける○靡他の靡は無と同じて、古い文にはいくらもある。こゝでは莊重の趣を添へる爲に、わざと眞似をしたのてあります。

（文義）女は之を聞き、ながし目に主人の方を見やり、につこり微笑んで、若し今述べた言葉が、詐や僞てなく、明きな日のやうてあつたならば、まことに頼母しいことて、たゞ妾ひとりのよろこびばかりてなく、一家一門、親族の末々までの幸福てあります。だが、早速あからさまに言ひ出し惡いのは、事を爲すの用意が十分でなくて、雙方ともに、思ひがけぬ後々の禍を殘してはならないと思ふからで、きつとそれに相違ないといふ處を拜見いたしたいものでございます」といひました。そこて、主人は家内の者どもを退け、これで御安心下され、決して人に洩らす樣な事はしませんと答へました。

（評論）この一節ては、有如皦日などゝいふ文字を使

つて、重々しい態度を見せたのが、作者の手柄であつて、なか〳〵秘密を打ち明けない處が、この文の主人公たる怪しの女の手段であります。文章からいふと、例の襯染法であつて、こゝらは、まだ下染めの處であります。

咏歌の志をり（三）

文學士　武嶋羽衣

（原）あはれといへどいたづらの
　言の葉陰に何かせむ
靈はなけれどなき骸を
　さぐりてなげく人やたれ

（改）あはれといへどいたづらや
　かなしといへど何かせむ
餓ゑて氷れるなき骸を
　だきつゝ泣ける人やたれ

これ第三節也。いたづらのといふ語、おもしろからず。下へのつゞきもわろし。いたづらやと改むべし。いたづらやはいたづらによいたづらなることとなり。かひなきことよとなり。

言の葉かげにこれも語をなさず。前と對句にしてかなしといへど何かせむと改むべし。

靈はなけれどこの句力なし。下になき骸といへば、靈なきことはいはずして明かなり。重複なるいひかたなり。されはいま一きは適切に餓ゑて氷れるなどあるべきか

さぐりてなげく。さぐるは暗中の物など取るさまをいふ。眼前のものを取るをさぐるとはいはず。なげくは長大息することなり。ためいきをつくと也。こゝはわか子、わが夫、わか兄などのなき骸を見たるさまをいふなればなげくにては力足らず、慟哭し哀號するなどいふべきところなるべければ、だきつゝなけるとあるかた少しはまさりぬべし。

（原）耳しひて聞えざりつる耳もとに
　神のさゝやきなほ聞えけむ

（改）しひはてゝ聞えざりける耳にだに
　神の御言はなほとほりけむ

これ今の世に名高き歌人が獨逸の音樂家ベートーヴェンを詠じたる歌なり。ベートーヴェンは千七百七十年獨逸のボン市に生れ、千八百二十七年享年五十八才にして身まかれり。天禀の英才一世を傾動し、雷名全歐洲にとゞろきたる人也。しかれども不幸にして、目しひ、耳聾うければ、こゝに耳しひてきこえざりつるとは讀みたるなるべし。

第一に是歌の疵ともいふべきは一句に耳しひてといひ三句に耳もとにといひて耳といふ字を二たび出したることなり。そもそも歌は僅々三十一文字のうちに無量の感慨をこめむとするものなれば、餘計なる文字、なくても意味の聞きとらるゝ如き文字はなるべくこれを省かざるべからず。而してその代りに他の重要なる、欠くべからざる文字を入るゝやうつとめざるべからず。この故に古來、歌學者は一首のうちに同じ意味の文字二つ以上あるを同心病とて、いたく歌の忌むべきことゝせり。これ洵に理由あることなり。同心病とは同じ心則ち同じ意味の文字ある病といふことなり。是歌もまたこの病あるものゝ如し。耳しひてといはゞ、耳もとにといはずとも耳といふことは知らるゝならずや。又耳もとにといはば上の耳しひては何とか他のいひかたを用ゐるべきならずや。されば一句をしひはてゝと打直さば是難を免るべし。又耳もとにといふことももとゝいふ字餘計ものなり。耳にきこゆといひてこそ穩やかなれ、殊更に耳もとゝいふべき理由なきにあらずや。もし又耳と耳もとと同じ意味なりとせば、これあやまりなり。耳は總躰の名にして廣く、耳もとは耳の下部にして狹し。手といへばひろけれど、袂(手本)といへば、手のもとのところにて袖の下部をいふにても知らるべしされはこれも改めて耳にだにとなすべし。かくせばだにといふ語をさへ添ふるを得て、意味一層つよくおもしろくなるべければ也。

第二の疵は聞えけむといふ五句の字也。これも第一の疵と同じく同心病なり。二句に聞えざりつるといふ字あれはなり。尤もこのところは二つなくては意味きこえざれど同字を二つならぶるは不手際ならずやされば

この五句をとりて、易ふるに、通りけむと打直すべし。かくの如く必要もなきに同字を二つも三つも一首のうちに用ゐるは詩家の嫌ふことなれど、時として、ことさらに、ある目的のためにかくすることもあり。その場合には、それがために、歌の明瞭をまし、勢力をつけ、流暢をますものなれば、忌むべからざるのみならず、かへりて好むべきことなり。さればこの二者は心を用ゐて、區別するを要す。今一例をあげむ。

君がため木曾の山路雲わけて
また去ぬらむか木曾の山路

思はじと思ふことこそ思はるれ
眠らむとして眠られぬ夜は

あしびきの山の峽に妹まつと
われ立ちぬれぬ山の峽に

これは皆歌の意味を强からしむるために、故意に同字を重ね用ゐたる例なり。俳句に

松島やさて松島や松島や

見わたせば、なかむれば見れば須磨の浦

とあるも同じ、また

あしびきの山の山守もる山も
もみぢせさする秋はきにけり

などあるは一首の調子を好くせさするために用ゐたる例也。更にまた

荒きあらし、白雪、しめれる霧、青柳、

などいふ詞づかひを見よ。あらしは荒風なり。しとは風といふ意なれば、あらしといへばおのつから荒き風といふと知られて上に荒きといふ形容詞はなくてもよかるべきやう思はれ、雪は白きに限りたれば又上に白といふ語のなくてもよかるやう思はれ、霧も乾きたる霧といふものあるべきやうなければ、しめれるといふ語、無益に思はれ、柳も青きのみなれば、これを青とことわるまではなきやうに考へらるれど、而かもこれらの形容詞あるために、荒きこと、白きこと、しめれること、青きことは、無きよりも一層いちじるしく、眼前にうかぶにあらずや。さればこれらの形容詞は無用の如くにして、實は用あるなり。則ち歌の明瞭をますといふ働きあ

るなり。さればこれらは決して重複の文字として、このベートーヴエンをよめる歌と、ひとしなみに論ずべきにあらず。よく／＼思ふべし。今日の歌よむ人にはしば／＼この重複のあやまりに陥れるもの多し。次の歌の如きは皆しかなり。

父まさば申さむものを母まさば
　語らむものを父母はなし。

わが息の終りの息の絶えむ時
　この苦みは身をやしるべき。

とこ闇の闇のそこより何ならむ
　われをよぶらむ聲のきこゆる

これに反して古人の歌に

深山木のその梢とも見えざりし
　櫻は花にあらはれにけり

これを俗言になほしていはゞ「深山にある櫻であるによつて古びて櫻の梢とも見えざりしが、春になればその櫻木に櫻の花がさきみちて、いちじるしく櫻と見ゆるやうになりたり」となり。一首のうち櫻といふ字五つも入るべきをたゞ一つに減じて、他は深山木といひ、梢といひ、花といひてその意をきかせたる、その苦心のほど、鍛錬のほど、まことに感ずべきにあらずや。

○

（原）いかでわれ生れかはりてそのかみの
　清きわが身となるよしもがな

（改）いかでわれ生れかはりていにしへの
　けがれぬ身ともなるよしもがな

この歌は前に出でたる歌主の、同じくよめる歌也。さて第一に惡しきところはそのかみといふ語の用ゐかたなり。こゝはそのかみといふ語をたゞいにしへといふ心に用ゐたれど、かく用ゐるは惡しき也。そも／＼そのかみといにしへとは語意同じきが如くにして、しかもやや異なるところあり。そはいかにといふにそのかみは其上なり。其とは、ある時をさしてそのと指したるなり。上は上つ代の上にして過ぎ去りたる時をいふ。さればそのかみとは、ある事に關係せる過去の時をそれと定めて指したる語なり。これに反していにしへは去にし

遊なり。すぎ去にし昔の遊りなり。則ち過去を漠然とさしたる語なり。そのかみの如く一定の時をそれとさしていいへる語にあらず。これ二語の區別なり。

かゝる區別あるが故にいにしへといふ語は突然いかなるところにもあらはれ來れど、そのかみは前文に、ある時代のことを話し、それに關してその時と定めいふ塲合にのみ用ゐらるゝなり。たとへば古歌に

吉野山たづねいりにしそのかみは
花見むとしも思はざりしを

といふがあり。一句二句に吉野山にむかしたづねいりしことをいひ、それを受けてその當時はといひ下せるなれば、そのかみの用ゐかた正しき也。又

菊川の水沫ときえしそのかみを
思ひくみてもぬるゝ袖かな

とあるも、むかし光親卿が東海道菊川の驛にて水沫の如くに身まかりたまひしその當時を思へばといへるなれば、そのかみの用ゐざま正しき也。

しかるに前にかゝげたる歌はいかてわれ生れかはりてといひ來りて突然そのかみと言ひ据ゑたり。前に、そのとさしていふべき時なき也。されば用ゐかたをあやまれるにて必ずいにしへのとかむかしのとかなかるべからざるところなり。よく〳〵思ふべし。すべて多くの言語のうちには意味大躰は似たれど、よく考ふれば同じからざるあり。これを類語といひて、とかくにまぎれやすきものなれば、よく注意するを可とす。いづらといづち、匂ふとかをる、大刀と劍、うごめくとゆらめく、まかるとはべる、だにとさへ、森と林、なつかしとゆかし、名にし負ふと名だたる、いざといで、などその例也。なほこれらの區別につきてはつぎ〳〵説明すべき折もあらむかし。

さて第二の疵ともいふべきはわが身のわがにてこれは一句のいかてわれのわれと重なりて同心病となればなり。上にわれとあれば下にはわがといはでもその意はおのづから酌まるゝならずや。さればけがれぬ身ともと改めむかた可なるべきか。

○

（原）この朝けはれる氷はうすけれど
　　寒かぜしるく冬はきにけり

（改）このあしたはれる氷はうすけれど
　　ふかくぞ見ゆる冬のけしきは

原歌の心は夜のあけがた戶などを明けて見るに瓶の水など氷はりたり、その氷はうすけれど、寒風のふきくるにつけても冬の來りしことはいと著しと也。第一に改むべきは朝け也。朝けは用ゐかたのあやまれりといふにあらねど、朝けとは朝明けにて朝のあけはなれぎはをいふにて、曉とほとんど同意の語なり。こゝは朝けといひても無論誤りにはあらねど、起き出てゝ戶をあくる時のけしきなれば、さばかり早き朝けといはむよりも、たゞ大よそにこのあしたといはむかた穩かなるべければ也。序にいはむが朝けといふ語をあさげと濁りて發音する人あり。これは惡しきにて必ず淸みていふべき語ぞ。

寒かぜしるく冬はきにけりこれ第二の疵なり。寒き空をさむぞらといふなれば、寒き風をさむかぜといひても差支なきやうなれど、しかはつゞけぬが常也。なほ初日とはいへど、初雲とはいはず、うき雲とはいへとうき風とはいはざるが如し。これ言語には慣用といふことあれば也。吾人が歌をよむに當りて、常に注意すべきは、この慣用の言語を用ゐるといふこと也。言はるべき理由ありても慣用なき言語は未熟なる言語なり、生硬なる言語也。國民に正當と認められざる言語なる也。よしまた、この寒かぜといふ語のかはりに正當なる語を易ふるを得るとしても、この歌だゝかく寒風しるく冬はきにけりとのみいひては、あまりにはたらき無からずや。不手際ならずや。何等のおもしろみなきにはあらずや。さるを、もし、ふかくぞ見ゆる冬のけしきはといはむには、上の薄くといふに對して氷はうすけれど、冬のさまはふかく見ゆるといふにて、薄しといふ語もはたらきて、比較的におもしろき歌となるべし、すべて歌は思ふまゝを、たゞすらく〵とのべたるばかりにては、かひなきものなり。必ずや、工夫を用ゐて、一ふしあるやう、はたらきのあるやう、手際の見ゆるやうよまむをこそ專一とはなすべけれ。

御伽話

小人國

長田蕙香女史

其一

昔々、アーサ王の時代に英吉利の某る處に夫婦のものが住んで居りました、此の夫婦のものは別に是といふ財產もなく、只小さき家屋と畠と牝牛とを持つて居りまして、貧しくは暮して居りましたが、誠に心懸のいゝもので、夫婦とも根氣よく働いて自分より、一層貧しき人達に惠んでやるのを、一番の樂しみと致して居りました、夫は畠へ出て穀物や野菜を作り、妻は一家を調へて、其間には牝牛の乳を搾り取るのが役目で、牛乳をば自分達は飲ずに、皆町へ賣出しました、斯樣に貧しいながら、別にひどく不自由もなく暮して居りましたが、此人達にとり、誠に不幸な事が一つありました、夫れは一人も子寶がないといふ事で、「我々が老年になつた時には、どういふ事にならうか。誰が畠を耕したり、乳を市場へ運んだりしてくれるだらうか。たつた、一人でよい故、小供があつたならば年を取つた後で、其子が我々を勞つて呉れべうに、なんと悲しい事ではないか、などと、夫婦のものは、常日頃歎いて居ました、

偖、此時代に澤山の魔法使がありまして、其中に一人アリンといふゑらい魔法使が、此善良なる夫婦の者に小供を授けてやりたいと考へ、或朝、ぼろ〳〵に破れた汚い着物を着て乞食の風をして、其家を音づれて戸をたゝいた、夫が畠行きの留守をして居た妻は、戸を明けて出て來まして、こういひました、嘸、お勞れて御座いましたらう、內へ這入て暫時、お休みなさい、私共は貧乏て何にも差上るものはございませんが、パンや、牛乳が御好きならば差上ましやう、これは私共の食物でありますと、魔法使のアリンは禮を申ました故直に、むき出しのテーブルへ雪の樣に白きテーブル掛をかけ、パンと牛乳とを用意した、アリンは、食べ終りまして、

「斯樣な結構な朝飯を、頂いた事は今迄に御座いませんてした、」と大そう悦んて、

「私が歸る時に何か御禮の爲、贈物をいたしませう、」と申ました、貧しい此妻は、此汚い乞食が、物を呉れやうといふ事を、可笑なとだと思つたらしく驚いて見て居りまするど、アリンは立ち止り樣、上に纏つて居つた乞食の假裝を脱ぎ捨てゝ、魔法使の服裝になつて、

「我はアリンてある、サアー何んても汝か欲しい物を撰へ〳〵」と叫ひました、て、妻は再び驚いて何んと言葉も出ません、そこでアリンは、

「汝は、何を一番望むか、」と心切に、尋ねましたので妻は漸く、こういひました、

「魔法使さん、私はよい夫があり、よい家屋や、畠や、牝牛を持て居りますが、若、たつた一人の小供があつたらは……若、私の親指より長くない位の大さの小供が一人さへあつたらば、もう私共は實に〳〵全く仕合でありましやうものを……」と申ました、アリンは

「宜しい、」といひなから、妻の親指の大さを目で見計ひ、「正直な心を常に持ちておいてなさい、左樣すると何時しかよい時か汝にむいて來ませうといふかと思ふと、アリンの姿は、何處へか消えてなくなりました。

其二

アリンは、直に仙人の女王の處へ飛んて行き、この夫婦の望み事を、委しく女王に話し女王から、分りました、といふ承諾を得ました、夫婦のものは或る日天氣の大そうよい朝、天から降つたか、地から湧たか、一人の男の兒を授かりました、其男の兒は、大變に小さな子で、夫婦が其長を計つて見ると、丁度、妻の親指位しかありません、それ故、何處ぞへ紛失つてはならぬと、夫婦は大心配の餘り、父親の木の靴を小供の搖り床に供へるといふ事にいたしました、兩親が、其子に名を命ける日が來ました時、仙人の女王は、窓から飛んて這入て來て、小供の教母になる爲に、來たのだと申して、子供が眠つて居る靴の搖り床を のぞき見て、親指太郎といふ名を命けました、如何ならば最早此子は、決して母親の親指の大さより成人しませんから…… 暫くすると、大勢

の仙人が、此小屋へ集つて來て、小供の着物を作り始めました、一番めの仙女は、蜘蛛の巣てシヤツを造り、二番目の仙女は、鼹鼠の柔皮て靴の外部を造り、其毛皮て内部を作り、三番目の仙女は、兜虫の羽て上衣を作り、四番目の仙女は、樫の木の葉て帽子を作り、而して此の外の仙女は、一つの絹の外套を着せました、其外套は、女王が自分が一番利巧と思つて居る蠶に、命令して此小供の爲に、態々織らせたのであります、夫で女王は、太郎が今迄寐て居りました、靴の搖り床をば滿足に思ひませんてしたから、其爲に、一つの卵の殼で新しい吊床を造ることを命じました、この卵の殼は、金てありまして それは金の卵のみを生む鵞鳥が生んだ卵てありました、併し、仙女等が行てしまいました後て、太郎の母は、小供が金の卵の床ではよく寐つきませんことを見付け出しました、元來太郎は、利好な子て、父の古靴の搖り床の、粗末で立派てないのを好んだので、靴の中の床へ入れて貰はぬとすぐ大きな聲て泣き出しました、て母親は、此金の床は、女王が折角心切の心組て、與へて下すつた物てあるけれども、據なく取りのけた位てした、



其 二

親指太郎は、直に歩いたり、話をすることが出來ましたもの丶、少しも成人いたしませんて、相變らず誠に小さ

い、併し、餘り利發でありましたから、父も母も、そんな小さいなどゝいふヿを、氣にかけませんでした、母は小使錢を、二錢づゝ毎日貯へて置きまして、或日、市場へ行きました時に、玩具の道具入の箱を、太郎に買つて參りました、其箱の内には、椅子、テーブル、コップ、茶椀、皿、ナイフ、サヲ、コーツヒ壺なども皆揃つて居りました、而して此道具類をば臺所の机の上に備へ付てやりましたて、太郎は自分相應の小さなテーブルの前に、据えられた椅子へ腰を掛け、小さい皿や、コップで食たり飲だりして居りました、太郎は一つのビスケットを一週間かゝつて食ます、一つのビスケットは太郎には充分な食物で、丁度普通の小供に四斤位のパンを、あてがつた位のものです、

太郎が充分成人した時に、太郎の母は讀みかきを敎へました、此が實に困難な事なので、母は本を机の上へ、眞直に立てゝ置くと、太郎は本の前を少し距りて、あちらこちらと歩き、暫くしてやう〳〵一字丈を讀みます、夫は太郎に取りては、本の字が壁にかゝつて居る廣告のびらの字の樣に、大そう大きく見える故、文字を讀むのに骨が折れるのであります、又、太郎が字を書くに勞れた時には、肩へ筆を持ち上げて、それから兩手で筆を持て、膝ゝ上へ筆を下し、それを力に起き上つて椅子を離れるのであります、また、父親に連れられて外へ出て行きます時、父が畠で働いて居る間、太郎は其隅の方では父のお辨當の番をさせられました、太郎はいつても、草の鞭てお辨當へ集つて來る蠅を、逐ひ拂つて居ましたけれども、風が吹く日などは、父は太郎が吹き飛んで行かない樣に、大きな薊草か又は、他の植物の莖へ繫いて置かなければなりません、て、他の小供等は太郎より見ると、まるで巨人の樣ですから、うつかりすると、蹈み潰されそうなので、他の小供と遊ぶヿが出來ませんから、父は太郎に、一つの遊ぶべき庭を與へました、其庭は窓の中に立つて居る植木鉢で御座います、それへ種を蒔いた處が、花が咲きましたから、太郎は毎朝一番よい花を見付て夫を手折て、肩へ擔ぎ母親が朝御飯に座つて居る處へ、持て行つて母親に見せました、

太郎の聲は、其體の小さいやうに、細く小聲であつたから、非常にきゝ取にくい、夫故太郞は、兩親に信號で話をする樣に致しました。是れ一つには、ふだん語が通じぬ故、勢ひ大きな聲を出して喉をいためるからであります、太郎は兩親にごく近よつた時に、時々話をしますが、自分は餘り話はしないで、多く人の話を聞き、色々大切な事を覺えました、自分は常に、饒舌つて計り居れば覺へる機會がないから……。暫くして太郎が敎母てある所の仙人の女王は、太郞が充分成長いたしましたから、特別に一つの劍を造つて



遣りました、女王は太郎に、蠅や鼷鼠が、獅子や虎の樣に大きく恐ろしく見えるのみならず、太郎の命にとり、誠に危險だといふことをよく知つて居りましたから、此劍を造りましたので、これは女王が自分でよく研いて銳く鍛へた針で出來て居ります、太郎は女王からそれを授かつて以來、常に腰に挾して居て、黑兜虫や蜘蛛などの樣な、自分の身に取り大きく思ふ動物に、寐て居る時襲はれるといふ恐れがある故、床へ這入る時でも、暫時の間も身の邊を離しません、

或日のこと、太郎は例の植木

鉢の中の庭で、勞れて來る迄働いて居りました、軈て日傘代りになる大きい葉の草の陰に、うと〳〵眠りかけた時に何だか、ひどく螫した樣に感じたて、直に眼を覺ますと、一つの大きな蝶が居りました、太郎は劒を拔いて蝶を刺殺さうとしましたが、ふと蝶は人を螫すものでないといふことを思ひ出しましたから、遂に免してやりまして、何處ぞに本當の敵が居るだらうと、鉢の中の庭を廻つて、索し歩くと一つの大きな黃蜂が、雛菊の下にとまつて居るのを見付け出しました、若もそれが蜜蜂であつたならば、蜜蜂は蜜を採るし、又他の者に襲はれた時でなければ、螫さないといふことを知て居りますから、逃してやるのであるけれども此はよく人を螫す憎き黃蜂、而も太郎が寐て居る時に螫した奴でありましたので、太郎は透さず彼の劒を拔きはなしまして、黃蜂と長い間鬪いました末、黃蜂をはとう〳〵退治しまして、其首を丁度桃太郎が鬼ヶ島から首でも取て來た樣に、凱旋の記念として內へ持て來ました、

其四

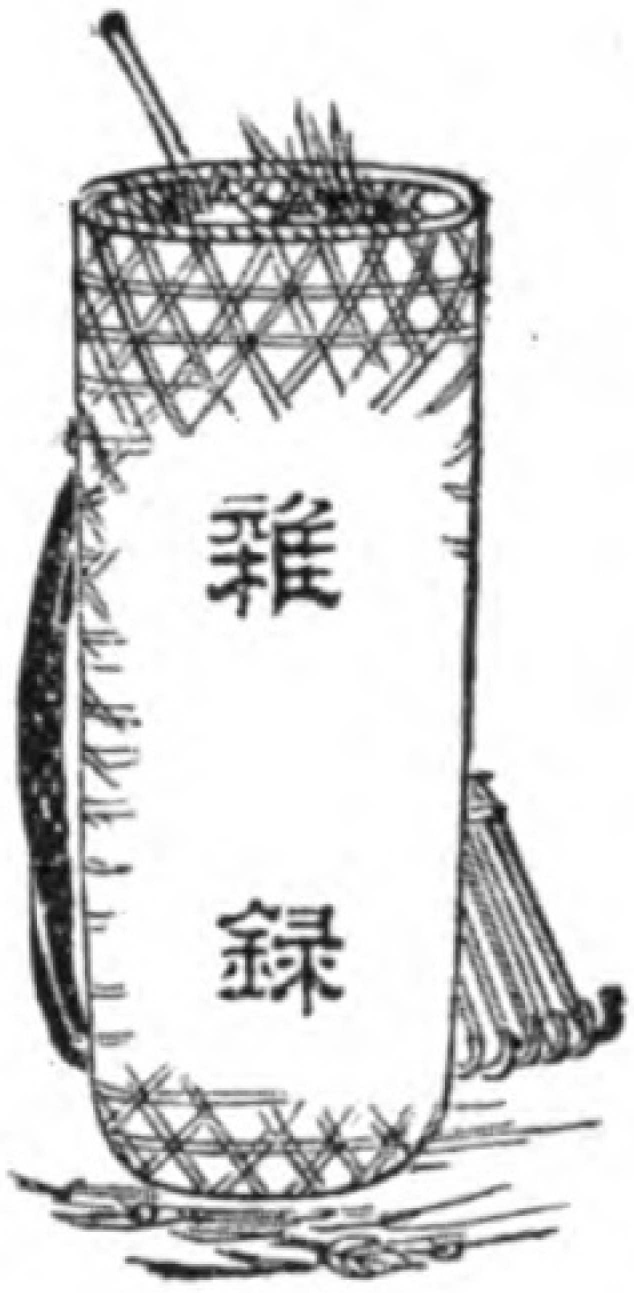
此樣な過失は時々困難な事を惹起しますから、太郎は女王より左樣な事はせぬ樣にせよ、大變に探索を好む事と、自分が關係もしないとに干涉して見ることを、非常に好むから、此んな過失があるのだと、嚴しく罰せられました、併太郎はこの後折々其戒めにふれる樣な事を仕出かしました、或日のと、他の小供等の遊んで居るのを、大きな石の尖へ攀ち登つて見て居ますと、端へ絲の付いている小さい袋を持て居ました一人の小供が、其袋が邪魔になると見え、遊びの群から拔け出して來て、其袋を太郎が坐つて居た石の後へ大事に据へて置いて、又他の小兒の方へ走つて行きました、太郎は此の躰を見まして、

「不思儀だ、何が此袋の中に入れてあるだらうか、私が行つて一つ見てやりましやう、他の小供らは見やしまいと、獨り首肯きながら、石の尖から滑り下り、袋へ這上つて自分位の大さ袋の中に這入て、何か中にある

か見ないのはどうも物好の心が滿足しませんでした、て、直に庭にある澤山の大きい圓い重いものを見出して、それが橡の實であつた事を知りました、
暫時たつて小供らは、一勝負遊んで仕舞つて、今度は橡の實で遊び始めた、袋を持て居た小供は、自分の橡の實を亡くしましたから、もつと袋から取出さうと思つて、走つて來ました、其時は丁度太郎が袋から這ひ出やうと思つて、一寸袋の口から頭を出した時でありましたから其子供は大そう〳〵腹を立て、
「ヤ、此の小さな奴めがよくも〳〵僕の大事な橡の實を盗んだな、」と叫びました、太郎は犬小屋から犬が顔を出したやうに、袋から外を眺めながら、
「私は少しも惡い事は致しません、私は一つも盗みはいたしません、何卒免して下さい、」と詫びましたれど、かの小兒は承知しません、袋の端の絲で太郎の首を縮付けつゝ
「僕は信用しない、汝は善くない事を爲る爲に此處へ這入つたのに違ひない、僕は汝を窮命するのだ、」といひつゝ、可愛さうに絲を縮て袋を上下へひどく動して、太郎が泣き聲あげて免してくれ免して……と叫んでも中々聞きません、
「私は只其處の中に何があるか見たいと思つてしたのです、どうか免して下さい、もう、再び斯樣な事はしませんから……」と袋の中から幾度も嘆願しました末、漸く袋を開いて頭から先へ出してくれました、太郎は辛くも命を拾ひて、我家へ歸りましたが、當分は身體の骨々が痛んだのです、併、又五六日經つと前の事を悉皆忘れて仕舞ました、

（次號未完）





米國青年女子の理想

米國女學生の狀態一斑
米國學校生活の半面

在米國スタンホード大學　飯島立峰

是は近時某教育家が米國女學生に向て左記二問題を提出して彼等の意向理想の如何を試みたのであります。其問題は

（一）社會に生存上男子たるを欲するや女子たるを欲するや及び其理由

と謂ふのである、語を換て言はゝ、世に生活する上に於て、男子と女子との二者何れを可と思ふか、或は其何れを撰ぶか、といふ問題である、第二は

（二）汝等が從來讀み又は聽きたる偉丈夫又は女傑の中にて誰々の如くならんと欲する？

といふのであります。之は第一問題に關連して來る問題でありまして、男子たることを欲するといふものは、古今の英雄豪傑として知らるゝ男子の中に付て選び、女子として滿足するものは、女丈夫の中で選ぶは自然の事であります。

此二問題をニウー、エングランド及米國西海岸諸州の合計六百の生徒に向て問ふたのである、然しニウー、エングランド女生の分は本問題たる米國婦人に直接の關係がないから省いて、西海岸女生より得たる二百五通の答案の結果を左に記します。先づ第一問に對する答案の結果を百に付ての比例數で云はゝ左の如くである。

▲女子たるを欲するもの即ち女子にて滿足するもの　八十六割

▲男子たるを欲するもの　十四割

尙前表を詳しく云はゞ、女子を以て可とするものは百

人に付き八十六人の比にして、殘りの十四人は、女子は面白くないから、男子になり度いと願ふものである。實に面白き結果ではありませんか、私は日本に居りました時、多く日本婦人より耳にしたる語は「アー男子であればヨカツタ何故女に生れたのであらふ」之は十人の内八人九人迄は確に然う謂つて居られましたが、（心の中は知りませんが）、米國女子の考は全く反對である、即ち之が間接に米國婦人の境遇の良好なることを示して居ると思ひます。

偖て其理由書を見るに、種々樣々である、其中で十四人の男子たる事を欲する理由を概括して述ぶれば、左の如き區別がある、

▲男子の生涯が樂で、容易で、困難が少ないと謂ふもの即ち其一二例を擧ぐれば、「男子は女子の如く種々困難なる責任を負はないから、私は男子たることを望む云々」又他の例は、「男子は氣樂な即ち安心の時を多く持て居るから、妾は男子たることを欲する」等である。

▲女子の仕事勞働には無報酬のものが多いことを不滿に思ふもの、即 其理由して陳べたる一例を擧ぐれば、

「男子は一定の報酬を獲て、一定の時間だけ事を執るに反して、女子は無報酬で、而も時間の定りなく働かんければならぬ、例へは晝夜家を警衞し、又は料理の如き、洗濯の如き、殆ど定限のなき仕事が多いから、妾は女子たるを欲せず云々」

▲等しく國民でありながら、男女兩性間に完全なる平等を欠くことあるを不滿に思ふもの、其理由書の一二例を擧ぐれば、

「妾は男子たることを願ふ、何となれば、短時間働きて而も多くの報酬を獲るを見る云々」又「男子は名を揚け、世に知らるゝ多くの機會を持て居るから、妾は男子たることを欲す」と

第二に女子たることを以て滿足する八十六割の多數者の理由を概括して示さば左の如くであります。

▲女性は男性に優ると信ずるもの三十五割

▲男子の生活を單調無味として嫌ふもの二十割

▲女子の仕事の直接に有用有益なることを希望するもの十七割

▲殘りの十四割は愼重にして、寧ろ明答を避けむと企てたる形跡がある、然し女子の運命は、男子に優ると信じて居ることは推察できる。

是等の答案を尙精密に注視すれば、一の邊幅虛搆なく、實に無邪氣にして天心爛熳なる精神を現實に發露して居る。一二例を擧ぐれば、「女子たることは一層の美である何となれば、女子は長き美しき毛頭を持て居るなればなり」又「女子は男子よりも一層美しき躰容と腰とを持て居るから、妾は女子たることを幸福と感して居る」等である。

次に前記の四種の答按に付て二三の例を擧げ、彼等の意向の一班を窺ふの便に供します。

(甲)種に屬するもの丶中に左の如きものがあります。

「妾は數多の善き女子を知れども、善き男子は極めて稀れてある、故に妾は女子たる事を最良と信じて居る」と大喝一聲實に米國男子をして顏色なからしむるの思ひがある。又「妾が女子を優ると思ふ所以は、男子は途中にして或は免れ難き事情の爲め、或は自己の怠慢に由て廢學するもの丶多きに拘はらず、女子は善良なる敎育を續いて受くる事が出來るからである」又「女子は社會に於て男子よりも一層多くの名譽を持つて居る、現在法律の規定に從つて、妾は凡ての職業中敎師ほど良いものはないと思ふ」と法律云々の一語は實際之あるを見ず、男子も元より敎員たるを得れども、現今既に學校によりては、女敎員多數を占め居る處も澤山あり、且將來益々增加する傾向あるは事實である、又男子を宗敎上及び實用上より觀察して女子の優ることを論じたのもあります。

「女子は男子より一層神に近くある、且又多くの善事を爲すは女子である」又「妾は何れの時に於ても女子たることを欲す、何となれば男子は往々酒色に沈り、又は竊盜を爲す、加之彼等は子女の着類其他有要品を製することを得ざればなり」又「妾が女子が男子に優ると

いふ理由は女子は男子によりて一層生産的であるからである。

(乙)種の得所男子の生涯は單調で且荒涼であるから好まぬ之に反して女子の生涯は實際偶然の事が多く、不意の事、機會、幷に成功し得べき事に付て滿ちてある。然るに一方男子の境界を見るに、興味なく平調である、今其二三の理由書を擧げて參考に供します。女子は、男子よりも一層多くの愉快を持ち、幸福なる生涯を有して居る」又「女子は種々の場所に行くことを得從つて多くの物を觀るを得るに反して、男子は熱鬧の肆店事務室に上り居らんければならぬ」想ふに女子は特に米國婦人は己れの意の欲する所、若しくは父兄の忠告に依つて東西南北何れの地方にも赴き嫁するを得又獨身者として生涯を送るを得、且日本の如き養子制度の行はるゝ國に於ては、其祖先の家を相續する爲めに女子にても往々其生地に一生を終らざるを得ない運命に立つ事があるけれども、米國女子は、他に嫁するか、又は獨身者と他に家を持つか、兎に角其生家に止まる必要もなく、又止まるを得ないから、實に天涯自由の身と云はんければならぬ、男子は之に反して、祖先父母の家名を襲ひ、其生地に止まる場合の多きは事實にして、前理由書は此邊の消息を漏したるものと見て可い。

(丙)十七割を占むる女子の有用なることを願ひ、且認め居るものゝ中には種々の理由を附し居ると雖、男子を壓倒し、又は彼の境界に迄も侵入せむとするが如き亂暴なる希望願慾を有するものはない、要するに教育訓導の職を以て偉大貴重のものと信じ、之を希望するが如く見ゆ。彼等の答按中の文句中「學校の教員たること。日曜學校を教ゆること」「音樂教師たること」云々の語句が多きを占めて居る、又彼等の中には非常なる大望を述べて居るものもある、音樂家たらんと希ふもの畫工又は著述家たらんことを希望して居るものもある、「妾は著述を以て世界の最も有用有益なる仕事と思ふ故に著述家たらんとを欲する」と云ふ答もある

(丁)最も愼重の態度を取りて居る最少の十四割は、十分の注意を以て兩面(男女)を觀察し、結局沈重なる說

を與へて、明答を避けて居る。其答按中に左の如きものがある。

「男子は金の點に於て多くの運命を持つ、併し女子は善事の母である」といふが如き安全なる答にあらずや、或は嚴格なる區別を二者の間に立てゝ居るものがある、「男子は困難なる勞働に堪へ、女子は智識感情に富んで居る、若し女子にして男子と地位を代ふるあらんか、何の用にも立たざるべし、實に男子は有形的に世上に働くから、我々女子は無形的に思想界に働くとを、得るのである」是れ兩性天職の異なる所を漏して居る。此に一種特別の妙案がある、「處女は生長して婦女となる、妾は元より然り、されど若し處女が長して男子となるとせば、寔に善良なる男子とならむ、何となれば、處女は概して童子よりも善良であるからてある」我國の所謂名相の家は賢人を出し、忠臣を得むと欲せば孝子の門に於てせよといふに等しくして、善き種は善き實を結ぶの理を執へ來りたのである。而も此警語が十二歳の一幼女より發したるに於ては、實に愛すべきの至りならずや。

其他第一問に對する答按中には、種々味ふべき趣味あるものも多くありと雖、其概要は右に述べたる種類に大別することが出來ますから、之で筆を止めて、次の第二問に付て少しく記し度いと思ひます。

自己の慈母、ミスヘレン、ジャクソン、ヂヨヂ、ワシントン、及びフロレンス、ナイチンゲールの四人は、彼等の理想的人物であることが多くの答按書で分るゝ彼等は此四人を神に次で尊敬し愛慕して居る、其次にはミス、アルコット、コルター、タシントン及びクイン、イリサベスてある。

「妾は私の母の如くあることを好む何となれば、曾て生れたる女の中で我母は最も愛らしう賢くあるからである」又「私の母は一の愉快の如く樂んで仕事を營み又優美なる性質を持て居るから、私は母を一番尊敬する」「私はミスペレン、ジャクソンたるとを希望する何となれば、彼女は詩嚢を滿たさんが爲め、海山にあつた事もある、又彼女は澤山の名詩を作つて居る、彼女は實

に一の豪傑である」次にナイクンゲルなるとを理想とする理由の中には「彼女の言行は共に高尚優美である」又「彼女は一の天使である」等である。

理想志望の前者よりは遙かに低く、且降りたるものにして、廣く世界の婦人の一般に所望するものに近き答按も少くない、例へば(一)王冠の金色燦爛たるに眩目して女王たらんとを願ふもの、(二)セレングールド女が巨萬の富に滿さるゝを見て同一運命を希望するもの、(三)高位の威嚴尊榮を慕ひてマルボロー夫人たらんとを希ふもの(四)現時の大統領マッキンレー夫人たらんとを祈るもの等である

米國婦人現時の眞相を描き居るものは、寧ろ次に擧くる答按の例である、

「女子は多く旅行し及び多くの金を費消することを得るから、妾は女子たることを欲す」

「女子は華麗なる衣服及び種々光彩の燦々たるものがあるから、女子は幸福である」

「男子は多くの困難なる勞働を爲すに反して、女子にはこれなし、故に妾は女子を優ると思ふ」

「女子の處刑は男子に比して輕く且稀れてある、是れ女子に對して法律が寛大であるからてある、故に女子たることを歡ぶ」等其他類例少からずと雖も、之を略す。

要するに斯る類例は一讀甚だ醜陋の嫌なきにあらずと雖、余は米國婦人現時の眞相を穿ちたるものとして、諸卿に紹介せざるを得ず、されど翻つて其斯の如くなる所以の根源を尋ぬる時は、彼等は確かに之を爲し得るだけの資格、素養及び力量あることを認めんければならぬ、然し男子は縱令單に男子の父に止るとするも、女子は決して然らず、實に婦人は女子の母たるに止まらず、一國若しくは人類全躰の養育者司導者である、果して然らば、其女子の理想希望の如何は、將來女子即ち母たるものゝ觀念たり、行動となりて、實現せらるものであるから、極めて重大なる事である。凡そ希望の大小、正不正、善惡は、其人一生の指南車である、故に抱負は極めて遠大極めて正且善でなくてはならぬ、想ふに米國婦人現時の眞相より打算したる青年女子の希望

は、或は外形の美、目前の小利に眩惑せらるゝものにはあらざるか、余は寧ろ其前數項に掲げたる高尚純潔偉大の理想希望を有する女子の將來頗る恐るべき者たるを信じて居る。而して斯の如き希望の女子は多數なりし事は、實に將來米國の益々隆盛に赴く前徴にして、米國の爲め賀すべく、祝すべきことである。特に左の言の如き最も味ふべく賞すべき價があると信じます。

「父よ妾が成長して後結婚する時には、私の欲する夫を持ち得るか」父答て曰く、「然り」、處女亦問ふて曰く、「私が結婚せざる時は一人の老婦人として、世を過ぐるは私の隨意であるか」父再び答て曰く「然り汝の隨意なり」斯の妙齡の一哲學者沈思熟考の後竟に語を發して曰く、「父よ妾は女子として社會に立つの甚だ困難なることを信ず、或は然らずや」と嗚呼、實に然り、々々、賢母良妻として一世の標本となり、一國民の養育家、敎導者となる事が至難至重にあらずして何ぞや、一國の女子たるもの斯の觀念なくして可なるべき、余は信じます、我敬愛する日本婦人は、元より一國女子の責任の至大至重なること、從つて世に處する事の頗る困難なることを覺悟し、決心し居らるゝ事を

女子の職業と簿記

金澤商業學校敎諭　土屋長吉

近來女子敎育盛に行はれ從て其地位の高まるにつれて、女子とても決して男子に劣るものにあらざること爭ふべからざるの事實となり、世人の女子職業に注目する者漸く增加し來り、郵便電信局、電話交換所、鐵道會社、印刷局等爭ふて女子を歡迎するに至りたるは、國家經濟上誠に賀すべきことなりとす、唯獨り未だ銀行、會社、商店等に於て簿記方として、女子を採用すべしとの說行はれざるは予輩の甚だ不思議に感ずる所なるを以て、玆に一言を述べて女子の簿記方に適すると、及び女子を採用するの利益多きことを明かにせんと欲す、但だ有夫の女子に此等の職業を執らしむるは或は弊害の伴はん恐れあれば、今は暫く未婚の女子に就て觀るべし。

夫れ簿記なるものは日々起る所の百般の取引を計算處理する一種技術的のものにして、其要は記錄を簡明にし計算を正確ならしむるにあり、而して之れが記錄を保ち依て以て計算の用に供せらるゝものを帳簿と云ふ、然れども簿記は唯簿記のみ又帳簿は死物なり、人に依るに非ずんば其効を奏すべからず、若し人の性は其行に現はるゝものなりとせば、帳簿を支配して計算を正ふする簿記方は必ず女子ならざるべからざるなり、今左に帳簿記入及計算整理上の要件を舉げ、女子の性質と對照して、之れを證せん。

(一)帳簿の記入は取引の了れる時直ちに之れをなすべし、男子は事を等閑に付するの氣味あれども女子は之れなく頗る秩序的なり。

(二)記入風は美麗(能書に非ず)にして且つ一樣ならざるべからず、女子は男子よりも美術的にして且つ叮嚀なり。

(三)帳簿へは取引を有りのまゝに且つ順序能く記入し何年後何人が之れを見るも一目瞭然たるやうにすべし、男子は時に才氣を走らして自分極めのことを記すの弊あり、「女子のすなる日記」と云ふ、記帳は古來女子の職とすべきものと見えたり。

(四)誤記を避くべく殊に出入貸借を誤記する時は容易に發見せられざるを以て注意に注意を重ぬべし、男子の性は粗放なれば時として此誤りを爲すことあれども、女子は小心翼々として苟くも相違なからんことを力む。

(五)數字の記入及計算は最も鄭重ならざるべからず、男子の注意力は女子ほどに高からず殊に女子の緻密なるは、一厘一毛だも苟くもせざらんとす。

唯女子は餘りに小心なるの結果仕事の運び遲々たるとあれど、然かも此性は如何に繁忙なる時と雖も男子の如く、善い加減になし置くの弊害なく殊に一般女子の性質として、男子の如く不正手段を敢てすることなきは、實に簿記方たるに適する長所となす。

女子既に簿記方たるに適す、次に簿記方なる職業が如何に女子に利益あるかを見んに。

(一)淸き職業なり、固より職業には貴賤なしと雖も、

簿記方の仕事は比較的小綺麗なり。

(二)收入多し、方今女子の手にせらるゝ職業は數あれども簿記方たるほど收入の割合よきものはあらじ、同等の資格を有する者にても郵便爲換管理所にては日給十八錢より三十錢位、印刷局、交換局、新聞社校正係とても皆之れより高きはなし、獨り簿記方に至りては多くは日給なるものなく、其被雇の當初に於てすら少なくとも八圓位の月給を受く(男子の實例)

(三)地位上進の望みあり、之れを給料より見るも爲換管理所の最高日給五十錢を以て極とすれども、簿記方は其技量の如何によりては月給二三十圓を得るに難からず、而かも彼れにありては其地位依然として雇員たるに止まり、如何に技能あるも如何に精勤するも終に本官に進むこと能はざれども、此れにありては其技能と信用とによりては、商店會社員として相應の好地位に進み得るの途あり、依て以て社會に於ける女子の地位を高め得べし。

(四)最好家婦たり得べし、管理所印刷局交換局の雇員と云ふ其職業決して卑しきに非ず、去れど何となく中流以上の男子は之れを嫌ふの傾きあり、現今實業の重んぜらるゝ世に於て何商店の簿記方と云ひ何々銀行員と云ふ、如何に地位ある夫に歡迎せらるゝよ、此妻既に簿記の修養あり商店會社の整理に熟練す、譬へ百萬の資産ある家に嫁するとも、其家計處理の如きは易々たるのみ。

(五)商業の練習、若し或は人に嫁することを好まざる者も、簿記を學べるの間簿記方として實地に從事するの間、自ら商業の練習を爲し得べきが故に他日女商人として經濟界に活歩することを得べし、

左れど利益は比較的のものなり、如何に女子の收入を增加し地位を上進すると雖も、簿記を修むること頗る難事に二年三年の歲月と學資とを要すとせば、二十圓の月給も決して高きに非らざれど簿記は左程に困難なるものに非ず、高等小學修了の者若くは十五六歲以上の女子にして尋常小學を卒へたる者ならば、三個月乃至六個月の修學にして能く普通商店の簿記方たり得べく

更に一個年の修養を積むに及んでは優に會社銀行に從事すべきの力を有す、商等女學校一二年の修業者は社會に立ちて何ものをも爲すべからず、簿記の修學豈可ならずや、

予輩は以上女子職業として最も適當なる又尤も利益あるものとして、簿記方なるものを照介したれば次に女子を採用するヿの商店會社に利益ある要點を說かん

(一)女子の性質より來る結果として、帳簿整頓し計算符合し不正其跡を絕つ

(二)監督に便なり、男子なれば往々口答へもすべけれど、女子は溫和にして節約のものなれば命令能く行はれ浪費少なし。

(三)商店管理上に利あり、男女幷びに業務に從事すれば、相互に競爭を生じ事務の進行速かなるのみならず、帳簿方と賣買方とは往々衝突するの憂ひあれど、若し其一方が女子ならば其溫和の性は自ら此爭を和らぐ

(四)經濟的なり、男子は槪して多額の報酬を要すべきを以て、商店は之れをして簿記方と賣買方とを兼ねしめ、銀行會社にても數課を兼任せしむる傾きあり、爲めに帳簿に誤記を生ずるに非らざれば事務粗漏に流るゝの弊を生ずれども、女子は槪して男子よりは薄給に甘んずるが故に此兼任の弊を釀すヿ少なし

女子が簿記方としての利益は女子自身と商店會社とに對し右の如く偉大なるに係はらず、今日迄此現象の現はるゝヿなかりしは蓋し女子が簿記の如何なるものなるかを知らず、商店會社も亦因習の久しき女子を見るヿ男子の如く重からず、女子能く簿記方として其任務を盡し得べきや否やを疑へるに由る、然れども此等の誤解は以上予輩の述べたる所によりて氷解せられ得べく、殊に女子が斯かる地位に進み得べきかの疑問の如きは、今後益々文明の域に進むべき我國としては愚にも付かざるヿなれば敢て言はず

最後に我國商業道德の頽廢は種々の方面に誤解を生じ、殊に貞操を重んずる女子の如きは甚だ斯かる社會に入るヿを恐るゝならんも、似而非ハイカラーは存外商業界に寡なく、又某新聞が某氏を攻擊せるが如きヿは信用を以て成立する商業社會には稀有の事なれば、無用の杞憂に過まらるゝヿなく奮勵一番盛んに簿記の研究に從ひ、予輩の說述せる方向に進み以て我經濟界に貢献する所あらんヿを、世の女子諸君に希望して巳まず

(了)

名家談叢

家庭教育の困難

記者曰く女史は北海道有數の豪商渡邊孝平氏の夫人にして熱心なる實験的家庭教育家なり

渡邊かつ子

私の考へまする所では、女子は重に内に居りますること故に、女子の任務の中では、種々の困難もありませうが、先づ一家の家政を整理して、夫に事へ、女子を教育して、よき家庭を作つて行くといふように、いろ〱ありませうけれども、私は子女の躾方くらゐむづかしいことはないと思ひます、ことに小學校に通ひまする年齢の中の教育といふものは、決して、學校許りに委かして置くといふことは宜しくないことでありまするから、この時には、つとめて、一層家庭の教育に、注意いたしまして、學校と家庭とで内外相應じて、躾方に注意して行かなければならぬことでおらうと思ひます、實にこの小學教育時代に作られました、精神といふものは、一生の間の精神となつてゆくことでありまして、その教育のやり方一つで、その子女の他日の國民となりました時に、善き國民ともなり、或は一家を保つことの出來ぬやうにもなるのでありますから、家庭の空氣を健全にして、惡しき風俗に染まらぬやうに、努めて監督して行かなければなるまいと思ひます。

五歳、六歳になりますと、世間の諺にもあります通り、惡戯盛りでありまして、見るもの聞くもの、皆模倣るやうになりまして、寸時も氣の休めぬものであります、丁度、私の女子が五歳の頃幼稚園にやりましたが、數へ方や、單語の發音なども少しは覺えましたけれども、又金錢の要求方なども覺えまして、與へませぬと、斯うてありますと、小さな拳を上ぐることなどやります。私には、さういふことを申しませぬが、店の支配人などに向て要求やうの擧動を覺えるのも、一つは幼稚園抔に行きますると、數多の小供が集つて居りまするから、自然

に又さういふことを迄も覺えることであらうと思ひます、只今では家庭に措きまして簡易しい假名や、二十前後の數方などを少し宛致へて居ります、幼稚園も子供の躾方には、いかゞかと案じまして、家庭で教育をして居ります。

子供を躾方まするには、一寸でも氣の緩けぬものでございまして、或る時に、餘り八ヶ間敷して、惡戯抔を致しましたときは頭は打つては惡うございますが、手のさき位は、少しは撚てもよからうと謂ましたら、さあ、お母さんの御許してあると謂つて、少しの過ちにも、手の先きなどを、撚たり、爭ひ致しますので、すぐに、その御許しは止めてしまひました、それから又姉妹の中では決して爭ふことなどを仕ないで、惡いことがありましたならば、お母さんに話すやうにと申しまして、私の方からよく戒めて行りましたが、或は、私の方に申さずに姉妹同志で、戒めますといふと、謂はれました方では、お母さんがいひますから、謂つて與れなくも宜いと謂つて聽きませぬ、まことに、小供の躾方位、むづかしいことはないと思ひます、無心のものでありまするから、酷しくも出來ませぬし、緩くも出來ませぬし、心配のものであります、そのでは、年長のものはよく、年少ものゝしましたことも、能く堪忍して、惡いことをさせぬやうにして、年少ぬものは、年長のものに能く從つて、さからうやうのことはないやうにしなさいと、いつてをきますが、まことに始終注意が要けてなりませぬ。

函館と申す所は、五港の中でも、横濱か、函館かと申します位日常のもの、物價も高くありますし、從つて奢侈居りまして、學校抔に通學まするものなども、一般から申しまするとに奢侈かたむいて居ります、併し、宅では、學生のうちは平常の一際着飾といふことをさせませぬ、私も寒を避くる爲めに沼津にをりますが、裁縫のやうのことも、保養の傍、手づからいたしまして、女子の見習ひになりますやうに、して居ります。

私は是迄女子を育てましたが、何れの子供の着物も一ツ身の衣服は勿論、すべて、後次ぎの子供の生るゝ迄は、一切衣服は私が仕立て居ります、それには、日中は

それ〳〵用事のありますことゆゑ、夜分休む頃の時間と、朝は下婢と共に起て都合して得ました時間とて拵へまして、外の成長娘子にも見倣はせます、之は、一つは、若しも衣服に針の過ちて有ることを恐るゝのと此着物を殘して置いて他日成長の後に母親の裁ちたることを見せしめて娘子にも亦さういふ風にさせたいと思ひますからてあります、女子に高等の教育も必要ではありませうが、商家抔にては殊に家政の整理といふことが第一でありますから、宅の娘子にも專ら普通教育丈を受けさせまして、後ち家政、裁縫のやうな實際のことを致させ、其外茶の湯、禮式、挿花、絲竹のやうなことはほんの小口を習わせました、二女は昨年高等小學校を卒業致しまして、三女は未だ小學校に修業中でありまするが、本年は優等卒業の證書をいたゞきましたと申して喜んで居ります。

家で下婢を多く使ひまするると、それに從つて、娘子も矢張り下婢を使ひます、それて、娘子に言ひ付けてさせやうと思ひましても、年頃十一二歲頃になりますと、中々直ぐに立つて用を辨じませぬ、下婢に命じて、用を辨じさせるやうの傾きがあります、つとめて、かういふ習慣を除きたいと思つて居りまして、命じまするが、下婢も用事の都合で直ぐに辨じ兼ねまするときには、この小さな、六歲か七歲の女子が、直ぐに立つて行るやうの譯て、六歲七歲の頃には、他人の言ひ付けられましたこと迄も、自分でやらうと、まめ〳〵しく、立ち廻り、用を辨させたいと思ふものは、却々辨して呉れず、子女の教育といふものは、誠に思ふやうに行かぬものであります、是迄の經驗に依りまするると、小供は、六七歲頃には、他人に言ひ附けましたことも、立つて用を辨したがるやうですが、之れに引かへて、十一二歲の女の子は兎角自分の仕事に無餘念下婢を使ふといふ風が、どうも此年頃にもあるやうに私は經驗して居ります。

御存知の通り函館は寒氣の烈しい所でございますが、娘子を躾方まするには、其寒さを厭ふやうの習慣を附けさせたくない爲めに、病氣でもない以上は、早くから起しまして、自分で床を仕末させまして、下婢の手數を

掛ませぬ、又洗濯類も、十二歳頃からは、自分で出來ますることと故、自分の衣服は、自分で洗濯させる習慣を附けて居ります。

女子の家庭教育に就きましては、好い參考書のないのに困まります「をんな」「大日本女學會雜誌」なども宜しうございますが、誠に此種類の善い雜誌がないようであります、餘り程度が高かすぎたり、講義しまするとが廣く渡りすぎましたりして、女子の家庭教育に宜い雜誌が少いやうであります。

坊間で賣つて居りまする、少年叢書につきましては、種々ありますが、矢張、桃太郎、かちかち山、猿蟹合戰、より歷史物の忠臣、孝子、のやうなものや立志談のやうのものを、讀ましたり話したりすることをやつてをります、想像て書きました所の所謂「ポンチ」繪といふものが繪艸紙屋で賣つて居りまするがあれは子供も好んで讀みまするから、遂、買つて渡すといふことになりますが、あの「ポンチ」繪は餘程意を附て撰んでやりませぬと、隨分、其中のことばに如何かと思はるゝやうのこともあります、男子は、一般に外部に於て事業に當りまするこことてありまするけれども、殊に商業家などといふものは、始終外部に出勝のものでありますれば、その子女の母親の膝下について居ることが、割合上父親よりも多いことでありまするから、母親は子女の躾方につきましては、餘程重大の責めのあるものであらうと思ひます、それで私は子女の躾方は女子の努めのうちでも、むづかしいことでありますと思ひまして、注意の出來る丈、家庭の教育を行なつて居ります。(東京市教育會演説筆記)

感化院の話

化院長 高瀨眞卿

○少年と父母

一般の少年が父母を愛慕するの程度はいかばかりなるやを知らんと欲するに教育家もしくは父母たるものゝ希望する處なり、わが感化院に於る常に此種の調査を怠らず、性行調査會に於ては時々さまざまの方面より

之を試むるなり、先年廿六人の少年に就て調査したるもの猶ほ記して感化資料に在り、之を左に掲げて少年が實母に對する感念と繼母に對する感念の如何を知らしむべし

此日教師は廿人の家族生を中學教室に招きて先づ左の如く言ひ聞せたり

此の黒板に三ッの題を出しました第一第二第三とある即ち

第一　父と母とはどちらがなつかしく思ふか

第二　常にまづ思ひ出すのは父であるか母であるか

第三　父と母とはどちらが自分を可愛がると思つて居るか

此問題については自分で思つて居る處を少しも取つくろはず、有の儘に答ふるがよい、紙へ書て出すべし、文章はどんなかき方でも分りさへすれば宜しい

此に於て彼等はいづれも左の如く答へたり

○答　（實父母存在）　一號　十五年

一　父よりは母がなつかしくあります
二　母の方を思ひ出します歸つて顔が見たいと思ふ
三　母はわたしを愛します

○答　（實父母存在）　二號　十七年

一　院に在つて常になつかしく思ふは母なり
二　父は全く短氣です何となく母を思ひ出します
三　自分を愛すは母親であると思ひます

●答　（繼母）　三號　十九年

一　父と母と何れとも分ちかねます
二　分りません
三　母は繼母に付何事にも冷淡の樣見えます

○答　（實父母存在）　四號　十八年

一　私は母を思ひ出す
二　父も思ひ出すが多く思ひ出すは母なり
三　母は隨分呵るけれど心の中では私を愛すと思ひます

○答　（實父母存在）　五號　十五年

一　院に居ても母はなつかしい
二
三　母はわたくしを可愛がります。

○答　（父母存在）　六號　十五年

一　父をなつかしく思ひます私の事を心配してくれます

二　母の事も父の事も思ひ出します

三　母の方が多くわたしを愛します

●答　(繼母)　七號　十四年

一　父がなつかしいので

二　父を思ひ出します

三　父はよく可愛がります

●答　(繼母)　八號　十七年

一　尤もなつかしきは父なり

二　母上は繼母なりしかれどもよく僕を愛す眞實の母よりも愛すと思ふ只た繼母の故を以て僕ゑんりょする故に母よりも父がなつかし

三　愛するは父の方が多いと思ふ

○答　(實父母存在)　九號　十五年

一　わたくしは母がなつかしく思ひます

二　母の方がなつかつしく思ひ出す

三　母はわたくしを愛すと思ひます

●答　(繼母)　十號　十七年

一　父をなつかしく思ふ

二　幼少の時に實母に別れていまの母も愛してくれるやうにも見えるが父の方を思ひ出す

三　眞の愛するは父なり

○答　(實父母存在)　十一號　十一年

一　母はなつかしくあります

二　母はなつかしくあります

三　母はわたくしをあいします

●答　(繼母)　十二號　十六年

一　父と母とは父の方がなつかしい

二　母はなつかしいが比かく的父より思ひ出しません

三　母はづいふんあいします

○答　(實父母存在)　十三號　十九年

一　母の恩が大なりと思ふ常に父も母もなしけれど母尤もなつかしく思ふ

二　思ひ出すは母なり

三　母は或時は憎み或時は愛す

●答　(繼母)　十四號　廿年

一　一番父がなつかしいと思ふ

二　母に氣に入らぬ事がいくらもあり其故かなつかしく思はす、思ひ出す事なし

三　母は冷淡なり

○答　(父存母なし)　十五號　十七年

一　母かなつかしく思ふ
二　母はよく世話をしてくれました思ひ出します
三　母は自分をよく愛したり

●答　(繼母)　十六號　十五年
一　母を思ひ出す事なし
二　父はなつかしく思ふ
三　母はあいしますか愛さぬか分らず父は愛します

○答　(父母共沒)　十五號　十七年
一　小生不幸にして父母なし慈愛の如何に深きやを知ず故に答ふこと能はず
二　これも前の通り
三　母世にあらば必らず小生を愛し吳れしならん

●答　(繼母)　十六號　十六年
一　父の方なつかし
二　思ひ出すは父なり母を思ひし事なし
三　母の愛は知らず父はよく僕を愛したり

○答　(父なし母存)　十七號　十八年
一　私が平生戀しく思ふは何事に付ても母なり
父の歸らぬ旅へゆき母の手一ツで育れられた故か父の事をよく知らす母をのみ思ひ出すなり

三　母は甚た愛してくれます

○答　(父沒母存)　十八號　十六年
一　父なき故母がなつかしい
二　母は何となくやさしき故思ひ出します
三　母はわれを愛す

●答　(繼母)　十九號　十三年
一　父がなつかしい
二　――
三　父はよく愛します母も愛すかしりません

○答　(實父母存)　廿號　十四年
一　二人ともなつかしく思ひます
二　遠くはなれていつも逢ふ事が出來ないから思ひ出す
三　母が愛してくれます

右廿人は、少年より十名幼年より十名を出せしなり、此の中には繼母の事あり、繼母の子は皆な父をなつかしく思はぬものなし、繼母はわれを愛すと思ふものは一人のみなり、父母の存在するものは皆な母をなつかしく思はぬなし、人爲的に義務的に繼子を愛するものは實父の之を愛せさるものよりも子をして愛慕の情を發せしむる事能はさるを知るべし

月旦

下田歌子刀自

奥南

明治の世、名媛才女の輩出せる中にも、下田歌子女史の如きは、まづ其最たるものであらう、從つて其名聲の隆々たるが、亦た殆んど比すべきものは無い、されど、非凡の人才は、兎角いろ／＼な世評を免がれ難い、況んや嫉妬心深き女性間に於てをや、さればにや女史の如きも、「已に苔が生いて駄目だ」とか、「いや婦人には珍らしい名人物だが、何うも其性行には感服し難い點がある」とか、其批評も隨分澤山あるが、しかし其等の多くは、所謂當にならぬ世間の噂で、左程信用を置くべきものでもないから、此には、吾人が見聞する所を以て、少しく女史の如何なる人物なるやを批評し、且つ其閲歴の要概を敍述しやうと思ふのである。

(上) 人物

下田歌子女史は、明治女界の先進で而かも稀世の珍才である、而してまた、少なくとも現代の女性を代表し得べき實力と資格を有する人物である、何んとなれば、單に學問を以てせば、今日の進歩せる女學者間に於て、女史に劣らぬのみか却て勝るものも少なくあるまい、また教育、文章、社交等を以てするも、亦た女史に遜らぬ技倆を有するものが無いでもあるまい、されば、女史を以て現今女學者中の新智識を以て目するは、事少しく古びたるやうに思はる、また誠實一方の教育家として、風流韵事を弄ぶ詩文家として、功名心燃ゆるが如き事業家として、圓轉滑脫の妙を誇る交際家として、現今女界の第一位を占むべき人なりとも俄かに斷言し難い、けれど、如何なる人才でも、一人にて各種の智識藝能を具有することは到底出來ない話である、而して其特異なる否偏重に傾ける專門家ならぬのが、是れ却て女史が學者としては普通の女學者流と聊か趣を異にする所で、而かも圓滿にして融通の利く人物たる所以である、されば、女史は單純なる學者にあらじ、美文家

にあらじ、所謂仕事師にもあらねど、學殖は和漢洋にわたりて頗る博く、加ふるに、先天的の才氣と練熟せる世才を有するを以て、辯舌にも巧みなれば、文章和歌にも長じ、而してまた能く社會公共の爲めにも活働するを見る、其教育上には勿論、著述に、演説に、女史が始終幹旋盡瘁しつゝあるは人の能く知る所である、而して殊に、明治年代の初期、我國が泰西の思想を輸入し、また其事物を摸倣したる結果として、舊來の文物制度は、悉く舊面目を一洗し去られ、從て日本古風の婦德主義女子教育等の改正せざる可らざる必要を認むるに至るや、女史の如きは、率先して之れが爲めに盡瘁した一人である、否最も有力なる女流の新智識者であつた、爾來孜々として自己の新たなる主義と抱負を實行することに勉めて、已往二十餘年の間に以て、其我國女界に貢献した所のものは實に尠くないことであらう、して見れば、女史の如きは、現代女流中榮譽あるの先進者で、且つ最も重きを置くべき人物である、が唯女史に憾む所は、其性格が靜溫なるべき女性には遠くして、寧ろ熱烈なるべき男性に近く、あまりに氣が利き、口が利き、働らき過ぎて、所謂お轉婆風あるを免がれず、之れが爲めに氏の行爲及び事業は、其精神と事柄の是非を問はず、比較的に多くの世難を受くることあり、折角の意志も幾許か障礙せらるゝものあること是れである、吾人が氏に對して看察する所は畧ぼ斯の如くである。

(下)閱歷

下田歌子女史は、美濃の人、舊岩村藩督學平尾鍒藏氏の女である、幼名をせき子と云つたが、後ち故ありて今の名(其改名の譯は後ちの記事に在り)に改めた、其祖父に當たる東條琴臺翁は、先哲叢談の著者として有名なる人である、歌子は、幼き時、他の子供よりも大いにすぐれてありし爲めに、世人より神童を以て呼ばれて居つた、其四歲の春に詠んだ歌がある、それを見ても非凡の天才を具えて居つたことが知らる、其歌に曰く、

正月はどちら向へてもお目出度い
赤い雪駄をはいて乳飲む

天眞爛熳の中に却て妙趣がある、此の如き生れながらの秀才であつたけれども、其未だ四歳の頃に、嚴父鎌藏氏が、藩政を爭うて謹愼仰付けられ、丁度十歳に爲る頃まで、其謹愼が解けなかつた爲めに、家政は大いに困難を告げ、いろ〳〵辛酸を嘗めねばならぬことゝなり、子供の敎育も充分にせしむることが出來ない境遇に陷つた、が流石家柄が儒家であるから、家庭に於ては敎育を受けせしめつゝあつたが、秀才は恐るべきもので、僅かに七歳の頃より詩歌を能くするやうになつた、祖琴臺翁は、深く之れを戒め、婦道必須の學を修めしめんとしたれば、怏々として樂まないで、それが爲め遂に病氣をわづらうに至つた、そこで、父母は心配一方でなく、之れを祖翁に謀つた、ところが翁も大に驚きてしかく好きなことならば止むを得ないとて、自ら敎授せらるゝことゝなつた、後ち八田知己翁に就いても歌道を修めた、文學殊にも和歌は、天性最も嗜好する處であつたと見へる、氏自らも「私しは子供の時から文學か大好きで、三度の食事を缺いても歌の一つも詠むのが非常に樂みであつた」と言つて居る、そうして見れば、氏が今日文學に長ずるも亦故ありといふべきである。

已にして十一二歳の頃に、王政維新に際會し、嚴父は他の有志家と共に、勤王の爲めに頻りに奔走し、又たも座敷牢に入れられた爲めに、家政もそれよりは益々困難に陷り、祖父琴臺翁が上京することゝなりたれば、歌子も翁に從うて上京の途に上ぼつた、それは十四歳の時である、其發するに臨み、詠んだ歌がある、

あやにしき着て歸らずばみくに山
　　また再びはこえずとぞおもふ

そうして途中、柿野村といふ所まで來られたが、何しろ初旅で且つ年も少ければ、勇を皷して郷關を出たものゝ、住み馴れし故郷は、何んとなく戀ひしくて堪まらない、そこで其感想が現れて一首の歌となつた。

わかるればかくもこひしきふる里を
　　心つよくも出でにけるかな

已にして東京に出て、其好める文學の道を、勉強して怠らなかつたれば、業大いに進んで、殆んど其蘊奥を極め

たと言ふてもよいほどであつた、明治五年歳十五の時、初めて召されて宮內省に出仕することゝなつた、上は皇后陛下御詠の御相手を奉じ、下は女官の教授を命ぜられて、寵遇殊に厚かつた、或る時、陛下の御思召によりて、左の歌を詠みて上つた。

敷島の道をそれともわかのま
　危くわたる雲のかけ橋

陛下御覽ぜられて、いたく其歌才に長ぜらるゝを賞し給ひ、畏くも特に「歌子」の名を賜はられた、續いて累進して權命婦となつて、女史自ら言ふのには「私は子供の時から始終歌を詠むことをやつて來ましたが、其の歌は、十五六の頃のは何うもよいやうで、今のは却て退歩したかのやうに思はれます」としかし それは強ち退歩したでもあるまいが、實際其頃より已に上達の城に入つた居つた事は認められる、右に揭ぐる二三の歌を見ても略ぼ推知せらるゝであらう、同年の秋、皇后陛下には、濱御殿に行啓あらせられ、女史が其供し奉りたる時、「濱御殿行啓の記」一篇を草した事がある、女史の宮仕したのは、丁度五年より十二年まで八年間である、十二年に、許嫁下田猛雄氏と結婚の爲め、宮仕を辭して以來は、麴町區一番町に桃天家塾を開き、門生を集めて、和歌習字等を授けて居つた、十七年に夫猛雄氏病沒したれば、後ち再び除服出仕を命ぜられ、宮內省御用掛を仰せ付けられた、女史が宮內省に出仕せる間に於て、高崎正風、福羽美靜、元田永孚等の諸老に學び、更らに英佛の語學を研究した、其年少なる時代には、我國の女子教育が未だ發達しなかつたから、別に今日の如き學校教育を受けたでもないが、其宮仕中の餘暇を以て修學せるもの、之れ女史が修學上の重もなる機會であつたらうかと思はる。

其頃より華族女學校創立の議が宮中に起つて居つた、が之れは彼の學習院に對して、此種の女學校の必要を感じたのである、女史は其議のあつた最初より之れに關係し協議に與つて居つたが、さていよ〳〵同校の設立(十八年)を見るに至るや推薦せられて之れが教授兼學監となつた、やがて翌年二月には其校模が一層

擴張せられ、そうして二十六年には、尚ほ益々同校をして整美ならしむるが爲め、女子教育の調査員として人を海外へ出だすことゝなつたれば、女史は最も適任者と認められ、官選に由り拔擢して英國へ發遣せしめられた、それより歐米各國をも漫遊して、二十八年に新智識を齎らして歸朝した、爾來女史が同校の教育上に盡瘁するもの尠くはない、爲めに同校は今日の隆盛且つ整備を見るに至つたといふも決して過褒ではあるまい、氏は去十八年より今に至るまで、實に十七八年の長き間、同校の教職に在りて、今では何うしても其關係を脱けられぬやうになつて居るのを見てもそれが解かる、目今は其外に常宮、周宮兩殿下御用掛をも兼ね、又女史の創設せられたる、實踐女學校、および女子工藝學校、下婢養成所等をも管理して居る、而して此等の諸學校も、時勢の必要に由りて設立せられたもので、且つ熱心に經營せられたから、其校績は頗る宜しいといふ、

此の如く女史は、多年の間教育に盡くした功勞が少くないから、現今では位階も高く、恰かも女子教育界の重鎮の如くに見做されて居る、而して女史は、此の如く女子教育家として重要の位置に在りて、職務の多忙なるにも拘らず、其餘暇を以て、文學其他の女學書類を著述したものが頗る多い、今其中の重もなるものを擧ぐれば、家庭文庫(十三冊)少女文庫(六冊)家政學(二冊)新撰家政學(二冊)新撰咏歌捷徑(一冊)和文教科書(數冊)子女教養全書(全八冊内一冊丈は既刊)等にして、何れも有益なる書物のやうである、此等の著書の多きより見るも、女史は教育家、活働家以外に、學問に忠實にして又た其精力の人に超ゆるものあることが知られる、要するに兎も角も、氏の如きは榮譽ある經歷を有する一人であらうと思ふ、吾人が氏の閲歴について知る所が斯の如くである。

雜俎

家庭園藝

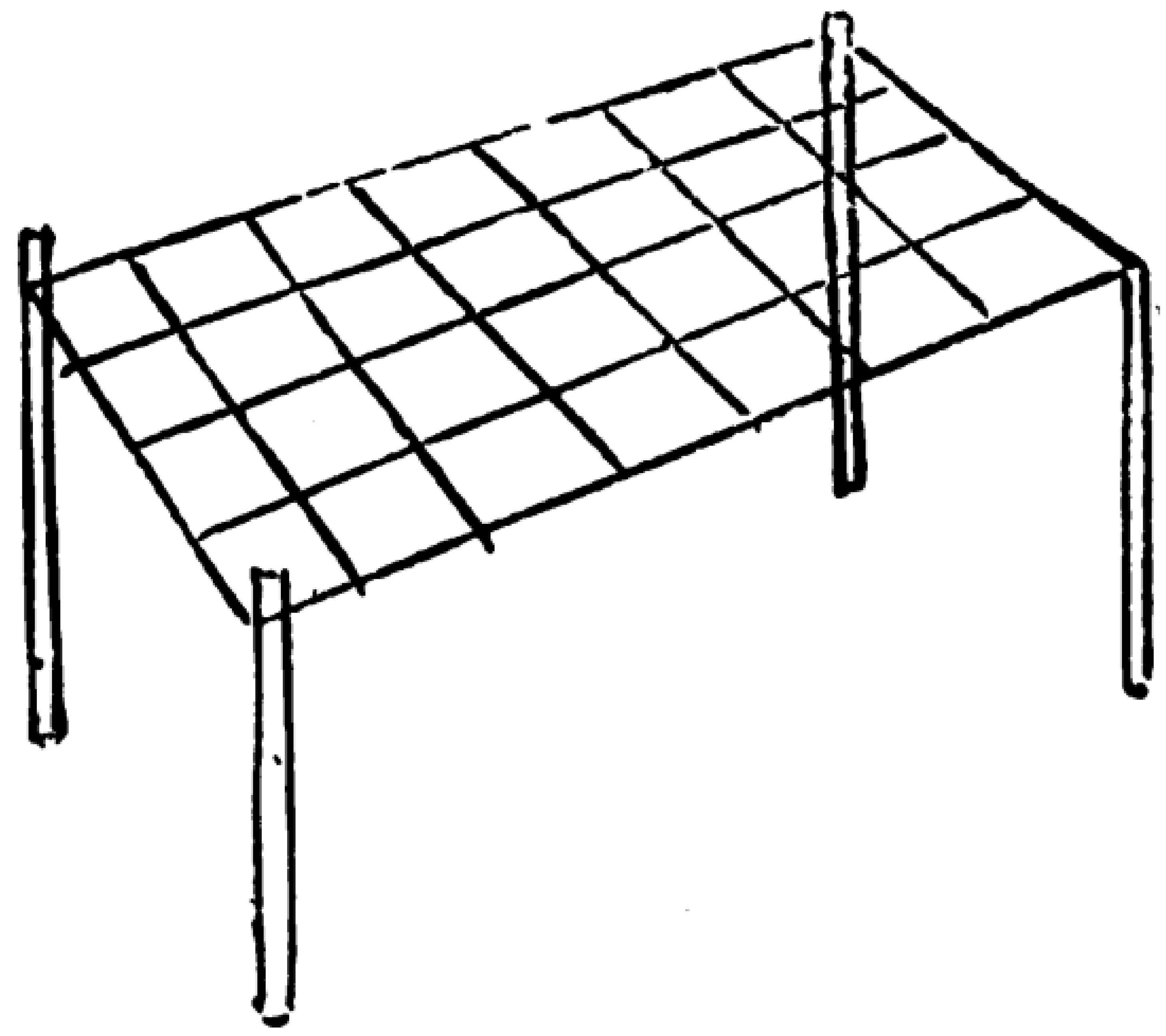
永島小蝶

樹作り及枝刈の事　此等の仕事を稱して剪定と云ふ此剪定は栽培法中肝要なることにて其の方法を得ざれば果樹の栽培上利益のみならず收益の如何は一に此剪定の方法を得ると得ざるとにあり而して其方法は種々あれども果樹を自在に生長せしむることはよろしからず故に枝刈を行ひ同時に枝の配置をよくし樹形を作り結實多き枝を出さすべし且本幹の生長を計るが爲めに横枝を刈るなり結實は木の生長盛ならずして固く出來たるものに多と知るべし之れ移植したる木の能く結實するを見ても知るべし故に枝又根の刈込をなすを肝要とす而して其刈込なるものは樹形を作る目的により異なるも先づ第一には地上一尺五寸位の所にて切る、次に又一尺五寸位に伸長したるときに刈るなり、此如くするときは木は萎縮狀をなし多くの枝を出す其枝を五寸乃至七八寸に切り之れより枝生ずれば又之れを切り以て花を咲かしめ結實せしむるなり

▲**樹作り**　之れには高木作りと低木作りの二種あり、高木作りは一丈二丈にも達するなり故に所謂立木作りと云ふて可なり其刈込は前年の枝を其秋又は翌春に刈込するにありて經濟上に於ては此方低木作りよりよしとす、

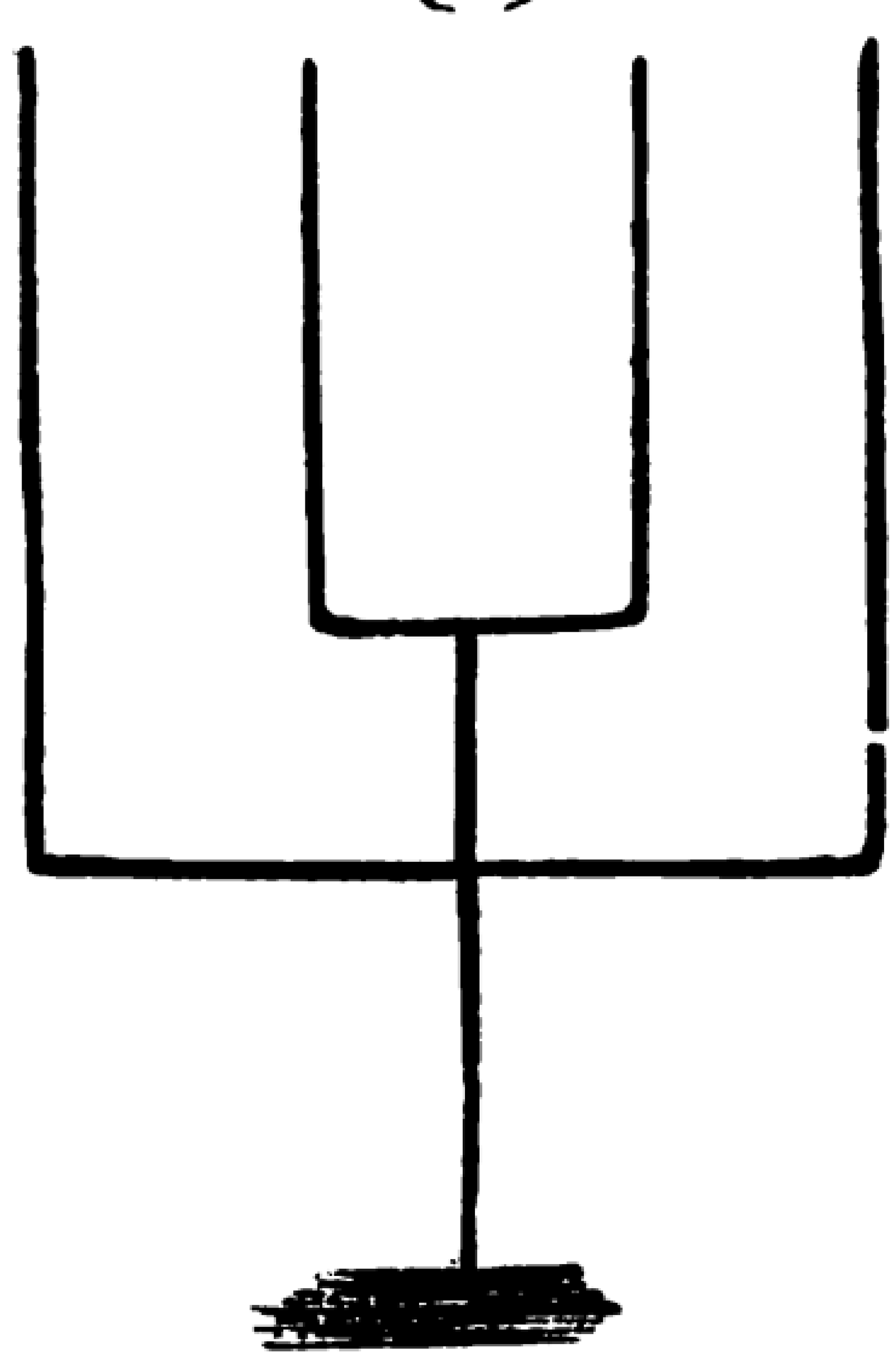
低作之れは果物の需要多く高價なる所に行はる而して其樹形も種々ありて狹地に結果多く良種を得るなり又低作りは地熱を受けると大なり故に寒地にて多く使用す其樹形は左の如し

▲**棚作**　此方法は我國栽培家の多く行ひ居る所の方法にして川崎在の梨園は皆此方の作り方なり葡萄も此方法を取る之れ我國に適當したるものにして其說種々あるも先づ低き爲めに風害を受けると少なし之れは圖の如く棚を設け之れに其枝を銜はせるものにして之れ

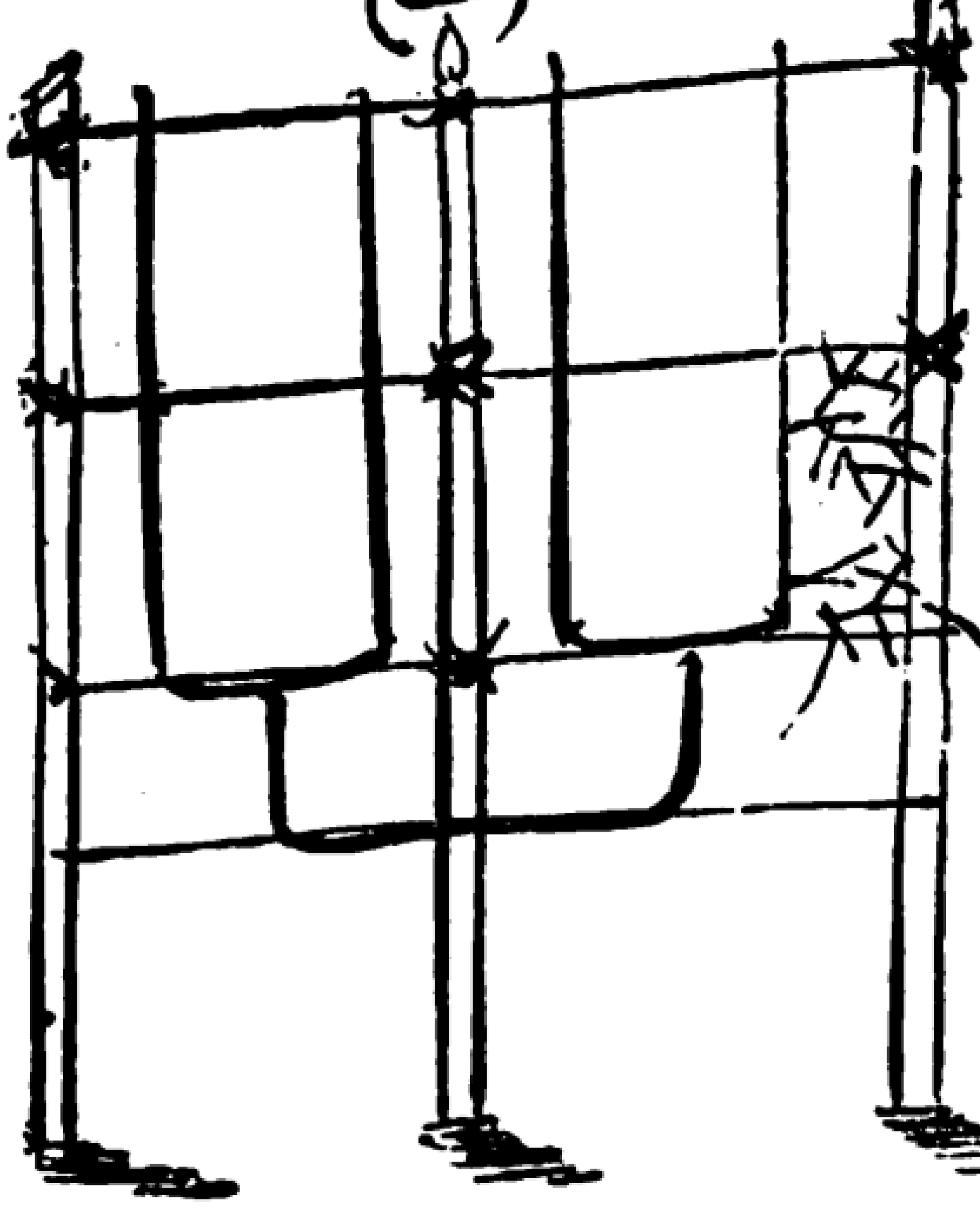


は地上六尺位の處にて本幹を切り横枝を出さしめるなり此方法は世人の最も能く熟知する所なり、

▲叉作　此方法は左圖の如く枝は偶數なるをよしとす奇數なれば其中央の者のみ生長して兩側の者は生長惡しければなり而して其枝は一尺内外の距離を最も適當となす偶數のものも（一）圖の如きものは肝心せず而し其高さは土質に由り異なるも地上二尺位の處にて切り之れより枝を出さしめたるものよし第一回に出でたる枝は其儘曲げるなり又一尺五寸の處より切り枝を出し曲げるなり兎角一尺五

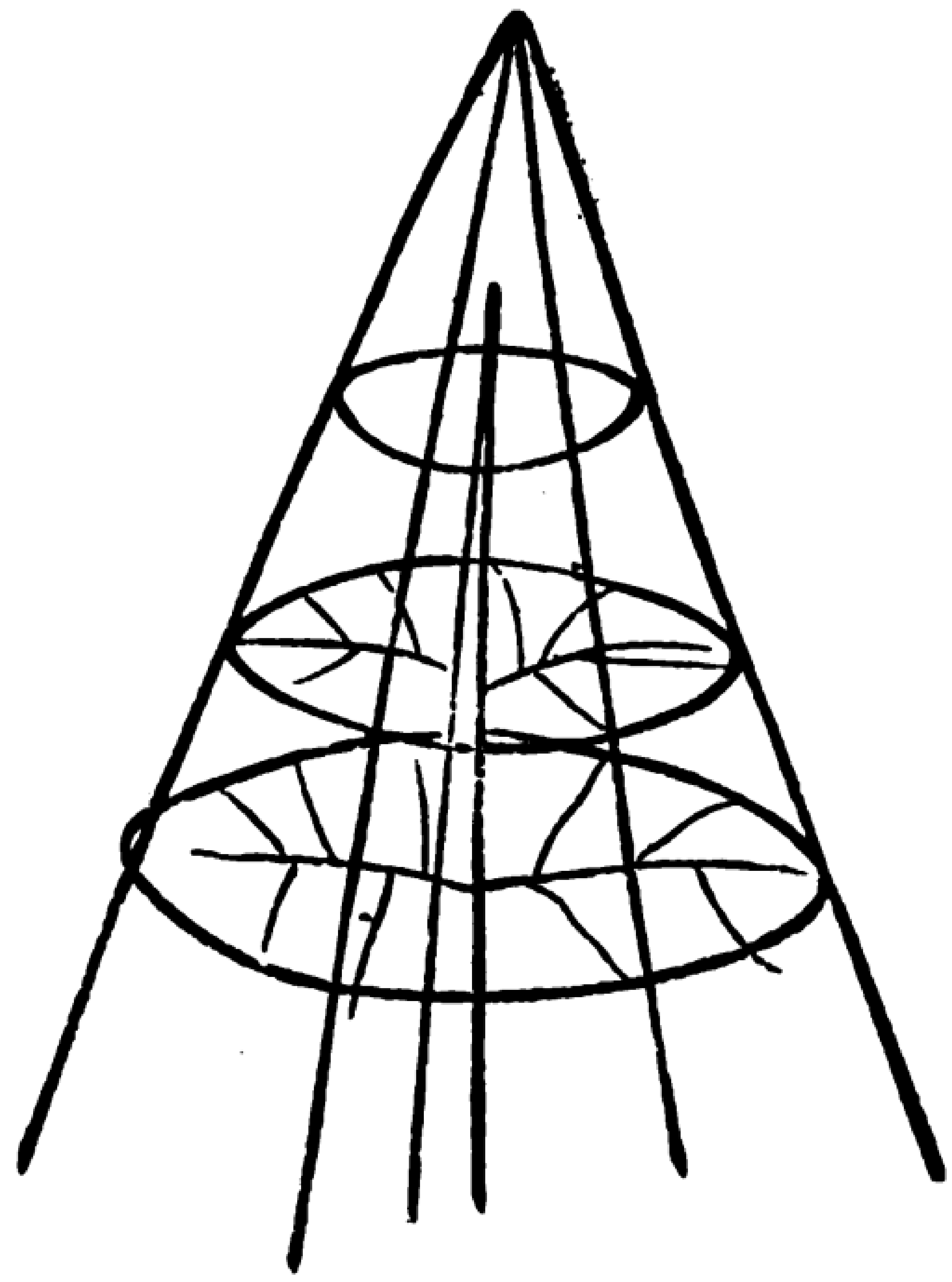


（一）



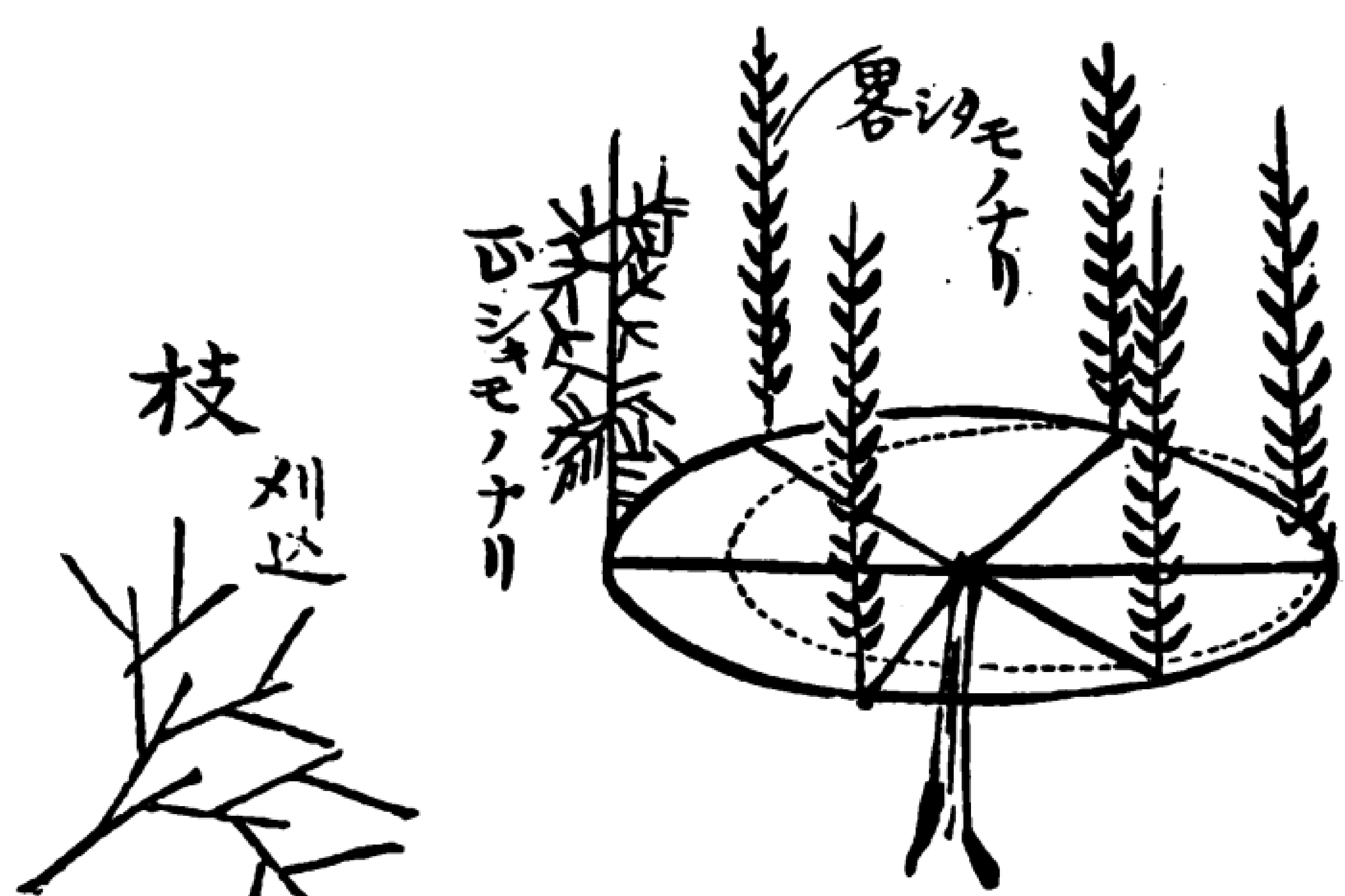
（二）

寸の處より曲五寸位の所にて切り此所より枝を出さしめ之れを年々一尺五六寸に切りて横枝を生ぜしめ其横枝を三寸位に刈込之れに結果せしむるなり且枝の配置を能し曲げる時便利なる樣に適當の距離に横に竹又は針金を張り之れに寄らしむるをよしとす、



▲圓錐形作　之れは名の如く圖の如く作る者にして費用少なく即ち手入れ等簡單にして作り得るものなり第一年には一尺五寸位の所にて切り枝を出し一本は上に伸ばし他は横に伸ばし上生長したるものは一尺位の所にて切り枝を出し前の如く一本を上に伸すなり斯くして刈込を行ふなり

▲圓柱形作　之れを地上二尺位の處より切り枝を出しむる其枝は圖に示す如く圓形の輪を作り輪の中心に本幹を置き枝を輪に取付け輪の所より上方に伸長せしむるなり而して上に伸長するものは年々一尺五寸位に切り之れに横枝を出さしめ横は大抵三寸位に切る之れより枝を生ずる故に之も三寸位に切ると年々相同じくす而して此刈込は大抵春行ふをよしとす、



波斯の風俗一斑

（福島少將旅行記の一節）

驛舍の光景

門内なる方庭の中央に、高さ一米突、方四五米突の平臺

を作り、之を睡眠、休憩、及び暫時馬鞍行李等を置くの所に用ゐぬ。厩の屋上は、即ち壁頂にして、更に高さ一米突、幅一尺許の胸壁を築き、凹凸して銃眼の形を爲すこと、支那の城壁に似たり。此驛舍は、他の家屋の如く、都て粉碎せし藁を混じて煉りたる土を以て築き、屋上は槪ね清潔にして、夜間一睡するに便なり。旅客來つて驛舍に達すれば、驛長、馬夫等は迎へて其荷物を卸すの助力を爲し、客は土床の上に橫はりて休憩するや。波斯人は最も茶を好むを以て、到る處の驛舍內には必らず茶器あり、固より不潔なりと雖ども、飮水不便の地を通じ、數時間の騎行をなせし後、此數碗の茶を飮みしとて、心神の快を覺えたり。又到る處に鷄卵及び麵麭を得べし。麵麭は麥粉を煉り、薄く丸く、或は薄く長く伸して燒きたるものにして、其味惡しからざれど、沙塵其外面に附着し、若くは不潔の土人が、之を携帶するの際に汚したる跡は、斑々として存するが故に、不快を感ずることも多かりき。其他稍や大なる宿驛村落に於ては、白米羊肉等を得ることあれど、予の此行は常に星を戴て

發し、夜深ふして達し、或は馬上にあること十數時間にして、從者いたく疲勞せしを以て、此等を調理するの餘裕もなく、麵包、鷄卵、胡瓜等を以て毎日三度の食事に供しぬ。

前驛より伴ひ來りし馬夫は、荷物を卸せし後ち、數分時間、馬を曳て運動しぬ。是れは自然の經驗より來るものにて、最も馬の健康を維持するに、必要の事とす。既にして、運動を終るや、草秣、或は粉藁を與へ、大約二三十分の後ち、水を與ふるを見たり。驛馬は、驛より驛の間、距離の長短に關せず、休憩することなく、疾驅するの習なるを以て、疲勞するの度も、亦甚だ大なり。又馬の本驛に歸るや、固より一定の時間なきを以て、馬夫の勤怠に從ひ甚しき遲速ある者と知るべし、驛舍は、驛遞局の管理に屬し、馬數は、驛路の繁閑に從い、驛遞局との約條に基き、人民の貯る所とす。近年馬疫流行し、斃死する者甚だ多く、新馬を以て、其缺を補ひし爲め、毎驛甚しき疲馬を見ざりしは、幸なりき。毎週郵便物の、北より來るもの一回、南より來るもの一

回、及び英國政府の特便、南北各一回、即ち都て四回にして、毎回馬匹數頭を要するを以て、驛馬なき爲め、旅客が空しく土床の上に、數日を費やすことも、屢々なりとぞ。予は幸ひに、郵便の中間を計りて起程し、且つ騎行甚だ迅速なりしが爲めに、一回も此不便に出會せしと無く、毎驛容易に馬匹を得たりしは、太だ幸運なりしといふべし。

驛馬の定價は、一頭一波里、一克蘭（太約六克蘭を以て我壹圓とす）なりしが、今は一克蘭五沙（二十沙を以て一克蘭とす）に騰貴せり。予の此行や、乘馬一頭、從者の乘馬一頭、行李搭載の駄馬一頭、及び馬夫の乘馬一頭、即ち四頭を要せしを以て、一波里に付、五克蘭を拂ひたり。驛長屢々驛間の里程を欺き、賃銀を騙取せんことを試みしより、常に豫め里程を調査し置くことの最も必要なるを感ぜり。

發程前、周旋の度合に從ひ、驛長に一二克蘭の酒手を與へ、又離距の長短に從ひ、前驛より來りし馬夫にも、一二克蘭を與ふるを例とせり。弊政の下、腐敗の人民、恩義人情は、彼等の解せざる所なれば、多く與へざるをば、寧ろ可とすべし。假令多く與ふるとも、一言の謝意を表せざるのみならず、目して以て旅行不慣の外國人と爲し、却て多額を強請するを常とす、

◉飲水々壺

波斯の旅行、道路の通ずる所、海岸僅々の地方を除くの外、海面を抜くこと數千尺の高原にして、暑氣甚だ酷烈ならざるも、空氣乾燥にして、太陽の威力激甚なるが爲めに、渇すること殊に甚しく、益々飲て益々渇するを常とするも、沿道到る處良水を得るに難きを以て、出來得る限り渇を忍ぶこと頗に必要なり。益々飲て益々渇し、渇愈々甚しきに至れば、たとひ如何なる惡水と雖ども、遂に喜んで之を飲むこととなり、結果の如何を顧るの暇なきに至るを常とす。

土人は、水は運搬するに革袋を以てし、水を貯ふるにも亦革袋、及び粗燒の壺を以てす。是れ共に氣孔ありて、氣孔より洩るゝ所の水分、乾燥なる空氣の爲めに、忽ち蒸發し、蒸發によりて、袋内及び壺内の水が、常に冷冽

となるによる也。予は孟買に於て、羅紗を以て亞鉛の外面を蔽ひし、軍用水壺を購求せしが、數時間の後、壺内の水溫度を加へ來りしも、革袋中に貯へし水は之に異なり、外氣益々熱して、益々冷冽となる也。土人は皆直に口を當てゝ、壺中の水を飲み廻すの習慣なれば、旅客は必ず自身の水壺を携帶するを便とす、然らざれば之より病ひを傳ふるの恐あり。埃及に於て、嘗つて英國の一卒、壺中の水を飲みし爲め、忽にして口より黴毒を發せしことありといへり。恐るべきと也。

●人情風俗

此地の波斯人は支那人の如き、寛袴を穿ち、筒袖にして、長さ膝に達する上衣を着す。上表は、一行。紐子を以てし、或は單に前を合せ、腰に長布を卷て帶とし、頭に羊毛を以て製せし、椀形の帽を冠し、足に麻布製の短靴を穿てり。之を中等以下、一般人民の衣服とす。婦人は貴賤を論せず、大なる黑布を以て、全身を蔽ひ、頭も又た同じく、黑布を以て之を包み、額の邊より長方形の白布を垂れて顏を掩へり。白布の上部には、長さ五六寸、幅二寸許の網を附せり。是れ兩眼のある所にして、婦人が世界の光りを見るは、只だ此網の目によるのみとせり。婦人を束縛すること、愈々嚴密にして、弊害の愈々生するは、世の常態なり。聞く、波斯婦人は頗る不品行にして、歐洲人等が子女の爲めに、良き傳婢を得ること、頗る困難なりといへり。

家屋は、概ね土を以て之を作り、屋低く室小にして窓なく、頗る暗黑にして不潔なり。土人一般の食物は、麵麭、牛乳、野菜、果實等にして、頗る單簡なり。酸味ある牛乳中に、搾りたる小片の麵麭を投し、之に葱等の細末にせしを混じ、一家相集りて、手を以て食ふを常とせり。

毎日二三回、口に呪文を唱へ、西南の方墨喀の方向を拜して、冥福を祈ると雖ども、弊政の餘、人心腐敗して、信義人情の如きは、彼等の全く解せさる所なれば、少利の爲めには、陰謀欺騙を逞うし、親子兄弟と雖ども、互に信用すること能はずといふ。

人民は、强徵橫奪を恐れ、知事總督を見ること虎狼の

如く大なる部落には、稀に學校ありと雖ども、教ゆる所は單に回々教の聖書に止り、更に天下日常の教科に及ばず、故に頗る無智にして。幾んど他に國あるを知らず。國に政法なきを以て、生命財産、常に安全なるを得ず、人民は益々懶惰して業を勉めず、今日あるを知て明日の計を爲さず、忠君愛國の精神の如きは、地を掃て消滅し、酷政に苦しむの餘、遂に英露諸强の代々、國を支配せんことを望むに至れり。六月二十日、德比特に宿し、二十一日發程の際、波斯の一官吏に會ひしに、行いて賊長と協議し、略奪品を返還せしむるの處分を爲すため、西拉斯より特選を以て派出せし、有爲の一官吏なりとのとなりき。彼れ曰く、波斯は腐敗の極點に達せり。一日も早く英國の代て此國を經營せんことを望む。』云々と南部は、英國の威望が浸潤せし所なるを以て、英國を渇望すること、此の如きあり。思ふに北部の人民は、之と同威を以て、露國の統治を渇望するならん。英の電信技手、曰く『貴官は、此言を聞て驚くべしと雖ども、是れは我々の常に耳にする所にして、人心の希望、既に此にあること久し』と嗚呼衰運の極、遂に此に至る、亦歎すべからずや。（太陽）

南洋の土産（口絵參照）　ＴＫ生

南洋サモア島は我が小笠原島を距る南方千八百海里太平洋中に星散碁布せる群島の汎稱にして、其風土は熱帶圈中に在るを以て島中に産する動植物は凡て熱帶地方特種の者にして本邦人の嗜好に適せざりしも先年臺灣か我が版圖に歸してより是等熱帶地方の物産は追々我が國人の生活上に接近し來り其の名稱効用の一般に知らるゝに至りしを以て今茲に其の一斑を記さん現今同島に産する者は椰子、麵麭樹、大薯、芭蕉實、葛、「パンダナ」海鼠、眞珠、松魚、鱶鰭、海龜、鷄、豚、帽子、蓆にして又向來産物となるべき見込あるものは鹽、雜穀砂糖、鰹節、牛羊、其他乾魚類なり今其重なるものに就て効用を擧げんに

椰子は土民の最も尊重するものにして其の菓實の未だ熟せざるものは核肉に一合乃至二合の甘水

(土人第一の飲料を滿盈す 其既に熟するものは土人一般の食料にして我が米麥と其用を同うす其殼は以て薪と爲すべく其木は以て家屋船舶の用材となり什器家具も多くは之を以て製造し其葉は以て蓆に作るべく以て帆を織るべし其他屋を葺き籃を編む等の用に供すべく又其毛皮は打て毛皮と「キユルク」様の粉を分離せしめ軍艦を製造する材料となし又は綸に作り縄となす又其「コプラ」(椰子の油皮)は輸出品の第一たり土人椰子を用ふるは斯の如く多く其の庇陰を蒙る此の如しされど猶ほ用ひ盡すと能はずして空しく腐朽に屬するもの多し

●「パンダナ」 は其用椰子に次て其の菓實は食ふべく其葉は細裂して帽を造るべく其木は以て家屋を建設すべし其枯葉を聚めて寢褥を作らば柔軟にして甚だ好し

●麵麭樹 其木は獨木船の船底舳艫等に用ひ其の菓實は土人の食料にして椰子實に次ぐものなり

●芭蕉實 椰子實の肉に和して菓子「パン」の如きものを製すべし

●海龜 人若し夜來海濱に露宿すれば海龜の群集するが爲めに眠ることを得ず其の海岸に登り來る響き他に徹して囂すし之を捕ふるには夜中より海濱に露宿して拂曉を待ち砂上を見渡せば無數の海龜恰も石を疊みたる如く點々所在にあり數人力を合せ急に之を捕へ一々砂上に仰臥せしめば背甲沙中に埋り又起る能はず故に力の及ぶ限りは先づ龜を仰臥し後ち料理せば一朝にして多きは二百以上を得べし又鼈甲を產す海龜と共に夜は砂上に來り晝は海中に游泳す海龜と共に捕獲するを得るなり鼈を本甲海龜を和甲と稱し二種共に甲を採て物產となす鼈甲の價は一定せずと雖も最良なるものは一斤七十弗に出で不良なるものと雖も一斤一二弗の價あり

●食物の製法 椰子實は、土人の常食とする者なるが之を製するには椰子實を採り之を海濱の沙塲に並べ數日太陽に爆し置くときは核内の水は凝りて一の芋の如き塊をなす之を割裂して核を出して烈火の中に

燒けば核の堅き皮は燒き盡して內部の芋の黃色は炙れ其味は芋を油にて揚げたるものと毫も違はず土人は之を常食となせり又魚を得れば何の魚に拘はらず皆「パンダナ」樹の葉にて茅卷餅の如く包みて火中に投じ燒くときは葉は龜の甲の如く黑く焦げて一の皮を爲す其の焦皮を剝ぐときは魚は蒸燒けとなり一二日間は腐敗する患なし南洋諸島到る所蠅の多きが故に何の食物も蠅の爲めに腐敗を來すと速かなれども此の焦皮を付けしまゝ置くときは何處に置くとも其患なしといふ故に土人は常に斯の如き法を以て魚肉を貯藏せり、土人又一種の糧養を製す是は椰子の實の中にある芋を碎き「パンダナ」の實の汁と「パンダナ」とを以て甘味を添へ食するなり又麵麭菓の一種菓中に栗と同じき種を有するものあり此栗樣の種を打碎し之を石臼にて搗き充分搗き交りたるとき之を團子の如く圓め長さ二尺程ある袋を椰子の葉にて造り此袋の中へ右の團子を入れ棒にて能く搗固め口を封し外部を繩にて卷〆め堅くして之を屋內に釣り置き必要の時之を袋の小口より輪切に切り上皮を剝き中の肉を食す其味ひ恰も我邦の乾柿の如く能く渴を止め腹に盈つ土人又葛を製し葛餅を作る其製法は「アロルート」といふ草の根を採り石の上にて搗き潰し大なる貝殼の中に清水を充たし此內に入れて白水を作り其の沈澱するを待つて上水を絞り日に乾して葛粉となすすべて土人は物を食するに匕箸なく又器皿もなし魚肉菓實の如きは大蕉の葉に盛り、之を食するに猿猴と一般なり、又飲料は椰子の菓實の未だ熟せざるに當り其核內に含みたる水を以て之を製せり其味はひ「レモン」水に砂糖を和したる如く甘美にして熱帶地方の食物として頗る清涼を覺ゆるものなり



			
鬼づた	つたくるま	だき菊葉	丸に松皮びし
			
九よう	丸にかたばみ	むかひ蝶	丸に鷹の羽
			
丸に軍扇	熨斗まる	丸に三つかしわ	おもだか
			
かつみ	立なみ	丸に橘	七よう

女學世界懸賞和歌兼題

納涼
旅行
瀧

（〆切七月十五日）

女學世界懸賞文

◎賞品天、地、人、の外秀逸十種に呈す

▲消息文（二十四字詰二十行限）

▲韻文（二十句限）

▲抒情文（二十四字詰四十行限）

▲叙事文（仝上）

◎〆切 七月二十日

◎披露 八月五日

◎賞品 以上四種中より甲、乙、丙、を選び十二名に呈す

懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚に綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界宛とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず

才媛詞藻

懸賞課題　佐々木信綱先生撰評

（天）海水浴　佐賀市柳町十七　小島ひで子

夕づく日こがねの潮浴びながら
　かへり來る人皆美しき

（地）夕立　信濃國小縣郡東内村字横辻　竹舟はる子

馬の荷をたすみおろして夕立の
　あめにぬれたる夕顏のやど

（人）海水浴　神田　千鶴子

海士の子にをしへられつゝいつとなく
　波きるわざもやすくなりにけり

秀逸

●夕立、海水浴、輕氣球（課題）

人はみなとく立さりし夕立に牛飼はかりぬれてゆく哉　河内　大矢たね子

夕立のはれ行く空に月出てゝ月照る坂を僧下り來る　伊勢　竺井ます

夕立は後ろの山にかゝりけり渡し場いそぐ繪傘繪日傘　越後　坪井わか子

窓にいま涼しさをはてぶらんふもとへ急ぐ夕立の雲　神戸　杉田鶴子

遠里の杉の木立の影うすく一村すぐる夕立の雨　新潟　行形よし

一隊の騎兵の後のしづまりてにはかに曇る夕立の空　埼玉　林溪花

繪日傘の影は小さくなり行きて牛ゆく畷夕立の降る　但馬　尾知山春子

夕立は波の上遠く過ぎゆきて呉越の空に虹横はる　浦和　林淡花子

打ちよする大浪小なみわけて小さくなりぬ兄君の笠　宮城　宮崎はる子

からき世を知らぬ顔なる都人潮浴すとそ海に入るかも　伊勢　河原芳子

馬くるま行きかひたえそいちまちもの土香涼夕立の雨　和泉　井上きよ子

うちつゞく眞砂路三里人たえてよる波暗く夕立のふる

とくおきて潮あみをれは二見潟岩のはさまに日はさし　紀伊　宮井時子

帆柱に風は狂ひて濤咆て玄海灘すごく夕立のふる　河内　河崎ひさ子

渦汐の鳴門をわたる雲先きに神ためきて雨の夕たつ　河内　河崎ひさへ

しばしとて軒端かしたる旅僧の身の上に泣く夕立の雨　伊勢　橋本とめ子

夕立に衣を絞る旅僧の姿斜に夕日さすなり　下谷　白井すみ子

なる神の遠くなり行く小松原夕立はれて月出んとす　安藝　岩崎芳子

なりところたちつゝ來るこゆるきの磯邊は夏の都也鳥　南信　吉澤とみ子

松風の琴のたえ間を潮あぶる少女の歌の清くもある哉　神田　松寺淺子

芝　高信花子

佳調

◎夕立　本郷　花香女子

夕立のはれにし庭の草の中の小池の水車よくめぐる哉

◎仝　甲斐　富郎子

山の端に浮き立つ雲の足みえて夕立すなり神もなりつゝ
◎仝上　　美作　池田芳子

夕立のすぎしばかりの湖に夕日のこりて白帆行く見ゆ
◎仝上　　甲斐　上原秀子

みな土はゆふだちすらくたに川のいはまにあまる瀬のしらなみ
◎仝上　　新潟　吉田梯子

堪へがたき夏だにはかに秋にして風の涼しき夕立のあめ
◎仝上　　大防　藤井もみ子

夕立に巷の塵も洗はれて緑はまほしき柳蔭かな
◎仝上　　四谷　中村美代子

雲の上に昇るみ船もおるものをなど沈きゆく我身なるらん
◎仝上　　和歌山　前山すみ子

五里の峠今ごろ君はこゆらんをかなたの峯に夕立ちの雲
◎仝上　　磐城　鎌田常子

曇りの世をばつゝまん雲見えて大平洋に夕立わたる
◎仝上　　信州　原さだよ

いつこより夕立來けん見かへれば西も東も雲さわくなり
◎仝上　　弘前　今静子

名殘なく夕立はれて馬車いそぐ松原虹うつくしも
◎仝上　　下野　美喜江子

時の間に嶺なす雲の起りきて夕立すなり松原の里
◎仝上　　伊勢　白井きの子

水上は夕立つらしも山川のさなみさわぎてそはにごりせり
◎仝上　　小石川　青木龍子

近方はまのつくほどの夕立にいり日さすなりみれの松原
◎仝上　　和歌山　香川君子

をちかたの山に夕日のかゝやきて我が庵のあたり夕立のふる
◎仝上　　小石川　平井岩子

夕立の空はけふりてくれ竹の葉末を走る露の玉ごろ
◎仝上　　神戸　今村竹子

沖はたる舟に夕日の影見えて磯邊は暗く夕立のふる
◎仝上　　京都　鹽見しげ子

てる日掩ふ雲ばかりたにうれしきを涼しさこほす夕立のあめ
◎仝上　　信州　吉澤辰美

打返す入江の波の音高く蘆邊に騒ぐ夕立のあめ
◎仝上　　呉港　市川富美子

入日さす峠の茶屋の松が枝に蜩なきぬ夕立の跡
◎仝上　　大和　都子

松越て松にかゝりぬ松島の浦ふり過ぐる夕立の雨
◎仝上　　本郷　とし子

夕立のひとむらすぎしいな田より五色ににほふ天のうきはし
◎仝上　　仙臺　山中よし子

夕立はあとなく霽れて裏庭の木蔭に涼し夕蟬のこゑ
◎仝上　　松江　高木露子

雲ひくゝ夕立さわぐ野路つたひ旅になやむはあはれたお子か
◎仝上　　愛知　水青女

庭池に妹が浮べしさゝ舟をふりくつかへす夕立の雨
◎仝上　　神田　杉まさ子

夕立のはれ行くあとを苦はれて見おくりをればあせみののなく
◎仝上　　上毛　関根はる子

たへかたきあつさもいつか夕立の雨となかれていつちらいにけん

◎仝上　京都　寺町文子

賤の女が子を負ひながら我家にと走るもあはれ脊戸の夕立

◎仝上　紀伊　栄山徽子

夕立の名殘涼しき若葉山露ちるあたり月ぞてるなる

◎仝上　下總　堀江よし子

時のまにふしのね近く雲見えて裾野にかゝる夕立の雨

◎仝上　常陸　石井けん子

さかさまに立てる松影見えずなりてかれずの池に鐵雨ふる

◎仝上　石見　みさを

朝顔の手入れせむとておりたてば俄にいたく夕立のふる

◎仝上　京都　渡邊益子

賤の男がよろこびもほにあらはれて水なき小田に夕立ぞふる

◎仝上　甲府　奥山たきよ

須磨の浦をすゞむ船人さはぐなり夕立すらしあはぢ島山

◎仝上　靜岡　林すき子

ふりきぬと見るまに空は霽はれて葉末の露に月は宿れる

◎仝上　仙臺　佐藤ふみ

なる神の雲おそろしと思ふまに里の小かはに夕立のふる

◎仝上　下谷　みき子

夕立はとくすずゆきてあつかりし夏ものこらず日さすなり

◎仝上　信濃　竹下よし子

なる神は山のかなたと思ふまにくこくるばかり夕立のふる

◎仝上　神戸　高松茂

夕立に峠の茶店にきはひぬぬれぬぬれたる人きあひつゝ

◎仝上　日向　紅[illegible]子

行く舟に夕日殘して過ぎにけり夕立晴れし琵琶の水海

◎仝上　それがし

夕立のなこりすゞしく月さえて葦間にきこゆ船歌のこゑ

◎仝上　香川　きせ子

鳴神のとゞろき渡る音過てなこり涼しき夕立のそら

◎仝上　靜岡　宮内千代子

馬に吹かれしみたるゝよ小松原もりのあなたば夕立のして

◎仝上　下野　神山とみ子

巡禮の身の上話なへぬまに虹となりゆく夕立の空

◎仝上　小石川　稲吉良子

夕立はふるまもあらてすぎゆきぬ只涼しさを虹にのこして

◎仝上　但馬　大山ふみ子

ふりすぎしあと猶暑しゆふたちの雲はいつこにまたのこるらん

◎仝上　伊勢　西井春子

庭の面の木々の緑は色そひてふく風涼し夕立の雨

◎仝上　水戸　武田清子

なる神の音もとゞろに聞えきてあつさをなかす夕立の雨

◎仝上　磐城　内山ふさ

荷駄馬は峠越ゆらん夕立に箱根八里の唄に暮れゆく

◎仝上　長野　佐和子

去年の夏友のいまはのその折の今宵のごとく夕立降りき

◎仝上　津軽　今ちか

四つ手網かたに賤の男かへり行く小田の畦道夕立のふる

◎仝上　大阪　頂之助

夏の野の草葉のうへも見えぬまてふりきほひたる夕立の雨

◎仝上　紀伊　宮井よし子

雨乞ひの松明見ゆる夏山の森のかなたに夕立のふる

◎輕氣球　熊本　澗富きく子

空を上るみ船にのりて同しくに星の御國にわれ行きて見ん

◎仝上　埼玉　守谷小桂

天かける船の帆まろく人をのせて北へ北へとわけてゆくなる

◎仝上　群馬　關根はる子

人皆の心の巧あらはれて空ゆく舟もある世なりけり

◎仝上　水戸　馬場とし子

はるはると人の巧を帆にわけて空の海原渡る船かな

◎仝上　上野　矢島まさ子

西東人の心を梶にして雲の浪間を通ふ舟かな

◎仝上　牛込　刑部栲子

いにしへの岩楠船か鳥なくてあまかけりゆく人もある世や

◎仝上　甲斐　小川初野

開け行く御代とはなりて大空を千里かけ行く船も見えけり

◎仝上　横濱　長谷川さく子

かしは手のきこゆる方に間みえて旗うちなひき風船のほる

◎仝上　神戸　うたかた

風のまゝに人のたくみをほにあげて雲のなみまを分けのぼる舟

◎仝上　新潟　平野琴柱子

はるはると雲の浪路をこぐ舟のゆくへや月の都なるらん

◎仝上　三重　雅子

風船のおろし枕場は人絶へて夕日淋しくかれさえ渡る

◎仝上　愛知　桑原蝶子

天地のわかれし時のおもかけを空にたゝよふたまに見る哉

◎仝上　小石川　青木龍子

雲の波わけ行く舟は久方のつきの都やとまりなるらん

◎仝上　陸前　佐藤とみゑ

日に月に開くる世には久かたの雲井を渡る舟もありけり

◎仝上　上野　矢島ぶん子

一すちの綱を命とたのみつゝ千里の空をはしる舟かな

◎仝上　神戸　今村たけ子

神のわざ人に宿りて天雲の浪路をのぼる舟ぞくすしき

◎仝上　駿河　林すぎ子

はてもなき八重の汐路のそれならて天の川にも船浮ぶなり

◎仝上　大和　榮山靜枝

空にみつ富士のたかれを下に見て風を力にのぼる船哉

◎海水浴　東京　花子

吹きおくる浦風渡し白砂の潮あみ衣油寒さまで

◎仝上　廣島　先崎よし子

朝夕に波と戯れ波とあそぶ孤島の夏のおもしろき哉

◎仝上　松江　大野松の子

うちむれつ手とりかはしつたのしげにしばかつくらし大磯の海

◎仝上　大阪　岡本つるゑ

讀みあきし詩集は磯邊の松にかけてもすそ輕々また潮あみに行く

◎仝上　新潟　行形よし

すゞしさは何にたとへむ[illegible]や夏の海に漕出みして

小説

●花束（上）

信濃　阿佐野みよ子

麥生の間から潺々流れ出て、末は菜の花の中に消えてゆくいさゝ川の畔りに、里人の昔から譽囃す一本の御殿櫻と云ふのが、連宵の雨に南技北枝の蕾皆破つて誠に今は是、咲も殘らず散りも初めぬと云ふ古句其儘の眺である。

朝未明から啼いて居た鶯も、正午になつた今は聲を收めて、此白雲と匂ふあたりは只胡蝶の翩々と翔ける計り。鄙の常とは云へ、花見樽叩いて樹下に狂ふ男もなければ、只閑寂で長閑で。

小牛を畷路から追ふて來て、頓て一服の粉煙草を此所で吸終つた爺さんの、伊勢音頭を唄ふて去つた後である。十二三歳の少女と、九歳位の男の兒と此の木陰に見えた。身には共に青糸織の木綿袷を着て、眼元の凛々しい口元の可愛らしい、黒い髮の生際から、紅梅色の頬肉の豐々した所まで、似たとも能く似た容姿、言はずとも確に姉弟に違ひない。

「好い景色だこと、何時までも繁ちあんと遊んで居たいよ、こんな好い所てねエ」

心ありげに弟の方を見たが、相手は何の感じも起つて居ないらしい。

「あれ姉ちあん、雲雀が土手の所へ、そうれ落たは」

伸ばしかけた肩先を後から輕う抑へて、姉も共に青草の茵の上に坐つた。菫、蒲公英、蓮華草などが奇麗に膝のあたりに咲いて居る。

「繁ちあん、お前其日になつて又嫌だと云ふのおあないの、え、繁ちあん、眞實に高野のお寺へ行くの、高野といつたら山の中だよ、ご覽な、向ふに青い雲のやうなのが幾重も見えるだらう、あれが高野山だよ、あんな山の中にお寺があるんだが、お前眞實に行くの？」

眞面目に問はれて、流石に力ない眼で姉の顏を見返した。

「嫌だ、坊主になるなんてえ、雖然姉さん、早く行く程立派な人になれるんだと、父樣が言つてるぢあないか、嫌だつてば乾度父樣に叱られるから、仕樣がない行くわ……姉樣も矢張り大坂へ行くの？」

俯向いたまゝ草を毟つて居る。

「アゝ」と力なく答へ弟の手を確と握り、

「お前は高野へ行くし、妾はまた大坂へ行くし、何時又一所にねえ、こんな所で面白う遊ばれるかと思ふとお前何とも思やしないの、眞實に妾それが悲しくつて……」

摘んで來た花束は、膝から轉がり落ちた儘てある。

「姉ちあん、何故母ちあんは死だんだらう、母ちあんさへ死なきや何時までも自宅に居れるんだにねエ」

寂しげな顏を眤と見つめて居た姉の眼には、涙の露のきらめくが認められた。

「何にも知らない此の兒が可愛そうて……」

獨言のやうに言つたが、堪へきれなくつて、弟を確と抱しめて泣いてる時、後の方に足音が聞こえる。

振り返つて見れば、二人を育てゝ呉れた乳母のお駒が土橋の上から例の嫣然として來たのである。

「お二人ともまアこんな所に……天神山から榮山寺の方まで大變に探しましたよ」

やがて近づいて來てお駒は、二人の泣いた涙のあとを認めた時は、一種憂愁の色が表はれたが、さあらぬ躰で姉弟の前へ出したのは、僅と杵を離れたばかりの草餅の皮包。

「さあお喫り、乳母もお相伴致します」

喜ぶ姉弟の顏を眺めて、お駒は思はず眼を閉つた。

「何店で買うたの乳母や？」

「ほゝそんなに見えますか、ねえ坊ちあん、乳母の叔父さんがお兩人に進げたいつてね、今拵へて呉れましたよ」

あゝ此の樣にして優しい美くしい笑顏を見るのも今日と明日、やがては知らぬ人ばかりの中へ出され、冷たい夜具を頭から被つて獨り寐の枕堅く、故郷戀しい時この小さい手を顏にあてたまゝ、泣き乍ら夜を明すてあ

らうと思へば、お駒はもう胸一ぱいに成つて來る。
「愈々明後日からですねえ、揃うも揃つてお二人までが、あんな所へお行きになるなんて、御親類が澤山あつても、あの誰樣もお止めにならないですか、眞實に何よりお二人が、お不便で……」
言ひ淀んで思はず鼻を詰らせた。弟は無言、食べて居る草餅に涙が落ち、姉は俯向いて眼を抑へてシク〳〵して居る。

（下）

吉見新左衛門と云へば知る人ぞ知る此の界隈での舊家石灰で塗り磨いた方幾町の土塀は、今も彼の通り霞の中に閃いて居る。名鏡も時到れば破れるのが浮世、當主が廓の酒に醉痴れた擧句の果ては、俗李と玉梅を見判けぬのみか、萬人が蹂躙つた路傍の花を、その色香に迷ひて別莊に移し植えたのがそも〳〵の。涙交りに諫めた妻のお節は、家の傾くを苦に病んで枕も上らず、あはれ霜にも雪にも堪へ得べき名木は、若木の二株を念紀を殘して、その根は枯れその幹は倒るゝの悲運に陷つたのである。
妻の亡くなつて間もなく本邸に呼入れたるは素生怪しきお小夜と云ふ女。天性の辯舌は逞しく鋭く、繪屏風の中の寢物語も奏効著るしく、遂に姉のお俊は大阪の俳優の家へ、弟の繁治は高野山の坊へ、孰れも預けることに決定たのである。
「長らくお宅にお世話にもなりましたし、能く御父樣の御氣質も存じて居ます、けれども何にも知らぬお二人を、俳優の家だの、高野だのへ、お遣りなさるなんて、餘り酷いお仕打ですわね」
お駒は二人をつく〳〵と眺めて
「何も御存じないのにねえ、眞實にまあ酷い、毎日妾泣いてばかり居ます……」
聲は流石に震へたが、泣聲聞かすまいと齒を咬縛る。鬢の後毛は耳朶のあたりで、ぴり〳〵と小搖してゐる、弟までが折々右手の小さい指で、その眼を抑へるいぢらしさ。
「乳母や、妾より繁ちやん方がねえ、眞實に可愛そう〳〵

「……」

「ハア」

と言つたッきり、耐らずお駒は引寄せて、頭を輕う背へ撫下して遣つたのである。

賺すべき身が悲しいことを言並べて、却て姉弟を泣かせる、それを知らぬではないが、我子同樣に育てゝ上げたこの二人が遠い〳〵所へ遣られて、染々と顔を見られるのも今日明日と思へば、物の分別も起る暇もない。我からも、膝に凭れかゝつた姉弟を抱締めて、均しく聲を上げて泣いた。

「お孃さん」

「何よ」袖の陰から濡れたまゝの眼を開いた。

「お父樣は彼した氣質ですから、それで乳母はねえ斯う決めました、お二人とも一旦行つてね、その中に東京の叔父樣ゞ學校から歸つて入らつしやるから、成るやうに御相談申して、あの乾度ねえ、乳母は大阪へも高野へも乾度お迎ひに參ります……」

「そうしてお呉ねえ、乳母や、」

「それまで待つてね」

「アヽ乾度來てお呉れ」

「行きますとも……」

抒情文

●雪月花

（甲賞）

神奈川縣青木町六七　保田ゆづる

雪月花、さても美はしく床しの文字なる哉

匂ひこぼるゝ美はしの花こは春のみに止むべきやはそかおらん限りの妙なるゑまひは如何に淋しき野に山に嬉しの面影浮べつゝ沈みし悲哀の胸をや慰むらん、すみわたる月影わきても清き秋の夜の月は光かゞやく玉の欄をはるかにてらして如何にゆかしき琴の音に昔し忍ふの友とやなりけん其とも分かぬはにふの小屋の軒もりて哀れいかなる翁媼か楽しきまとゐをやてらすらん、花は色なく鳥は音をたち折柄なる木枯しの風われは顔なる冬の日に紛々春ならぬ六ツの花ふゞき亂れては老も幼きも寒さ打忘れ實に心ある風流士やいかに床しき言の葉に咲きいでぬらんと思ふを積り〳〵ては人の世のけがれし塵をその清き衣の袖に限なく蔽ひて見るからに神々しきしろかれの世にたとへなん是ぞ雪てふ物のくしく妙なるわざならすや實に美はしき花清き雪さては冴へたる月こそ愛てたきものゝ極みとやいふへけれ

われ日頃此の三のものたゝえて止まさるは花の婉なる姿雪の清かなるはた限なき月の光愛するのみにはあらすしてこは假令は優しくもけなげな

るべき我やまとおみなの心によくも似通へはなす誉れある泰西の聖人や如何なる物をか其心になぞらへつらんしられども古き其上より美はしき花も名におふ櫻花國をは故山とせる我か日の本の女子など此花の如き美はしき露におとらぬ清けなる月に比ふるすみ渡る心なくてやは

さはれ花てふ物の美はしさ折からの嵐のかれ離く月におしきは村雲ならすや其のみか雲れいと高き富士か岩根をよそふ一點けかれなき清けき雪も然てふ敵にはかつよしなき我如何にせんされとされど長世に色うつろはず消えずけがれず年へてます／＼光あるは人の心々の雪月花ともいひつべきか

あゝ美はしく床しの文字なる哉月雪花や

評　雪月花をめづる情をのべて、人の心の中にも雪月花ありたけれと結ぶあたり、才藻掬すべし（おうなむ）

●夏の夜

〔乙賞〕

和歌山縣西川原　藤田琴子

人皆ねしづまりたる家の一室、獨り机によりてあれば、昔しに歸る思ひは長し。果ては、通ひ來る松風のむせび、波の叫びも耳に入らず、空想の白き翼ふりたてゝ、悲しき方に飛べる我が心。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我が姉上は、我が姉上は、何處まで、死出の山路を。死出の山路を、何處まで。戀しき姉上に別れて、荒れ狂ふ波海原のたゞ中にたゞよふ小舟の如く、色あせたる羽、力なうふりて、秋の虚空にひろがへれる胡蝶の如く、いこふべき島影なきにまどひ、休らふべき花影なきにかなしみつゝ、袖の涙をこよなき慰さとして、玉の緒もたえなむばかり泣き歎く、君が一人の妹を哀れと思ひ給はずや。月なき今日のくらき夜にも、迷え給ふか、ひとり、山路をば。辿り給ふか、ひとり、よみじをば。姉上やは。姉上やは。暑きこの頃、足休めむ涼しき木影、そこにありや。渇な癒さむ清水、そこに流れたりや。あはれ、追ひしきて、疾く追ひしきて、今一度、よりても見たや、御膝に。すがりても見たや、御袖に。

京の友どち文よせていふ、歸らぬものなり諦めはてよ、歸らぬ事ぞ、歎くをやめよと、日頃親しき友の、何事も皆、知り合ひたる友の言葉として、いといぶかしく思はれぬ。さる冷かなる世のことわり說きて、我が心の思ひを消えしめむとするはつらき事ぞ。かへらぬものと知るからに、我みはいよ／＼歎かるゝ。かへらぬ事と知るからに、我れはいよ／＼諦められぬ。わが姉上の、我が姉の、諦めでは、かなはぬものになりぬと思へば。

なぜに姉上は歸らず、なぜに姉上は死にゝたる、綠の房なす黑髮、いき／＼しき御顏、丈高き御姿、必ず長らへて、必ず死ぬべき人にはあらざりしを。憎くや、誰が死なせたる。恨めしや、誰が殺しつる。無念ぞ、恨みぞ、遺恨ぞや。

父なく、母なき我が身に、父とも母ともたのみまつりし姉上よ。姉上よ。思ひがけきや、遂に歸らずならむとは。遂に立たずならむとは。忘れも得せじ、かなしき今年の春のくれ、いたましき病ひに冒されて、我が心づかひも仇に、庭の櫻風にちり、窓に音ある夕ぐれ時、其夕まぐれ、姉上は、姉上は、とはに眠りぬ。とはに眠りぬ。かくして春も逝きぬ。

其の春の、其のゆふぐれのまためぐり來て、其の花獨りながめなば、姉上と共に見たる京の月や紅葉や、又こむ時にながめなば、悲しき思ひのたへ難うつらからむとて、遙なる北の空より南の星をなつかしみ、幸の御光求めむとて、懷しき故山、ふりすてつ、故山の月花、後にのこして、

ふだらくや、岸打つ波の紀の海のほとり、あは夢結ぶ身となりし心の内、思ひ至るや、世の人々。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

思ひ得たへじ、早やわが胸は。つと立ちて、窓押し開けば星の光に、海原たゞほの白し。松の音のすずしく、波の聲さえたり。仰げば、銀砂子まきちらしたらむが如き星影、あゝ星よ、星、セルチチル、スター、願はくは、幸なき此身を守りませ。うなづくか、やさしきまたゝき、せはし。拒むか、おそろしき光殘して、西に流れて。

評　文情清高にして、津々たる詩味を帶ぶるが如し、亦得易からざる文也（おうなむ）

●渡し守り

（丙賞）　こみや

大方の花の稍も暮れ行く春に名殘をつけて青葉のかげ日に／＼生ひ茂り行くこの頃の空昨日今日はあやしの雲の波さへ西に南にたゞよひてやがては心なき雨のおそひや來ぬらん美しかりし黄金色の夕陽は光を納めて仰ぐによしなく見渡す限りの人里ははや薄く夜の色に蔽はれかゝり小石にさゝやく浪の音葉揺れに聲ある風のしらべの外には田家の燈火のまゝ水に映じて明滅する狀此落莫たる自然界の妙境に對しては國手もふ覺筆をおき詩人も自ら感歎の聲を發せん細く長く幽に余韻をひきて遙に消え入る遠寺の鐘の音夕つげ鳥の己がねぐらをさして急ぐかげ三つ二つ凄光は四下をてらして滿目只寂々ある此幽韻なる光景心ある人よ長へに汝が慰藉となり希望の星はやがてその頭にかゞやかん流れ清き小川の水あゝ此流れあゝこの水あらき浮世の颪風もなくて渡る日毎のなりはひも悠々自適只一葦の行くがまに／＼に已が心身をまかせ悽愴たる人生の運命をよそにしていと平和なる渡し守りの翁よ今や家路にいそぐ客が後すがた黑く淡くだみたる聲はり上げてふしをかしうかすかにきこゆる舟うたはありし昔の思ひ出にやあらんそが門邊に迎ふるは誰妻か子か終日の勞れぎにひてなぐさむるにたれ妻か子かあはれ翁よこの時の翁よ思へ眞の快樂はかの富貴の門にあらずしてかゝる伏家の中にあるを世は名に走り利に趣き黄金の爲には主義本領をまげ地位爵祿のためには眼中正義なく錦繡綾羅をまとふて酒地肉林に彷徨するもの比々以て是なる今日洒然として天命を樂しむものあゝ此翁このながれ乾坤風獄の間あはれ風月を友とし自然に接し眞理をさとるの好適地點はこれか岸の一本柳のもとに佇みて見送るわれははてなき空想にふけりつふけゆく空を仰げば霞の衣ぬぎすてもやらでおぼろの月にわづかに其光をもらし四隣の萬籟しづまりて只きこゆるものは野犬の遠吠のみ。

評　閑雅にして風流的なる、所謂「渡守」の翁の生活を描きて、遂に人生觀にも論到す、文情共に清高の趣あるを見る（おうなむ）

◉思ふまゝ

（秀逸）　本郷區通り四ノ一六　堀口菊子

◎明日ありと思ふ心の仇櫻夜半に嵐の吹かぬものかはとのみ思ひて、ひねもす唯靜々として身を勞し聊も樂しむの余地なかりせば此はむしろ悲しき業にて嫌とすべきものにはあらじ、さるは又世を夜半の嵐に散る仇櫻とのみ觀じなば、さては深山の奥を尋ねて厭世遯俗の庵をば結ぶに至らむ。されど明日ありと思ふ心にほだされて今日も甚なく暮しぬるかなと云ふらむやうになりて以樂天に傾きて無頓着に流れん側の不勤勉不

むなど云ふは、大方明日てふ觀念にほだされて今日をうとんずるものぞ。さはれ今日のみと思ひなやみて、くよくと勉むるは、むしろ消極にして、ゆゝしき業をなすゆゑんにはあらずや。たゞ明日てふ觀念にほださるゝ事なく、よく明日あるを、樂みて今日をいそしむこそ、まことの業にはあれ。

◎沈毅にして果斷なるは男なり、饒舌にして思慮なきは女なり、理に起り義に戰るゝは男なり、猜忌に泣き嫉妬にさけぶは女なり、血の如き涙あり火の如き熱情あるものは男なり、言葉に實なく行に節なきは女なり、豪膽にして秋山の概あるものは男なり、小心にして井底の蛙の如きは女なり。さはれ一念到りて岩をも透すものは女ならずや。轗軻不遇に泣く者は男ならずや。なほ男は石の如きか、堅くして割るゝなり、女は金の如きか、固りて溶けさるなり、たとへば女は薔薇の如く濕腰にして刺あり、男は根のうきたる大樹の如く、風の爲めに忽ち倒るゝなり。

◎今の子守女を見るに一人として品よきはあらじ、彼等のかたみに語らふを聞くに、みたらなる話のみして、恥としも思ひたらむけしきなく、さては人の前をも憚からで、我はがほに、口ひゝらかして、鄙歌を唄ひほこり、物を辨へぬ小兒をさへ、しらずしらずあらぬかたにいざなひ行くは、慨かはしき事にこそ、かゝやうの女の手にも、やがて日本の國民ともなるべき人の育てらるゝを思へば、我國のゆく末も、いと心もとなしや。

◎いさゝかの、人の言に、はら立さからふは、己が愚なるを示すものなり。いかにのゝしりそしればとて、空ふく風とき〻過しなば、つゆ、心にとむべきことも、なからむ、見よ彼の松杉などの、風にさからへばこそ、枝も折らるれ。彼青柳などの、風にさからはればこそ身の全きをうるなれ。

◎貝原益軒翁は、友に交り、久しうしてますます敬ありけり、とか。わが友は如何に、よそ人ならで我身は如何にと、折ふしは顧れど、なほ、なかなかに及ばぬぞ、うたてき。

評　こは、偶感を述べたるもの、別に清新の趣も見えれど、文中に見るべきの語もあり(おうなむ)

●そゞろ言

(秀逸)

信州下高井郡倭村
大字柳澤四三番地　小林春子

○世にあさましきものゝかづかずあるがなかに、たゞ暫しあつまの都へのぼり居ける人の、覺束なきかの地のもの言ひざましたる、心の奥も見へすくべう思ほえていと胸わろし。

○さはれくだりゆくさまこそ、なほ淺閒しけれ。野邊送りにおのれは行かで、近きあたりの知れる人などに名札のみ賴みて言傳てやりつる、いく度も見たり。斯樣になりては言ふ甲斐もあらざらむと、いとかなし。

○さる人の言はれたるに、今の世の紳士といふものは笑しきひげと、絹(シルク)帽子(ハット)と、羽織と、こゝらの孔伯とをもてる人なり、とありしが、實にさるべうもや、思へばすゑの世の字書こそ、あやしき者なるべけれ。

○わが好むものは、春雨、海棠、菊の露、尾花多き、秋の野、蘆花しろき川邊、の松緑なる處、山間の月、青葉の瀧、夏の夜、天井の高き、深夜五位鷺の鳴きわたりたる、浪あらき海邊、旅行、讀書、山上の眺望、小犬三四歲の稚兒、疊の新しき、氣前よき女、沈勇ある人強情なる男、沈痛悲風の趣ある音樂、綺癖、及び詩文醉ふて亂れざる人、淸小納言、しづか御前、春日のつぼね、紫武部、小野小町、近くは一葉女史。

○わが嫌ふものは、蚊、蠅、猫、鼠、おくび、便所、口の臭き人、きざ

な男、氣取る女、臆病者、ふらがる男、利口ぶる女、にやけ男、理屈すきの人、氣概のなき男、愚痴をこはす女、酒くせの惡き男、義理しらぬ人、おべつか者、風あらき夜、夜更けて吠ゆる犬の聲、鐘の音、按摩の笛、ランプの薄くらき。

○忘れればこそ、思ひいださず候。この心われには、こよのふ嬉し、友もかくあらまほしくこそ。

○雨に、風に、咲く花を見、照る月を眺むるにつけてたえずおぼし出でらるゝは、わが故郷のことなり。年のいつとせ夢のまにすぎて、空しく北海の濱にさすらふわが身の恥かしさ、あはれ、つゝがなきはわがふるさとの山と川とにて、幼きほどのわが友垣は今いかにこその人また今年の人ならざるべく、いつまで草のいつまでも、變らじと心にねぎし人の身の末ぞきかまほしさや。

評　妙にあられど、又たきづもなし、吾が好むもの、嫌ふものを述べたる邊、頗るおもしろし(おうなむ)

●都なる兄を懷ふ

(文与)　高知　竹村鶴子

たれこめて春の行方も知らぬまに、花染の衣は、いつしか色あせ、蟬の袖もうつろいそめて、青葉の梢涼しげに茂りたる、今日此頃の景色はなさく春に劣るべき。

庭の白百合の花は、今や咲みちたるに、あまりの美しさに氣も心もむすぼれがちなる我は、かたへに書を押やりつ、書窓を出でぬ。

目にとまりし此花よ、あはれ都におはす兄上の、必ずよき花の咲かん程に、眺めんとて、うゑ給ひしにはあらざるか、さるに此花はうるはしく咲きしよ、あゝ花よ、主は遠き都におはすものを、たれに見せ、たれをなぐさめんとてかくは咲きたるぞ、汝は兄上の旅立給へるを知らざるか。

思ひ出せば兄上の、物學びせんとて、山川へだてし東都に旅立給ふことゝなりぬ、其時のわらはの心何とはなしにはなれがたき思ひぞしぬ、今日こそ御別れなれば、汽船までは、御見送り申さでやはと、心にちかひしかひもなく、學び屋に通ふ身のせん方なくて、朝まだきに兄上の、御居間訪ひまつらむと思へど、未だふしどをはなれ給はざれば、障子の外より「御機嫌よう」とのみは申上げ、あとは夢中にて家を出でぬ、其聲のあやしくふるひし事はあとにて知られぬ。

今頃はいかにし給ふらむなどとて、それよりこれを思ひ及ぼして、たゝずむ程に、さつとふきくる一陣の涼風に、始めて我にかへり、見れば今や夕日は山の端に落ちなんとして、あたりをぐらく、我そばに立てる柳の今朝の雨に宿したる露の玉の衣の袖に散りぬ。

折りしも下女のもち來りし、手紙をもたれならむとて見れば、あなうれしきかな、我思ふ心の通じけむ、兄上の許よりの御手紙なりき、直ちに封押しきりて見れば、今月の末には暑中休暇となるなれば、絶えて久しかりき故郷にかへらむとの文字、其御筆の滯りなく、嬉さの心もこもらむとぞ覺えし、

咲きみだれたる白百合の花を見れば、こも又嬉しげに笑めり、やよ花よ、汝の主は程なくかへり來まさんに其折までは散らであれよ、汝のつゞかん限りは、美しく咲きて旅のつかれを、やすめまゐらせよ。

時しも空を仰げば一輪の月は中天に昇りぬ、あなふけやすき夏の夜や、師の君よりの宿題もあるものをと、さやけき月の影ふみて家に入りぬ、

敍事文

●我が身

（甲賞）　大阪市西區西長堀南通り二丁目　村田たま

心ゆく計り晴れ渡つた大空の月、その影を遣水の名殘りにうつして見る涼しき快さ、ましてこのやうな廣い庭の木立の茂つた所は格別、水晶の玉を糸緒に通してそこいらへぶらさげたやうてある。

が此の景色この有様、昔は嬉しとも樂しとも思つて眺めたのであるが、今の我が身に何樂しかろうぞ、何面白かろうぞ。

引受けて世話してやるといふ體のいゝ名のもとに、折から拂底のこれ幸と下女代りにされて……下女の役位今迄しつけたものだから別に何とも思はないが……世話になつてると思へばこそ、云ひたい事も云ひ得ず毎日〳〵叔父様や叔母様の鼻意氣ばかり伺つて、氣兼して氣味の惡いおてこすりを云はれて……折には辛い悲しいと思ひつめいつその事ぬけ出て家へ歸らうかと、下駄まではくことも有るが……歸つた上はどうならうか……人の親切も思はずぬけて出るやうな横着ものは一切當家には揮ひつけぬと云はれるは知れたこと、例へそうなつても身から出た錆、自分は誰怨まうやうもないが母上はどう思ひなさるだろう、父上に別れていとゞ心細いのにまだ其の上親類にまで見離されてはと、嘆かれるてあろう。おいたはしい母上にそんな苦勞をかけてはと思ひ返して、夢中に門口迄出たのをさあらぬ體に又ひきかへして、竈のかげてそつと涙を拭ふたのも幾度か……

あゝこのやうなつらい悲しい境界にある身て、何が面白かろうぞ、何が樂しかろうぞ。よしたとへどんなに貧乏しても今一度父上と共に暮らされたなら。

もと我が家はそんなに富とでもなかつたけれど、さればとて貧しいでもない。下女の給金も儉約して其の務は母上と我れ、やさしき父上に慈愛深き母上そして我と無邪氣な弟と。いつも笑聲は屋に充ちてわが家計りは秋が來ても冬が來ても藹然春のやう、かくして樂しき月日は何還も〳〵同じやうにくり返されたのてある。春のやうなと計り思ひつめて居た所へ、蕭殺冬の木枯のやうな風が吹きすさんだのてある、それはあえなくも父上がふとした病氣からなくなられたので

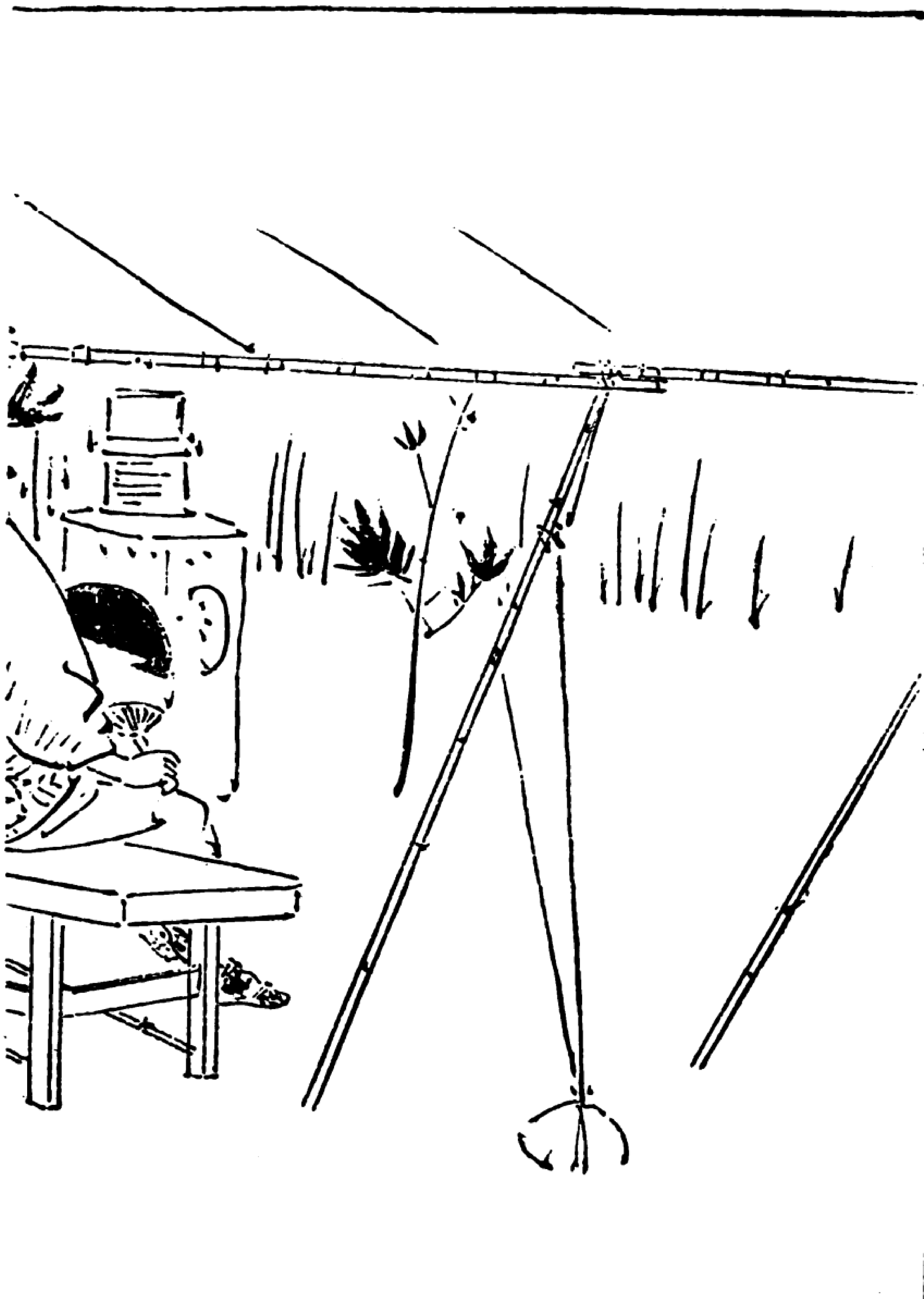
いくらかの蓄も藥の代に大方使ひ果してしまつた心細さ、かくして一家生計の費は二三軒の貸家料があるとはいへ全く母上の御手一つにまかされたのである。

かゝる所へこの家から自分だけ引きとつて、世話してやろうといふ話が出た。

否々人の家へ居候になる程心ぐるしい嫌なものはない、居候になんかなる位ならそれよりも小學校の教員にでもなつた方がと、その事を母上に御話しゝた。すると母上はそれもよいが然し斯うなつた以上頼にするは親類ばかり、だから何事も親類のいふ通りにして——殊に又むこふでは親類がありながら餘に世話もせぬと、世間の人にいはれては心苦しいといふそれも尤、御前も定めて嫌だろうがそれは義理と思つて……と仰せられて涙のある目にぢつと自分を見守りなされた、アヽその時〳〵只もう譯もなく悲しくなつて、嫌だ嫌だと思ひながら嫌といふ事をよう御答へ申さなかつたのてある、今思へば何故其の折キツパリ斷はらなかつたのだろうと、つく〴〵惜しまれてならぬ。

さて此の石田家へ來てからはどうてあつたか、是迄ても水仕事もした洗

溜もした掃除もした、が然し其の報酬として樂しい家庭にあたゝかい兩親の膝下に面白く暮したのてある。それが初の内こそ叔母さんも從姉妹のお俊さんもいろ〳〵と親切にいつて下さつたけれど、この頃では丸で他人あしらひ何の下女と一寸も擇ぶ所がない、否儘に下女として我れを見るのである。今迄は下女も二人使つて居たのを自分が來てからは、不經濟だからとて一人には暇をやる、そして自分には下女も一人で不自由だろうが辛棒しろと、それとはなしに働けと云はんばつかり：……それならいつそ下女の代りしろと云つて下されぱよいに………然し自分は決して下女の役目を厭ふものてはない、却て喜ぶものである。居候になつてぶら〳〵遊んで居るよりも下女の代りなりお三どんの代りなりする方が、いくらか心苦しさが減ずるそれに又叔父樣や叔母樣の氣受けもよからうと思つて、されど其の心使も水の泡、一日暇なしに働かして置いてそしてさすがお民さんは今迄しつけてるだけあつて、働き振りがお上手だとは審辭といへばいへ、何といふ情ない言葉てあろう、自分はイーエと何の氣なしに答へて思はず涙を浮べたのてある。さて骨休めと思ふ晩になれば肩たゝけと　腰すい、とか、御前は嫁と思ふてあろうがこれも皆御前のため、女　嫁して姑に事へればならぬから、按摩は其の手際として習つて置かなければいか



涼み

ぬとて、あゝせいかうせいとやかましい事計り、それも外ならぬ自分の爲とならば喜で聞く、實に按摩は女の手藝の中の一ッであろう。然しそんなにやかましく云ひながら我が子のお俊さんに一寸もさせないのはどういふ譯てと、幾度か〳〵口籠つた末思ひきつてお尋れした、すると叔母さんはフヽンと鼻の先であしらつて、お俊とお前と一所にされては困りますよ、お俊は子家の一人娘だから嫁が按摩するやうなそんな卑しい所にはやりませぬ、僅の薬代に蓄のお金をひつばたいてしまふやうな所のものと、くらべられては迷惑だと面憎い程の云ひぶり……何も蓄のものもひつばたいてなど云はなくつてもよいに……然も其の場には家内中皆居たのであるが、かなしいと聞いたのは自分一人計り他の人達はそれを可笑しいときいたのてある。

あゝまこと居候といふものはかく迄つらいものであろうか、かく迄悲しいものであろうか、と思ふにつけアヽ父上いまさばかゝる境遇には立ち到らぬものをと、御在世の折はさほどにも思はなかつた父上の、今しみ〴〵と戀ひ慕はれるのである。

或る日暇を貰ふて母上の許へ往つた、久し振りの事とて大層よろこばれ、どんなだいと我が事を一番先へお尋れなさつたのは定めしお氣にかゝつ



茶屋

てあつたのであろう、見あげ參らすれば暫らく違ひまつらぬ間にさてもお年老られたこと、尤も今迄の風習も髮結賃を儉約して結び髮に、よろづ飾らぬ御有様の一きはお年を添えるのだろうけれど、然もお苦勞なされた跡あり〳〵と見あげられ參らするに、まだ其の上にお心を痛めやうとてわが苦しい境遇をどうまあ子として云はれやうか、只にんの少し計り家が廣いから掃除のてがありますとか、お庭が大きいから水をまくに隨分骨が折れますけれど、まいてしまつた時の快さは又別段てすとかと、それとはなしにほのめかしたばかり思ひきつた事は云ひ得ない、それも家を出る時は厄介になるのは困ろう何も世話して貰はなければ今日口すぎが出來ないといふのでもなし、こつちから世話してくれと云ふたてもなし、むこふても世間に對して引取つたのだから厄介者と思へばそんなにいゝ心地もしまい、さすれば家へ歸つた方が自分も氣兼れなしだし、叔父樣や叔母樣の方も經濟上大分逃ふだろうし……そうだこれは自分の境遇のつらい事を母上にお話してキツパリ固はつてもらはう、もう〳〵居候になんて二度となるものではない、とかたく決心して家を出たのであるがさて來てみれば……いた〳〵しい母上の御姿に對しては其のかたい決心も、いつの間にか消え失せてしまつて苦情も苦痛もそして又困苦も云はれないのである、云ふに忍びないのてある。

あゝなつかしの父上慕はしの父上。父上は黄泉とかゝら母上の苦勞なさるのや私の氣兼れするのかを、ごらんなさいますか。ごらんなされた時アゝ我がこんな所へこなかつたなら、だれもそんなつらい目には逢はぬものをとお嘆きなさるてせう

が父上よ決して〳〵お嘆きなされますな、苦は樂の種といふ事が有りますから、やがては今日の有樣を笑ひながら語りあふ時もありませう。よしや女の力弱くとも一心に精出して我身はとまれかくまれ、弟は必らず〳〵立派なものに仕上げて見せまする程に、草葉かげからごらんなされて下されませ。

アゝもう何も云ふまい云ふたとて別に仕樣もないもの、只うらやましいのはお俊さん――それも〳〵決して髮飾りに衣服に流行を追ふて粧ふのを見てうらやましいとは思はぬ、却て華美な風として排斥する。一人娘として可愛がられて居るのを見ても羨やましいと思はぬ、却て我が儘者になる恭として排斥する。されば何がそのやうにうらやましいが(?)それは〳〵兩親が無事で揃つて居られることてある。

評　人は境遇の奴隸なりとかや、まして心よわき女性のかゝる境界に沈淪せばなどか世をはかなまずには居らるべきよみもて行けは眞情流露して貫に同情の涙あふるゝばかりなり（幽雲）

◉初　夏

（乙賞）

大阪本田一番外一五九　岡崎鶴子

菅の根の長き春日は蝶よ花よと夢の間に過ぎ去りて、今年も早や青葉茂れる森陰に時鳥の初音を待つ頃とはなりぬ

花咲き匂ふ春の野邊月清み渡る秋の夜半いづれ戀しからぬはあられども夏の初の景色も又一しほのながめにて面白くも又趣味多けれ、木々は皆青葉して茂りし棺のいといぶせく窓は書讀むだにものうき迄に小暗き數多のものにしばし後れし池のほとりの藤山吹もいつしか汀の水に影をも止めずなりて唯春夏の間をつくらう卯の花のみまがきの邊りに咲き殘りて闇にも訪ひ來る人の道しるべとなるぞいとも愛らしき

時知らぬ松さへ此頃は一雨每に綠深くまさり行き花たちばなも匂やかに芥子なでし子檜扇虎尾小田卷などの夏の草花は時を得顔に咲き初めて背

戸の小川のせゝらぎはさながら自然の琴をかなづるやう蛙啼くもあはれにはは見るもの聞くもの皆をかしく樂しからぬはなし、

今日しも朝まだきより降りしきりし雨の夕方よりやう〳〵晴れたれば日ねもすのうさを散んぜんと一人宿を立ち出でゝ尻無川のほとりに行き遊近をながめつゝ覺へず川下へと下り行けば日はいつしか暮れ果て八日の月は清くさへ渡りて青葉にやどりし露にうつりたる様さながら青き敷物の上に數多の玉を列べし如く川べに立てる柳の下に少時たゝずみて此天然の美しき景色をながむる折しも一ツ螢川向ふより飛び來りてわが顔をかすめ行くにぞとらへんとしてあせれども唯身を焦がすのみにて其間に螢は遠き彼方に飛び去りぬ

折柄一陣の涼風サト吹き來りて草原(グラース)には時ならぬ小ゝ波をたゞよはせつゝ今迄哭しおりし玉露は盡くふり落されぬ

折しも螢狩する子等にやあらむ四五人の小女とや〳〵と走り來りてぼう然として立つ妾の姿を異しげに打見やり共にさゞめき合ひて又もや彼方にはせ行ぬ

評　叙景の筆輕ろくして徹に入る讀もて行くに涼風一陣肌膚を襲ふの感あり。(嗣雲)

●避暑の一日

(丙賞)

伊勢國度會郡
宇治中之切町　河原芳子

(朝)

夏は殊更くらしわびぬる身の、いかにものうく引籠りつる、わけて今年へ、俊夫も歸り來て、お許へいかになど待ちくちし侍るに、例の歌袋携へて來よ、濱の朝夕はおもしろからん、と。なさけ深き伯母君の許より、いひおこさせ給ひし嬉しさ。さなくとも去年の名殘をくりかへさばやと思ひつゞけ侍るになど、獨語しつゝ、つとめての程出立つ。

町を離れて長き畷にさしかゝれば、露を帶びたる天地の景色いとすが〳〵しう、青田、瓜畑、桑林はいふも更なり、田井の水汲む桔槹の軋る音、小牛追ふ子の無邪氣なる歌どもゝ、炎帝の暴威を被らざる朝の野邊の平和に調和されて、慰藉の樂のそこよりこゝより、あるは高く、あるは低く、豐けき韻きを空に滿えて、自然の興を人の子にさゝやくやうなるに、眼に見ゆるもの皆涼し、など口ずさみながら、心地よき歩にそよふく風を送り迎へつ、午前八時すぎ、二見浦なる伯母君の家につきぬ。

(夕)

伯父君、伯母君、さては俊夫の君の珍らしき物語に日のたくるをもしらで、打ち寛ぎて興じ合へる折しも、沖より颯と匂ひ來る風のたとしへなう冷やかなるに、あな嬉しや、とふりさけ見れば、魔の手の如き黒雲の早や極みなき空を覆ひ盡して、今にも大雨到らんとするけはひなるにぞ、欄干近くよりかゝりて、其の大觀を眺はんと思ふ間もなく、白馬銀甲の大軍が海を覆ふて驀突し來る如く、一瀉千里の勢もて、船を走らし、島を圍み、岩角に突喊し、松風の咻喚する様、げに壯絶のながめなりけり。あゝ、大自然の威嚴あることよ。と我しらず叫びぬる瞬間、霹靂一聲、火箭を放つて、颯々たる雷車雨に去りし跡は、滿天恰も拭ひし如く霽れ渡りて、炎帝の威漸く衰へ、活々したる光彩は、大地の萬象に趣味ある色を點出して、一幅の活畫圖を見るが如く、清涼の氣肌に迫りて其の心地いふばかりなし。

あゝ、七色の虹は匂ひぬ、清き渚に歌拾はゞや、と俊夫の君のそゝのかし給ふに、浮立つ心抑へかれて、さらば侍はん、とて罷りぬる程、松の翠の眞砂に印して冷々といはん方なきあたり、寄せてはかへす雄波雌波

の幽けき私語を聲くにつけても、嶺山かげより沖の小島にかけわたしたる七色の橋の、奇しき彩華に美神の俤を思ひ浮ぶるにも、身はこれエデンの園に遊べるやうにて、夕榮ほころ山光水色の、氣高き薫りに袖をかざしつ、若き血おどる胸の内に慰藉を送る晩鐘の音を數へながら、讃美歌謳する無限の思ひよ。あはれ次第に沈み行く雲旗雲の、こぎ歸る真帆片帆に影を落すや、紫匂ふ鹽屋の烟たちのぼりて、蒔繪の松になびきかゝりし風情比ふるに物なく、宵の明星の聖けきほゝゑみをたゝえたるめでたさ。飛ぶは螢か、砂木焚く火か。いとも床しき夏節の一曲が長き餘韻を波上に漂はしたるなど、見るもの、聞くものゝ總ては、詩的感情をもて迎へられつ、自然の母の懐に抱かれてこそはかとなくうたひありくほど、浮世の夏はさる方に忘られて、あつき思ひを語り合ひしぞまたなく嬉しかける。

砂の上に書きし二人の歌をねたみ　倭夫の君
よせくる波の打ち消しゆくも　よし子
夕づゝの高き薫りを袖にして　よし子
汚れなき子の涙さゝげけん　倭夫の君

評　牛刀もて鷄を割くとや婦女子の筆としては如何はしけれど文氣爽快にして讀むに快し(舶雲)

●夕立一過

伯耆　皐月さなへ

（秀逸）

今日は常よりむし暑く、そよ吹く風さへ少しも無きは、雨のけはひとこそ覺ゆれ。夕陽漸く翼をまけむとする折、薄墨色の見るめ々重々しく、其の裡には如何なる惡魔の、潜めるやらむと疑はるゝ許りの、一抹の叢雲、伯耆富士の一角にあらはれ、次第々々に其の翼をぞ擴げける。さては夕立すべしと眺めやるに、おどろおどろと遠雷の響きして、一陣の雨氣にとめる、妙に涼しき風、颯と許りに一吹きなで過きつ。後二三分間は、世間皆澄みわたりし如く靜まりて、其の瞬間に大粒の雨、ばら〳〵と數ふる許り、庭の面に跡を印してぞ過ぎにける。直ぐ又あとより一しきり、勢の強き風すさび來りて、庭の片隅なる竹、さわ〳〵と頭を振り、恰も狂氣の如し。見るみる雨は非常なる勢もて、ザア〳〵と篠つく許りに降り出しぬ。今迄喧しく鳴き居たりし蟬は、はたと一時に鳴きやみて、最前より庭先きにて、餌をあり居たりし子雀の二羽三羽、驚きて楓の老樹に絡める蔦の葉陰に隱れしなど、いとをかしうなむ。

田圃にて田植しゐたりし赤襷の少女達は、足もあらはに裾かきあげて、叫びつゝおめきつゝ、家路をさして歸るもあれば、のそり〳〵と少しも急がぬ牛を、罵りつゝ急ぐ童もあり。鍬を肩にして、心のみ矢竹にはやる老翁、白衣つけし旅の法の師の、疲れし足をひきずり〳〵、笠をかぶりて急ぐさま、如何にも哀れに見ゆるなど、眞に一幅のパノラマの如し。

雷も次第々々に遠くなり、雨も漸く降り止みて、向ひの山は尚盛んに降れるさま、恰も薄墨繪の雨景色そのまゝなり。やがて天の一方には、はや美しき瑠璃色あらはれ、漸次其の面積をひろめて、遂に全く雨雲は、其の影をぞ失ひける、夕陽に再び輝き出てしが、其の光りは以前より一入麗しく、少しも曇りなく、家に涼しきと限りなく、何とも言へざる心地よき光りにて、恰も繪畫の佳人が、浴後そゞろありきせる樣に髣髴たり。

庭の草木はさながら甦りし如く、濡れし綠葉の、そよ〳〵と吹き來る風

にゆらる丶毎に、何處ともなく濕りし土の香なぞ迸りし。今朝一輪さきし優しきうさちに、何となく凉とせし風情ある桔梗の花、恰も紫水晶の如く光れるに、一羽の蝴蝶とび來りて、其の美しき可愛らしき小袖の如き翅を、ひろ〳〵と動かしつゝ、二三回花のあたりをめぐりしが、やがて花片の上にとまりて翅を休めぬ。折しも凉しき風一吹きサッと吹き來りし故、花は胡蝶をのせしまゝ少ししな垂れつ。中に溜り居たる露、ほと〳〵と二三滴こぼれたるなど、げに得もいはれぬ風情にこそ。

先つ程まで一滴の水もなかりし、彼方の小川の水溢れ、水車は水音たかくめぐり始めつ。路の凹地には名も知れぬ小魚の三つ四つ、水の干ぬまの命とも知らで遊べる樣、いとゞあはれに見ゆるかし。遠近の畔には、鍬を肩にせる里の若者二人三人、ひな歌なんどうたひつゝ、今日の夕立は近頃になきおしめりなれば、　日は必ず休業ならむなど、語りあひ乍ら家路を急ぐざま、恰も繪畫の如し。

評　敍事秀麗

●をり〳〵くさ

（秀逸）　島根　まつなみ

ゆたけく覺えしもの

籠に揚げたる蠶のまゆ、ましてさはやかにつくりなされたる蠶よけ綿の巣にまり形したるが自ら淸げにいと多うつきたる、此上なうゆたけく覺えしは心づからにや

さわやかに覺えしもの

さみだれなどの晴間程近き山々にむら〳〵と立ちのぼる雲の見えて道のべの草にうすきもすみのいとゞしうぬれ渡れる頃の田の面のけしさ、濁らざる水淺からず目もはろにおひしきたる色まだ淺さ若苗のまつと渡る冷たき風に露はこぼれて打ゆらげる樣のいときよきに誰がのり出てし田舟一隻つなぎとめたる竿のはしに身ゆるきもせずとまれる鶺鴒のやがてさえ渡れる一こえ高らかなたこなたにせはしなうとびまわるにいづこよりか今一羽とび來てかたみになきかはしつゝあそべるさま見れば塵おほき巷になやめる身もあはれ心地さわやかにすが〳〵しうぞ覺ゆる

評　姿なよやかにして風情こもれり

●日記の一ふし

（秀逸）　出雲　綾　子

六月六日、製糸場の汽笛に短夜の夢驚かされいそぎ臥床を出づれば空はよく晴れわたり一點の散雲もなし

例のごと露子の君誘ひ給ふ共に琴の師の許にゆく今日は殊の外ひまどり前十一時家につきぬ

七日、晴天ふきながしの鯉幟風を孕みてひるがへる

かづ子の君より細ゝなる玉章にそへて多くの蕙めぐみ給ふ早速其厚意を謝し夏菊の一本そへて返り事す

八日、細雨ぼつ〳〵降り出し雷のおどろ〳〵しく物すごし

節分に煎り豆出して食ふ

父上のこよなうめで給ふ花菖蒲の雨になやめる姿やさしともやさし

九日、雨やみだれど曇りがちにて何となくうつとうし

地柔ければとて裏の茄子に草そふ

早生の大豆ののぶ事いちじるし

十日、雨やむ露子の君音づれ給ひ邪なき語しもしめやかに時の移るも覺

えず興多かりし

初蚊帳に入るいぶせき心ちしてねむられず池になく蛙の聲かまびすし

評　幼稚なれどもよく其躰を得たり

消息文

●さみだれの頃父を失ひし友の許に菓子を贈るとて

（甲賞）　神奈川縣青木町六七　保田讓子

父君逝き給ひぬとの御文手にせし其夜の夢だに未ださめはてぬ様覺え候をいつしか一月斗りも打過せしけふ此頃かきくらしふる五月雨の空軒の玉水地上に苔生ひ雨蛙の聲聞くだに身も心もとざこめらるゝ心地せられ候をまして御許様には日頃の御なげき何によりては御心を慰め給ふらんと思へばいとゞ御いとしさ御なつかしさ身にしみ候を隔り居候身の口惜しさ只々朝に夕に御心の中とやかくとおし斗り奉り御噂のみに打暮し候幸に御母公様を初め奉り御やからの皆々様ちとの御さわりもおはしまさずや明暮れ小さき胸に案じ居申候さても今朝小包に托し差送り候菓子一箱こはさして珍らしき品にはおはされども去年の夏御父君手前許音づれ玉ひし折此上なく御口に叶はせ玉ふとていたくも愛でさせ給ひし事ふと思ひ浮び候に任せかゝる物をと母の止め候も顧みずいさゝか御目に掛け申候あはれ供へ奉る御靈やうけさせ玉はん程もいと覺束なけれど御一同様の徒然語り給ふ御笑ひの種とも相成り候はゞ妾が狭き心の喜びいか斗りぞやゝがては必ずまかりいて萬づ御目のあたり聞え上ぐべくなん

かしこ

●避暑地より

（乙賞）　信州上水内郡榮村字住良木四八　小林つね子

御手紙並に御見舞の品、ありがたく只今頂戴しました。湯あたりでしやうか、しばらく此地の醫師にかゝつて居りましたものから、着のお知らせ申上げしのみにて、とんと御無沙汰に相成り居り、今更のやうに恐入りました。

留守宅の御見廻りお願ひ申して置きましたるに、お暇なき御中、わざ／＼御出くださつたさう、厚く御禮申上げます。

此地の景色、山も水もいと面白く、あなたのやうに和歌の道にでもたけてゐたならば、定めし景色そのまゝをとゝのへて文の上にも御目にかけ、日記なども物する折でございましせうが、ほんとうに口惜ふてなりません。

蚤は今迄に二つ三つ見ましたが、蚊はついぞ鳴たのをきゝません。一番面白いのは四季に咲く野べの花どもの時をも知らず亂れ合ふて居るのでございますが、今五日程で歸るつもりですから、その時はたんと手折つて、お土産にいたしましやう。かしこ。

評　言文一致躰の書翰文としては、未だ十分に熟達せざるやうなれど、努めて怠らずば望みないでもない

●出産を祝ふ文

（丙賞）

東京市牛込區市谷田町二丁目二十番地　倉持菊子

かれてより今月と承りよそながら御案じ申し候折から只今御玉章御うれしう一亘拝見致しまゐらせしに昨夜いとも〳〵御平らかに御産のひもとかせ御母子様とも御障なくすこやかに御肥立の由特に御初産の御手柄玉にもまさる御男子様にさへいらせらるゝよし郭公の初音よりもまさりて嬉しうなん覺えまゐらせ候ましてや御父君様には兼てより男子ならばとの御望みに候ひしまゝかざしの花も物かわと父君の御いつくしみ如何ばかりに候はん初孫の笑顔に氣も若やき玉ふらんと察しられ候て御館の内の御賑ひ手に取る如くにて候早く上りて見參らせ度候へども據なき用事の爲め上られかね候間御初着の料として御恥しながら黄八丈一反聊か御祝のしるし迄に進じ上候やがて參上赤さま抱きまゐらせんを樂しみに思ひ居り候　あなかしこ

◉海水浴場より病める友のもとに

（秀逸）

岐阜　なでしこ

其後は御經過如何に候や、今朝新聞にて見侍ればいづ方も例ならぬ暑さの由、御障りなかれと祈入候。こゝは思ひしよりもよき所にて、去年御伴せしかの濱邊には及ばず候へども、山の姿海の眺めも面白く、殊に新開の土地とて來遊の客も少なく、物賣る店旅舍等の不自由なる代り、またいたく都の塵の立ちまじらぬぞ中〳〵に嬉しう侍る。私一家は、海に臨める寺院の奥座敷を借りて、自炊いたし居候。魚類は需要少ければ隨て自由に安價に手に入り、いつも潑剌たるを調理して膳に上す毎、海遠き里に病みませる君の、此頃の暑さにさこそは御口味なくなはらいぬ候、これ參らせたらんにはとのみ存じ侍る。今年は濱のそゞろ歩き、月の夜のまどゐにも、面白き御話承らん君なきに、心淋しく日々御噂のみ致し居候、御愛子様相不變御壯に御遊びの御事ならん、太郎も日々美しき貝小石等を拾ひ集めては、幹雄さんへ御土産と申居候。昨日漁船を雇ひ、沖の鯛釣にまゐり、大小澤山の獲物有之、かへるさの海苔に參らせんと乾し置候。これは手製の鯛味噌いかにも味にて、御口に適ふまじと存候へ共、幸便に任せ御贈呈申上候まゝ、只志の程のみ御賞玩被下度折から隨分御身御大事に被遊べく、余は次の便に申のこし候　かしこ

●手向の花に添へて友の許に

（秀逸）

本郷區通り四丁目十六かゞや方にて　東都　入江まつ

またぬ月日のたつに早くて今年もいつか苧から賣る聲を大路に聞くやうに成り申候、軒端に釣りたる提燈の淋しき色を見るにつけ、うら淋き事思ひ出られ候に、まして御わたりはと思ひやられ申候去年の此頃は未だ御妹子様御病も出給はず、私方の蓮池に其花折りにとおはしまし片手を岸の小松にかけ給ひ玉の腕をさしのべ給ふはしゝ御袂より、くれないのはんけちの洩れ出でゝ水にうかびし有様など昨日のやうに思はれ候も今年は門火に迎へられ給ひ御魂祭の棚の上に、みそはぎのつゆ手向けられ給ふらん御事思へども猶夢のやうに覺へられ候、多くもおはしまさで唯御二人なる御中あけくれに御睦ましう他所目うらやましきやう入らせられしを嘸かし御思ひ出ぐさ、さま〴〵にて慰めかたうのらせられ候はん。いとゞ御思ひや增ると、たゆたひながら有し餘波の蓮の花一もと持たせ差し出し候を御靈前に御供へ下され候はゞ忝けなく。籠のうちの林檎は今朝はじめて木よりとりおろしたるに御座候、同じく御覽に入れ度て、かしこ。

女學世界定期増刊（發行九月十五日）

懸賞文募集

はつもみぢ

投書〆切八月廿日

才媛詞藻　秋の卷

歌は心の花なり、文章は思想の錦なり、うるはしかるべき婦人にして其の心に花のかざりなく、思想に錦のよそほひなかりせば、如何ばかりもの足らぬ心地さるべき、昭代教育の發展に伴ふて、女子の文藝は著るしく其歩を進めぬ、茲に女學世界の才媛詞藻は來るべき秋涼の好季節を以て又更に其の定期増刊を發刊せんとす「初もみぢ」即ち是なり、さればうるはしき心の花の一ひら、いみじき思想の錦の一片を寄せて我が才媛詞壇を飾られん事を

文種

▲**小説**（文體隨意）二十行二十四字詰ニテ　紙數十枚マデ

▲**和歌**（題　鹿　萩　猿　道）端書ニ一題一首ノ事

▲**新體詩**（題隨意）二十句限

▲**抒情文**（題隨意）十行二十四字詰ニテ　紙數二枚限リ

▲**敍事文**（題隨意）二十行二十四字詰ニテ　紙數二枚限リ

▲**消息文**（候文言文隨意）二十行二十四字詰ニテ　紙數一枚限リ

賞品

特賞　金拾圓　壹名
　　　金五圓　壹名

甲賞　金參圓（圖書切符）五名

乙賞　金貳圓仝　六名

丙賞　金壹圓仝　拾名

秀逸　金五十錢仝　二十名

注意

▲特賞は小説の優等者に限る

▲和歌の高點は乙賞以下にて別に相當の賞品を呈す

▲小説原稿は紙捻にて綴る事

▲各種規定の紙數に超過するものは一切採用せず

▲封筒には必ず「はつもみぢ」と附記すべし

●第二皇孫殿下御誕生

皇太子妃殿下には去月廿五日愈々御分娩親王御誕生遊ばされたり妃殿下には前日午後も常の如く御廊下に於て御運動あり八時三十分頃御寢に入らせられ當日朝四時五十分頃まで御安眠五時五十分頃より御産氣の御催しあり田中宮内大臣幷に岡侍醫局長は急ぎ參候し 拜謁したる處至極御氣色麗はしく種々の御辭さへあり二回の御産水ありたる後七時三十分極めて御安靜に親王御誕生相成りたり御母子とも至極御健全にて何の御障りもあらせられず御初聲もいと高らかにおはしませりとぞ

有栖川宮、同妃兩殿下も直に御參入夫より御參内遊ばされ委細 兩陛下へ奏上あり齋藤太夫も參内して奏上したり其他東宮御所と宮城とへ參賀の次第一々申すまでもなし

七月一日は一週日目につき 天皇陛下親ら御命名遊ばさるべし御命名參考書取調、 上奏すべき旨細川文事秘書官長、三島本居の兩東宮侍講へ御沙汰ありたり、初御參内は來八月十三日の御豫定なりと

皇太孫御誕生引續いて親王におはします帝室の御繁榮千代を八千代とことほぐべく殊に當日は恰も東宮妃殿下第十九回の御誕辰なりしに同じ其日に御誕生ありしこそ一入めでたかりけれ

●大橋圖書館の開館

故博文館主大橋佐平氏の遺志に由りて設立せられたる大橋圖書館は、特に工事及び諸般の設備を取急ぎたれば、いよ〳〵去月十五日(博文館創立の十五周年紀念日)を以て開館式を擧行するに至りたるが、當日には、午前十時に近親一同館内に會合して故佐平翁銅像の除幕式(銅像は同館玄關の正面に安置せらる)を行ひ、午後一時より來賓を式場に引きたり、式場は階上の閲覽室を以て之に充て、正面には「靜觀自得」と書する扁額を揭げ、其下に假りの演壇を据置き、極めて質素なるか如く見へたり、軈て一時三十分頃、奏樂によりて來賓一同着席し、先づ「君が代」の吹奏あり、次て圖書館設立の

△△由來は石黒男爵によりて演述せらる、其要旨に曰く

余は卅一年五月二十四日大倉喜八郎氏の還暦及び銀婚式祝宴に於て、故佐平氏が博文館創立十五周年には公益の爲め一の紀念を留めたき考ありと聞きしが、其後三十二年の夏に至り愈々私立圖書館を開館するの決心を爲したと聞いて、不肖ながらも充分賛助すべきを約した、といふ事の發端より語りつゞけて、巳にして卅四年一月九日の早朝に、佐平氏が來て語られたるには、私も去年秋頃から健康が勝れぬ冬になつてから特に勝れぬ、昨日に至り腹内の硬結を發見したので、更に嚴密なる診定を受けたに、胃癌であると宣告を受けた、胃癌と云へば不治の症で且つ私も六十七の壽を有つて明日も計られぬことであれば、圖書館の事は三十五年まで待たずに著手したい、家族とも熟議を遂げて先づ創立費として五萬圓を支出し、維持費として五萬圓に達するまで年々一萬圓宛支出し、維持費が全額に達するまで年々五千圓を支出するに決したとの事であつた、尙ほ設立の方法及び萬事を委託すべき人々をも自ら定められて、同廿七日に委員の第一會合を開き、其後佐平君の病床に於て屢々會議を開き、私も度々病床を見舞ふたが、病床に端坐して語らるゝ所は圖書館の事ばかりで他の事に及ばず、病の身に在るを知らざるものゝ如くであつた、次て建築に著手するや、佐平君は病を力めて自ら礎を置かれた、十二月一日に見舞ふた時には既に起き上ることも出來なかつたが、夜着の袖から手を出して私の手を握りて云はれるには、既に死期も近づいたと自ら感じるが、家の事は新太郎が充分やるであらうし、事業は博文館、博進社、東京堂の人々が遺憾なく經營するであらうから思ひ置く事は少しもないとの事であつた、そこで私が、只だ一ツ遺憾な事は嘗ての志望たる圖書館を開き、一人たりとも書籍を讀むものがあるのを見せたいが、今となつては力及ばぬと云つたに、佐平君は決してそうでない、自分の信頼する協議員諸君が新太郎を助けて下さる以上は、此の事業の成立つことは、云ふにも及ばぬ次第で、自分が見たも同じことであるから、願はくは此上とも盡力ありたい、協議員諸君にも此意を傳へられたいとの事であつた越えて二日大橋君は長逝せられたのであるが、其の言葉は今尙ほ之を報道する私の耳には響いて居る

男爵は斯く演べ來りて感に堪えざるもの丶如く參會者の多數も肅然として容を改めたりき男爵は更に普請の聲は梵鐘の聲よりも故人の靈を慰むべきを思ひて初七日を過ぎざるに工事を繼續し故人が希望の如く十五周年の當日を以て開館式を擧ぐるに至れることを演述せり

次て桂伯爵の祝詞代讀、菊地文相、千家知事、松田市長の祝詞朗讀あり、次ぎには添田法學博士、肝付海軍少將、福地櫻痴居士の演説ありたるが、何れも此の圖書館の事業は、社會公共に裨補する所多かるべしとて大いに賛稱したり、最後に博文館主大橋新太郎氏は、圖書館の協議員一同を代表して謝辭を述べ、大橋家が此擧に出でたるは、毫も名譽を博せんとするの念なく、唯是れ社會公共に酬ゆべき當然の義務なり即ち博文館が微力ながらも一の圖書館を公衆に寄附するに至りし其の事業の

進歩は畢竟社會人文進運に伴ふたるの結果なれば今日之を社會公衆に寄附するは又當然の義務なり云々猶博文館の三十年乃至四十年の紀念には、更らに大なる公共的事業を起さんことを此席に於て諸君に誓ふと述べ已にして式を終り、其れより茶菓の饗應及び太陽增刊「海の日本」の配附等ありて各自退散せり、來賓には菊地文相青木子爵花房男爵千家知事都筑馨六肝付兼行松岡康毅前島密松田市長其他數百名にて、頗る盛んなる開館式なりき、尙ほ同館にては、去月廿日より愈々開館して公衆一般の閲覽に供することとなりたるが、最初なるが爲めにも由るべけれど、開館後數日の如きは、閲覽者非常に多くして、限りある閲覽席に之れを入れ切れず、午前中早くより滿員の札を掲ぐるが如き有樣なりと圖書館の數少なく、且不備を免がれぬ今日、私立ながらも、まづ以て整備せりと云ふべき大橋圖書館の設置を見るに至りしは、社會公益の爲め、殊にも敎育上の爲めに、大ひに之れを喜ばざるを得ざる也、今同館の開館に際して、本誌の讀者に報導し置くこと右の如し

▲日本美術　同誌は日本美術院の機關雜誌なるが去月發行即ち第四十一號より一大改頁を施し口繪をアートタイプに改め更に本誌中には網目銅版を挿入して記事を精選せり篇中繪畫互評會紀要幷に研究會紀要項中には各出品畫の合評を掲載し、鹽田力藏氏の美術の體育、橋本雅邦翁の談片等斯道に有益なる記事多し

▲女訓の栞（全）　著者は女子敎育家として有名なる三輪田眞佐子女史なり本篇は即ち女史が本邦固有の女德を養成せんとし十年一日の如く女子敎育の職に從事せる其の實驗上より得來りたる智見に基き、空論を避け實行を重んじ、形式を離れて實際に入るやうに薰陶したるものにて從來有觸たる形式的敎訓書とは大に其面目を異にするものあり、篇中文學論、愛情論交際論、夫婦論等大に見るべし

▲滿都の響　松韻會々員の手になりたる新風今様を集めたるものなり荻野由之氏の「和歌及新體詩を論ず」高橋龍雄氏の「新體詩の形式を論ず」二篇稍見るべし

▲男子貞操論　大體を男女論、戀愛論、男子貞操論の上中下三篇に區別せるも要は唯此下篇に在るのみ署名して玉里みちとあれど其の文によりて見れば有髯男子なること疑いなし

女學世界第貳卷第十號記事要目

（八月五日發行）

其他、學藝、史傳、家庭裁縫、編物、英語實習等例により材料豐富

每月一回五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内｛定刊數……………十二冊
　　增刊四回…三、六、九、十一月價格同一

郵税　一冊　二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
二十四字詰一行	…	四十三錢	三十五錢	三十錢
半頁卅二行	…	十三圓七十六錢	十一圓二十錢	九圓六十錢
一頁六十四行	割引三十三圓	割引二十七圓	割引二十二圓	割引十八圓

▲等級ノ位置メ切日等御照合次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢劵相添へ申込あれ。

明治卅五年七月五日發行　第貳卷第九號

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

博文館諸雜誌發行表

定價

雜誌	定價	郵税	發行
●太陽	一册參拾錢	郵税參錢	每月一回
●少年世界	一册拾錢	郵税壹錢五厘	每月一回
●中學世界	一册貳拾錢	郵税貳錢	每月一回
●女學世界	一册貳拾錢	郵税貳錢	每月一回
●文藝倶樂部	一册廿五錢	郵税貳錢五厘	每月一回
●太平洋	一册六錢	郵税五厘	每月曜日
●圖書世界	一册參錢	郵税五厘	每月一回

七月發兌表

六大雜誌

雜誌	號	發行
●太陽	第九號	五日發行
●中學世界	第九號	十日發行
●女學世界	第九號	五日發行
●文藝倶樂部	第九號	一日發行
●少年世界	第九號	一日發行
●圖書世界	第四號	二十日發行
●文藝倶樂部臨時增刊大阪と神戸	第十號	十五日發行
●少年世界臨時增刊博物館	第十號	十日發行

太平洋

號	發行
●第二十七號	七日發行
●第二十八號	十四日發行
●第二十九號	廿一日發行
●第三十號	廿八日發行

廣告料

雜誌	一行一回	字詰
●太陽	金四十五錢	五號活字十八字詰
●少年世界同	金四十五錢	五號活字廿四字詰
●中學世界同	金三十錢	五號活字廿四字詰
●文藝倶樂部同	金四十錢	五號活字廿四字詰
●女學世界同	金三十錢	五號活字廿四字詰
●太平洋同	金四十錢	五號活字廿二字詰
●圖書世界同	金十五錢	五號活字廿四字詰

（後付の一）

地理及

理學士佐藤傳藏君著

日本新地理（全壹册）

上製五十錢
郵税十錢
並製卅五錢
郵税八錢

天然地理人事地理地方誌の三項嶄新の事實により正確の統計を本とし巧妙の組織簡潔の叙述詳盡して餘殘なし彼の臺灣と北海道とに至つては立論奇拔にして說明詳密なり中等教育教科用書として無比唯一の新地理書なり

理學士佐藤傳藏君著

萬國新地理（全壹册）

上製五十錢
郵税十錢
並製卅五錢
郵税八錢

本書ば新地理の要領を語らん爲め最新の統計、事實仕組を以て編述し、中等教育に向つて地理專門家に向つて普通の學生に向つて大に告ぐる所あらんが爲め最も精細に說述せられたり日本地理と共に併せて机上に備ふべし。

法學士永井惟直君著

商工地理學（全壹册）

上製五十錢
郵税十錢
並製卅五錢
郵税八錢

商工地理學の研究の最必要にして且趣味多きは今更ら蝶々を要せず著者久しく東西の地理と商工業歴史との關係を究め氣候風土地勢人種人口等の商業に及ぼす影響に至るまで論究し斯學の爲め一生面を開きたる必讀の良書なり。

理學士佐藤傳藏君著

中等教育地理教科書（上卷）

正價五十錢
郵税十錢

世の中等教育の名を冠して地理書を出すもの多くは非專門家の手に成るを以て組織紛亂眞に中等教育に適ふもの尠きは寔に巳むを得す佐藤理學士夙に玆に憾みあり其深遠の超績を以て潛思本書の著あり材料は學士自ら踏査せる所實に類書中に粹を拔くもの本書を措て他にあらさるなり

大和田建樹君著

通俗日本地理（全壹册）

正價三十錢
郵税八錢

此書の特性ば行文平易にして讀みやすく解しやすく興味滴るが如きにあり、換言すれば文學上地理加ふるに蠶頭に地理學上必須の事項を掲げて讀者に便せしめ、こゝに日本地理問題を設けて獨學者の指針たらしむるこそ丁寧反覆、近來有數の良著といふべし

澁江保君著

通俗世界地理（全壹册）

正價三十錢
郵税十錢

本書は斯學に該博なる智識を有する澁江君が歐米に於ける最近の名著を涉獵し兼ては其創見を加味し最新の事實統計を基礎とし斬新の組織を以て著述せられたるものにして其材料の豐富なる其筆路の流暢なる點に得易からざるの良書なり

發兌元　東京日本橋

理科書類

理學士高木貞治君著
新撰算術（全壹册）
上製五十錢　郵税十錢
並製卅五錢　郵税八錢

世に算術書多きも皆翻譯ならざれば單に機械的に説明するものに過ぎず，本書は然らず筆を整數に起して無理數，量及其測定に説き及ぼし結論として頁數虚數に擱筆す其間說明立論共に精確にして理論縱横に說述せり。

理學士高木貞治君著
新撰代數學（全壹册）
上製五十錢　郵税十錢
並製卅五錢　郵税八錢

本書は正數の觀念並に四則算法を支配する根原的法則を叙述し讀者の記憶を新にして以て新研究の地を成さんとを企圖す，即ち筆を代數學の原則に起して有數函數方程式の根整函數の有理分解其他方程式解法等に及びぬ。

理學士林鶴一君著
新撰幾何學（全壹册）
上製五十錢　郵税十錢
並製卅五錢　郵税八錢

本書は筆をユークリツトが幾何學に起して以て其狀貌を知らしめたるの後更にユークリツトが第十三公理を否認せる非ユークリツト幾何學に入り主として口バイユースキー及びボリアイが研究に從ふて說述殆んど微を極めたる要册也。

理學士松村定西郎君著
新撰三角法（全壹册）
上製五十錢　郵税十錢
並製卅五錢　郵税八錢

本書は歷史的に在來の三角法より筆を起し進んで高等諸學科に必要なる諸公式を誘導し圓函數の解析的定義をなし轉じて現今數學の最高點と稱せらるゝ函數の微分方程式定義に逹せんとを勉めたるものにして叙述簡なりと唯應用理論其要を得て學者に稗益する鮮からざる也

理學士松村定次郎君著
新撰微分積分學（全壹册）
上製五十錢　郵税十錢
並製卅五錢　郵税八錢

微分積分學は解析幾何學力學と共に近世數學の三大進步と稱せらる然れども其理論の深邃なる應用の弘大なる能く初學者をして會得せしむる良書なきは斯界の欠點とす本書は松村理學士が歐米諸大家の學說を基礎として其煩を省き要を拔きて眞髓を摘萃せるもの實に近來稀有の良書なり

理學士松村定次郎君著
新撰解析幾何學（全壹册）
上製五十錢　郵税十錢
並製卅五錢　郵税八錢

本書は數學の最高學科たる解析幾何學の新書にして著者は曩に三角法に筆を執りたる人なり本書現はれて益す數學の蘊底を極むるを得たり百科全書中欠くべからざるの要書なり。

(除付の三)

區本町三丁目　博文館

（後付の四）

理科書類

植物營養論（全壹册）

農學博士稻垣乙丙君著

上製五十錢
郵税十錢
並製卅五錢
郵税八錢

種藝の事たる先つ植物生育の理に通ぜざる可からず就中之れが營養の法則に至つては大に研究なかるべからず、本書は植物の化學的組成を明かにし次に其解剖的構造を説き終に營養の法に及び最も詳密を究む實に農界の寳册といふべし。

分析化學（全壹册）

工學士藤井光藏
工學士内藤　游君著

上製五十錢
郵税十錢
並製卅五錢
郵税八錢

分析の一事は化學中の最要務たり而して著者本邦に好書なきを遺憾とし多年專攻する所を以て本書を著はし簡明適實に最新分析法を解論す蓋し斯書類中の冠冕なるもの世の農工業家學術家は勿論厚生の道に志すものは必ず一讀すべき最良要書なり

應用化學（全壹册）

工學士蜂屋貞興君著

上製五十錢
郵税十錢
並製卅五錢
郵税八錢

化學の用は人類日常の生活より大は農工業に至る迄一として欠くる所なし然れども世未だ恰當の著者なき爲め學者の遺憾鮮考し多年著者茲に慨し歐米に於ける最近の良書を參考として實驗を加へ本書を著はさる行文明快内容該博實に近來無比の良書なり

星學（全壹册）

理學士須藤傳次郎君著

上製五十錢
郵税十錢
並製卅五錢
郵税八錢

星學は其學理幽遠高尚にして未だ一般人に適する平易なる著者なき爲め世人の天文に通ぜざるは吾學界の一大欠點にあらずや本書は須藤學士が大學にありて斯學を專攻するの傍ら之を歐米諸學者の學説に鑑み自已の創見を加へ編著せられたるものにして一讀星學の樞機に通ずるを得べし

有機化學（全壹册）

理學士龜高德平君著

上製五十錢
郵税十錢
並製卅五錢
郵税八錢

此書は著者が最新の原書を參考し多年の實驗に徵し能く小册子中に多數の事項を收容し學理に偏せず實用を重んじ初學者をして斯學の大要を知得せしむるに務め且つ平易なる文章を以て記述したれば斯學を講究し此業に從事せんとするものゝ一讀すべき良書なり

無機化學（全壹册）

理學士眞島利行君著

上製五十錢
郵税十錢
並製卅五錢
郵税八錢

本書は化學通論及無機化學の二論より成る前編には化學に關する主要なる理論及最近の學説を收め後編には嶄新なる系統に從ひ無機化學の概要を載せ尚新發見に係る總ての事實は容れて漏すなし實に普通教科書以外に一新機軸を出すものにして有機化學と共に一雙の好著なり

區本町三丁目　博文館

（後付の五）

（後付の六）

科書類

藤野修吉君 外二名著

通俗 理化一斑

（全壹冊）正價三十錢 郵税八錢

本書は上下二編に分ち上編には力學流体力學熱學氣象學大意光學音響學磁氣學電氣學を詳述し下編には化學一斑として非金屬元素金屬元素普通の炭素化合物を詳述し尚鼈頭物理學者化學者の列傳を掲げたり

川村守義君著

通俗動物學

（全壹冊）正價三十錢 郵税八錢

本書は極めて通俗的に物理學の人綱を叙述せるものにして著者の平易流暢なる文章は乾燥にして趣味少き斯學をして興味津々たらしめ且つ初學の腦裡に解し易からしめん爲めに懇到なる注意をなせり

永島長五郎君著

通俗昆虫學

（全壹冊）正價三十錢 郵税八錢

吾人人類の生活する地球表面に種々なる形態及生活を有する動物生存より其種類千差萬別今玆に論究する所の昆虫學は即ち筋肢動物門の一綱なりとす其學理は興味多大にして學生か夏季採取に体力を養ふの一端ともなるべし。

理學士眞島利行君
理學士岡田武松君著

中等教育 理化示教

正價四十錢 郵税六錢

中等教育を施すの始に理化學を授くるは唯生徒の觀察推理の腦力を啓發するにあり、然れども充分に此等の効果を併せ收むるは教育上一大難事に屬す、今編者は教授細目の要領に依り簡易明確說論し數多の密圖を挿入し上記の目的を達せんとす中等教育の教科書として本書の右に出づるものなし

工學士松永新之助君著

工業大意

（全壹冊）正價廿五錢 郵税六錢

電氣、機械、造家、造船、鐵道、土木、鑛業、造兵、應用化學、採鑛冶金等の各科に付き、每科精密なる圖畫を挿入し、何人にも理解し得らるゝ樣、最も簡明平易に說明せられたるもの、凡そ世の工業に志ある者は何人も皆な一本を備ふべきものなり、

金澤巖君著

寫眞及幻燈

（全壹冊）正價廿五錢 郵税六錢

一箇の鏡面天地の森羅萬象畫き出すものは寫眞なり一幅の白布社會の萬物を映じ出すものは幻燈なり。此寫眞と幻燈の技術、之れを說明し盡して殆んど遺憾なからしめたるものは、此書なりとす。世の此技術を學ばんと欲するものは、請ふ此書に就て知られよ！

區本町三丁目 博文館

風雅文庫

（全部六冊袖珍美本）

鶯亭 長井金升君著

風雅文庫 狂句の栞（第四編）

川柳點の惡口と一口に云へども狂句はアラを探すばかりでなく人情を穿ち教訓の意を含み言ひ廻しの自由なる雅となく俗となく世に廣まりしは柳樽なり然れども中には巧に過ぎて意味の分らぬ者多し本書は柳樽中の名句を一々丁寧に評して委しく意味を說明し併せて明治の新作を添へ初心の爲めに指南車たるべき作り方を記したれば一度繙けば鬼神も腹を抱へて笑ひ出す滑稽たッぷりの珍本と云ふべし

全一冊洋裝袖珍
正價廿錢
郵稅六錢

既刊

第壹編●都々逸の栞
第貳編●冠句の栞
第三編●狂歌の栞

續刊目次

第五編●狂躰句の栞
第六編●雜俳の栞

本書全部を纏めて美帙に裝ひ明窓淨几の下に備へて花月の好伴侶とせば百年の長齡も此の浩氣を養ふの原素となるを得べし雅客たる人必ず一本を購入せざるべからず

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

恐るべき腦充血も健腦丸にて根治す

◎神經をしづめ數年難治の腦病を全治す

◎健腦丸は逆上◎腦充血◎頭痛◎神經症に尤も適當の良劑なるは既に實際患者の熟知する所にして滿天下の腦病、神經病者を救濟し雷名を轟かしたる良劑にして有觸れたる雜藥の類に非ず

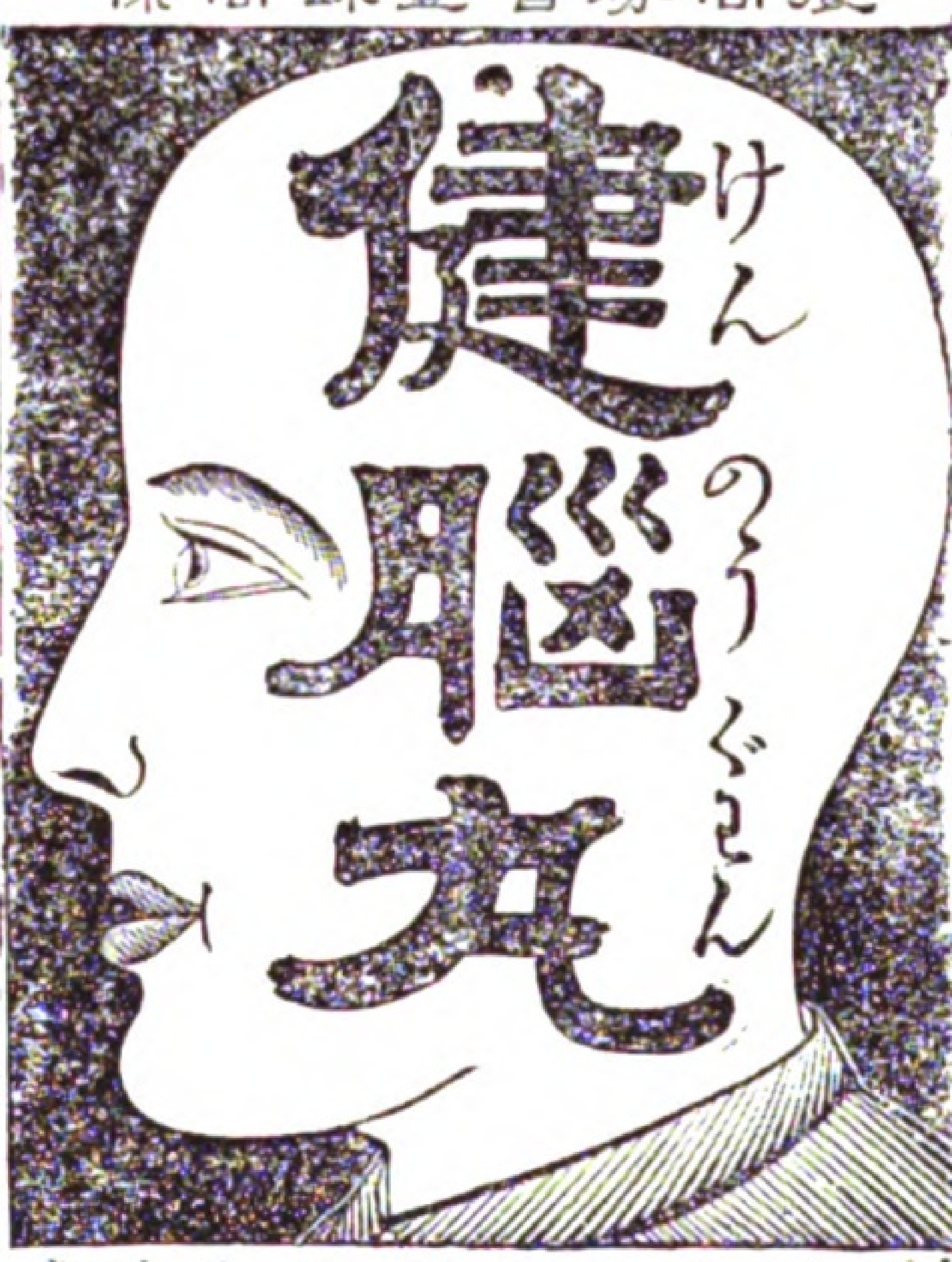
實業家の如き常に百般の事に就て腦髓を過度に費し腦病を患ふる人ゝ

神經家 僅かな事を案じ過ぎ神經過敏に泣き又は悲み搐搦等を起す人

大酒家 又便祕の人は常に服用せば中風又は卒中等を未發に防ぐ

投機家 又は官吏學生の如き常に腦の使ひ過ぎ頭痛或は眩暈する人

農商務省登錄商標



僞物あり此商標に注意

◎健腦丸は婦人の子宮血の道にて逆上し耳鳴り目かすみ◎夜分不眠症等總て腦病神經病に最良の藥劑にして殊に中風卒中を未發に防ぎ身躰強壯となるは健腦丸特有の効力なり

◎腦病神經病にて數年不治の難病も一ヶ月にて全治し頭痛逆上抔には一日分にて速効あり

(●)本劑の販路盛大なるを羨み類似藥を販賣するものあり御購求の節は上部の商標に御注意を乞ふ

(●)賣捌所は全國到る處の藥舖に取次販賣せり

(●)發行所へ御注文郵券一割増

◎藥價表

		郵稅
一ヶ月分	金壹圓	拾錢
十三日分	金五拾錢	六錢
七日分	金參拾錢	四錢
一日分	金拾五錢	四錢

(丹平)

本店 大阪心齋橋八幡筋南 電話東九百〇一番 丹平商會本店

分店 大阪平野町堺筋北 電話東千〇三十七番 丹平商會分店

女學世界
毎月壹回五日發行
第貳卷第九號
明治參拾參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可
明治參拾五年七月五日發行

東京秀英舍印刷